
バカと発明と召喚獣

ヒョウガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと発明と召喚獣

【Nコード】

N88010

【作者名】

ヒョウガ

【あらすじ】

あらゆる新しい発明をするが必ず爆発させる男。海谷陸。彼はどんなものでも完成してようが済むと必ず爆発させる。それがプログラムでも爆発させるはた迷惑な男の話である。おさなじみの清水美春を巻き込み大波乱

プロローグ

プロローグ

アメリカ棒研究所

「主任」

「何だ？」

「いけませんよ。ご主人様。そんな声で返したら気分を悪くしますよ」

「黙ってる！！お前は」

「お前ではありません。マーナと言つ名前があります」

「それで主任。漫才は終わりましたか」

「「漫才言つな！！」」

「では報告します」

「切り替えが早いです」

「お誉めに頂けて光栄です」

「それで用件を言え」

「は。簡単に言います。主任は今から日本に行き文月学園に行きその学長の藤堂カヲルに会い

そのシステムの解析に手伝うようにとの連絡です」

「なるほど。ってそれ左遷じゃないですかぁ？」

「いえ。所長は英断と言ってます」

「さよならご主人様。新しい場所で頑張ってください」

「いえ。マーナさんも一緒の出向です」

「ええ。 。 どうして私もなんですか？」

「所長によりますとたいして役に立たないうえ勝手にインターネットをするので反省をさせるために出向になりました」

「役に立たないって失礼ですう。サポートナビゲータである私に失くして運営できると思ってるんですかぁ？」

「では答えましょう。今までもこれから貴方が居なくても大丈夫です」

「ええ 信頼足りなくない。マスターも否定してください
!」

「俺も所員と同じ感想だ」

「生みの親である貴方が言いますかぁ」

「所長に連絡を了解と伝えてくれ」

「わかりました。それとさっさと解決して帰ってきてください」

「ああ。言われなくともそのつもりだ」

「私の存在理由は…」

と落ち込んでサポートナビゲーターマーナと俺海谷陸が日本行の準備をしていた。

「そうだ。日本にいる清水家族に連絡しとこどんな反応が返ってくるか楽しみだ」

日本の清水宅。

「貴方、美春来週陸君が日本に帰ってくるって知らせてくれたわよ」

「げっ、あの爆発野郎が帰ってくるのですか」

「美春駄目よ。陸君を爆発野郎と呼んじゃ駄目よ」

「そうか。あの野郎が帰ってくるのか」

と美春母の話を聞いて背後から黒くまがまがしいものを垂れ流し始めた。

「そつよ。貴方」

「私の可愛いマイエンジェル美春をいつも黒焦げにしたあの野郎が帰ってくるのかー!」

「その発言はどうかと思うけどいつ爆発してるのは美春が邪魔してるからよ」

「だからそうじゃなくて母さん」

「コンドコソコロス。コロス。コロス。コロス。ワタシノマイエンジェルヲクロコゲニシタコト。」

シンデッグナワス」

美春の父からは何かまがまがしいものが溢れ出ておりそれそのものが襲いかかってきそうなのだ。

「もう皆はしゃいじゃって嬉しいのね」

とどこかずれてる美春母だった。

設定（前書き）

人物設定です。

設定

設定

名前：海谷陸うみやま りく

性別 男

所属 2 - F

容姿：中性的な顔立ちで髪は赤で顔や髪形は緋色の欠片の犬飼慎二にそっくり。

備考：必ず爆発させる発明家。失敗しても成功しても爆発させるための扱いつづらい人物。

清水美春とはおさなじみで彼の実験に巻き込まれいつも大変な目に会っていた。

それゆえに美春は女好きになった。

性格は面白ければそれでいいためあらゆる面で興味がなければ無視を続ける。

名前：マーナ。正式名マスターサポートナビゲーターマーナ。

性別 女型

所属 2 - F。正確には生徒ではないが陸の目を盗んでその所属にした。

のちの語るが陸に見つかり怒られます。

容姿：葵い髪。顔や髪形は魔法少女リリカルなのはStriker SのリインフォースIEIと同じ。

備考：本来は誰でも楽に操作できるナビゲータのはずなんだが職員や陸が優秀すぎて使われなかったため暇なので遊ぶしかなかった。性格は人懐っこくいたずら好き。雄二と組んで悪たくみを考えている。

第一話

俺は、日本に着き、その足で文月学園に向った。

そこでここ（文月学園）の学園長と話をしていた。

「アンタの成績なら所属はAクラスさね」

「まあ、マスターの実力なら、朝飯前ですう」

「ポンコツは黙ってる」

「酷いですう（泣）」

「それで、話を進めていいかい」

としなびれた干物いや学園長は呆れた顔をしていた。

「ええ。所長に聞いた通りですよね」

「そうさね。まあ、あんたは、学生兼開発チームだよ」

「マスター。ようやく役に立てるのですね（感動）」

「出番が、あつたらな」

「そうさね。出番があればさね」

「うう。二人とも酷いですよ（泣）」

「さて、役立たずはほつといてクラスについてですけどバカが集まるクラスがあるそうじゃないですか」

「ああ、確かにあるけどなぜそこに興味があるさね？」

と化け物いや学園長は怪訝な顔をしていた。

そして、陸は意地の悪い顔をしていた。

その顔を見ていたマーナはまたろくでもないことを考えているなと思った。

「俺の研究は知ってますよね」

「はん。それくらいは、把握してるさね。専門はプログラム。他はロボット製作だったかね」

「さらに加えるなら薬学にも精通してますよう」

とマーナが補足した。

「おや、そうかい。それとバカとどう関係があるんだい」

「大ありですよ。優秀なクラスに行ったらろくにデータが取れません。

それよりかはバカで体力がある奴の方がいろいろと試せますから」

「流石、マスター。自分に興味あること以外が関心を示さない。そ

「こが痺れますう」

「アンタもそのポンコツもまともじゃないようだね」

と妖怪いや学園長はため息をついていた。

「いいだろう。アンタの望み通りにしてやるよ。それと明日から始業式さね。遅れるじゃないよ」

「あ、もう一ついいでしょうかババア」

「アンタ今アタシの事をババアと言わなかったかい!!」

「それは気のせいだと思いますよババア長」

「どうやら聞き間違いじゃないようだね」

妖怪は額に青筋を浮かべながら、こちらを睨みつけ、

「アンタは聞いて欲しいのかい。それともアタシをおちよくりたいのかい!!」

と吠えていた。

「そんなの聞いて欲しいに決まってるじゃないですか。そんなこともわからないんですかババア長？」

「はん。言いたいことがあるなら早くいいな」

「では、明日、俺がシステムにハッキングしてもいいですね」

「出来るもんならやってみなクソガキ」

「今の言葉記録したな。マーナ」

「はい、記録しました」

「クソガキ、記録してたのかい!!」

「明日、ハッキングして文句を言われないようにするための方法ですよ」

「くっ、アタシの言葉に二言はないよ。ただし、あんたが失敗した場合アタシの命令には従って貰うよ」

「ええ。良いですよ」

「今の言葉に二言はないね」

「ええ。俺の所属に誓って」

「大丈夫ですう。きちんと記録しました」

「そうかい。明日が楽しみだよ」

「ええ。俺もですよ」

「それじゃ、さっさと出て行きな」

「ああ。また明日」

「待つてください。マスター私を忘れないてください」

「ああ。そう言えば居たな」

「忘れるんじゃないよクソガキ」

と学園長室を出て行き、その足で自分が住むところに向かっている。

「マスター。喧嘩売りましたね」

「俺を使おうとしてるんだ。実力を知りたいのさ」

「はあ、前途多難ですう」

「と文句を言いながらしてたら着いたぞ」

「着いたって。ああ確かにここですね。衛星での確認もしましたから間違いありません」

「たまに、気がきくな」

「???」「げっ」

「???」「あらあら、今日だったのね」

と声が聞こえたので振り返ってみた。

「ああ、お久しぶりです」

美春「何で、あんたがここにいるのよ？」

美春母「駄目よ懐かしいからってツンデレしちゃあ嫌われるわよ」

「それはですね。今日ここに住むことになったんです」

「あらあら、そうなの。はいこれがカギよ」

「あ、どうもすみません」

「何で、あんたが隣に住んでるのよ!!」

「何でって今日越してきたから」

「今すぐ帰れ!!」

「あらあら、恥ずかしいからって、帰れはないわよ美春」

「もう手続きはしたからな帰れと言っても無理だな(ニヤリ)」

「ど、どうしてこんなことに。ああ、お姉さま今の美春を癒してください」

こうして、美春一家の予想通りの反応に満足した俺は明日に向けても準備がしていた。

第二話

バカテスト

問 以下の問いに答えなさい

「調理のために火に掛ける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を一つ挙げなさい」

姫路瑞希、マーナの答え

「問題点…マグネシウムは炎に掛けると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例…ジエラルミン」

教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っかけ問題なのですが、姫路さんやマーナさんは引っかけかりませんでしたね。

土屋康太の答え

「問題点…ガス代を払ってなかったこと」

海谷陸の答え

「問題点…火力が足りないから爆発しなかったこと。だからダイナマイトを使用するべき」

教師のコメント

爆発させてどうするんですか？

この問題の問いはどうしてマグネシウムじゃ駄目なのかと危険が起かない合金を聞いているのです。

吉井明久の答え

「合金の例…未来合金）　すごく強い）」

教師のコメント

すごく強いといわれても…。

「マスター。時間ですよ」

と駄目ナビ　が起こしに来たようだ。

「ああ。わかっている。だから準備してるんだろっが」

「準備って……また爆発させるんですか？（呆れ）」

「廃品処理だよ」

「ああ。また同胞が散るんですかね（涙）」

「安心しろ。お前の番も近いからな」

「安心できませんよマスター（怒り）」

「それで、どうするんですか？」

「このバイクをお前が動かすんだ。そして、学園に着いたら爆破する」

「あおう、それって、私の身の安全はどうなるんですか？」

「バックアップは大丈夫だ」

「やっぱり死ぬんじゃないですか（涙）」

「違うぞ。消えるだけだ」

「私には同じ意味ですう」

「さて、話も終わったし行くぞ」

「うう。死ぬときは一緒ですよねマスター（泣顔）」

「いや、消えるのはお前とバイクだけだ」

「鬼、悪魔!!」

「きっちり安全運転をしろよ。じゃないとお前の本体やバックアップが消えるぞ」

「マスター。なんなりと命令をください」

「それじゃ学園に向かうぞ」

「アラホラサツサ」

俺はバイクを出しマーナがアクセスし起動させて学園に向った。

「お、見えてきたな」

目の前には今日から俺が通うことになる高校である文月学園の校門がある。

「マーナ。そろそろ爆発させる」

「あおう、やっぱり無かったことに「やれ」

「了解しました。自爆シ クレンス発動」

そろそろだなと俺は飛び降りた。

「今回も見捨てるんですねマスター!!」

チユド ン

「うむ。今回の爆発も完ぺきだな」

????? 「そうか、新学期早々に問題を起こすのはお前か!!」

と黒焦げでススだらけのゴリラが居た。

「おい。マーナ。このゴリラは誰か検索しろ」

「……」

「ってそうかさっき爆発したから復活させなくては駄目っただな」

????? 「お前が昨日この学園に転校してきた奴だな」

「ええ。そうですよ」

「ならば、自己紹介をしよう。俺の名は西村宗一だ」

とゴリラが怒った顔で俺を見ていた。

「さて、お前に常識を教えたほうがよさそうだな」

「必要無いですよ」

「そっいうな。遅刻してきたのはお前で最後だからな」

と俺とゴリラが笑った。ただしどちらも目は笑ってないが。

「お前には常識をたたきこんでやろう!!」

「やなっこった」

と俺は学園内部の地図をパソコンに表示して、その場から逃げた。

「待てえ!!」

と俺はゴリラが諦めるまで逃げ回った。

第三話（前書き）

遅くなりましたが更新しました。

良かったら見てください。

第三話

バカテスト 第二問

問 以下の意味をもつことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、
(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2)泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

マーナの答え

『(1)マスターの川流れ』

海谷陸のコメント

次はどう爆発させようかな(黒笑)

海谷陸の答え

『(2)泣き面に爆発』

教師のコメント

どうして爆発させるのですか。

あれから逃げ回ったが運悪く他の先生に見つかりその後コリラにかかり軽く説教を受けた。

その後クラスの場所を教えてもらいその教室に向った。

「ふむ。ここが例の場所か」

と俺が教室に入ろうとしたら。

????「早く座れ、ウジ虫野郎」

と教卓の前にいた男がいきなり暴言を言われた。なるほど。こいつはここでの第一モルモットか。

「ふむ。確かに遅れはしたがいきなりうじ虫野郎とはどういふことだ？」

????「ち、明久ではなかったか。すまない。代表の坂本だ」

と野性味のある男が返事をした。

「そうか、気にするな」

「そう言ってくれれば助かる。それでお前は誰だ？」

「俺の名は海谷陸だ。何気にするなモルモットを死なせばしないからな」

「?モルモット?」

と坂本といった男が考え込んでいた。そこで俺は坂本の口の中に薬を入れた。

「? (ごっくん) 今何を飲ました!？」

と坂本は慌てて俺の服を引っ張ろうとしたので俺はかわした。

「実験だ」

と俺は当たり前前のことと言った。

「お、俺で実験するな!？」

「安心しろ。このクラス全員が俺にとってモルモットだ」

『『『『俺達もかよ!!!』』』』

とクラスメイト達が声を上げた。

????「それより雄二よ。体はなんともないのかのう」

と男の制服を着たじじい口調の女の子が坂本に話しかけていた。

しかし、そろそろ効果が出る時間だ。

と俺がニヤツとすると。

「ああ。大丈夫だ秀吉。心配してくれてありがとう」

「そ、そうかそれは良かったのじゃ」

と秀吉と言う女の子は引きながら返事をしていた。

「なるほど。性格が反転してるな」

「????」……恐ろしい効果」

「????」そうね。飲みたくない薬ね」

と小柄な男と勝気な女がこちらに来た。

「のう。お主。あれは元に戻るのかのう」

「一日たつたら元に戻るさ。人体実験でも死んだ奴はいない。何せ、薬の効果は性格が180。変わる奴だからな」

「……副作用は？」

と小柄な男が聞いてきた。

「すごく腹が減るくらいだな」

「そうか。それは良かったが正直今の雄二はきついのが」

「そうね」

「……（コクコク）」

と3人は言うが俺は面白いのでこのままにしておくことにした。

「それより俺の席はどこだ」

「自由席じゃ」

「そうか」

と俺は適当な席に座りパソコンを起動させさつき消えたナビを復活させた。

「うう。酷いですよマスター（涙）」

「良いから、ここのセキュリティにアクセスしろ」

「少しは、優しさを見せてくれても罰は当たりませんよ」

「優しさ？何それ？食えるのか？」

とマーナと話をしてるとバカそうな男がはいつてきた。

「???」
「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「遅いぞ明久。早く座れ」

「え！？ゆ、雄二なの？」

「何を言っただ明久。俺以外に坂本雄二が居るのかよ」

あの明久と言うやつは薬で変化した坂本に恐怖や信じられないものを見たって顔をしている。

なるほど。この坂本と言うやつを弄れは面白いかもしれない俺が考えてると

「マスター侵入完了しました。気づかれないようダミーデータを流

してませんがよろしいでしょうか？」

「ああ。かまわねえ。他の奴らに気づかれないようにしろ。あとはお前の自由にしろ」

「了解です それと例のツインテールはDクラスにいますよ」

「そうか。面白くなりそうだな」

と俺が言うとマーナも意地が悪い顔をして笑っていた。まったく誰に似たのやら。

と俺が次に移ろうとしたとき。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

問答している坂本と明久に話しかけている覇気のない声が聞こえた。

そこには、寝癖の付いた髪にヨレヨレのシャツを着た、中年がいた。

このクラスの担任なのだろうかと俺が考えてると。

「それと席についてもらえますか？HRホームルームを始めますので」

と言った。さてさてこれからどうなるか楽しみだぜ

第四話（前書き）

連続投稿です。

第四話

バカテスト 第3問

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that
grandmother had used regularly」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強してますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 * x」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

マーナの答え

「祖母と呼べるものは前にマスターに破壊されました。」

教師のコメント

……そうですね。あとで海谷君に説教をします。

海谷陸の答え

「困った。ネタが思いつかない」

教師のコメント

真面目に答えてください。

「えー、おはようございます。2年F組担任の福原慎ふくはらしんです。

よろしくおねがいします。」

そういつて黒板に名前を書こうとしたが、チョークが無いらしく諦めた。

なるほど。さすがは最低クラスだ。

と思いながら俺は先生の話など聞かずパソコンを見ていた。

マーナがシステムの掌握をしているのを見ていた。

「マスター。掌握まであと数分です」

と駄目ナビ が教えてくれた。

(何が誰にも入れないだ！！マーナに簡単に掌握されようではお粗末でしかないな)

「マスター邪魔が入りました」

「迎撃をしろ」

「了解。アンチプログラム始動します」

(さて、これからどう動くか楽しみだな。俺を動かす位は粘って欲しいね)

と俺が考えてると後ろの奴が俺に肩を叩いてきた。うざいので振り返ると

????「お前の番だぞ」

「俺の番だと?」

(なるほど。俺の自己紹介か)

と俺は立ち上がりめんどくさそうに喋った。

「俺の名は海谷陸だ。俺の邪魔をした奴は実験に使うから覚えとけ」と言っただけ俺は座った。

周りからぶつくさ言っていたが俺に言わすれば実験が出来るから構わないのだがらと笑っていると。

「マスター掌握完了です」

とマーナからの返事が来た。

俺はダミーで無いかの確認とハッキングの形跡を消しシステムの解析をさせた。

何やら、マーナも何かをしているようだが気にしても仕方あるまい。どうせ役に立たないのだから

とパソコンのキーボードを叩いていると真っ先に目に着いたのが『観察処分者』というものだった。

調べてみると該当者が吉井明久と書かれていた。

なるほど。あのバカがそうかと気分が悪そうな男を見ていた。

実践データが探してみたが今の状態では確認が出来そうにないと俺がため息をついてると。

バキィッ、バラバラバラ……。

何か壊れた音が聞こえたのでそっちの方に向いたら教卓が崩れていた。

「え、……替えを用意してきます。少し待っていてください」

「随分ともろい教卓だな？」

きまづそつに告げると、先生は早足で逃げていった。

「あ、あはは……」

近くでは、巨乳娘が苦笑いしていた。

その隣では明久が神妙な顔立ちになって坂本に話しかけていた。

そして、立ち上がって廊下に出て行く二人。

そして、二人に気付かれないように扉の前で聞き耳を立てる俺。

何が企んでいるのか聞かてもらおうか！

文月学園におけるクラス設備の奪取・奪還および召喚戦争のルール

文月学園におけるクラス設備の奪取・奪還および召喚戦争のルール

一、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立ち会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。

なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

二、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は、該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。

総合科目については各科目最新の点数の和がこれにあたる。

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると0点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

四、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受け直して点数を補充することで何度でも回復可能である。

五、相手が召喚獣を呼び出したにも関わらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄と見なし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

六、召喚可能範囲は、担当教師の周囲半径10メートル程度（個人差あり）。

七、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行為として処罰の対象となる。

八、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもつてのみ決定される。

この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。

あくまでもテストの点数を用いた「戦争」であるという点を常に意識すること。

九、点数が測定不能の場合、試験召喚戦争中に回復試験は受けられない。

十、点数が測定不能の場合、戦闘に参加できる時間10分のみそれを過ぎると補習室に行きとなる。

十一、点数が測定不能の場合、時間切れ以外で敗北した場合代表が倒されたとみなしそのクラスは負けとなる。

例を上げると敵を倒す前に時間切れになりその上対戦相手が一人でもいると敗北となり測定不能者の所属するクラスが敗北となる。

第五話

バカテスト 第4問

問 以下の問に答えなさい。

『 (1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のうちどれか、
? ? の中から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$ 『

姫路瑞希、マーナ、海谷陸の答え

『 (1) $X = \frac{\pi}{6}$

(2) ? 『

教師のコメント

そうですね。角度を『 π 』ではなく『 $\frac{\pi}{6}$ 』で書いてありますし、完璧です。

それに海谷君は数学では冗談を書けないことに先生は安心しました。マーナさんはコンピュータ ですから解けて当然ですね。

土屋康太の答え

『 (1) $X = \text{おおよそ} \frac{\pi}{6}$ 『

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生はいままで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

さてさて、どんな会話が繰り広げてるのか楽しみだなこれが俺の少ない趣味の一つだからな?

『それで、話ってなんだい?断っておくけど俺に男に興味は無いからね?』

『性格が変わっても雄二が僕をどういう目で見てるか聞きたいよ?まあ今は置いとくけどそうじゃなくてこの教室についてのことなんだ』

(この教室（Fクラス）についてか…それと、男に興味を持つ薬か。あのゴリラに飲ませたらどうなるか楽しみだな。そうだな。データも欲しいしこのクラス全員を対象にしてみるか。面白くなってきたな)

『Fクラスか。想像以上に酷いもんだね』

『雄二もそう思うよね?』

(安心しろ。このクラスのやつだけじゃなくて、見た奴誰でも思っ
な。)

『もちろんだよ』

『Aクラスの設備は見た?』

『ああ。凄かったね。あんな教室見たことがない』

(ふむ、暇があったらAクラスを覗くのも一興だな)

『そこで、僕からの提案。折角2年生になったんだし、<試召戦争>をやってみない?』

『戦争、を仕掛けたいと?』

『うん。しかもAクラス相手に』

『……なにが目的なんだい』

『いやあ、だってあまりに酷い設備だからさ』

『嘘をつくなよ。全く勉強に興味のない君が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろう』

『そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校にくるわけが

』

『君がこの学校を選んだのは、＜試験校だからこその学費の安さが理由だよな？』

（ふむ。何か考えてるようだあのゴリラ。それにしても渡りに船だな。

試召戦争の実践データを取れるとはありがたいね。それにマーナでは取れなかった情報もありそうだし面白くなってきたな。）

『あー、えーっと、それは、その……』

『…姫路の為だね？』

『ベツ別にそんなワケじゃ！』

（面白くなってきた。これに参加しないといけないねえ）

『おい、お前ら。なに面白そうな話をしてるんだ？』

「！？いつから聞いていたんだい？」

「！？君は？」

「お前らが教室をでた辺りからだ」

「最初からじゃないか、え　と君は？」

「自己紹介をしたと思うが陸だ。海谷陸」

「……何が目的何だい？」

警戒をしてるようだな。無理もない親しくない奴が突然話しかけてくるんだ。当然の反応だな。

「簡単な話だ。試召戦争に興味があるからだ」

「本当にそれだけかい？」

「詳しくは言えないがここには実験の協力の為にこの学校に来ただ」

この男に嘘を言う必要はない。言う必要がないことは言わないけどな。

「……わかったよ。この場は君の言葉を信じよう」

それから少し考えたこのゴリラは俺を信じてくれたようだ。

「それよりさっきの話だな」

「ああ、そうだね。どこまではなしたっけ？」

「明久が姫路の為に戦争を起こそうとしているってところ辺りだよ」

「なるほど。惚れた女の為か」

「べ、別にそんな理由じゃ

」

「それで、どうするんだい代表殿？」

「明久に言われるまでもないよ、俺自身でもやろうと思ってたところだったんだ。ちょうど勝てる作戦も思いついたからね」

「え？どうして？雄二だって全然勉強なんてしてないよね？」

「世の中学力だけが全てじゃないって、証明してみたくてね」

ふむ。奴の中に何かあるのか？興味があるがそれよりも試召戦争の方が楽しみだ。それは後に調べるとしよう。

「それより、そろそろ教室に入るよ。先生が戻ってきたみたいだからね」

「あ、うん。」

「さて、代表殿のお手並み拝見と行きますかな」

壊れた教卓をかえて、HRが再開された。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

「えー、須川亮です。趣味は

」

とくに変わったことが起こらずにゴリラの番が来た。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生にいわれて雄二が席を立つ。

性格が変わったせいかな。ふざけた雰囲気は見られず、代表として相応しい堂々とした態度で教卓が上がっていった。

「坂本君は、Fクラスのクラス代表でしたよね？」

先生に問われて、鷹揚にうなづいた。

まあ、バカの中では成績が良かったただけだな。

「Fクラス代表の坂本雄二です。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれて構わない」

こっからがこのゴリラの見せ所だな。どうやってFクラスの皆を乗せるか楽しみだな？

「さて、皆に一つ聞きたいことがあるだ」

代表殿が全員の生徒を見るように告げる。

間のとりかたがうまく、全員の視線はすぐに代表殿に向けられるようになった。

堰をきつたかのように次々とあがる不満の声。

「皆の意見はもつともだね。そこで」

Fクラスの反応に満足したのか、自信のある顔を浮かべて、

「これは代表としての提案なんだけど

これから戦友となる仲間達にむけて野性味満点の八重歯を見せ、

「
FクラスはAクラスに<試召戦争>を仕掛けようと思
う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争への引き金をひいた。

さてこれからどう面白くしようかな（ニヤリ）。

第六話 試召戦争開始準備

バカテスト 第5問

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント
良く出来ました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

海谷陸の答え

『光ってるの』

教師のコメント

前前回の雪辱を果たして満足げのようですがあとで土屋君と吉井君と一緒に職員室に来てください。

マーナの答え

『通信』

教師のコメント

光ファイバーですか？確かにあなたにとってそうかもしれませんが陸に染まらないでください。

Aクラスへの戦線布告。

それはFクラスにとっては現実未の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたらなにもいらぬ』

そんな悲鳴が教室のいたるところから上がる。

確かにこいつらの去年の成績を見れば誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。

文月学園に点数の上限が無いテストが採用されてから4年間が経過した。

このテストには1時間という制限時間と無制限の問題数が用意されている。

その為、テストの点数は上限がなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことが出来る。

また、科学とオカルトと偶然によって完成された<試験召還システム>というものがある。

これはテストの点数に応じた強さを持つ<召喚獣>を呼び出して戦うことのできるシステムで、

教師の立会いの下で行使が可能になる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。その中心にあるのが、召還獣を用いたクラス単位の戦争

試召戦争と呼ばれる戦いだ。

その戦争で一番重要になるのはテストの点数なんだが、AクラスとFクラスの点数は文字どおり桁違いだ。正面からやりあったとしたら、Aクラス一人相手にFクラスは3人でも勝てるかどうか。いや、相手次第では4、5人でも勝てないかもしれない。

「そんなことは無いよ。必ず勝てるよ。いや、俺が勝たせてみせるよ。」

しかし、そんな中で雄二は自信満々に宣言してみせた。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけがないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

しかし、まだ否定的な声しか上がらなかった。

確かにどう考えても勝てる相手ではないだろうな。しかし、あのゴリラにはその考えがあるようだな。

「根拠ならあるよ。このクラスには試召戦争で勝つことの出来る要素がそろっているだよ」

このゴリラの言葉をつけてFクラスの皆が騒ぎ始める。

「それを今から説明してみせるからね」

どうやら得意の不適な笑みで説明を始めるつもりだったのだろうか
薬のせいかさわやかな笑顔になったみたいで皆引いてるようだ。

俺的には面白いから戻さないけどな。

「そこにいる、康太君。畳に顔をつけて姫路さんのスカートを覗いてないで前に来てくれないかい」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる康太とかいう男。

姫路はスカートの裾を押さえて遠ざかると、康太は顔に付いた畳のあとを隠しながら壇上へ歩き出した。

「土屋康太君。彼があ有名な寡黙なる性識者^{ムツリーニ}なんだ」

「……！！（ブンブン）」

確かこの学校の情報を調べているとよく目にするのがムツリーニ
と言つ名前。

確かこの名前は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑をもって挙げられる。

『ムツツリー二だと……?』

『馬鹿な、奴がそうだというのか……?』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ……』

『ああ。ムツツリに恥じない姿だ……』

なるほど。たとえどんな状況でも、自分の下心は隠し続ける。異名
は伊達じゃないようだな。

「姫路さんのことは説明する必要はないよね。皆だってその力はよ
く知っているはずだから」

「えっ?わ、わたしですか?」

「うん、うちの主戦力だからね。期待しているよ」

確かデータでも姫路と言う巨乳娘ひとりでFクラス生徒の4 / 5人
分の戦力になるからな。

『そつだ。俺達には姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ、彼女さえいれば何もいらないな』

面白いな。誰だい?これから戦争を仕掛けようとしてるのにさっき
から巨乳娘にラブコールしてる奴は?

「木下秀吉だっている」

「ワシもか？」

木下秀吉。データによると学力ではあまり名をきかないが、他の事
だっただら有名だったな。

演劇部のポップだったりだとか、双子の姉がいたり。

『おお……！』

『ああ。あいつ確か木下優子の……』

「当然俺も全力を尽くすから」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験のときは姫路さんと同じで体調不良だ
つたのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

『おいおい、俺達ならやれるんじゃないか！？』

『なんだかやれそうなきがしてきたな！』

うまいな。性格が変わっていても指揮する力は変わらないようだな。

ほとんどのクラスメイトは引いていたがな。

だが今クラスの士気は確実に上がっていた。

「それに、吉井明久だっているからな」

……シーン

そして一気に下がった。

なるほど。性格が変わって明久^{バカ}を弄ることはやるんだな。

これは面白いデータとサンプルだ。ますますこいつ（雄二）で試して弄りたいね（ニヤ）。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まったくそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことあるか？』

『さあ？初めて聞いたが。このクラスにいるのか？』

「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！

僕は雄二とは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを
って、

なんで僕を睨むの士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう!」

「そうか。皆は彼の事を知らないのか?ならば教えてあげるよ」

「彼の肩書きは《観察処分者》だからね!」

第七話

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

うん。情報でも明久^{バカ}の成績から見てもその通りだな（笑）。

「ち、違うよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだよ。バカの代名詞だよ（さわやか笑顔）」

「性格が変わっても言うことは同じか！！バカ雄二！」

「あの、それってどういうものなのですか？」

なんだ、姫路（巨乳娘）はしらないのか？

「まあ、具体的には教師の雑用係だね。

力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすといった具合だよ」

マーナが情報収集した情報によると、本来の召喚獣はものに触ることができない。

召喚獣が触れられることが出来るのは他の召喚獣だけである。

しかし、明久^{バカ}の召喚獣は違う。雄二^{ゴリラ}の言ったとおり、物に触れることこの出来る特別製だ。

「そうなんですか？それって凄いですね。召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、

そんなことが出来るなら便利ですよね」

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」

確かに実際に大したもんじゃない。召喚獣の負担は何割かは明久バカに帰ってくる。

だから、明久バカの召喚獣が傷ついたら、明久もダメージを負う。

精神がリンクするってことだから表面的ではなく、内面にくるってことだ。

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できない奴が一人いるってことになるよな』

「気にする必要がないよ。いてもいなくても同じような雑魚だからね」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな?」

「とにかくね。俺達の力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思っただ」

なるほど。確かに成績を見たがEクラスと戦うメリットはないな。

しかし、Dクラスでは、勝てるかどうか微妙だぞ。

「うわっ、すっごく大胆に無視された!」

「皆、この待遇は大いに不満だよね？」

『『『当然だ！』』』』

「ならば、総員武器をとって欲しい！出陣の準備だよ！」

『『『おおーっ！！』』』』

「俺らに必要なのは卓袱台ではないよね！俺らに必要なのは……」

『『『Aクラスのシステムデスクだ！』』』』

「そこで明久。君にはDクラスへの宣戦布告という大役を任命しようと思うんだ」

なるほど。明久を犠牲にして自分は楽しもうというわけか。

「……試召戦争の使者って、だいたい酷い目に合わされるんじゃないかな？」

仕入れた情報でも基本的に上位クラスには下位クラスの挑戦を受けなくてもメリットは無いため、

明久の言うように下位クラスの使者はボコられる運命にある。

雄二は明久を騙してそれを楽しみたいんだろうが、それでは面白くないからな。

「大丈夫だよ明久、俺が」

「まあ待て代表、明久バカを使用者にするわけにはいかないな」

「そして、君も僕をバカ呼ばわりするんだね」

何？という疑問顔の雄二ユウジに俺は、説明をすることにした。

あとバカが何か言っただけな気がするが気にしない。

「バカをけしかけても面白くない。ここは俺にまかしてもらおう」

『な、なんだと！！』

『俺的には吉井がぼこられるのが面白いと思うだが』

「最低のクラスメイトだ！！」

とクラスメイトが口々に言っていた。

これだからバカは困る。まあ、バカは無視が一番だからな。

「まあ、俺に任せな。楽にDクラスを倒す方法を考えているからな」

「へえ。それは面白そうだね。じゃあよろしく頼むよ」

とゴリラは俺の案を採用したようだ。

さて準備をしなくちゃな。

第八話

それから準備を終えた俺がDクラスに行こうとしたらなぜか俺を止めようとしていた。

「お前は人殺しをする気か？」とか「そんな物騒な武器入らないよね」とか「確かに楽に勝てるだろうがやりすぎだ」とか

言ってたが薬をちらつかせたら黙って俺を離して通してくれた。

さていろいろ問題も発生したがまあ、いい。

まずはDクラスに行く前に情報収集をするためのカメラと盗聴器を仕掛けないといけないな。

カモフラも完ぺきなステルスカメラとステルス盗聴器をこの学園にばらまいたしそろそろ行くか。

そして、Dクラスに向った。

????「この教室に何のようでしょうか？」と三つ編みの女の子が俺に気づいて話しかけてきた。

「この代表に用事があるんで呼んでももらえないかな」

と俺が言うと女の子は代表に呼んでるようだ。

「代表？ ええ、いるわよ。平賀くん、お客さんよー」

「なんだい？ 玉野さん。お客さんって？」

「彼が用があるみたいよ」

「初めまして、僕がこちらのクラス代表の平賀って言うんだ。それで用事というのはなんなんだい」

「ああ。Fクラスの海谷陸だ。我々Fクラスは、Dクラスに対して、戦線を布告する。開戦は今日の午後だ」

「なるほど。君が使者と言うわけか」

「ああ。そうだ」

「と言うわけだそうだ。皆、Fクラスから宣戦布告をしてきたようだ」

『無事で済むと思うなよ』

『軽く蹴散らしてやると伝えときな』

『バカが俺達に勝てると思ってるのかよ』

と俺の周りに血の気が多そうな奴らが集まってきた。

「ああ。俺達の勝ちで決まってるからな（ニヤ）」

『『『上等だ』』』

と俺に襲いかかってきたが前にいる奴に薬を飲ませた。

即効性だからどうなるかな。

『加藤。じつは俺お前が好きなんだ』

薬を飲まされた奴は急に後ろの男に振り向き加藤という男に告白をした。

『中田がおかしくなった!!』と告白された加藤と言う男は引いていた。

ふむ実験は成功だな。惚れ薬を飲んだ奴はなぜか後ろにいる奴に惚れる効果がある。

なぜそうなったかは研究中だが(笑)

『おいこいつが持つてる薬に気をつける!!』

「遅い。お前らにはこれだ」

と俺から離れようとしてたが時遅く薬を飲んでした。

『し、しまった!?!』

『ち、畜生!!』

『必ず仕返しをしてやるからな!!』

「そろそろ時間だぞ」

と俺が言う彼らはそのことに気づき慌てていた。

『斉藤好きだ!!!』

『風間好きだ!!!』

『平賀好きだ!!!』

『『『ち、近づくな変態ども』』』

と、俺をぼこる暇もなく正常な連中は逃げ回っていた。

さてこれだけでは面白くないから俺は教室を出ると特殊なガスをばらまいた。

『おい、使者が居ないぞ!!!』

『そうは言っけど俺達も逃げ場がないぞ!!!!』

『おい。扉が開かないぞ!!!』

『『『愛してるぞ!!!』』』

『『『ぎゃああああ。変態が来た!!!!』』』

『ねえ、さっきから体が重たいんだけど?』

『そ、そっいえばそつだな』

『ねえ、見てあそこに箱があるよ』

『そっから出てるんだ』

『それを外に放り出すんだ!!』

『わ、わかった!!』

カチツ

『カチツ!?』

ドカ　　ン!!!

「終わったか」

「み、美春はアンタが一番恐ろしいです!!（ガタガタ）」

「何だ。無事だったか。つまらん」

「陸！アンタはおさなじみをなんだと思ってるのですか!!」

「キッパリ実験材料」

「お、終わりました。美春の平和は今終わりを告げました!!（ガタガタ）」

とブツブツ言っていたので俺は仕方なく美春を保健室に連れて行って教室に戻った。

おまけ

保健室の先生は困っていた。

「清水さん。大丈夫ですか？」

「あ、悪魔が来た！！終わりよ。美春の平和は今終了した〜！！（ガタガタ）」

「困ったわ。精神科に連れて言ったほうがよさそうね」

と保健室の先生はため息をついていた。

第九話（前書き）

今回は少し短いです。

第九話

教室に戻るとクラスメイトは俺に集まってきた。

『死人は出してないよな』

『君が無事なのは良いけどDクラスの奴ら可哀想だな』

『どんな手で逃げ帰れたんだ』

と口々に言ってきた。なぜか俺の心配ではなくDクラスの心配をしているなぜなんだろう？

「よし。陸が戻ってきたね。今からミーティングを行うよ」

Fクラスでは行わないようで、雄二ゴリラは扉を開けて外に出て行った。まあ当然ことだな。

「あの、一体何をしたんですか？」

「そうじゃのう。突然の爆発が聞こえたときは驚いたのじゃ」

と姫路（巨乳娘）とデータに書かれていた木下秀吉が話しかけてきた。

「?どうして、そんなことを聞いてくるんだ」

「ど、どうしてって」

「お主を知っているじゃろうが下位クラスが上位クラスに宣戦布告をしたらばこられとじゃから心配をしていたのじゃ」

俺は理由がわからないから聞き返すと姫路（巨乳娘）は、つまり、その後を引き継いだ木下による説明が入った。

「ああ。そのことか。簡単な話だ。俺があいつらに薬と麻醉ガスを喰らわせたからさ」

「なぜ同情をしたのか理解できました（呆）」

「そうじゃのう（ため息）」

と俺に答えになぜか二人は呆れていた。？なぜ呆れるのだろうか。ふむ。そうかまだ生ぬるいのだな。

では次はもっと過激な物にしよう俺が決意してると。

「ほら吉井に海谷。あんた達も来るの」

性同一障害の島田が俺と明久と土屋バカを呼んでいた。

「あー、はいはい」

「ああ」

「返事は一回！それと海谷？ウチに対して失礼なことを考えてなかった！」

「へーい」

「ああ。そんなわけないだろう」

なるほど。感は鋭いようだ。

「……一度、Das Brechen
だと……」

ええと、日本語

「ん、どうしてドイツ語なんだ？」

「……調教」

「そう。調教の必要がありそうね。それと自己紹介の時に言ったと思うけどウチは帰国子女よ」

ああ。そう言えばそう言ったような気がするな。

「調教って。せめて教育とか指導って言ってくれない？」

「じゃ、中間とってZuchtingung」

「……それはわからない」

「折檻だな。しかも悪化してるぞ」

「そう？」

「というかムツツリーニ。どうして『調教』なんてドイツ語を知ってるの？」

「……一般常識」

ふうん。最近是一般常識になってるのか。そいつは知らなかったな。

「相変わらずムツツリーニは性に関する知識だけズバぬけてるよね」

「……！！（ブンブン）」

そんな会話をしていると屋上にたどり着いた。

第十話

雲一つない空から眩しい光が差し込む。

春風とともに訪れた陽光に、気持ちよさを感じた。

「陸。宣戦布告はしてきたね？」

雄二ユウジが確認してきた。

「今日の午後に開戦予定と告げてきたぜ」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことよね？」

「そうなるね。明久君、今日の昼ぐらいはまともなもの食べてね？」

「そう思うならパンでもおごってくれるとうれしいんですけど」

「？明久バカは、金がないのか」

と明久バカの言葉に俺は呆れた。

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや、食べないんじゃないんだ。食べれないんだよ」

「いや、一応食べてるよ」

「……アレは食べてると言えないよ」

「一体どんな食生活をしてるんだ。」

「何が言いたいのさ」

「いや、君の主食って」

「水と塩だよね？」

「失礼な。きちんと砂糖だっけ食べてるさ！」

「あの、吉井君？水と塩と砂糖って、食べるとはいいいませんよ……？」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

「やっぱりこいつはバカだ。」

「ま、飯代まで遊びに使い込む君が悪いんだけどね」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

「^{バカ}明久の話によると明久の両親は仕事の都合で海外にいる為、明久は一人暮らしをしている。」

「一応親からの仕送りはあるらしいけど、そのほとんどはゲームや漫画に消えている。」

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」

「……」

「明久^{バカ}言葉がおかしいぞ」

とバカに突っ込みながらも俺は考えていた。

ほう。姫路（巨乳娘）は明久^{バカ}が好きなのは行動を見ててわかってるけどどこまで積極的とは思わなかったな。

データの更新だな。

「本当にいいの？ 僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久し振りだよ！」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったね明久君。手作り弁当だよ？」

「うん！」

まあ、たまにはまともな物を食べたほうがいいだろう。死なれてはサンプルとして困るからな。

「……ふーん。瑞希って随分優しいんでね。吉井だけ（・・・）に作ってくるなんて」

へえ。この性同一障害の島田もバカが好きなのか。焼きもちに嫉妬か。では、彼女もサンプル決定だな。

恋に興味はないが性同一障害を治す薬が研究中だから彼女で実験をしながらやっつけていこう。

餌はバカの写真でもあげれば協力してくれるだろうしな。と俺が考えにふけてると。

「……………」

「？陸。何を考えてるの？」

「新しい実験についてな」

バカの奴何で話しかけて来てんだ。と俺が悩んでると。

「あの、海谷君は弁当はいららないのですか？」

と姫路が不安そうな顔で俺を見ていた。ああ。そのことが。なるほど。なるほど。

「ああ。悪い考え事をしてたんで気づかなかった。出来たら俺にもお願いできるかな」

「わかりました。それじゃ、皆さんに作ってきますね」

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな……………」

「今だから言うけど、僕初めて会う前から君のこと好き

」

「待って明久君。今振られると弁当の話はなくなるよ」

「 にしたいと思ってました」

バカの反応は面白いがゴリラのバカ弄りはつまらんな。もっと面白くするべきだと思う。

たとえばふられたときにバックに爆発を起こすと面白いと思うが。

ふられた方もふった方も唾然としてその後正気に戻って慌てると思うと顔がニヤケるぜ。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「明久君。君はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるね」

「だって……お弁当が……」

「話がかなりそれだね。そろそろ、試召戦争の話に戻ろうね」

今回の戦争は俺は回復試験とやらを受けなくてはならない。面倒な話だ。

「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなのじゃ？
段階を踏んでいくのならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「簡単な話だ。Eクラスと戦わなくて勝てるからだ」

「陸。君にも話してないよね？」

「俺は、去年の一年、二年の生徒の成績を知ってた。それくらい予測できる」

「……気になることがたくさんあるけど今は良いよ（呆）。もちろん考えがあつてのことだよ」

「どんな考えですか？それとどうして成績を知ってるんですか？」

「そうね。ウチも気になるわ」

ち、メンドクセ。そうだ。ゴリラのせいでしょう。

「代表はクラスの成績を把握している。そこから知ったからだ」

「え、そうなんですか坂本君？」

「そうなの。坂本？」

巨乳娘と島田ミンデレがゴリラに詰め寄っていた。ゴリラも迫力で引いてい

る。とりあえずは安心だな。

「え、うん。特別に教えてくれるよ（焦り）それより話をつづけるよ。」

色々と理由があるんだけど、なぜEクラスを攻めないのは簡単よ。戦うまでも無い相手だからね」

「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」

確かに試験の点数で振り分け試験が行われているので、Eクラスは俺達のFクラスより点数は高い。

「振り分け試験の時はね。姫路と俺に問題が無い今ならEクラスには勝てるからね」

「つまり、Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「？それならDクラスは正面からぶつかると厳しいの？」

「うん。確実に勝てるとは言えないね」

「だったら、最初っから目標のAクラスに挑もうよ」

「さっきゴリラが言ってたろ？色々と理由があるって。」

「誰がゴリラですか！でも陸の言う通りよ。初陣だからね、派手にやって今後の景気づけにしたいよ？」

それに、打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだからね」

「あ、あの！」

と、姫路（巨乳娘）が大きな声を出していた。

「ん？どうしたの姫路さん」

「えっと、その。吉井君と坂本君と海谷君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それはね。それはついさっき、姫路さんの為によって明久君に相談されて」

「それはそうと！」

雄二ユリヲの台詞を遮るように明久バカが大きな声をだした。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味が無いよ？」

「負けるわけ無いよ」

「ほう。大した自信だな」

「君達が俺に協力してくれるなら勝てるよ」

「なるほど。面白そうな話だな」

「いいかな、君達。俺らのクラスは 最強だよ。」

確か雄二ユリヲは、学力が全てじゃないという証明のため。

明久バカは、姫路（巨乳娘）に相応しい設備を与えるため。

俺は、実践データを得るため。

皆、違った目的であるが、やることは一緒。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……(グッ)」

「が、頑張りますっ」

打倒Aクラス。

Fクラスにとっては荒唐無稽な夢かもしれないが、夢は見るためにあるものだ。

「そう言ってくれると嬉しい。それじゃ、作戦を説明するよ」

ここに、最下層（Fクラス）が最上層（Aクラス）に対する下克上が始まった。面白くなってきたぜ。

第十一話（前書き）

Dクラス戦です。

少しお見苦しいところがありますが読んでいやでしたらそこを飛ばして読んでくださると嬉しいですよ。

第十一話

戦争が始まって戦ってる頃俺と姫路（巨乳娘）は、回復試験を受けていた。

「メンドクセ」

「あははは。そう言わず頑張りましょう」

と巨乳娘は言うが一言で言ってこんな簡単な問題を解く方が苦痛ではない。

そんなことより、俺は新薬の研究や召喚獣の実践データを採取してどこまで出来るか試した方がよっぽど有意義だと思っがな。

「とまあ、愚痴ったところで仕方がないな。さっさと試験を済ませ向うとしよう。」

マーナ視点

マスターの命令通りに召喚獣のデータを収集してますがこんなんで良いのでしょうか？

近藤『いたぞ。Dクラスだ』

田中『げ、俺達が弱っていると知って挑んできたぞ』

『後退だ！！』

鉄人「敵前逃亡は補習だぞ」

と鉄人が背後にいた。

『Fクラス近藤がDクラスに総合科目で挑みます。サモン！！』

『なめるな！！サモン』

両者の足もとに幾何学的な図形が現れ、その後に召喚獣が現れた。

近藤の召喚獣の姿は槍を持ち道着姿で現れた。対して田中の召喚獣はふたふりの短剣と鎧を着けていた。

Fクラス近藤総合科目340点VSDクラス田中総合科目580点

田中『行くぞ！！』

近藤『ちっ』

田中の召喚獣が走りだし短剣を構え近藤の召喚獣に迫った。

しかし田中の召喚獣の攻撃はあたらずかわされた。その上反撃を受けた。

近藤『どうした。余裕でかわせるぞ』

田中『うっせ！！（ちっ、体がだるくて思うように俺も召喚獣も動かせねえ）』

近藤『とどめだ！！（やはり、海谷が何かしてるな。おかげで楽に

戦えるぜ！』

と近藤の召喚獣が攻撃をしようとしたところ何者かの召喚獣に止められた。

???? 『俺の田中に倒させない』

田中 『げ、永久』

近藤 『お、お前ら出来てるのか？』

と田中が怯え、近藤が呆れていた。

「お前らの趣味にとにかくは言わないが時と場所を考える」

と鉄人も呆れていた。

永久 『俺の田中に指一本触らせないからな』

と彼の傍にいる召喚獣の装備はランスに鎧を着けていた。

田中 『誤解です！！西村先生！！』

と田中は必死に誤解を解こうとしていた。

しかし。

永久 『酷い。そっちの野性的な男の方がいいの！！この浮気者！！』

と攻撃しだした。味方のしかも田中召喚獣に（笑）

田中『バカ、敵は、あっちだ!!』

近藤『西村先生。彼ら、俺を無視して戦ってますけどこれって敵前逃亡になるじゃないんですか?』

「ああ。確かにそうだな」

と鉄人が動こうかとしたとき。

永久『この浮気者!!』

田中『冗談じゃねえ。俺は普通に女が好きなんだ!!』

とお互いの攻撃で点数が0になった。

田中『あ。しまった』

永久『きちんと話し合いました?』

と田中が落ち込み永久が近づこうとしたとき、二人の肩をたたかれた。

『てつ鉄人!?!』

「さあ、戦死者は補習室へ集合だ!!」

先ほど味方の攻撃でやられた田中と永久が、あつという間に担がれてしまった。

「さあ来い、この負け犬どもが!!」

『いつ、嫌だ! 鬼の補修は嫌だあああ!!』

『安心して。どこでも話は出来るよ』

「安心して。趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎」と言つ、立派な模範生にお前達を仕立て上げてやる!」

『たつ助けて!! 誰か……助けてえええええ!!』

『もっと腹を割って話し合ひましょう』

死に物狂いで逃げようとするも、びくともせず。

そのまま田中と永久は、補習室へと連行されていった。

その場に残った、自身にも起こりうる最悪の未来……その戦慄を残して。

『哀れな……だが、これは戦いなんだ。躊躇えば、次は我が身やだからな』

と近藤は恐怖を覚えていた。だが気を取り直して皆に号令を出した。

『皆。今のうちに各個敵をたたけ!』

『あつ、ああ。よし、やれるぞ!』

『そうだな。海谷の作戦があれば、おそるるに足らずだ!!』

近藤の号令と活躍で一気に士気が上がった傍らで、犠牲者が出たDクラスはいきなり動揺。

それもそのはず、体が鈍くて大変なうえホモ野郎がさがしているのである。

そのうえ一歩間違えばあなっていたのは自分かもしれないのだ。

『なっ、なあ……逃げないか?』

『そっそうだよ! 体が鈍いうえホモ野郎どもの見つかるくらいなら、俺もうFクラスの設備でいい!』

鬼の補修が確定されるなんて嫌だ!』

『そうよ! 卑怯な作戦を立ててきたうえ味方殺しの巻き添えは嫌』
『よ』

マーナもそう思います。その上気持ち悪いです。何とかしてほしいです(切実)。

ピンポンパンポン

『連絡いたします! 船越先生、船越先生。吉井明久君が、体育館裏で待っています。』

教師と生徒の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです!』

こっちの方が面白いと思いますよ(ニヤリ)

陸視点

俺がテストを解いてるとき。

ピンポンパンポン

『連絡いたします！ 船越先生、船越先生。吉井明久君が、体育館裏で待っています。』

教師と生徒の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです！』

確かデータによると船越教諭 45歳独身

婚期を逃し、ついには単位を盾に生徒に交際を迫る様になった女性教師。

なるほど。ゴリラには面白いことを考えてるな。と俺が笑っている。

どこかともなくバカの声が聞こえてきた。

『須川ああああっっ！』

「「「「「わはははははっ！」「」「」「」

「グッジョブ！須川。最高の仕事だったよ！」

皆が笑いきるまでしばし、雄二ユウニ達は教室を出て行った。

「おい姫路。あとどん位で終わる？」

「えっと、あと30分ぐらいで終わると思います」

「そうか、だったら大丈夫だな」

「このあとつて、海谷君が近衛部隊の人たちを引き付けている間に、私が平賀君を倒せばいいんですよね？」

「まあ、お前の点数だったら近衛部隊もろとも倒せそうだけどな」

「そ、そんなこと無いですよ。」

「そう自分を謙遜するなって。この学年じゃお前とまともに戦えるのって霧島ぐらいだろ？」

「……本気 of 海谷君には敵いませんよ。」

「ん？なんか言ったか？」

「はい。海谷君はなんで、本気を出さないんですか？」

「本気？。何でそう思っただ？」

「テストを解いてた時まるで簡単すぎてつまらないという顔をしてました。」

「それに海外で私達と変わらない歳で博士号を総なめにした男が居るってニュースや新聞で書いてました」

「どっつてそう思った」

「最初は坂本君の予想をわかっていたところと成績の話です。確信を持ったのはテストで予想していた枚数では足りなくて先生が

何度も取りに行っていました」

「なるほど。だがそれだけでは根拠がないと思うが」

「え……？」

「テレビやニュースで知ったと言ったがそれは名前だけで顔は載らなかったと思うが。」

それにひょっとしたら同姓同名かもしれない。テストだって適当に書いていたかもしれないぜ」

「……」

「俺がそういう人間だと言っなら根拠と証明をしてみな」

「……確かにそうですね。わかりました。吉井君達と暴いて見せませす！……」

「やってみな」

さて仕込みは終わった。これからが面白くなるぜ

第十一話（後書き）

次でDクラス戦が終わります。

第十二話（前書き）

Dクラス戦決着。

第十二話

第六問

問 以下の問に答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希、海谷陸、マーナの答え

『C6H6』

教師のコメント

君達には簡単でしたかね。それに今回は海谷君が間違いを書かなくて先生は安心しました。

海谷陸のコメント

薬の調合もしてるんだ。化学式ごときに間違える事は俺のプライドが許さねえだよ。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は科学を舐めていませんか。

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

「下校している連中に上手く溶け込むんだよ！取り囲んで多対一の状況を作るんだよ！」

「皆、落ち着いて取り囲まれない様に周囲を見て動け！半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに、残り半分は防衛しつつ囲まれている者を助けるんだ！」

坂本とDクラス代表平賀（熱血野郎）の指示が戦場に響き渡る。渡り廊下は既に総力戦となっていた。

俺らのクラスの皆がDクラスの連中を取り囲んでる姿がそこら中に見て取れる。

地力で劣る俺達Fクラスにとっては、多少姑息だろうと形振り構っ

てはいられない。

下校中のドサクサに紛れて敵に近付き、取り囲んで打ち取るという戦法で挑んでいた。

対してDクラスは、弱っていても上位クラスの意地か。先ず囲まれない事を第一とし、

個々の実力がFクラスに勝るからこそその各個撃破の戦法を仕掛ける。

互いに一步も譲る事無く、戦場の緊迫感がどんどん増してゆく。

さて、傍観するのも飽きたし。折角だし召喚して試してみるかと獲物を探してると。

「あ、そこにいるのはもしや、美波お姉さま！ 五十嵐先生、ここにきて下さい！」

「くっ！ しまったわ」

「お姉さま！ 逃がしません！」

「くっ、美春！ やるしかないってことね……！」

ふむ。どうやら島田ツンデレが美春に勝負を挑まれたようだな。

既に召喚獣を喚んでいるしな。

応えるように島田ツンデレもそちらを見据えて声を出しました。

「サモン試獣召喚っ！」

喚び声に応えてツンデレの足元に幾何学的な魔方陣が現れた。

確か教師の立会いのもとにシステムが起動した証だったな。

そして、姿を見せる召喚獣。

現れた召喚獣は、ツンデレをそのままデフォルメした見た目、軍服姿でサーベルを持っている。

……軍人さんのようだな。

【まさにベルばらに出てくるオスカルみたいだな】

ん？どこからか電波が聞こえたような気がするがまあいい。それよりレズ娘の召喚獣を見るとしよう。

美春（レズ娘）の方は、普通の西洋鎧に両刃の剣で、見た目はツンデレと同じくデフォルメされた容姿をしている。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……」

「ちょっと！！いい加減ウチのことは諦めてよ！！」

なるほど。ツンデレは明久バカが好き。しかしレズ娘はツンデレが好き。

俗に言う三角関係か。あ、違うな姫路（巨乳娘）を加えるから四角関係か

と俺が考えてるとどこからともかく特にカモフラカメラから優しい視線を感じるのはなぜだ。激しくムカつくのだが。

「ところで島田さん、お姉さまって」

「嫌です！ お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

「来ないで！ わたしは普通に男が好きなの！」

「嘘です！ お姉さまは美春のことを愛してるはずです！」

「このわからずや！」

この様子からレス娘の一方的な愛情か（憐れみ）

ツンデレも苦勞してるな（同情）。それとバカお前が考えてることは俺も同感だ。

「行きます、お姉さま！」

と俺が考えてると2人の召喚獣の距離が詰まってきた。

いよいよ対決か。

「はあああっ！」

「やあああっ！」

2人の気合が廊下に響いた。

いまのところは拮抗してるが……

「相手の方が点数が高いのに真正面からは不利だ！」

とバカが指示を出している。

「そんなこと言われても、細かい動作はできないのよっ！」

しかし、ツンデレはうまくは動かせないようだ。

直後、均衡が崩れた。

ツンデレの召喚獣が力負けして得物を取り落とした。

なるほど。ここまてだな。

「ここまてですっ！」

「くうっ！」

そのままの勢いでツンデレの召喚獣が押し倒した。

その頭上には参考として2人の戦闘力（点数）が表示された。

Fクラス 島田美波 化学 53点 VSDクラス 清水美春 科学

94点

データ通りの点数だな。

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

剣を喉元に突きつけられるツンデレの召喚獣。

腕や足を刺された程度なら点数が減るくらいで済むけど、首や心臓をやられたら即死　つまり補習室行きと言つことのようにだ。

これは下手に動けないな。

「い、嫌あつ！　補習室は嫌あつ！」

ツンデレが取り乱している。

そんなに補習室と言つところは恐ろしいのか？

「補習室？　……フフツ」

レズ娘は、楽しそうに笑いながらツンデレの手を引っ張っていつている。

ふむ？

そつちは確か保健室だったよな？

「ふふつ。　お姉さま、この時間ならベットは空いていますからね」

「よっ、吉井に海谷！早くフォローを！　このままだとウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！！」

だろうな。だがこれも経験の内だと思つぞ。

「殺します…美春達の邪魔をする人は全員殺します…」

「島田さん。君の事は忘れない……!!」

「なんで戦う前から別れの台詞なのよ!?!」

とレズ娘の殺気にバカは怯え、ツンデレに別れの言葉を言った。そのことに怒ったツンデレにレズ娘を刺激させた。

「邪魔者は殺します!」

ツンデレの召喚獣の手足に攻撃を加えて動けなくしてから、こっちに来るな。

まあちようどいいか。こっちとしても試したいしな。渡りに船だな。

「バカ下がってる。 サモン 試獣召喚っ」

硬直してるバカを後ろに引かせ。俺が割り込んで召喚獣を召喚した。

さて、どう戦おうかな。と俺が考えてると点数が表示された。

Fクラス 海谷陸 化学 測定不能 VS Dクラス 清水美春
化学 41点

結論から言えは瞬殺だった。

なるほど。慣れてないと使いこなせないな。だがこれもまだまだ改良点があるな(ニヤリ)

さて唾然としてるやつがいるな。

「ツンデレ、大丈夫か？」

「な、何であんたがここにいるのよ（ガタガタ）」

どうやら今頃になって俺に気づいたらしい。

「ええ、助かったわ海谷。本当にありがとう。ん？なんで海谷を見て怯えてるのよ」

とツンデレが不思議そうな顔をしていた。

「実は、私と陸はおさなじみなのです（ガタガタ）」

「そ、そうなんだ（汗）」

ん？何で俺を見て納得するんだ。

「はい、家もお隣でろくな目に遭いませんでした（ガタガタ）」

「そ、それはお気の毒に（同情）」

「中学の時に海外に引っ越した時は救われた思いでした（安らか）」

「でしょっね（優しい目）」

「ですが、昨日再びこちらに帰ってきてまして地獄が戻ってきました」

「美春（涙）」

「ですから、お姉様！美春と一緒に補習室に行きましょう（切実）」

「西村先生！！早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

「おお、清水か。 たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。 こっちに
来い」

「お、お姉さま！ さっきまでの同情は！？それと美春は諦めませ
んから！」

このまま無事に卒業できるなんて思わないで下さいね」

ふむ。 同情による説得は無駄に終わったなレズ娘。

「吉井」

「島田さん、お疲れ！一度戻って科学のテストを受けてきなよ」

「吉井…」

ふむ。 かなり怒っているなツンデレ。

「さ、陸。 そろそろ戦争を終わらせよう」

「吉井ッ！！」

「はひいッ！！（ビクウ）」

怯えてるなバカが。だがツンデレこんなことをすれば余計に恋が成立しないと云うの事を知らないのか？

「……………ウチを見捨てたわね？」

「……………記憶にごぞいません」

「……………」

今一瞬時が止まったな。

しょうがない。これ以上くだらないことで時間を無駄にするのは好かん。

「死にな」

「いいかげんにしろ！！」

「う……………」

「リ、陸？」

いいかげん、頭に来るんだよ。

終わったことを愚痴愚痴いやがってそれに助かったんだから良かったろうに。

「誰か！！ このわからず屋を本陣に連行しろ！！」

「りよ、了解!！」

と背後にいた須川がツンデレを連れって行った。

さて、他の場所はどうなっているかな。

マーナ視点

さて、そろそろ決着がつきそうですね。

平賀「お前らが束になるうとも俺を倒せないぜ」

中村「確かにそれは同感。だけど切り札が届けばいいのさ(ニヤリ)」

平賀「は?」

「あ、あの……」

平賀「え? あ、姫路さん。 どうしたの? Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思うけど」

おやおや、敵に後ろを見せるなんて愚か者がすることですよ(ニヤリ)

「いえ、そうじゃなくて……Fクラスの姫路瑞希です。 えっと、よろしく願います」

「あ、こちらこそ」

「その……Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……はあ。どうも」

「あの、えっと……さ、サモン試験召喚です」

Fクラス 姫路瑞希 現代国語339点 VS Dクラス 平賀源

二（代表） 現代国語129点

「え？ あ、あれ？」

戸惑いながらも熱血野郎も召喚獣を構えさせて相対します。

ですが、相手にならないでしょうね。

「い、ごめんなさいっ」

背丈の倍はある大きな剣を持ちながらも素早い動きで相手に肉薄する瑞希ちゃんの分身

相手の反撃も許さず、一撃でDクラス代表を下して、この戦いの決着となりました。

第十二話（後書き）

次はコラボになるか？本編になるかどっちかになります。

第十三話

第七問 問 以下の問に答えなさい

『good および bad の比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希&マーナ&海谷陸の答え

『good - better - best

bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。海谷君には前回に引き続きまともな答えに先生は嬉しいです。

海谷陸のコメント

これを間違えたらバカにバカにされそうでムカツクから。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

まともな間違え方で先生驚いています。

good や bad の比較級と最上級は語尾に -er や -est をつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad-butter-bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっばい』

Dクラス代表 平賀源氏 討死

『うおおーっ!』

Fクラスの皆の勝ち鬨により、大音響が起きた。

「凄えよ!本当にDクラスに勝てるなんて!」

「これで置やちやぶ台ともおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛しています！」

ほう。雄二ユウジを讚える声があちこちから聞こえてくる。

「あー、まあ。なんといいですか。そう手放して褒められると、なんていえばいいのか」

ほう。雄二ユウジでも照れているようだ。

「坂本！握手してくれ！」

「俺も！」

雄二ユウジはもはや英雄である。

「雄二！」

明久も雄二の所に行き、握手をしようとする。

その手に包丁があるように見えるのは、おそらく復讐の為だな。

「ぬおおっ!」

どつやら見破られたようだ。

「雄二……! どうして握手なのに手首を押さえるのかな……!」

「押さえるに……決まっているでしょう……! フンッ!」

「ぐあっ!」

捻りあげられた明久の手から包丁が落ちた。

やれやれ。復讐をするつもりならうまくやれよ。

と俺はゴリラと明久バカの漫才を見ながら傍観してたら。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

背中から誰かの声が聞こえてきた。

振り向くとそこにはヨタヨタと歩み寄る平賀（熱血野郎）の姿があった。

「あ、その、さっきはすいません……」

違う方向から姫路（巨乳娘）も駆け寄ってきた。

「いや、謝る事はない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪

いんだ」

向こうはこちらの戦力を甘く見ていたがゆえの敗北だ。気にする必要はない。

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

なるほど。敗北すればこうなるのか。

勝てば英雄のように扱われるのが代表なら、負ければ戦犯として扱われるのも代表だからな。

「もちろん明日でいいよね、雄二？」

「いや、その必要はないよ」

ふむ。どうやら雄二は、予想通りの返事をしたな。

バカは驚いてるな。

ここは黙って傍観するか。

「え？　なんで？」

「Dクラスを奪う気は最初からないからね」

「雄二、それはどういうこと？　折角普通の設備を手に入れることができたのに」

「忘れたのかい？ 俺達の目標はあくまでもAクラスのはずでしよう？。」

「でもそれなら、なんで標的をAクラスにしないのさ。 おかしいじゃないか」

「少しは自分で考えなさいよ。 そんなんだから、君は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるですよ」

「なッ！中学生にそんなことを言われるわけないだろ！」

「それはごめんなさい。 近所の小学生だったよね」

「……人違いです」

「まさか…本当に言われたことがあるの……？」

「冗談のつもりでいったのという顔をしてるな、ゴリラ。」

そして、俺も驚いた。

「と、とにかくだね。 Dクラスの設備には一切手を出すつもりはないよ」

「それは俺達にはありがたいが……それでいいのか？」

「もちろん、条件があるよ」

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。 そんな大したことじゃないよ。
俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい
の。 それだけだから」

ゴリラが指差したのは窓の外に設置されているエアコンの室外機。

でも、ちょっと貧しい普通の高校レベルの設備でしかないDクラス
にエアコンなんてものはないので、

この室外機はDクラスの物ではない。

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もある
と思うけど、そう悪い取引じゃないとおもっけどどうかな？」

うまく事故に見せかければ嚴重注意で済み、

それだけで二ヶ月のものを期間をあの教室で過ごすという状態から逃
げられるので、

決して悪い取引ではないな。

「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを
？」

平賀（熱血野郎）の疑問はもっともだな。

ふむ。なるほど。ゴリラの狙いはわかった。

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでね」

「……そうか。ではこちらはありがたくその提案を吞ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話すから。今日はもう行っていいよ」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

「ははっ。無理するしなくていいよ。勝てっこないと思っているですしょうっ?」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな」

じゃあ、と手を挙げてDクラス代表、熱血野郎は去っていった。

「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、

今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！解散！」

ゴリラが号令をかけると、皆一瞬ビックリしたがどうでもいいのか雑談を交えながら自分のクラスへと向かい始めました。

帰りの支度をするんだろっ。

しかし、思ったより効果が切れるのが早いな。

これは、ますますサンプルのとりがいがあるな（ニヤリ）。

さて俺も帰るかな。

教室に戻り帰る準備を終えて帰ろうと教室から出たら鉄人が笑いながら待っていた。

顔が笑っているのに目が笑っていない。

「さて、海谷。朝言ってたことを覚えてるな？」

「何の話ですか？」

「キサマに常識を教えてやると言ったぞ」

「そうでしたっけ？」

「ああ。言ったぞ」

「すみません。物忘れが激しくて」

「それは、困ったな。はっはっはっは」

「「あっはっあっはっは」

「「……」

「今から補習だー!!」

「やなこった。マーナ逃げるぞー!!」

「そ、そんな私まで巻き込まないでください！」

「ええい。面倒だ。二人纏めて補習だ！！」

「理不尽です」

「気にするな。お前の不幸は鉄人に見つかったせいだ」

「ほとんどがマスターのせいです」

と俺は逃げながらパソコンを脇に挟み薬の準備をしていた。

「待たんかコラ！！！」

「これでもくらいな」

と鉄人に薬を飲みました。

「海谷。良いことを教えてやろう。俺に薬物は効かん！！」

「お、面白いサンプルだけどアンタ本当人間ですか？」

「当たり前だ。鍛えてるからな。薬が効かなくなっただ」

「あ、ありえませんが。もはや地球上生物とは言えませんよ」

「安心しろ。プログラムだろうが主人と一緒に補習を受けさせてやる」

「全力で拒否します」

と俺達は逃げ回るはめになった。

その頃学園長室では。

「なるほど。あのクソガキには西村先生に任じた方が良さそうだね」

「はい。私もそう思います」

陸が鉄人から逃げ回ってる状況を隠しカメラで見ていた学園長と高橋先生が話していた。

特別問題 バカと科学と魔法（前書き）

俺と彼女と召喚獣から、新条ありすと秋月終夜と桃宮あかりと来栖銀河と天宮龍馬と相沢綾菜とのコラボです。

許可は貰ってます。

文才がないので、面白くないかもしれませんが。

それでも、良いという心優しい方はお読みください。

レフェルさんやレフェルさんのファンに怒られないといいな。

特別問題 バカと科学と魔法

陸の部屋

陸「ふむ（考え中）」

マーナ「マスター。何を悩んでいるのですか？」

俺が悩んでいると能天気なポンコツが話しかけてきた。

「マーナか。今、俺は悩んでいる。俺は新条の能力や桃宮の黒魔術がどうして出てくるのかをな」

「なぜ？そんなことを考えたんですか？」

とマーナは不思議そうな顔をしていた。

「そんなの簡単だろう。科学者である俺が解明できないことが在っていけないからだ」

「でも、マスター。新条さんは知られたくないみたいですよ」

とポンコツはやりたくないと言っている。無論。俺だって新条を傷つけないわけではない。

「そんなことは百も承知だ。俺が試したいのは新条の能力の無効化だ」

「マスター。どうしてそんなことを考える気になったんですか？」

とマーナは普通ならそんなことは考えないと言っている。

確かに新条の力は不思議だ。俺だって調べられるなら調べたい。

だけど、新条は拒否している。それに坂本ゴリラが彼女を守ろうとしている。

普段はバカのかせに彼女（新条）の事になると過敏になる。

俺にはわからないが大切な人なんだろう？

そんな奴から俺の欲求だけで調べるのは新条に悪いし悲しませるのが嫌だからだ。

それに、こんな俺にも美春以外で優しくしてくれる新条に裏切りた
くないからだ。

「実は、新条の情報をハッキングしてそれを利用しようとする輩が
来日したようだ」

「え！？そ、そんなありすさんの情報は隠ぺいに隠ぺいを掛けまし
たよ」

「ああ。確かになだけど。何者かが俺達に気づかれないように侵入
し新条の情報を盗み。それを裏に売ったようだ」

「売った奴は捕まえて桃宮が作った謎のドリンクを解析して再現し
た薬を飲ましたら自白した」

「それで、何と？」

どうやら、マーナも危機感を募らせたようだ。いつものようにおちゃらけた様子はない。

「そいつの名はカル ラ＝エラーだ」

「な、なんで、あんな奴に売ったんですか!？」

相当お怒りのようだ。無理もない。あいつはやってはいけないことをした。俺が愛した彼女を殺したんだから。

マーナとも仲が良く、よく笑い、誰もが憧れる女性だった。

それにカル ラと俺は親友だった。ともに博士号を取り俺達の夢を掴もうと約束した友だった。

だから、俺はカル ラと彼女を会わせ。共に幸せになろうと言ったんだ。

だけど、カル ラは、彼女は悪魔と言った。なぜ、そう思ったのか？今でもわからない。

それからカル ラは人が変わった。そしてついに人体実験まで行うようになった。

事を重く見た政府はカル ラを逮捕した。しかし、カル ラは脱獄をし人を誘拐し実験の道具にした。

そして、俺はカル ラの居場所を突き止め自首を勧めるつもりだった。だけど、俺が行った時はモヌケのからだだった。

嫌な予感がし戻った時遅く彼女は実験されたようで生きていなかった。もちろん奴もいなかった。

彼女が亡くなったことをマーナにも教えている。そしてその言葉は今も忘れられない。

どうして、彼女を守らなかったんですか？友人を止めたかった。笑わさないでください。貴方も人殺しですよ！！

そんな狂った奴よりも好きになった人を守るべきだったですよ。貴方も彼と変わらない。

俺は、これ以上聞きたくなくマーナを無理やり眠らせ記憶の改ざんを行った。それが今のマーナ。

「さあな。そいつはわからない」

俺は苦虫を噛みながら悩んでいる。俺は今度こそ奴を止められるのかと悩んでいた。

「……マスター。苦言を言いますが悩んでいるのなら彼女の様になりますよ」

とマーナは以前彼女を失った時と同じ声で俺に聞かせた。

そう、新条にもしもの事があつたら私が貴方を殺すと言っている。

「わ、わかっている」

と俺は言うしかなかった。それでも俺はカル ラも新条も救いた
んだ。彼女が俺を救ってくれたように。

「そうですか。じゃ早くに行動を取りましょう」

とマーナはひややかな声で急かした。そうきつと俺では救えないだ
ろうから、自分で救うと言っている。

「これが以前のカル ラのデータだ。どこまで役に立つかわからな
いけど」

「ですが、目安になります」

とマーナはデータをインプットし俺が最近作ったロボットに自分を
入れた。

ロボットの容姿は葵い髪。顔や髪形は魔法少女リリカルなのはSt
rikersのラインフォースIIと同じ。

レイン「今から私はレインと名乗ります」

とマーナが動作を確認と同時に発言をした。

それは、彼女を護衛をするために学園に侵入すると言っているのだ。

「待て、マーナ。事は新条に気づかれずに片付けるべきだ」

と俺が言うとマーナイやレインは冷たい目で俺を見ていた。そんな
ことだから彼女を失うんだと目で訴えていた。

「くっ」

俺は何もいえずここから出て行った。

そして、俺はどこに行けばいいのかわからずさまよっていた。

マーナいやレイン視点

朝になり、私は学園長に電話をした。

「なんだい？朝っぱらからどんな問題が起きたんだい」

と学園長はわずらしそうに言った。

「大変なことです。カル ラがありすをそしてあかりをターゲットにしました」

面倒なので重要なことを言った。

「何で、奴がここに来るってわかったんだい」

と学園長は真偽を知りたいようなので包み隠さず話した。

「なるほど。それは確かのようなだね」

と学園長は理解と納得をしたようだ。

「で、あんたはどうするつもりなんだい？」

「私は、学園に入り彼女達を護衛をしたいんです」

と私は今の自分の気持ちを伝えた。

「わかったよ。ただし、確実に犯人を捕らえ彼女達を守っておやりいいね。以上だよ」

と言つて電話が切れた。

私は急いで学園指定の制服を着て登校をした。

「ん？マーナどうしたんだ。今日は陸は居ないのか？」

教室に入ると坂本が補充テストの準備をしていた。

「今回マスターは使えません。それより重要な話があります」

坂本が不審な顔をしながらこちらに来た。

「何だ？」

「実は新条と桃宮が狙われてるのです。狂った科学者が彼女達を人体実験をするために」

「その話は本当か？」

と鋭い顔をしながら私に確認をしてきた。

「ええ。本当よ予告の手紙が送られてきたから。これが証拠の手紙よ」

雄二は手紙を受け取り、そして読んだ後破いた。

「それで、俺はどうすればいい」

「出来るだけ彼女の傍にいてください。それと彼女達には内緒で」

「ああ。確かに余計な不安をさせたくないな」

「それと信頼できる仲間を集めてください」

「それは、一人では危険と言うことか？」

「……（コクン）」

「わかった。仲間を集めとく。だから必ず守るぞ！」

「ええ。言われるまでもありません」

陸視点

「????」あれ？陸どうしてここにいるの？」

とどこからともなく明久^{バカ}の声が聞こえた。

明久^{バカ}「今僕の事をバカにしたでしょう!!」

意外と感がするどいな。と俺が感心していると。

「何に、悩んでるの?」

とバカが俺を覗きこんできた。

「別にどうだっていいだろう!!それより、学校に行かなくていいのか?」

俺はうざかったので追い払おうとした。

「うん。今から行っても遅刻は免れないしだったら陸に付き合おう
と思っ
てね」

しかし、どこにも行かないと言ったバカに俺は呆れた。

「明久。お前は男を落とす趣味でもあるのか?」

「そんなのは、ないよ!!でも陸は悲しそうな顔をしてるから」

「全く。バカに心配されるようじゃ俺もおしまいだな(ため息)」

「どういう意味だよ」

とバカが怒っていた。

「明久に聴きたい」

「?何?」

「俺の友達が新条達に迷惑をかけようとしている。お前ならどうする」

と俺が質問すると明久は少し悩んで答えを出した。

「僕なら、あかり達の傍にいてそして、その友達を殴っても止めると思う」

そう単純な答え。でもそれが一番の解決策で納得がいく答えである。

「クツクツクツ。何だそんなことでもいいのか？友達を頼ればいいのか。悩んで損した」

「な。何？どうしたの!？」

とバカがビクビクしていた。

「明久。ついてこい。友達を助けるために手をかしてくれ」

「うん。ようやく本領発揮だね」

「……面白そうな話。俺も参加する」

と声がした方向に振り向くと土屋がいた。

「ムツツリーニも手を貸してくれるの？」

「……」
「コクン」

「それじゃ準備してから行くか？」

「うん」

「……」
「コクン」

俺達は準備をしに俺の家に向った。

レイン視点

「随分と卑怯な手を使うのね」

「当然だよ。陸は僕が認めた男だよ。そんな彼がここで埋もれさすわけにはいかないからね。」

邪魔物は排除するのに限るからね」

「そのためにありすを利用しようとしたのか！！！！」

と雄二が怒っていた。

「陸を昔の状態に戻すためと僕の実験の為だよ。偉大な研究の礎になるんだから喜んでもらいたいね。」

この学園の人間全員が僕にはモルモットだからね」

「むづ。何と言つひきょう者じゃのつ」

「僕には、誉め言葉だよ」

終夜「まだまだ。陸が必ず来る」

龍馬「ああ。そうだな」

綾菜「そうだね」

ありす「うん、きつと来てくれるよね」

あかり「まあ、遅刻気味だけどね」

とカル ラが実験を開始しようとしたそのときどこからともなくダイナマイトが投げつけられた。

「「「!?!?!?!?!?」「」」

「これは、まさか、陸だね」

「ま、マスター?」

「全く遅すぎだぜ陸」

銀河「遅いぜ」

「???」「なあ、明久。どうしてこんなかっこをしないといけないんだ?」

「???」「違うよ。今は。明久じゃくてキツネのノインだよ」

「???」……正義の味方は遅れて登場するものと相場が決まってる」

そう俺らの恰好は何とも言えない格好になっていた。

「「「……」「」」

「「「プッ」「」」

笑われた。

カル ラ「なんとういう珍妙な格好だよ。君達は僕を笑い殺す気がいい（笑）」

レイン「ま、マスター気を確かに持つてくださいい（笑）」

雄二「はっはっはっは。あはっはっは」

そう学園中から笑い声が聞こえた。

「よし、今なら楽に助けられるよ」

「ああ。そうだな（悲）」

「……任せる」

と言って忍者ルツクの土屋が新条達を助けた。

「は、しま　　ぶあっはっは」

とカル ラが邪魔しようとしたが俺達の恰好がつぼにはまったらしく笑いまくっていた。

明久いやノインは走りカル ラを殴った。ファンシーなキツネがカル ラにのしかかり殴っていた。

しかし、反撃をしようとして、俺を見て笑いだすカル ラ。勝ち誇ってるノイン。

しかし、傍から見てたらファンシーなキツネの可愛らしい光景でし

が見えない。

そして、俺の恰好は魔法少女リリカルなのはStrikerSの八神はやての恰好をしていた。

ノイン「何してんだよ。はやて。君も参加するんだよ」

忍者「……（コクコク）」

はやて「せやな。ここまで来たんだ。やるだけや」

と俺も覚悟を決めて爆竹を投げた。

パンパン。

「陸。君は僕を笑い殺す気ですか？（笑）」

「やかましい！！」

結果カル ラは笑いが止まらないまま御用となった。

その後鉄人に海谷目覚めたのか？と勘違いをされた。

次の日視線が優しい美春に遭った。

そして教室に入ったらクラスの皆の笑いの合唱が起きたのでマーナイやレインを爆破した。

もう二度と土屋を信じない。

おまけ

陸のコスプレは売り上げナンバー1になった。

ちなみに美春も購入済み。

「これで、しばらくは静かになります」

それを知り陸が暴れたのは割合する。

この恥辱忘れない。

特別問題 バカと科学と魔法（後書き）

次回は本編に戻ります。

第十四話

第八問 問 以下の問に答えなさい

『女性は（ ）（ ）を迎えることで第二次性長期になり、特有の体つきになりはじめる』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント
正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント
随分と急な話ですね。

海谷陸の答え

『初潮』

教師のコメント

真面目に答えてくれて嬉しいです。

海谷陸のコメント

向こうで見せてもらったから。

マーナの答え

『初潮。でもマーナにはありません』

教師のコメント

余計なことは書かなくて良いですよ。それと貴女はデータですから無くて当然です。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれてはじめての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。』

初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するころに初潮をみるものが多いため、

その訪れる年齢には個人差がある。

日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳しくすぎです。

「さて、今回の実験台は誰にしようかな？（ニヤリ）」

「おはようございます〜」

とパソコンからマーナが挨拶をしていた。

相変わらずの畳と卓袱台だな。

「おう陸。時間ギリギリなうえ悪だくみを企んでると言う顔をするぞ」

既に到着していた雄二ユウジが隣の卓袱台で胡坐をかいていた。

持っているのは英語の教科書だな。

テスト前の復習をしているみたいだな。

だが俺をからかおうとしてるゴリラにはどんな実験をしようかな。

「ふむ。昨日に続いてお前で実験をしようか（ニヤリ）」

「まあ、待て。これから、補充テストを受けなくてはいけないし。それに俺以外の奴にも試すべきだ」

「命が懸つてると他人に押し付けたいですよね」

と怯える雄二「ゴリラ」とのほほんなマーナ。

「昨日から気になっていたんだがそのパソコン閉じてるのにどうして会話が聞こえるんだ」

「ああ、そのことが。このノートパソコンは、俺の自作だからそれくらいはたやすい」

と雄二は気になっていたことを聞くことで話題を変えることにした。

「あの〜皆には何も言われなかったのでしょうか？」

とマーナが気になっていることをゴリラに聴いていた。

「ん？ 何がだ？」

「Dクラスの設備のことですよ」

「ああ。皆にもきちんと説明したからな。問題ない」

「そうか」

「そうですね。それは良かったです」

皆が素直に言うことを聞いたのは昨日のゴリラの働きを評価してのことだろう。

む、島田か。

どうやら落ち込んでいるようだな。

データを取る時に変動が出るのはお困るからフォローしておくか。

「^{シンデレ}島田、おはよう」

「……海谷……」

シンデレは俺の顔を見て驚いていた。

「ああ、そのなんだ。昨日は言いすぎだな」

「え、ううん、ウチこそ」

「昨日のわびと言っわけではないがシンデレの恋がうまくいくなじに手伝ってやる」

「べ、別に手伝わなくてもいいわよ。でもまあ、その時は頼むわ」

「ああ」

「陸？ なに話してるの？」

「ああ明久。昨日のことを謝ってただけだ」

「そう？ ああ島田さん、僕もごめんね」

「ううん、ウチこそごめんね／＼／＼／＼」

「うん？ 島田さん熱あるの？ 顔が赤いよ」

「な、何でもないわよ！！」

「いじぶあっ！！」

テレ隠して明久^{バカ}を殴ったツンデレ。

「苦労してるな」

「そうね。うまくはいかないわ」

「まあ、元に戻ってよかった」

「え、海谷。ウチの事を心配してくれたの？」

「まあな。俺も少し言いすぎたからな」

「アンタも素直じゃないわね」

とツンデレが笑った。

「うつせえ!!」

と俺は、叫んで俺は、自分の席に戻った。

「うあー……づがれだー」

「そうだな」

机に突つ伏す明久^{バカ}

いま、4教科目が終わったところだからな。

ちなみに昨日の件で船越先生に襲われそうになった明久は、近所のお兄さん（三十九歳独身）

を紹介して貞操を守った。

「うむ。 疲れたのう」

秀吉がいつの間にか近くに来ていた。

今日の髪型はポニーテールか。

「……………（コクコク）」

おや、土屋もいたのか。

「よし、昼飯食いに行くぞ！ 今日ラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

勢いよく立ち上がるゴリラからは全然疲れが感じられない。

まあ、それは俺もだが。

それにしても、昼食をそれだけ食うのか？こいつの胃袋はどうなっているのか調べてみたいぞ。

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「あ、あの。皆さん……」

俺達が食堂に行こうとしたとき声をかけられた。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

姫路（巨乳娘）はもじもじしながら俺達の方を見ている。

「おお、もしかや弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

「迷惑なもんか！　ね、雄二！」

「ああ、そうだな。　ありがたい」

「そうですか？　良かったあ〜」

巨乳娘もバカが好きか。ライバルがいると大変だな。

「むー……っ。　瑞希って、意外と積極的なのね……」

「ツンデレ（こちらも対抗して弁当を作ればいいじゃん）」

「なによ（簡単に言うけどウチ自信がつくまでは無理よ）」

本当素直になれないなツンデレ。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

「そうですね」

「そうか。　それならお前らは先に行っててくれ」

「ん？　雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買って来る。　昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！　一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「悪いな。　それじゃ頼む」

「おっけー」

「きちんと俺たちの分をとっておけよ」

「大丈夫だつてば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行ってくる」

ゴリラとツンデレは財布を持って教室を出て行った。

「僕らも行こうか」

「そうですね」

「そつだな」

明久は巨乳娘が抱えていたバックを受け取って屋上に向かった。

なるほど。ツンデレや巨乳娘が好意を持つのはとうぜんだな。

第十五話

第九問 問 以下の問に答えなさい

『人が生きていくうえで必要とされる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？たんぱく質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

さすが姫路さん、優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのはあなただけです。

海谷陸の答え

『？爆発 ？研究 ？マーナ弄り ？実験 ？研究資金』

教師のコメント

随分とやり遂げた顔をしています。間違いです。

そしてこれで生きていけるのはあなただけです。

海谷陸のコメント

どこか問題でもあるのか？

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時を早発月経という。
また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

マーナの答え

『電気さえあれば生きていけます』

教師のコメント

それは貴女だけです。

「天気が良くてなりよりじゃ」

「そうですねー」

屋上へと続く扉の向こうは抜けるような青空。

絶好のお弁当日和というだろうか。

「あ、シートもあるんですよ」

姫路（巨乳娘）がバックからビニールシートを取り出した。

俺達はワイワイと準備を始めた。

「気持ちいいですねえ」

「……………（コクリ）」

俺達はビニールシートの上に足を投げ出した。

たまには日差しと風に当たるのも悪くないな。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

「」「おおっ！」「」

「ほう。上手だな」

巨乳娘が重箱の蓋をあけると、明久と土屋と秀吉は一齐に歓声をあげた。

見た目は凄く旨そうだな。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に」

「……（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムツツリーニっ」

土屋は素早い動きでエビフライをつまみ、流れるように口に運んだ。

「……（パク）……（モグモグ）」

土屋はつまそつに食べていた。

パタン ガタガタガタガタ

土屋は豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「「「……………」」」

俺と明久と秀吉は顔を見合わせてた。

「わわっ、土屋君!？」

巨乳娘が慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。

「……………(ムクリ)……………(グッ)」

土屋が起き上がり、巨乳娘に向けて親指を立てた。

きつと『凄く美味しいぞ』と伝えたいだな。

でも、土屋……………足がガクガクと震えているぞ。

それとぜんぜん、説得力ないからな。

「あ、お口に会いましたか？ 良かったですっ」

巨乳娘は土屋の様子に気付いてないな。

「良かったらどんどん食べてくださいね」

巨乳娘が笑顔で進めてくれる。

「……………陸、秀吉。 あれ、どう思っつ?」

巨乳娘に聞こえないくらいの小声で明久が話しかけてきた。

「（……どう考えても演技には見えん）」

「（ああ。恐るべし巨乳娘の弁当）」

「（陸、明久。お主ら、身体は頑丈か？）」

「（薬の実験で自分にも試してるから大丈夫だとおもっが）」

「（正直胃袋には自信ないよ）」

表情は当然笑顔のままだ。

巨乳娘にこの会話を気取られないようにしている。

「（ならば、ここはワシと陸にまかせてもらおう）」

「（そんな、危ないよ！）」

「（だがこれしかあるまい）」

「（大丈夫じゃ。ワシの胃袋は存外頑丈な胃袋でな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせん）」

「（でッでも！！）」

「（これしか方法がないんだ）」

「（そうじゃ。安心せい……ワシの鉄の胃袋を信じて……）」

「おう、待たせたな！　へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

「あつ、雄二オウニ」

ゴリラがやってきて止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込んだ。

パク　モグモグ　バタン　　ガシャガシャン、ガタガタガタ

ゴリラは数回噛んだ後、ジューシユの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本！？　ちょっと、どうしたの！？」

遅れてやってきたツンデレがゴリラに駆け寄る。

愕然としているとゴリラが倒れたまま俺の方をじっと見て、目っこ訴えていた。

「（毒を盛ったな）」

「（残念ながら俺ではない、巨乳娘の実力だ）」

ゴリラに俺も目で返事をした。

「あ、足が……攀つてな……」

巨乳娘を傷つけないようにウソをつくゴリラ

「あはは、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「運動不足だぜ。ゴリラ」

「そうなの？ 坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

事情の分かってないツンデレは不思議そうな顔をしている。

余計なことを言いださないうちに退場させた方が良いな。

明久に頼むとしよう。

「（明久、ツンデレをしばらくの間、この場から離れさせる）」

「（了解）ところで島田さん。その手をつているあたりにさ」

バカはビニールシートに腰をおろしているツンデレの手を指差している。

「ん？ 何？」

「さっきまで虫の死骸があったよ」

「ええっ！？ 早く言ってよ！」

「「じめん」じめん。とにかく手を洗ってきた方が良いよ」

「そうね。ちょっと行ってくる」

ツンデレは席を立ち、手を洗いに行った。

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

「全くだね」

はっはっは、と男4人で朗らかに笑っている。

一方、その後ろ側で俺達は必死に作戦会議を行っていた。

「(さつき雄二が倒れた後マーナに弁当の成分を調べた結果、豪いことが分かった)」

「「「……(ゴクリッ)」「」」

「(普通の弁当には入っていないはずのものが入っていた)」

「(そ、それはなんだ?)」

「(塩酸(HCl)、硝酸(HNO₃)、硫酸(H₂SO₄)、メタノール(CH₃OH)、トリクロロエチレン(C₁ClCH=CCl₂)……)」

「(ああ、もういい)」

「(吐き気がしてきた)」

「(……明久、1秒でも長く巨乳娘の注意をそらせ)」

「(陸、どつするの?)」

「(薬品を無効化にする薬をこの弁当にかければまともに食べれるはずだ)」

「(できるのか?)」

「(ああ。確か玲さんと言う女性が作った食事をおいしく食べれように開発した薬だ)」

この薬を開発しなければチームは全滅していた。

「(姉さん一体何やってるの!?)」

「(今気になることを聞いた気がするが。今はそれどころではない。上手くいくか分からねえが、できる限りやってみるさ)」

「(わかった)あつ! 姫路さん、アレはなんだ!?!」

「えっ? なんですか?」

バカが指差した明後日の方向を巨乳娘がみる。

その隙に俺は薬をかける。

「(ちっ、どんだけ薬品をかけてるんだよ。一つはサンプルとして貰うとして。」

それでも薬が足りれば良いが)」

俺は手持ちの薬を使い有害物の無力化に成功した。

「（はあ、はあ、はあ……）」

「（陸、どうだ？）」「

「（成功だ、明久もういいぞ）」

「（わかった）ごめん、見間違いだったよ」

「あ、そうだったんですか」

「もうお弁当食べちゃった？」

これで安心して食べられると思っているとシンデレレが戻ってきた。

「いや、まだあるぜ」

「それじゃ、改めていただくぞ」

「うん」

思い思いの場所に座って、巨乳娘のお弁当（劇物抜き）を食べ始めた。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

「……（コクコク）」

いつの間にか復活した土屋。

「そうですかー。嬉しいですっ」

「そういえば、美味しいと言えば駅前に新しい喫茶店が」

ここで明久が話題をそらしにかかった。

これ以上下手なことを言っつて『それじゃ、また作ってきますね』なんてことにならないための配慮だな。

「ああ、あの店じゃな。確かに評判が良いな」

「え？ そんなお店があるんですか？」

「うん。今度今日のお礼に雄二がおごってくれらつてさ」

「てめ、勝手なこと言っつなつての」

「へえ。そうなのか」

作戦は成功したようだ。

とりあえず命の危機は去つたな。おそらくあれを食べたら俺でも無事では済むまい。

第十六話（前書き）

三話連続投稿

第十六話

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

食事も終わり、皆でのんびりお茶をすすっていると島田が雄二シマダ ユウジに試召戦争のことを尋ねていた。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。 そうだ」

昨日、DクラスにBクラス用のエアコン室外機を壊してもらったことを条件にクラス交換はしなかったからな。

Aクラスを攻めるのにBクラスの室外機は関係ないので、次の目標はBクラスだな。

「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

「そうだ。俺達の目標はAクラスだ。」

「どうやらツンデレは通過点に過ぎないBクラスを相手にする理由がわからないようだな。」

「どうやら明久アカもわかってない顔をしてるな。」

俺は、成績と昨日の交渉でゴリラの作戦はわかったがな。

「正直に言おう……どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「一騎打ちに？ どうやって？」

「Bクラスを使う」

「なるほど」

バカは『どうやって？』という顔をしてるな。仕方ない教えてやるか。

「明久、試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるか？」

「え？ も、もちろん！（知らない）」

「（吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを1つ落とされる

んですよ」

「設備のランクを落とされるんだよ（なるほど、そうだったのか）」
巨乳娘に助け船を出されたバカは同然分かってたという顔をしながら答えた。

ここはスルーしとくか時間の無駄だし。

「ああ。。　つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

本気で言ってるのかこのバカは？やはり頭の回転が良くなる薬を開発すべきか。

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

「またもや巨乳娘のフォローが入った。」

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

「そうだ。ゴリラは、そのシステムを利用して交渉するつもりなんだ」

「交渉、ですか？」

「ああ。 Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。」

設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。
まずうまくいくだろう」

「ふんふん。 それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。 『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどねー」

学年で二番手のクラスと戦った後に休む暇なくまた戦争ではきついだろうからな。

Fクラスも連戦ですが、まあ、俺達には不満という原動力があるからな。

そもそも頭は悪いけど体力の余っている野郎どもがほとんどのクラスだからな。

「じゃが、それでも問題はあろう。」

体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実でありのは確かじゃからな。 それに」

「それに？」

「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろつか？ こちらに陸と姫路がいるということは既に知れ渡っていることじゃろつか？」

FクラスがDクラスに勝ったとなると、当然その勝ち方に注目が集まるからな。

俺と巨乳娘の存在はもはや周知の事実だろうからな。

そうなるも相手もなんらかの対策を練っているはずだろうからな。

「そのへんに関しては考えがある。 心配するな」

自信満々だな。ゴリラ。

「とにかくBクラスをやるぞ。 細かいことはその後教える」

「ふーん。 ま、考えがあるならいいけど」

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来い」

「断る。 雄二が行けばいいじゃないか」

「やれやれ。 ん？ 陸、ここは反対しないのか？」

「あ？ああ。 俺に任せれば面白いものが見えるがどうする」

と雄二が悩み始めたが答えが出たようだ。

「……どんな作戦だ」

「実は、Bクラスの代表の根本には彼女が居る」

「それで、何が言いたい」

「Fクラスの男どもは彼女もちが嫌いだと聞いている。

そこでこの情報をFクラスの連中に聞かせれば楽にBクラスを倒せるがどうだ」

「却下だ。それが確かな情報ならうまくいくだろうが陸の情報が正しいとは思えない。

よって不採用だ」

とゴリラは俺の案を蹴った。確かに俺は情報のソースを教えてない。いえに信じられないのはわかるがだが試すこともまた必要なことだ。

「そうか。それなら仕方がない。では、俺はBクラス戦は出ないで良いな」

「何だと!!!!どういうことだ!!!!」

俺を戦力と考えてたゴリラは俺に詰め寄ってきた。

「さっき俺は信用できないと言ったよな」

「!?!」

雄二は固まった。いや何も言えないのが正しい。

「それが理由だ」

「それじゃ、勝てないよ陸。考え直してよ」

とバカは俺を説得しようとしている。

「そうよ。アンタが居ないと戦力が足りないじゃない」

とツンデレが話に加わってきた。

「そうですね。せっかくここまで来たんですから最後まで行きましょ
うよよ」

と巨乳娘も加わった。

「なぜ参加しないのか教えてくれぬか」

と秀吉が聞いてきた。

「……俺も聞きたい」

と土屋も加わった。

「理由も何も雄二が俺を信用できないと言ったから以外に何がある」

「」「」「つ!?!」「」

誰も何も言えなかった。

「じゃあな」

俺は屋上から去った。

、午後のテストが終わった後。

「……言い訳を聞こうか」

「予想通りだ」

あの後明久がテストの後、Bクラスへ宣戦布告しに行ったようだ。

どうやら激しい攻撃を受けたようだ。制服がぼろぼろだ。

「くきいー！殺す！殺し切る　っ！」

「落ち着け」

「ぐふあっ！」

みぞおちがよ酷いことをするなゴリラは。待てよこれから面白いことになりそうだな。

明久を俺の方に連れていくか。

「先に帰るぞ。明日も午前中はテストなんだから夜更かしするんじゃないぞ」

と言ってゴリラは帰っていた。

「大丈夫か明久」

「陸だけだよ。僕を心配してくれるのは」

と明久は落ち込んでいた。

「じゃあ帰るか」

「うん」

俺と明久は教室を後にした。

そのとき巨乳娘がキョロキョロして怪しさ満点だった。

だが明久は気にしてないようだからほっといて大丈夫なんだろう。

それより、例の作戦の為に明久を仲間にしなくてはいけないな。

科学者と5帝（前書き）

今回のお話は『5帝の学園生活』の5帝のオリジナルキャラクターの『関戸劉』と『小田高名』と『村野草子』と『村野風子』と『藤川舞』の5人とコラボします！

蒼さまファンと蒼さまに怒られないといいなあ

科学者と5帝

とある研究室。

そこに陸とプログラムのマーナと藤川舞と小田高名が集まっていた。

「それで爆発マニア。僕と舞に何のよう集めたんですか？」

「そうですね。私としても新薬の研究と実験をしたいのですが？」

と舞と高名はさっさと用件を言えと言っていた。

「簡単な話だ。あの鉄人のせいで思うように実験ができない。そうは思わないか藤川」

と陸は淡々と話していた。

「確かにそうですがあの鉄っちゃんをどうにか出来るのですか？」

「そうですね。それと僕に何の用ですか？今の話を聞く限り僕は必要が無いと思いますが」

と舞と高名は何が言いたいと言っている。

「それはですね。鉄人で実験をしようと言っているのですよ。マスターは？」

「！？」

「正気ですか？」

「そんな無謀なことをするつもりですか？」

マーナの回答に舞と高名は驚き確認をしてきた。

「当然だ」

と俺が自信満々に言った。

「私用事がありますから帰ります」

「僕もしなくてはいけないことを思い出しましたから帰りますね」

「まあ、当然のことですね」

「黙れ！！ポンコツ」

「仕方ない。関戸達に頼むとしよう。すまないな時間を無駄にさせてしまった。」

それと、鉄人にちくると俺の邪魔だけはするなよ」

「はい、はい。わかりました。お疲れさまです」

「まあ、無駄なことをして逃げ回ってください」

次の日。

『待たんか！！吉井に坂本に海谷』

『陸の薬が10秒しか効かないってどんだけ薬に耐性があるんだよあの化物は!!』

『信じられないよね。舞の薬でも前は一分は効いていたのに今じゃほとんど効かないもんね』

『ますますタフになってるな。注射器じゃあの分厚い筋肉で刺らないよっだしな』

『お前らがいろいろ試すから耐えられるようになったんだ!!』

『やはり、これだけではデータが取れない』

『ま、マスター。冷静に観察してる場合ではありませんよ!!』

『今日こそ逃がさんぞ!!』

『明久、雄二。これを被れ』

『さ、サングラス?』

『!なるほど。そういうことか。流石専門』

『マスターは爆発にはこだわりがありますからね』

『お前ら俺の専門はロボット工学とプログラムだぞ。爆発は専門ではなく趣味だ』

『でもどうして薬を作れるようになったの?』

『ロボットにしろプログラムにしろ手間や時間がかかる。
対して薬ならそれほど手間も準備も資金もかからないからな』

『なるほど。専門は金がかかるし場所や時間もかかる。』

『薬ならサンプルとデータさえあれば売って金に出来るからな』

『へえ。そうなんだ』

『舞、いや藤川には劣るがな』

『もともと専門が違いますからね』

『何くちやくちや喋ってる!!--』

『さて、そろそろ逃げますか。喰らえ鉄人』

『そうそう何度も食らうか!』

ポイ（陸が何かを投げた）

バシ（鉄人が何かを手ではじいた）

カツ　ン（地面に当たり破裂した）

『ぬ。小癩な!!--』

ドカ　ン（爆発）

『……………結局爆発させるんだな』

『……そうだね』

『……マスター。もう爆発の専門になったらどうですか？』

『お約束だ。あとマーナ。お前を別の爆発物に入れて爆破するぞ』

『酷いです。マスター（シクシク）』

『そ、そんなことより早く教室には入る』

『そうだな。あの状態ならば早くは教室にはこれないしな』

『まあ、黒焦げで服もボロボロじゃ入りたくとも入れませんね』

『残念だ。小田や藤川が参加してれば面白いデータが取れると思っ
たんだが』

『マスター諦めるという言葉があります。ですから諦めましょう』

『ある人が言っていた。諦めたらそこで終わりだと。だから俺は諦
めない』

『でも、僕達だけじゃこれ以上は鉄人を抑えられないよ』

『そうだな。で、どんな作戦を立てるつもりだ』

『まあ、お前達はお宝を取り替えすための戦いだからな。』

俺としては、最強の人外のデータさえ取れば構わないからな。

作戦とは言えないがFクラスの人間と5帝を動かせれば何とかなる
と思うが』

『難しいと思うよ』

『そうだな。ん？そう言えばお前は どうして奪還作戦に協力してくれ たんだ』

『ああ。簡単だ。5帝の連中に頼まれたものを鉄人の取られたからな。困っていたから参加したんだ』

『ねえ。頼まれたものって何？』

と明久が聞いてきた。

『そうだな。俺も知りたいな』

『別に良いけど俺に聞いたと言うなよ。信用第一なんだから』

『マスターにとってお得意様ですしね』

『わかった。言わないから教える』

『そうだよ。教えてよ』

『関戸と小田は植物に液体の薬を注入することでメロンパンとカレーパンを作ることが出来る奴』

『某ネコ型ロボット風に言つと？』

『植物改造エキス!!』

『……よくそんなものが出来たね』

『ああ。俺も尊敬する』

『安心しろ。俺も出来るとは思わなかった』

『私も驚きでした。爆発させずに完成した作品ですから』

『『『だよね!!そして、世界の終わりだ!!』』』

と雄二とマーナと明久が頭を抱えていた。

失敬な。

『お前らな。俺だって料理する時は爆発させるわけないだろう』

『そ、そうなんだ』

『へえ』

『お前ら信じてないな』

『マスター。今までのことで信じられないのですよ〜』

ピィ（何かの音）

『マスター？さっきの音って？』

『ねえ。どうして学校内に逃げるの？』

『去らばだ!』

『どうして、雄二も逃げるの?』

『爆発まであと10秒です』

『!?!?!?』

『あの?明久さん。一緒ですよ。共に爆発に巻き込まれてくれま
すよね?』

『ごめん。去らばだ!!!』

『裏切り者』

『さて、マーナ。補習の時間だ』

『て、鉄人!?!』

『グットラック』

ドカ
ン

『海谷、坂本、吉井。明日は逃がさんからな!!!』

再び黒こげになった鉄人は吠えた。

屋上。

「……もう、薬では無く爆発で対処したほうが楽だと思いますよ」

「……そうですね。私も思います」

「でも。拙いですわ」

「ん？どうしたの風子さん」

「私が頼んだ薬が届かないのは困りますわ」

「そうだ。ようやく完成した。最高に美味しいメロンパンが食べれないのは困るからなあ」

「おや、バカ劉に風子は何を注文したんですか？」

「「企業秘密ですわ（だ）高名（バカ高名）！」」

「そう言えば、今日持ち物検査で鉄人に没収されたもんね」

「なるほど。それは大変ですね。爆発マニア達は（パク）！？これは、カレーパンでは、無くメロンパンなぜ？」

「俺がすり変えたに決まってるだろ。バカ高名^{ニヤリ}」

「なるほど。失敗作を僕に渡したんですねアホ劉」

「あら、めずらしい。メロンパン命の劉が形がカレーパンでも中身がメロンパンでは渡さないと思いましたが」

「そうですね。それに、高名君が触っただけで気づかないなんておかしいですよね」

「それについては、簡単ですよ。爆発マニアとともに研究して作り
ましたから。」

いろいろ失敗もありましたが。昨日最高の出来ができたんです」

「残念だったな。俺の方も昨日出来たんだよ」

「なるほど。沢山の失敗作を食べ続けた結果すり替えられても気づ
かなかつたんですね」

「あの薬臭くオイル臭さでは鼻がマヒしますわね。だから、臭いで
気づかなかつたのですわね」

「そいえば、舞さん。陸から貰うはずだった薬のデータはどうする
の？」

「大丈夫ですよ。バックアップを取ってあるはずですからそこから
貰えばすみます」

「そうなの。さっきマーナさんが余計なことを言って爆破されたけ
ど良かったの？」

「……」

「「「……（コク）」「」」

この時俺達は奪還作戦に参加することを決めた。

「？」

一人理解が出てなかったので説明をする羽目になったが。

Fクラス

「さて、戦力は申し分ないな。なあ陸」

「ああ。今度こそ奪還する」

「……（コクコク）」

「ムツツリーニ。奪還物の場所と鍵は把握してるか」

「……当然」

「明久。これが最後の挑戦だ」

「気合を入れて行くぞ!!」

「」「おっ!!」「」

ガラッ

劉「待ちな。俺達も参加するぜ」

雄二「?あれお前らは参加しないと行ってなかったか?」

高名「いえ。状況が変わりましたから」

風子「参加することに決まったのですわ」

舞「そう。すべてはお宝の為にです」

草子「皆。頑張つて勝つよ!!」

陸「何だかわからないが戦力はそろつたぞ雄二」

「おう。今こそ聖戦だ!!」

明久「目指せ!!お宝だよ皆」

Fクラス男子生徒「「おっしゃあ!!」」

職員室。

「だからお前達はバカだと言っただ!!」

開始数分で鉄人によって雄二、ムツツリーニ、陸、明久、劉、高名、風子、草子、舞以外全滅。

「驚いた!!。俺特性の爆竹を素手で消火するとは思わなかった」

「ねえ。本当に鉄人って人間なの?」

「もはや、人間ではありませんね」

「……(コクコク)」

「で、どうしますか?雄二に陸」

「作戦とは単純だがここに職員室のすべてのロッカのカギがある」

「なるほど（ニヤリ）」

「そういうことですか（ニヤリ）」

「なるほどですわ（ニヤリ）」

「どういふこと。陸」

「簡単に言えば誰かが鉄人達先生を誘導してその隙に職員室に忍び込んで物を奪還するわけだ」

「なるほど（ニヤリ）」

「で、どうやって二手に分かれるのですか？」

と舞が聞いてきた。

「ここは俺が言いだしつぺだ。俺と明久とムツツリーニで先生達を誘導する」

「それは、構いませんが何か企んでませんか？」

「いや、そんなことは、無い。それより、舞。お前が持つてる薬を俺に渡してくれないか」

「どんな目的に使うのですか？」

「鉄人以外の先生には効果があるからな。それを使う」

「わかりました。ですが、今持ってるのは男子を狂化させたりする薬だけです」

「なるほど。都合がいいな」

「どうして、都合がいいの陸？」

「明久、少しは自分で考えろ」

と雄二が呆れていた。

無論俺（劉）も思う。

「まあ、見てればわかるさ」

と陸が笑っていた。

舞からもらった薬を溶かして液体にしてそれを無色無味無臭のガスを作りだした。

まさか、それを職員室にばらまくのか。

それは、恐ろしいが確かに効果がありそうだ。

あの高名も啞然としていた。

確かに普通に完成したのも驚いたが最後は結局爆発するガスの中に入って探す担当の俺達は恐怖を覚えるしかなかった。

「確かにそれもあります、それ以前に何時の間にも用意された備品

の方が気になります」

いつも思うがどうしても読心術がつかえる？

「そこはいま関係ありません…。そんなことよりポジションの変更を希望します」

また心読まれた！…って本当に関係ない！

「俺も希望する」

「僕もです」

「私もわたくしですわ」

「私も」

「当然俺もだ　　っていない？」

「何てことだ（ガク）」

って、この場にいるのが俺と雄二だけなんだ？

どうやら雄二も同じ考えのようだ。

つまり、こいつに押し付けないと俺の命が無いということか？

しかもご丁寧に防毒マスクと防護服を一着しかない。

「……………」

俺達は、無言でその場を離れようとしたとき。

「「「西村先生。坂本君と関戸君が職員室に侵入をしようとしてます！」「」」

「「「ちくしょう！！」「」」

覚えてるよバカ高名に陸。

俺達は迫りくる鉄人と凶暴化した先生たちと追いかけてこをするはめになったが。

途中俺だけ落とし穴に落ちて助かった。

あとで陸に聞いた話だと他にも仕掛けがあって対鉄人対策と言う話だそうだ。

あの後俺が怒ってることに後ろめたかったのか。

陸が帰りに特性メロンパンを奢ってくれたうえバイクを只でくれた。

無論爆発しないように調整されている。

ちなみにガスは爆発しなかったそうだ。

当然物品は取りかえしたようだ。

次の日のHRルーム

「……昨日、職員室に盗難が発生した」

教室に来た鉄人が開口一番に鉄人が言いだした。これは俺達が奪還した物の事を指している。

「大変嘆かわしいとは事態だと思わないか、Fクラスの諸君」

「……そうですね。全く嘆かわしいと思います」「」

「そうか。はっはっはっは」

「……そうですよ。あっはっは」「」

皆で笑いあっていた。しかし鉄人の目は笑ってなかった。

「貴様ら全員補習だ!!」

「……逃げろ!!」「」

と俺達はいつものように騒がしい一日が始まった。

第十七話 Bクラス戦（前書き）

コラボと連続投稿です。

姫路（巨乳娘）がちよっと引き気味だな。

男のノリについていけないようだな。

『『『『『うおおーっ！』』』』』』

一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮に達しようとしているな。

ここで負けると話にならないから、戦力もFクラス五十一人中四十人を注ぎ込んでいる。

教室はガラ空気になるが……まあ、俺や明久には関係ないがな。

【キーンコーンカーンコーン】

昼休み終了のベルが鳴ったな。

いよいよBクラス戦開始だな。

「さあ、行くわよ！ 目指すはシステムデスクよ！」

『『『『『サー、イエツサー！』』』』』』

クラスメイト達は島田ツシデアレのかけ声と共に全力でBクラスへと廊下を駆けだしていた。

「いくぞ。明久」

「うん。でも僕が抜けて大丈夫かな」

やれやれ、明久の奴は優しいな。しょうが無い。少し、戦争の事を忘れさすか。

「大丈夫だ。雄二が言ってたじゃないか明久の事をいても居なくても変わらないザコだと」

「！そうだね。それに貢献すれば姫路さんがAクラスに行ける可能性があるんだね」

「ああ。本来はいけないが特別にそれを可能にする方法がある。俺の研究の手伝いをすれば学園に貢献すれば学園長が特別にもう一度振り分け試験を受けさせてくれるという話だ」

「わかったよ。早くいこう」

「ああ。そうだな」

やれやれ。

ババアに説得するのに苦労したがこれを見返りを明久に話せば戦争の事はどうでもよくなるからな。

明久の戦争理由は姫路（巨乳娘）だからな。例えばBクラスに負けても何の問題も無い。

それに、雄二は明久を弄ることに楽しんでるからな。

一応信頼はしてるようだがまだ甘い。

明久のすごさを理解しきれてない。

そう明久の召喚獣は物に触れることが出来るという利点だ。

観察処分者は他の生徒よりも操作性は有利と言うことだ。

もしこれに高い点数を加われば鬼金棒と言うわけだ。

俺の目的は明久からの信頼とテストの点数を上げることだ。

上手くすれば、観察処分者の評価を変えることが出来る。

今まで、誰もしなかったことをしてみる価値がある。

もし、そんなことを出来たら誰もが驚くだろうし、それにババアの驚く顔が見たいのが俺の今の野望。

全く俺が少しシステムを弄ったくらいで文句を言いやがって、

問題点だらけの腕輪の開発に回しやがって俺以外だれも居ないじゃないか。

まあ、愚痴はともかく明久^{バカ}が成績を上げることが出来れば明久の約束を守ることが出来る。

そう本当の条件は明久の成績を最下位から最低でもCクラスまで上げることが出来たら叶えると言う話なのだ。

まあ、この事を雄二が知ったら全力で阻止するだろう。

戦争に参加する動機があれば問題が無いのだからそれがなければ明久の成績の上昇は明久弄りが難しくなるといことになる。

それだけは、阻止したいんだろうな。さて、戦争の方はどうなっているのか？

「マーナ。モニターに映してくれ」

「？ねえ。この教室で良いの」

「ああ。そうだ」

「この中央にあるゲーム機でするの？」

「そうだ。明久の場合。普通のやり方じゃ飽きるからな。ゲーム風にすればあきにくいだろ」

「でも、学園長にひと泡吹かせたいからって僕で良いの？」

「ああ。学園長からの指名だからな」

「うん。わかった。

成績の上昇と陸の学園からの要求をクリアすれば姫路さんはAクラスに行けるんだね」

「ああ。あと姫路（巨乳娘）次第だな」

「じゃあ、始めるよ」

と言ってコントローラを握って開始した。

さて、どうなっているかな。

マーナ視点

マスターの指示通り。監視してます。さてFクラスの今回の主武器は数学です。

成績の検索によるとBクラスは比較的文系が多いのが理由です。

それとなぜか長谷川先生は召喚可能範囲が広いというのも理由です。

他にも英語ライティングの山田先生と物理の木村先生もいます。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れてくるぞ！」

私が見える範囲では島田達、前線部隊の向こう側を見ますとゆっくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いていました。

えっと、人数は10人程度ですね。

様子見といったところでしょうかね。

「生かして帰すなっっ」

それが皮切りとなり、Bクラス戦が始まりました。

総合 Bクラス・野中長男 1943点 VS 総合 Fクラス・
近藤吉宗 764点

数学 Bクラス・金田一祐子 159点 VS 数学 Fクラス・
武藤啓太 69点

物理 Bクラス・里井真由子 152点 VS 物理 Fクラス・
君島博 77点

圧倒的な実力差で第一陣がことごとくやられていきます。

さてこれからどうします、Fクラスの皆さん。

「おっ遅れ…まし…た……。ごめ…んなつ…さい…はあ」

「大丈夫？瑞希」

「だ、大丈夫です……。美波ちゃん」

なるほど。姫路さんは運動が苦手そうですね。それを島田さんが心配してますね。

『来たぞ！！ 姫路瑞希だ！』

あれ？Bクラスの目つきが変わりましたね。

あれは明らかに姫路さんを警戒してますね。

「瑞希、来たばかりで悪いんだけど……」

「は、はい。行って、きます」

今から姫路さんが参戦するようですね。

『長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラスの姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます』

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

『律子、わたしも手伝う!』

二人がかりとはよほど警戒してるみたいですね。

さてこれからどうなるか見させてもらいましょう。

『『^{サモン}試獣召喚!』』

敵の二体は剣と槍を構え、姫路さんの方は前に見た大剣を軽々と持つて

あれ?前は無かったはずの左手首に綺麗な腕輪をしていますね。

なんなんでしょう?

「あれ、瑞希。召喚獣、腕輪をしてるわね」

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

『そ、それって』

『わたし達で勝てるわけないじゃない』

？何で向こうの2人が腕輪をみて顔色を変えてるのでしょうか？

「じゃ、行きますね」

そう言っつて姫路さんの召喚獣が左腕を敵の召喚獣の方に向けます。

『ちよつと待つてよ!?!』

『律子！ とにかく避けないと!』

敵2人の召喚獣は急いで横に跳ぼつとします。

その直後、姫路さんの召喚獣の腕輪が光を発しました。

キュボツ（ものすごい熱戦が走つた音）

『きゃあああーっ!』

『り、律子!』

あれま、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれましたね。

頭上には点数が出ていますね。

数学 Fクラス・姫路瑞希 412点 VS 数学 Bクラス・岩
下律子&菊入真由美 340点

「う、ごめんなさい。これも勝負ですのです」

甘いですね。姫路さん。これは勝負なんですから謝る必要ありませんのに。

姫路さんの召喚獣は、大きく避けてバランスを崩した敵に大剣を振り下ろし、

相手の武器ごと一刀両断して決着は一瞬でつきました

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ、一人で!? そんな馬鹿な!?!」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

あらあらBクラスの残り8人に驚愕の表情が浮かんでいますね。

「やるじゃない。瑞希」

「はい。美波ちゃん。それではみ、皆さん、頑張ってください!」

「やったるでえーっ!」

「姫路さんサイコーッ!」

あらあら信者急増中みたいですね。

これは吉井君も大変ですね。

なるほど。腕輪の効果で敵の士気も挫くのが狙いですか（ニヤリ）。

「瑞希、下がって頂戴。あとは、ウチらがやるわ」

「あ、はい」

へえ。確かにこれでは相手の前線部隊崩壊は時間の問題でしょうね。

『中堅部隊と入れ替わりながら後退！ 戦死だけはするな！』

時間稼ぎの意味もありますか。

「島田すまぬがここを任すのじゃ、ワシは須川と教室に戻るぞ」

「ん？ なんでよ？」

私が戦況を眺めていると島田さんところに木下君がやってきました。
）。

「Bクラスの代表じゃが……」

「ええ」

「根本らしい」

「根本って、あの根本恭二？」

「うむ」

「なるほど。確かに戻っておいた方がよさそうね」

「雄二に何かがあるとは思えんが、念のための」

「それと明久が見つけたら教室に戻るように言って欲しいのじゃ。戦死はしておらぬのじゃが見当たらんじゃ」

「え！？吉井が居ないの？」

「うむ」

「しょうがないわね。わかったわ見つけたら一発殴ってから教室に送るわ」

「では、頼むのじゃ」

と言って木下君は教室の方に向かって行きました。

あらあら姫路さん戦いながらも吉井君を探してますね。

それと鬼の形相で吉井くんを探してる島田さん。怖いです。

さて、ボケはここまでにしてあの根本と言っやつが仲間のクラスメイトに指示を出してましたね。

気になりますから私もFクラスの教室に戻ります。

「酷いのう。まさかこう来るとはのう」

「ああ。ここまでするとはな」

教室に引き返した私と木下君と須川君が見たのは、穴だらけになった卓袱台とヘシ折られたシャープや消しゴムでした。
なるほど。

マスターが楽に勝つ方法を提示したのはなんだかの問題を起こす可能性があったからですね。

「酷いな。これじゃ補給がままならないぞ」

「うむ。地味じゃが、点数に影響が出る嫌がらせじゃな」

「あまり気にするな。修復に時間がかかるが作戦に大きな支障はない」

と後ろの方から坂本君が話かけてきました。

そして席についた須川君は坂本君に話しかけました。

「坂本がそう言うなら良いけど…それはそうと、どうして坂本は教室があんなになっているのに気付かなかったんだ？」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室をからにしていた」

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午後九時に持ち越し。」

その間は試召戦争にかかわる一切の行為を禁止する。　ってな」

「それ、承諾したのか？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方が俺達に有利なじゃないのか？」

「姫路以外は…な」

「あ！ちっ、そうだった」

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうだな。この調子だと本丸は落とせそうにないからな」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路の個人の戦闘力の方が重要になる」

「だから受けたのか？ 姫路さんが万全の態勢で勝負できるように」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合がよい」

「じゃが、陸が動けばかなり楽になるのじゃがのう」

「ああ。確かにあいつは代表には攻撃が出来ない。

点数補充は戦争以外しか出来ないという条件があるがあいつが居れば楽に行けたが
機嫌を損ねたからな」

「?どうして参加してくれないんだ。海谷は」

と須川君が聞いていますね。

答えは坂本君がマスターを信用してくれてませんからですから。

「ああ。俺が陸を怒らせたからだ」

と坂本君が苦虫を噛んだ顔で話してました。

「どうして?」

「それはのう。雄二が陸の作戦を蹴ったからじゃ」

「ああ。なるほど。すねたわけか」

「違うのじゃ。雄二が陸を信用できないと言ったことが原因なのじゃ」

「まあ、いきなり変な薬を飲まされれば信用できないわな」

「それは否定できるんじゃないかとにかく今の戦力で勝たなければいけないのじゃ」

「ああ。そういうことだ。それにしても明久がどうしたんだ。もう戦死したのか?」

「それがなのじゃがないのじゃ」

「いないだと!?!」

「うむ。教室が出たところはまでは一緒だったのじゃがそこから先は知らんのじゃ」

「俺が見たのは吉井と海谷が話してどこかに行ったのが最後だな」

「おやおや。坂本君怒ってますね」。

「何考えてるんだあいつは!!」

「須川よ何かを言ってたのか聞いておらぬのか」

「んん。確か吉井がいなくても関係ないって坂本が言ってたところか聞こえなかったな」

「なるほどのう。雄二今回は明久と陸なしで戦わなければいかんかう」

「あいつ!!とことん俺の作戦を無視しやがって!!須川何としてでも明久と陸を戦線に出すんだ」

「わ、わかった!!」

へえ。マスターを戦線に出すと無理ですよ」。

「私マーナが掌握してる事を知らないのですか」。

「って知りませんよね」(ニコ)。

さて行きますかね〜。

と私が行くこうとしたとき。

「雄二。とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうでも何かされていくかもしれん」

「わかった。気をつけるよ」

「うむ」

と言って木下君が教室から出て行きました。

「さて、備品の手配とあいつに荷物でも見ておくか。壊れでしたら俺の作戦のせいで言われるからな」

ふうん。優しさはあるんですね〜。

「あと出来たらあいつの弱みを握れたら俺の思い通りに動かせるかな」

前言撤回です。貴方は悪魔です。

まあ、マスターが困る物はこの教室には置いていませんから安心してすけどね〜。

しかし、この事は、マスターに筒抜けですけどね。

第十八話

さて、須川君には悪いけど、マスターの邪魔をさせるわけにはいきません。

覚悟してください。

放送室

「とりあえずこれでいいか」

ピンポンパンポーン

『連絡致します』

須川君が校内放送で流しましたか。

では、邪魔をしますか。(ニヤリ)

これからとんでもない事が流れますから頑張ってください。

『Fクラスの皆およびBクラスの皆に繰り返しますFクラスおよびBクラスの皆にお伝えします』

ふっふっふ。やはり面白くおかしくしないといけませんよね。(笑顔)

さあ、根本どう行動をとるか楽しみです。

『Bクラス代表の根本恭二君はCクラス代表の小山友香さんと付き合っているぞ!!!』

『なお放送したのはFクラス須川亮です。野郎どもBクラスをブチノメし根本を地獄に送るぞ!!!』

F・Bクラスの生徒『『な、なんだと!!!』』

あつはつはつは。自分で実行しておいてなんだけとお腹痛いです。

まあ、実際痛くはないのですがマスターの人を弄る楽しさがよくわかります。(さわやか笑顔)。

Fクラス教室

雄二「……須川の奴。俺が頼んだ要件ではないがまあ、間違いなくBクラスに勝てる確率が上がったな(ニヤリ)」

Bクラス教室

根本「な、何てことをバラすんだFクラスの須川のバカ野郎!!!」

Bクラス男子生徒「代表?どういうことですか?」

Bクラス女子生徒「確か、代表。彼女が居ないと言ってますんでしたか?」

「お、落ち着け!!!で、デマに決まってるだろう」

「どもってますよ。代表」

「俺には君しか見えないって嘘だったんですね!!」

「だ、だから誤解だと言ってるだろう!!」

「……………（ジトジト）」

Cクラス教室

小山「な、何で知られてるのよ。覚えてなさいよFクラスの須川!!」

Cクラス男子生徒「代表ってあんなのが好きなんですか?」

Cクラス女子生徒「別の男子生徒にした方がいいと思いますよ（憐れみ）」

「そうよ。その通りよ何か文句ある!!」

「いえいえ。人の趣味は人それぞれですから（慈愛に満ちた顔）」

「そうです。最低な男でも惚れた男への弱みですよ（慈愛に満ちた顔）」

「あ、あんた達。私に喧嘩売ってるの!!」

「「いえいえ」」

腕輪研究室

陸&明久「わははははっ!!」

明久「や、やるね。須川君（むつちゃ笑顔）」

陸「ああ。まさか放送室に行って戦争に勝つために自分を犠牲にするとは思わなかった（むつちゃ笑顔）」

まあ、100%マーナの仕業だろうが、今回は面白いから誉めてやろう。

「にしても陸から教えてもらってたから僕は知っていたけどそれでも驚いたよ。

根本と小山さんが付き合っていたなんて」

「ああ。偶然二人きりで話しているところを見たから追跡したら案の定だったというわけさ」

まあ、実際はカモフラカメラと盗聴器がたまたまあの二人が密会していたところを映っていたから。

気になって徹底調査した結果わかったからな。だから楽に勝てる作戦を提示しただけだね。

さて、笑わせてもらったしこれからどう行動をするのか楽しみだな。

マーナ視点

む。今マスターが誉めてくれたような気がします。

嬉しいです。これでしばらくは私は安泰です（さわやか笑顔）。

『やっちまえ!!!』

『須川会長が命をかけた行動を無駄にするな!!!』

Fクラス男子生徒『『おつ』』

『なあ、どうする?』

『正直こいつらと戦いたくない』

『ああ。教室はおいしいけどなでも、根本に彼女がいると知ったらな』

Bクラス生徒『『ああ。むしろ根本死ねだな』』

あらあら。一部のBクラスの生徒以外はやる気を失せて代表を倒そうと話になってますね。

ここまで上手くいくとは思いませんでした。

おやFクラスの皆が何やら覆面をかぶってますね。

????『これより、異端審問会を始める』

あれ須川君?隠れてなくていいですか?

『『『す、須川会長!!!』』』

『お前らの気持ちはわかるだから根本を肅清しよう!!!』

と覆面を被ったFクラスの生徒達がまだ、戦おうとしているBクラス
の集団に突っ込んだ。

その結果。

突っ込んだFクラスの補習の決定と引き換えに大半のBクラスの生
徒達も報酬室に連れって行かれた。

まさに自爆特攻。自分の戦死と引き換えに道連れを作る恐ろしい攻
撃です。

そして、相手に10000点のダメジを与えました。

そのかいあって降参をする一部のBクラス。

よって再び教室前に攻め込み今日の戦争は終わり、休戦となりまし
た。

第十九話（前書き）

連続投稿。

第十九話

Fクラス教室

俺と明久戻つてくると姫路（巨乳娘）と島田ミンデレが怒って俺と明久に詰め寄ってきたが。

俺と明久が先生の用事で参加できなかったと言つとしぶしぶ下がった。

俺を疑つてんなら西村先生に聞いてみなと言つと確認に行つて戻つて来て落ち込んでいた。

まあ、当然の結果と言つやつだ。

いまだに俺を睨む雄二ゴリラに戦況はどうなったかと聞くと。

「一応計画通り教室前に攻め込んだわけだが、こちらの被害も少なくなはない」

とゴリラが忌々しそうにこちらの被害を書いたメモを読み上げている。

「そうか。ハプニングはあったけど、今のところは順調のようだな」

「そうだね」

「まあな。それより、明日は参加で」

「……トントン」

「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあったか？」

気がつけば土屋がそばに来ていた。

明久はいつものこと言っているが油断できない。この気配美春と同じ気配をしていたぞ。

どうやら今日の土屋は情報係で、戦闘には直接参加しないで周囲を警戒していたようだ。

相手の動きを逃さずチェックする為のようだ。ゴリラをにとしては良い作戦だ。

「ん？ Cクラスの様子があやしいだと？」

「……（コクリ）」

土屋の話によると、どうやらCクラスが試召戦争の用意を始めているとのことのような。

それとマーナからの情報で根本と小山が打ち合わせをしているという事と現在Cクラスに隠れているということがわかった。

さて、どうしようかな。

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「……ねえ。ムツツリーニ、根本はそこにいた？」

「……分からない」

「ん？ 明久、どういうことだ？」

「放送で雄二も知ってると思うけど。根本とCクラス代表の小山さんは付き合っているよね」

「……そういうことか」

「どうやら雄二は一言で明久が言いたいことが分かったようだ。」

「正確には俺が明久に教え、それを雄二に話すことで対処法を取ると言うことが俺の狙いだ。」

「？ ……どういうことだ？」

須川が聞いてきた。

「根本が俺たちにCクラスが漁夫の利を狙っていると感じかせて、協定を結びに来たときに倒そうとする可能性があるんだ。協定違反を盾にな」

「な、卑怯な！」

「どうすのじゃ？」

と近藤君が怒り、木下が心配そうにこちらを見てくる。

さてどうするんだ雄二。

「で、どうしようか、なあ陸？」

「やれやれ。どうやっても俺を戦場に出したいらしい。面白い乗ってやるっじゃねえか」

「わざわざ俺に聞く必要もあるまい。代表の作戦通りわざと誘いに乗ろっじゃねえか」

「そつだな。今から行ってくるか」

「そつだね」

雄二がそう言うと俺と明久は立ち上がった。

「あと、近藤君と須川君もついて来て欲しい」

「ああ。わかった」

「別にかまわないがどうして俺が行く必要があるんだ？」

「ああ、それはな、異端者を見つけるためさ」ニヤリ「

「ああ。なるほど。」ニヤリ「

「どうやら俺の言いたいことがわかったようだな。」

「さて、さっさと済ましていくか」ニヤリ「

「ああ。そつだな。せっかくやる気を出してくれたようだしな」ニ

ヤリ)」

それから俺達はCクラスに向かった。

『ガラッ』

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？(どうだ？根本はいるか?)」

教室の扉を開くなり、雄二は俺に聞いてくる。

「(すまない。見える範囲ではない。だがここで須川が役に立つ)」

「私だけど、何かようかしら」

「(そうか)何、ウチのもんが迷惑をかけたから謝りに来たのさ」

「なっ!?!それは、殊勝なことね」

と小山は唾然としたがすぐに気を取り直した。

「(須川)」

「(なんだ)」

「(謝るふりをしてこいつのスイッチを押せ)」

「(？良くわからんがわかった)」

「おい。須川」

「ああ」

「ああ。そのなんだ」

「何よ！！はつきり言いなさい」

「ああ（ポチ）」

『それで、根本君。勝てるの？向こうには高得点を誇る男と姫路さんがいるのよ？』

『ああ、勝てるさ。姫路の動きを止める対策はあるしあの男は俺には攻撃できないし何より今回戦いに参加しないようだからな』

『それなら良いけど。根本君が負けたら私達が攻めると言うことで良いのね』

『ああ。だが俺達が負けるわけ無いさ』

と突然スピーカーから根本と小山の密会が流れた。

「（今だ、雄二）」

「（なるほどな）」

「これはどういうことか？教えてくれないか？」

口元を三日月みたいにして雄二が言う。

「じ、これは!?!」

「????」そうですよ。これはどういづことですか根本君?

根本「い、いやこれは!?!」

「なんだ、長谷川先生にBクラスの生徒も居たのか……」

「俺らがどこにしよう俺らの勝手だろ! 他人のお前にとやかく言われる筋合いはねえ!」

「まあ、そうだな……だが、本当にここにいただけなら良いんだがな……」

「な、何が言いたいんだ!」

ふん。まだ白を切るのか。もう詰みだと言うのに、往生際が悪い奴だな。

「さて、そろそろ茶番を終わらせようか(須川、これで謝る必要はないな)」

「やはり、付き合っていたのは間違いないみたいだな(ああ)」

「陸(お手並み拝見とさせてもらっせ)」

「海谷陸!?!」

「ちよっ……なんであんたがいるのよ? 戦闘には参加しないはずじ

「や!？」

「おや、謝りに来るのに問題はないと思いが。それともそんなこともわからないのか？」

「な!何ですって」

小山、もう少し頭を使いなよ。

はあ。ここは無視しよう。

「さて根本……君とBクラスの生徒がいるのは分かったが、さっきの放送となぜ長谷川先生なぜあなたがここにいるのか聞かしてくれないか？」

「そうですね。私は根本君に呼ばれたんです……ってまさか!？」

「ええ。まるで俺達を罠にはめるかのように偶然とは考えられないですよね」

「酷いじゃないか、協定を破るなんて……確かそっちから試召戦争に関する行為を一切禁止にしたんじゃないか?それか、さっきの放送はどういうことだ。」

まるで最初から計画されてたようだがどういうことだ。根本に小山

「そうですね。これはどういうことですか? 根本君」

「くっ……こいつらを生かして逃がすな! それに、ここで討ち取れば、ウチの勝ちが決まったようなモンだ!」

往生際が悪い三下だな。

「あれ？ 協定違反をしてきたのはそっちなのにそれがばれたら今度は口封じか……そのところはとうなんですか？ 長谷川先生？」

こういうときは先生に訴えるのが一番楽だからな。

確かに俺は、いろいろとやるが本当に困ったことはしないし。

それに、根本にぐらべれば俺の方が信頼はあるからな。

「そ、そうですね。確かに協定違反したのはこちらのBクラスのようにすし……」

「くそ！ 行くぞ、お前ら」

根本は悔しそうにしながら、取り巻きと共にそそくさと逃げ去った。

まだまだ詰めが甘いぜ。

「さあ、帰るか」

「ああ、そうだな。長谷川先生、お騒がせしました」

「いえいえ、こっちが悪いみたいですから」

俺達はCクラスの教室をあとにして自分達の教室へと戻った。

「戻ったぜ」

「あー、疲れた」

俺達が戻ると皆が俺達のところへ集まってきた。

なので、俺はさっき会ったことを話した。

「ま、こうなった以上、Cクラスも敵だ。

同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にすぐCクラス戦はきつい」

それが向こうのねらいだからな。

さてどう出る雄二。

「それならどうしようか？ このままじゃ勝ってもCクラスの餌食だよ？」

「そうじゃな……」

「心配するな。向こうがそう来るなら、こっちだって考えがある」

明久達が悩んでると雄二君が野性味たっぷりの活き活きとした顔で告げた。

「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

この日はこうして解散となった。

「さて、どんな手を使うんだ。雄二」

だが俺と雄二が残った。いや雄二が俺に残れと言ったことが原因だ。

「ああ。だがその前に明日も戦闘に参加しないのか明久と共に」

「ああ。詳しくは言えないが学園の依頼だからな」

「そうか。ではどうすれば、お前は俺を信用してくれる」

「簡単な話だ。明久の成績が上がっても成績を下げる事だけはするな。」

それとこの二つの腕輪の実践で使って欲しい」

「なるほど。それを実行してBクラスに勝てば俺に協力してくれるんだな」

「ああ。ようやく雄二が俺を信じてくれたようにな」

「ふん、抜かせ」

「「勝とうBクラス戦」」

「他にも必要なことがあるんだろう」

「ああ。明日女子の制服を持ってきて欲しい」

「なるほど。面白くなってきたよ（ニヤリ）」

「ああ。俺もだ（ニヤリ）」

久振りに面白くなってきたな。

爆発と過激派（前書き）

秋雨さんの『バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ』より、
『久遠 光一』をお借りしました。

秋雨さんに怒られない事とファンの多い作品ですから、暴動が起こらない事を祈りつつ、出させていただきました。

爆発と過激派

Fクラス教室

久遠光一は、海谷陸に注文をしていた。

光一「スタンガンの出力上昇と警察にばれないように本場の拳銃と弾を入手してくれ」

陸「ああ、わかった。しかし、この威力のスタンガンさえ耐え切れる人間が居るのか」

「ああ。とある人外には効かなくなり始めてる」

陸が今の出力でも耐え切れる人間が居ることに信じられないでいた。

何故なら、象も一撃で感電死するほどの威力だからなのである。

だが光一は陸の否定を理解しながらも居ると遠い目をしながら語っていた。

「そうか。銃に関しては、時間がかかる。だから俺が持っているやつをお前にやろう」

「すまない助かる」

「気にするな。光一と明久を倒そうとして返り討ちに遭う奴らに実験が出来るから俺としてはありがたい」

「そうか。まあ、陸らしいけどな」

と言って二人は勉強ゲームで頑張ってる明久を迎えに行った。

次の日

Fクラス

ガラッ

俺が教室のドアを開けて入ると黒板の前でFクラスの連中が集まっていた。

「雄二に陸。この騒ぎはなんだ？」

「ああ、それはな文月学園主催、豪華賞品争奪戦、オリエンテーリング大会をやるんだってさ」

「まあ、俺には関係ないがな」

俺に質問に陸が答え坂本雄二は興味がないようだ。まあ、俺にも興味がない。

「！！これは、最新のエアガンに具現化の腕輪だと！！」

「ああ。それか、俺が開発した新型の腕輪だ」

俺が書かれている物に釘付けになっていると陸が教えてくれた。

「？何だよ？その新型の腕輪がどうかしたのか？」

と雄二が陸に聞いている。

そう俺の予想が正しいなら具現化の腕輪の効果は……。

「召喚フィールド内しか使えないが自分が考えた武器または物を点数を消費して現れるんだ。

もちろん物理干涉付きでな。それと白金の腕輪と同じで点数を消費して召喚フィールドも作れるからな」

「なるほど。それは便利な能力だな（ニヤリ）」

やはり、俺の予想通りだ。

「まあ、他にも如月グランドパークのカップル招待券もあるぞ（ニヤリ）」

「何い！！これだけは翔子に渡すわけがいかない」

とゴリラがうるたえているが俺には関係ない。

まあ、せっかくだから工藤と行くのもいいかも知れないなと俺が考えてると。

ガラッ

「どうしたの雄二に光一に陸？」

と吉井明久が教室に入ってきた。

「ああ、今、オリエンテーリング大会の話をしていったんだ」

その質問に答える陸。

「オリエンテーリング大会でどうして皆が集まってるの？」

「明久。黒板に張ってるチラシを見るとわかるぞ」

と雄二が指を黒板の方に指していた。

クラスメイトの目線の先に張ってあるチラシを明久は覗き込む。

そしてそこには

「文月学園主催、豪華賞品争奪戦、オリエンテーリング大会〜！！」

と、書かれていた。

「そういうことだ明久」

と俺が話しかけた。

「へえ。そうなんだ。だから雄二と光一と陸が集まって話していたんだ」

商品欄を見ていた明久が突然大きな声を上げた。

「ああ！ フィーとノインとアインの限定版ストラップセット！
これこれこれこれこれこれー！」

「何だ明久？ そんな物が欲しいのか？」

「良いだろべつに」

明久、お尻をクネクネさせるな。

「どつやったらこれが貰えるの？」

「ああ。それはなあとで先生からも説明があると思うがまずはこれを見てくれ」

陸が宝の地図みたいな見た目の文月学園の地図を取り出した。なるほど。今回は宝探しというわけか。

「この中から探し出すのか。僕RPGで宝箱探すの得意なんだー」

「そしてこれが、試験問題だ」

「えっ」

陸が山のように積み上げられた試験問題を卓袱台の上に置く。

「試験の答えがチェックポイントの座標になっていて、そこに隠してあるチケットが賞品の引換券だ」

雄二が簡単に説明してくれる。

「そ、それじゃあ、テストがとけなきゃ貰えないじゃないかー！」

「しかも早い者勝ちで、他のチームとぶつかった場合は、召喚獣バ

トルで奪い取ってもいいそうじゃ」

「何から何まで不利じゃないかー！」

「安心しろ。俺とお前のコンビなら負けない！！」

確かに不利だが俺達には陸が居る。陸と俺と明久なら負けることはない。

「そうだ！ 光一か陸となら「皆席に着けー！」」

鉄人がちようど入ってきた為、一時的に全員が席に着く。

「何気にオリエンテーリングのチーム分けを発表するぞ」

さてさて、俺は一体誰と同じチームなんだ？

『一・有藤・工藤・武藤

二・遠藤・加藤・近藤

三・浅賀・朝倉・飯島

四・竹中・田中・平田

五・吉井・海谷・久遠

六・横溝・氷室・手塚

七・島田・土屋・姫路

八・須川・瀬戸・竹中

九・君島・布田・真中

十・仲野・中村・斉藤…

十七・坂本・木下・マーナ』

ん？何でプログラムがチーム入りしてんだ。

「問題児は二カ所に集めておいた。何をするかわからんからな」

「異議ありだ！！何で、プログラムのマーナがメンバー入りしてんだ！！」

と陸が怒っている。まあ、当然の事だな。

「簡単な事だ。お前とマーナを一緒にしとくと危険だからだ」

と鉄人が断言した。

「でも、雄二とマーナが一緒にいることも危険だと思います」

と明久が続けて文句を言った。

「心配するな。常にマーナには監視が付いている。だから問題ない」

明久の反論も鉄人は粉碎した。

「制限時間は放課後のチャイムまで、これも授業の一環だ、真面目に取り組むように！」

と言って鉄人は出て行った。

屋上

「問題は俺たちそれぞれの問題に線だな」

現在俺達のチームは屋上で作戦会議をしている。

「俺の答えが地図のX座標。明久の答えがY座標。最後に光一がZ座標。つまり、何階にあるかだからな」

「なんだあ。全部選択問題じゃないか」

ん？ 明久に作戦でもあるのか？

「それなら、楽勝だね」

「明久、選択問題得意なのか？知らなかったな」

なるほど。あれの出番か。

「僕の得意分野を知らないのかい？ いいよ。見せてあげる」

そう言って自信満々に明久が取り出したのは

コロコロ、（鉛筆が転がる音）

「……（啞然）」

「俺達は解けない問題の時はこれをつかってるからな」

ん？どうして陸が啞然としてるんだ。

「数学はこの、ストライカーシグマV！」

見た目は青と赤と白に色をした普通の鉛筆にしかみえないが。

「現国は、プログラムブレイカー！」

次に緑と黄緑と白の鉛筆。

「歴史は、シャイニングアンサーだ！」

そして普通の黄色とピンクと白の鉛筆の登場。

「正解率高いんだー！」

「……明久に光一。お前らの人生は、サイコロの性能に左右されてきたのか？」

と陸が呆れていた。

あとで光一ともども勉強ゲームをさせるべきだなとつぶやいていたが気にするまい。

「バカにするな！ 見てろ！」

「見てなきゃいけないのか」

陸、お前が言いたいことはわかるが俺達に出来る事はこれしかなかったんだ。

「唸れっ！ ストライカーシグマV！」

コロコロと音を立てながら転がる明久の鉛筆。

さあ、俺達を導いてくれ！！

「いよし。よし、わかった！」

答えが出たみたいだな。

「X座標721、Y座標231、Z座標は7。発見！」

おお！　してその場所は？

「ターゲットは、あそこだぁー！」

勢いよく指を出た場所に向けて指す明久その指の指す場所は補習室だった。

「で、あそこに行ったら当分は出てこれないがいくのか？」

「明久、やめとけ。鉄人の根城はずれだからな」

「おかしいな？　問題が間違ってるのかな？」

「「答えが間違ってたんだろうが！？」」

『あつたー！』

「「「ん？」」」

呆れている陸に落ち込んでいる俺達の元に聞こえてきたのは聞いたことのある声が聞こえてきた。

『何が見つかった』

声のする方を見てみると、そこには霧島・優子・工藤のチームがチケットの入ったカプセルを持って補習室の真下の教室にいた。

『あつた。賞品の引換チケットだ』

『最初から正解ね』

「X軸とY軸は当たっていたようだな」

どうやら、性能は問題がないみたいだな。

「ほら！ ストライカーシグマVは凄いだろー！」

「信じてるお前の方が凄いと思うわ」

と陸は呆れていた。

『学食のデザート一年分だよこれ〜。三人で分けよう！』

『……………私はいらない』

『代表。ダイエット中』

『……………違う。その代わりに、カップルチケットは私に譲ってほしい』

『彼氏と行くんだね！』

『……………ううん。ウチの主人と』

「きゃあ。大胆」

ものすごいことが決定しそうだな雄二。

『……ものすごい悪寒を感じる』

『雄二。どうしたのじゃ。まるでこの世の終わりのような顔をして、落ち着くのじゃ』

『ど、どうしたのですか。何で急に壊れるのですか』

どうやらゴリラが霧島の目的に恐怖を覚えてるみたいだな。

「そんなことより、さっさと俺に問題用紙を見せろ」

と陸がめんどくさそうに言ってきた。

「え？問題を解いてくれるの？」

「それは、ありがたいが急にどうしたんだ？」

「俺にも理由があるんだよ」

と陸が遠い目をしてた。何だろうと下を見ると清水が島田を襲っていた。

なるほど。早くここから離れたいな。

「はい。これ僕が担当するはずだった問題」

「ああ」

どうやら明久も下の状況を見て陸に同情したんだな。

「じゃあ。物理は俺がするぜ」

「すまない。頼む。俺一人で全部の問題を解いたら時間が足りなくなる可能性が高い」

「任せろ。俺は物理が得意だからな」

「ふっ。知ってるさ」

それからものすごいスピードで俺と陸で自分と明久の問題を解いていた。

そして、移動をした場所で見つけたカプセルの中身は新型のエアガンだった。

「よし、まず一個見つけたね」

「ああ。そうだな。おまけに光一が望んだ物だしな」

「うん。そうだね」

「早く試し撃ちがしたいな」

「安心しろ。交換してこの大会が終わったらいくらでも出来る」

早く撃ちたい俺を落ち着かせようとしている陸。

「じゃあ、次はどこに行こうか」

「そうだな」

それから俺達は明久が探してたものを見つけていた。

そして制限時間も残り少なくなってきたところで再び屋上に向った。

「さて、どこにあるのかな、と」

「待て、明久に光」

「え？何？」

「なるほど。今戦闘中か」

屋上に到着したとき召喚フィールドが張られていた。

「「「「試^{サモン}獣召喚！」「」」」」

「「「「試^{サモン}獣召喚！」「」」」」

全員が召喚時のポーズをとって召喚獣を呼び出していた。

「まずいぞ、数でも質でも負けておる」

「まさかこいつらとあたることになるなんてな」

「うづう。すみません。私は召喚獣を呼ぶことはできませんから」

「……手加減はしない」

「覚悟はいい？」

「それじゃ、バイバイ」

『Fクラス 坂本雄二 & 木下秀吉

日本史 236点 & 205点

VS

Aクラス 霧島翔子 & 木下優子 & 工藤愛子

日本史 423点 & 458点 & 403点』

圧倒的だな。

Aクラスの三人が召喚獣を突撃させる。

「どっしょよう。このままじゃ雄二達が負けちゃうよ」

「そうはいうが俺達の点数も戦える状態じゃないけどな」

そう俺達を倒そうとアンチ久遠同盟が俺達に戦いを挑んできた。

何とか倒したが俺や明久を助けるために陸は腕輪の効果で点数を俺達に分け与えたため、

俺達の点数はほとんど残ってないである。

「今は、耐えるしかないな」

と陸が言った。

しかし普段冷静な陸が何時になく焦っていることに俺や明久は不思議に思っていた。

その時チャイムが鳴り召喚フィールドが消えた。

「えっ!?!」

「な、何!?!」

「時間切れです」

そのことで雄二達は助かったようだ。

「あー、危なかったです」

「運が良かったのう」

「次までに対策を考えておくか」

と雄二達は安心していた。

それを見届けた俺達は交換所に向った。

Fクラス

「やった! フィー・ノイン・アインの限定版ストラップセット!

葉月ちゃん喜ぶぞー！」

「よかったな明久」

「そう言えば、具現化の腕輪はどうなったのじゃ」

と秀吉が聞いてきた。

「ああ。それならここにあるぜ」

と陸が腕輪を四つ持っていた。

「それじゃ、具現化の腕輪ってシークレットアイテムの事だったの？」

「ああ。そうだ。紙にも書いてあったろ。シークレットアイテムは具現化の腕輪ってな」

「なるほど。だから具現化の腕輪と書かれた紙はなかったのか」

と雄二は呆れながらも納得していた。

「文句は良いから使ってみな明久に雄二に秀吉に光一」

「うむ？陸よお主は良いのか？」

「ああ。開発者は使ってはいけないってルールがあるからな」

「それとマスターは腕輪のデータが欲しいからですよ」

なるほど。実験データが欲しいのか。だから、雄二達の戦いにひやひやしてたのか。

カップルチケットとシークレットアイテムがセットになっていたから焦っていたのか。

「それは、構わんのじゃがフィールドを張って具現化したら点数が足りないのじゃ」

と秀吉が陸に聞いてきた。

「安心しろ。俺が召喚フィールドを呼ぶから大丈夫だ、起動【アウエイクン】」

「せっかく陸が作ってくれた腕輪だ。試すぞ」

「そうだね」

「そうじゃのう」

「ああ。行くぜ」

「リアライズ具現化」

「みて、雄二、光一、秀吉、陸に。僕のは大剣だよ」

「ああ。良かったな明久」

「ほう。良かったのう明久」

「まあ、明久には無駄に豪勢な武器だな」

「まあ、これくらいの武器がないと俺の計画に支障が出るからな」

「それで、雄二の何？」

「俺か？ガントレットだぜ」

「結局殴る一択かよ」

「うっせー!!」

「まあ、雄二らしいとはいえるのう」

「そうだね。雄二らしいと言えばらしいよね」

「そうだな」

「ああ。それは認める」

「お、お前らな!!」

「それより、秀吉や光一はどうなんだ？」

「うむ。ワシはサーベルじゃ」

「俺は、ガトリングガンとバルカン砲だ」

「……秀吉はともかく光一がここまで銃好きだと思わなかった」

「うむっどいっことじゃ」

「ああ。この腕輪は本人が欲しいと思う無意識なところを読み取って出てきてるんだ」

「なるほどのう。今ワシは演劇でベルばらをしておるからサーベルが出たのじゃな」

「ああ。そうだ。ここまでは問題ないな」

「おい。どういっことだ？」

「落ちて着け雄二。ここまでは俺でも実験して試してるから大丈夫だ」

「それで、次の段階って何？」

「ああ。この腕輪の本当の使い方は今自分達が持つてる武器を召喚獣に装備させるのが使用方法さ」

「で、どうすればいいのじゃ」

「ああ。簡単さ。装備トビと言えはいい」

「」「」装備トビ「」「」

「おい。俺がつけてた物が召喚獣に装備されたがどうして俺にメリケンサックが装備されるんだ」

「なるほど。入れ替わったか。その程度で済んでよかったな。

俺の時は爆発しまくって困っていたからな」

「つまり、これは失敗かろう」

「いや違うよ。成功だよ」

「マスターおめでとうございます」

「ああ。ありがとうマーナ」

「じゃあ、陸、お前もやれよ」

「ああ。言われるまでもない。装備^{セット}」

ドカ
ン

「……何で俺だけ爆発するんだ。機能も問題ないのに？」

「はははは。お、お前の無意識も爆発させることしか考えてないからじゃないのか？（笑）」

「否定できる要素がないのう」

「しめん。陸」

「何も言えないな」

「な、ならばお前らも爆発させてやる！」

「」「」「逃げる！」「」

「ついで騒がしい一日が終わった。

爆発と過激派（後書き）

ご意見感想をお待ちしています。

第二十話

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校した俺達に雄二は開口一番そう告げた。

「作戦？ でも、開戦時刻はまだだよ？」

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

「あ、なるほど。それで何をすんの？」

「陸。例の物を」

「ああ。これで良いんだろう」

「ああ。そして、秀吉にこれを着てもらおう」

雄二に言われ、俺が鞆から取り出したのはうちの学校の女子制服。

赤と黒を基調としたブレザータイプで、他校にもかなり人気が垂涎の逸品だそうだ。

どうして俺がそれを持ってらるからってそれは昨日にさかのぼる。

美春の家

「キサマ!!!私の可愛い美春にまた手を出す気か!!!」

と玄関から美春父改めバーサーカーが襲ってきた。

いつもの事なので以前姫路（巨乳娘）が作った弁当の味を再現した薬を飲ませて沈ませた。

「グフウ　　ッ」

「げっ。何よ！！み、美春に何の用ですか？」

バーサーカーを倒した後美春が出てきた。

これは都合がいい。

「実はなお前の制服が欲しい」

「……はっ？」

む。言い方が悪かったかな美春が呆れてるようで哀れなものを見たような顔をしている。

「あ、あんに何があったのよ！？」

「ああ。じつは、BクラスとCクラスが連戦になりそうなんだ」

「それで？」

「このままだと、俺達が負けてしまう」

「美春的にはアンタが落ち込む顔が見ていたけどでもそれだと美波お姉様に迷惑がかかります。困りました」

いつも思っのだが美春が恋する乙女モードになると激しくムカつくのだがなんでだ。

他の職員に聞くとそれは嫉妬と言っが俺にそんな感情はない。

何故なら俺が愛した女はもうこの世にはいないのだからそんな俺がどうして嫉妬しなくてはいけないんだ。

「はあ　っ。美春的には納得できませんが美波お姉様の為なら仕方ありません。

その代わり新しいのを買ってもらいますよ。それが条件です」

「ああ。構わねえ」

「それでは今から行きます」

「ああん？今からなのか？」

「当然です。それくらいはしてくれても罰はあたりません」

「ああ。了解した。しっかりエスコートさせてもらいます」

「当然です」

と俺と美春は新しい制服とそのほかの私服を買わされ食事を奢らせられた。

でも、悪い気はしなかった。いや楽しかった。

「遅くなつたな。悪いなここまで面倒かけて」

「そう思うのなら少しは……」

「ん？なんか言つたか？」

「明日必ず勝ちなさいよ。いいわね」

「ああ。その勝利の女神に誓つてな」

「な、何を、い、言ってるのですか／＼」

と言つて顔を赤くして家に入つて行つた。

そのことをマーナに言つたら天然の女たらし、鈍感と言われた。

何でだろう？まあいい。今は、作戦の方が大事だ。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

秀吉、男としては大いに構つた方がいいぞ。

そんなんだから第三の性別と言われるんだ。

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらつ」

そうこれが昨日雄二と立てた作戦だ。

秀吉にはAクラスに所属する双子のお姉さんの木下優子さんがいるのは知っている。

一卵性双生児かと思うほどよく似ていて、違う個所と言えばテストの点数と話し方ぐらいしかないらしい。

俺は、会ったことがないため詳しくはわからんが大丈夫だろう。

とにかく彼女に化けてCクラスはAクラスに戦争をしかけさせるのがこの作戦のポイントだ。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

俺から制服を受け取り、その場で生着替える秀吉。

なぜか、クラスメイトは顔を赤くしている。

それに土屋はカメラで秀吉を撮りまくっている。

「雄二。こいつらどうして、顔が赤いんだ。秀吉は男だろう？」

「さあな。こいつらの考えなんて俺にはわからねえよ」

「確かにな」

雄二のいうこともだが詳しく知ったら頭が痛くなりそうだから聞かないようにしよう。

「よし、着替え終わったぞい」

ふむ。秀吉が着替え終わったようだな。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

雄二が秀吉を連れて教室を出て行った。

「あ、僕も行くよ」

「俺も行こう」

そのあとを明久とともに追いかけた。

そのまましばらく歩いてCクラスを目の前にして立ち止まる俺達

「さて、ここからは済まないが1人で頼むぞ、秀吉」

Aクラスからの使者になりすます以上、Fクラスの俺や雄二が同行するのはまずいからな。

「気が進まんのう……」

「そこを何とか頼む」

「それに、ここで負ければさらに設備のランクが下がるぞ」

「むう……仕方がないのう……」

「悪いな。とにかくあいづらを挑発して、Aクラスに敵意を抱く

よう仕向けてくれ」

ガラガラガラ、と秀吉が教室の扉を開けて中へと入って行った。

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

『な、何よアンタ!』

『話しかけないで! 豚臭いわ!』

自分か来たのに話しかけるなって突っ込みどころが多いぞ。

『アンタ、Aクラスの木下ね? ちよつと点数が良いからっていい気になってるんじゃないわよ! 何の用よ!』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの! 貴女達なんて豚小屋で十分だわ!』

『なっ! 言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって!』

別にFクラスとは言っていないぞ小山。

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

『ちょうど試召戦争の準備もしてるようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから!』

秀吉はそう言い残し、靴音を立てながら教室から出てきた。

「これで良かったかのう？」

実にすがすがしい顔だな秀吉。

「ああ。素晴らしい仕事だった」

「見事な演技だ。あそこまで出来る奴はそうは居ないぜ」

「そう言っただけだと嬉しいのじゃ」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

Cクラスから小山のヒステリックな叫び声が聞こえてきた。

作戦成功だな。

「作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

さて後十分で今日の試召戦争も始まるようだし、さっさと教室へ向かうか。

第二十一話（前書き）

連続投稿

第二十一話

教室へ戻ったあと、午前九時より俺達は昨日中断されたBクラス前という位置から進軍を開始することになった。

但し、俺は教室待機だがな。暇なのでマーナに戦況を映すようにした。

マーナ視点

おやおや、昨日と違ってFクラスが不利ですね。

「ドアと壁をうまく使っんじや！ 戦線を拡大させるでないぞ！」

木下君の指示が飛びます。

坂本君に“敵を教室内に閉じ込める”と言われていたので指示を遂行しようと戦争をしているのですが、姫路さんの様子がおかしく、何も参加しないようにしているように見えます。

ん？吉井君も気がついてるみたいですね。

何故でしょうか？。

『左側出入り口、押し戻されています！』

『古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！』

これはまずいですね。

Bクラスの成績は文系が多いので、強力な個人戦力で流れを変えな
いと一気に突破される恐れがあります。

「姫路さん、左側に援軍を！」

「あ、そ、そのっ……っ！」

吉井君が姫路さんに頼むも姫路さんは戦線に加わらず泣きそうな顔
をしてオロオロしています。

一体何があるのでしょうか。

仕方ありません。今回だけ手伝ってあげます。

立会人をやっている竹中先生にだけ聞こえる声で囁きます。

「……………ツラ、ずれてますよ」

「っ……っ！」

頭を押さえて周囲を見回す竹中先生。

私のデータには相手の秘密も登録されてるので対処しやすいのです
。

「少々席を外します！」

予想通り少しの間が出来ます。

「古典の点数が残っている人は左側の出入り口へ！ 消耗した人は補給に回って！」

このチャンスを吉井君は見逃さず対処しました。

応急処置ですが、これで少しは持ち直すはずですね。

なるほど。吉井君は姫路さんの動けない理由を聞き出そうとしてるんですね。

「姫路さん、どうかしたの？」

「そ、その、なんでもないですっ」

「そうは見えないよ。何かあったなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし」

「ほ、本当に何でもないんです！」

吉井君が聞くけれど姫路さんは否定をします。

ですが姫路さん……泣きそうな顔では説得力はありませんよ。

『右側出入り口、教科が現国に変更されました！』

「数学教師はどうした！」

『Bクラス内に拉致された模様！』

右側までもBクラスの得意とする文系科目に切り替えられましたね

」。

結構ピンチですね。」

「わたしが行きますっ!」

姫路さんが戦線に加わろうと駆け出しましたが。」

「あ……」

急にその動きを止めて俯いてしまいました。」

私も吉井君と一緒に姫路さんが見ていた方を目で追ってみると、

その先には窓際で腕を組んでこちらを見下ろしている根本の姿がありました。」

なるほど。姫路さんの行動のおかしさは原因がわかりました。

根本が手にしているのは姫路さんのラブレターですね。」

「……なるほどね。そういうことか」

吉井君も根本が持っているラブレターに気づいたみたいですね。」

「姫路さん」

「は、はい……?」

「具合が悪そうだからあまり戦線に加わらない様に。」

試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」

「……はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね」

「あ………!!」

姫路さんは何か言いたげでしたが、吉井君は気にせず背を向けてくださいます。

「面白いことをしてくれるじゃないか、根本君」

吉井君は凄く怒ったように教室へと向かいました。

さて、マスターの機嫌も悪いだろうしどうするのでしょうか。

陸視点

「雄二っ!!」

「うん？ どうした明久。脱走か？」

明久の声が聞こえてきたので俺と雄二は振り向いた。

ちなみに雄二はノートに敵の現在の戦力を書きこんでいるところだ。

「話があるんだ」

「……とりあえず、聞こうか」

雄二は明久の言葉を聞いて明久の方をみてきた。

まあ、予測がつくがな。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

明久、それだと変態だぞ。

「……お前に何があったんだ？」

仕方ないフォローを入れよう。

「雄二。明久はこう言いたいんだ。根本に対する面白い罰を思いついたんだ。

それを実行するには根本の服をはぎ取って、捨てる必要がある。そう明久は言いたかったんだ」

「面白い罰？ ……どんなだ？」

俺は雄二に小声で説明をした。

そしたら雄二は最高の笑顔で頷いた。

「ああ、良いだろう。勝利の暁にはそれくらい何とかしてやるっ」

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

「どうしても外さないとダメなのか？」

「うん。どうしても」

「俺からも頼む」

と俺と明久が頼むと考え込んでいた雄二が俺達の方に再び向いた。

「……条件がある」

「条件？」

「ああ、姫路が担う予定だった役割をお前らがやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させる」

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさ！」

「良い返事だ」

ふっと口の端をあげる雄二。

俺と明久はあれこれ雄二と打ち合わせてして作戦を開始が始まった。

そして雄二はDクラスに指示を出しに行き、俺と明久は須川を呼んだ。

「美波！ 須川、協力してくれ！」

「どうしたの？」

『何か用か？』

この2人は既に昨日の戦闘で点数をかなり消費して当面は補給テストを受けるのが任務になっている。

「補給テストは中断。その代わり、僕らに協力してほしい。この戦争の力ぎを握る大切な役割なんだ」

「……随分とマジな話みたいね」

「うん。ここからは冗談抜きだ」

「何をすればいいの？」

「僕と召喚獣で勝負してほしい」

「そして、ツンデレ島田と須川にはこの腕輪を着けて欲しい」

そう言うと召喚獣勝負の立会人として空いている先生を呼びにいった。

さて、俺もは暴れますかね。

「待たせたな！ ここからは俺が担当する！」

Bクラスの出入り口につくと、俺は大きな声でみんなに告げた。

『来たぞ！ 海谷だ！』

『つつしやあああああ！ Bクラスの奴らを蹴散らしてくれ！』

こうして俺のBクラス戦での初戦闘が始まった。

俺の登場により皆のやる気ががますますあがっているな。

『くっ……アンタなんて返り討ちにしてやるっ！ 試獣召喚！』

『この人数ならいくら海谷でも倒せるだろう！ 試獣召喚！』

『『『試獣召喚！』』』

5人が俺に襲いかかってくる。

お前らDクラス戦のときの俺の点数を調べてないのか？

だがまあ、今の俺は機嫌が悪い。運がなかったな。

「試獣召喚」

幾何学的な魔法陣からでてくる科学者の姿で、薬やメスを持った俺の召喚獣。

無論腕輪をつけている。

「運がなかったな。己の不運を悔いるんだな」

俺は邪悪な笑みで、薬を投げ5人の召喚獣を一気に片付けた。

現代国語 Fクラス・海谷陸 測定不能 VS 現代国語 Bクラ

ス生徒×5人 727点

『『『『『は?』』』』』』

5人からは啞然とした声が出た。

『で、でたらめだ!』

『あんな奴に勝てる勝てるわけないだろう!』

俺の点数をみてほかのBクラスの生徒が騒いでいた。

うるさい連中だ。Dクラス戦を見てたら誰が危険かくらいわかるだろうに。

さて明久。そろそろ良いぞ。

ドン!ドン!ドン!

Dクラス側の壁から何かで叩かれているような音がした。

マーナ御苦労。いいタイミングだ。

マーナ視点

僕は須川君の召喚獣や美波の召喚獣に攻撃をかわしながらいや正確には壁に召喚獣の攻撃をするための行動だ。

そして、どこからもなく陸の声が聞こえてきた。

『今だ!』』

このタイミングで僕達は壁に攻撃をした。

ドン!ドン!ドン!

陸視点

「お前ら、いい加減にあきらめろよな。

昨日から教室の出入り口に集まりやがって……暑苦しいことこの上ないっての」

不意に根本の声が聞こえてきた。

「どうしたんだ? 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか?」

対するは本隊を率いてきた雄二君の声。

ドン!ドン!ドン!

明久達が壁を壊すまで、壁の強度を考えるとあと残り2発。

「はア? ギブアップするのはそっちだろう?」

「無用な心配だな」

「そうか? 頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ?」

「そうだな。 姫路は体調が悪くなっていたようなので休んで貰っ

てはいるが、この程度のクラスに出す必要もないだろ」

「それに、俺がいるのを忘れていないか、根本」

「くっ」

「ふ、さっきの威勢はどうした？ どうやらもつすぐお前が負け組代表だな」

ドン！ドン！ドン！

残り1発だな。

「ちっ……さっきからドンドンと、壁がつるせえな。何かやって
いるのか？」

「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

「けっ。言ってる。どうせもつすぐ決着だ。お前ら、一気に
押し出せ！」

「……体勢を立て直すぞ！ 一旦陸の後ろに下がれ」

そう言うと少しずつ俺の後ろに下がっていくFクラスの仲間達。

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

「ふっ。違うな。俺がいれば十分だからだ。それに……」

『だああ　っしやあーっ！』

『ぶっ壊れる　　っ！』

『壊れなさい　　っ！』

ドゴオッ×3（壁が壊れる音）

豪快な音を立てて、Bクラスにつながる道が出来た。

「んなっ！？」

驚いて引きつった根本の顔。

戦力のほとんどは俺が引きつけてあるので、根本の懐はがら空きだ。

またとない、決闘の場所だな。

代表の防備も薄いしな。

「くたばれ、根本恭二いーっ！」

明久を含めた数名が、根本に勝負を挑むために接近していく。

「遠藤先生！ Fクラス島田が　　」

『Bクラスの山本が受けます！　　試獣召喚^{サモン}！』

「くっ！　　近衛部隊か！」

まだ教室に残っていた根本（の近衛部隊が明久達の行く手をふさぐ。

明久達と根本の距離は約20メートル程度だな。

広い教室のせいで随分と距離があるな。

Fクラスの教室とは大違いだな。

「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だったな！ お前らの奇襲は失敗だ！」

取り繕うように笑う根本恭二。

確かに明久達の奇襲は失敗だ。

既に周りを近衛部隊に取り囲まれている。

だが目標は達した。

本当の作戦を話す前に話は変わるが……各教科にはそれぞれ担当教師がいて、

その先生によってテスト結果にも特徴が現れる。

たとえば、数学の木内先生は採点が早く、世界史の田中先生は点数の付け方が甘く、

明久と一緒にいる英語の遠藤先生は、多少のことには寛容で見逃してくれる。

では保健体育は？

保健体育は採点が早いわけでも、甘いわけでもない。

遠くにいる相手に戦闘をしかけられるわけもなければ、騙しやすい先生であるというわけでもない。

保健体育という教科の特性

それは、教科担当が体育教師であるが為の

ダン、ダンツ！

出入口を人で埋め尽くされ、4月とは思えないほどの熱気がこもった教室。

そこに突如現れた生徒と教師、2人分の着地音が響き渡る。

雄二の作戦でDクラスによる破壊活動でエアコンが停止したので、涼を求める為に開け放たれた窓。

そこから屋上よりロープを使って2人の人影が飛び込み、根本恭二の前に降り立った。

そう……保健体育の特性は、教科担当が体育教師であるが為の並外れた行動力。

そう本当の奇襲は土屋による不意打ちが本当の目的だったのさ。

「……Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ……！」

「……Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリイーニ　　ッ！」

無駄だ。明久達が近衛部隊を引きつけたので丸裸になった根本恭二。最早どこにも逃げ場はない。

「サモン 試獣召喚」

保健体育　Fクラス・土屋康太　441点　VS保健体育　Bクラス・根本恭二　203点

土屋の召喚獣は手にした小太刀を一閃して一撃で敵を切り捨てた。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

第二十一話（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしています。

第二十二話 嬉し恥ずかし戦後対談？

戦争終了後、俺は明久に冷却シップと包帯を巻いていた。

「お主ら、随分と思い切った行動に出たのう」

Bクラスにやってきた秀吉に、最初にそんなことを言われてた。

まあ、声を出したのはマーナだが明久達の作戦をサポートしたのは事実だからな。

そう言われても仕方がないと思うが……

「うう……痛いよう、痛いよう……」

「明久、あんまり動くな。冷却シップが上手く張れないだろうが」

100%全てがフィードバックするわけではないが、素手で鉄筋コンクリートの壁を壊したからな、その痛みは並ではない。

「なんとも……明久らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？ もっと褒めていいと……痛っ！」

「自業自得だ。作戦を立てたとき手に限界が近いと思ったたら島田達にやって任せると言ったはずだ」

「うう」

と俺が怒ると言い返せない明久。

「じゃが後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「秀吉……それは遠まわしに馬鹿って言ってるぞ」

「そうかのう?」

確かに学校の壁を破壊するなんて、問題にならないわけがないからな。

明久、須川、島田は今日の放課後の予定が職員室での説教で埋まっている。

まあ、今回は俺も関わってるから一緒に怒られる予定だ。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二がパンパンと明久の肩を叩いている。

やれやれ雄二は絶対、馬鹿にしてるな。

ま、今回はしょうがないけどな。

それより、腕輪の方はどうなった。

「須川に島田。腕輪はどうなった?」

「ごめんなさい。壊れちゃった」

「すまない。俺もだ」

「気にする必要はない。まだ実験段階なんだから壊れたって仕方無いさ」

「そう。それならいいけど」

「ああ。そうだな」

と申し訳なさそうな須川と島田。しょうがない話を変えよう。

「それより、物に触れた感想はどうなんだ？」

「え！？それは」

「よくわかんないけど一体感があつたような気がするな」

「そうね。ウチも同じ感覚ね」

「そうか。腕輪の実験をこれからも協力してほしい。それでいいな」

「ええ。でも爆発だけはさせないでね」

「そうだ。そうだ」

「努力はしよう」

やれやれ、こまった奴らだ。

さて、負け組代表はどうか。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……」

床に座り込んでいる根本……さっきまでの態度が嘘のようにおとなしいな。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲のみんなが騒ぎ始める。

ま、当然と言えば当然だがな。

「落ち着け皆。前に雄二が言ってたじゃないか、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃねえ」

「うむ。確かにの」

俺の言葉に秀吉が頷く。

まあ、この展開に少し慣れたのだろう。

「陸の言うとおり、ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば開放してやるうとおもう」

2回目の説明なのでクラスの皆はどこか納得したようだな。

まあ、雄二の性格を少し理解し始めたんだろう。

「……条件はなんだ」

力なく根本が問いかける。

ふっ、面白いことを言うな。

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

ほう。どうやら相当の迷惑者のようだな。

だからこそ周りの人達は誰もフォローをしないのだな、本人もそれは分かっているようだな。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

昨日のお昼に雄二が言っていた、あの取引の材料を提案するのだな。

「Aクラスに行って、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

疑う根本の視線。

当初の計画ではなそうだがな。

「ああ。Bクラス代表がコレを着てそして看板を首から掛けて言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言っつて雄二が取りだしたのは、先ほど秀吉が来ていた女子の制服。

そして、俺は看板を取り出した。看板に書かれてる内容は私はFクラスに負けた根本恭二ですと書かれている。

これらは明久の要望の制服を手に入れる為の手段だ。

なんとなく雄二の個人的感情も入っているような気がするが……

「ば、馬鹿なことを言っつな！ この俺がそんなふざけたことを……」

根本が慌てふためいている。

往生際が悪いな。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

随分と嫌われてるな根本。まあ同情はしないけどな。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態グふうっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

「変わり身が早いな」

流石の雄二も驚いてるな。まあ、無理もない。だが社会では当たり前前の事だから気にもならないがな。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解っ」

明久はそう言いながら、ぐったりと倒れている根本に近づき制服を脱がせる。

そして明久が根本の服を脱がすとき嫌そうな顔をしていた。

無理もない。俺もやりたくないからな。

「う、う……」

むっ。いかん奴が起きる。

「喰らえ!!」

シユ（薬を口の中に入れる音）

「……………（ゴクン）……………ゴばあっ!」

と根本は嘔きだして再び倒れた。

それから明久が根本に女子の制服を着せようとして困っていた。

「私がやってあげるよ」

とBクラス女子の一人が提案をしてくれた。

「そう?悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理。土台が腐ってるから」

酷い言いようだ。

「じゃ、よろしく」

と言って明久が教室の外に出て行ったのを確認すると俺も出っ行って行った。

マーナ視点

「……………あつたあつた」

吉井君は根本の制服からは姫路さんの封筒を取り出し、自分のポケットに入れてるところだった。

「おや、吉井君は制服をどうするか悩んでいますね。では、お手伝いしましょう。」

「明久、その制服に用がないなら捨ててしまえ」

「うん。そうだね。折角だから根本君には女子の制服の気心地を家まで楽しんでもらおうとしよう」

吉井君はそんなことを言いながら、Fクラスへと向かいます。

さて私も向かいますかね。

私はカメラからカメラに移りながら吉井君を追っていきます。

「落とし物は持ち主に、っと」

教室に戻ってきた吉井君は根本の制服をゴミ箱に突っ込み、例の封筒を姫路さんの鞆に入れておこうとします。

「吉井君！」

「ふえっ!?!」

しかし、吉井君は姫路さんに背後からいきなり声を掛けられて、間抜けな悲鳴を上げてしまいました。

「な、なに？」

「吉井君……！」

目が潤んでますね。

まったく今日は泣き顔ばかりですね。姫路さん。

「ど、どうかした？」

慌てている吉井君に姫路さんは正面から抱きつきました。

「ほわぁあつと！？」

「あ、ありがとうございます……！ わ、私、ずっとどどどっていいか、わかんなくて……！」

吉井君はそんな姫路さんの態度に困惑してますね。

「と、とにかく落ち着いて。泣かれると僕も困るよ」

「は、はい……」

吉井君は姫路さんを引き離します。

「いきなりすいません……」

涙目をこする姫路さん。

「もっもう一度」

「はい？」

欲望が漏れてますよ〜吉井君^{ニヤニヤ}

「もう一度壁を壊したい！」

あちゃあ。さすがそれは拙いですよ〜。

「あの…さらに壊したら留年させられちゃうと思いますよ…」

流石に吉井君もわかってることなので気まずそうです〜。

「じゃ、じゃあ皆のところに行こうか」

「あ、待ってください！」

吉井君が教室を出て行くこととした時姫路さんが袖を握って引きとめます〜。

「な、なに？」

「あの…手紙、ありがとうございました」

俯きがちに小さな声で言う姫路さん。

「別に、ただ根本君の制服から姫路さんの手紙が出てきたから戻しただけだよ」

「それってウソ、ですよね？」

「いや、そんなことは」

「やっぱり吉井君は優しいです。振り分け試験で途中退席したときだつて『具合が悪くて退席するだけでFクラス行きになるのはおかしい』って、私の為にあんなに先生と言い合いをしてくれていし……」

なるほど。そういう理由がありましたか。だからマスターの話に乗ったんですね。

「それに、この戦争って……私の為にやってくれてるんですね？」

「え！？ あ、いや！ そんなことは！！」

「ふふつ。誤魔化しても駄目です。だって私、自己紹介が中断されたときに吉井君が坂本君と海谷君に相談しているの、見ちゃいましたから」

おやおやあの相談を見られていたみたいですね。

これは誤魔化しようがありませんよ吉井君。
ニヤニヤ

「凄くうれしかったです。吉井君は優しくて、小学生の時から変わってなくて……」

ああ、これはダメですね。この雰囲気は吉井君には耐えられそうにないですね。

「そ、その手紙、上手くいくといいね！」

「あ……。はいっ！ 頑張りますっ！」

ふふ。姫路さん満面の笑みですね。

本当に吉井君のこと好きなんですね。

それに対して吉井君は本当に鈍感です。マスター同様に（ため息）。

「で、いつ告白するの？」

はあ、下世話な話ですね。吉井君。

「えッええと…全部が終わったら…」

「そっか。けどそれなら手紙より直接言った方が良いかもね」

「そッそっですか？ 吉井君はその方が好きなんですか？」

「うん。少なくとも僕なら顔を合わせて行って貰う方が嬉しいよ」

「本当ですか？ 今言ったこと、忘れないでくださいね？」

「え？ うッうん」

ふふ。姫路さんは嬉しそうに吉井君に念を押していますね。

「こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！」

おや、根本が起きたみたいですね。

『いいからキリキリ歩け』

「さ、坂本と海谷め！ よくも俺にこんなことを」

『無駄口を叩くな！ これから撮影会もあるから時間がないんだぞ』！

「き、聞いてないぞ！」

そんな良い争いが廊下から響いてきました。

どうやら始まるみたいです。

「なんででしょうか？」

「なんだろうね？」

伝令だけではなく、いつの間にか撮影会までスケジュールに入れられたみたいです。

さてこの情報を更新しておきますかね（黒笑）

「とにかく、頑張っつね」

「はいっ！ ありがとうございます！」

元気よく返事して、姫路さんは教室を出て行きました。

とても軽やかな足取りです。

さて、私もマスターのところに戻りますか。

「　　と、その前に雄二の教科書に卑猥な落書きをしておこう」
「　　やれやれ、絶賛勘違い中ですか（はあっ）」

その後、職員室で先生方の親身な指導を受けた吉井君と島田さんと須川君とマスターが疲れてました。

その後マスターは学園長室に行き腕輪の実践データと問題点を学園長に話して更なる改良をするように指示を出されました。

その帰りに女装をした根本と出会い殴り合いをしたあと和解をしました。

しかしマスターは邪悪な笑顔で笑ってました。

次の日

Bクラスではものすごい悲鳴があったそうです。

何でも根本が真面目でさわやかで自分の非をわび改めて協力をして欲しいと言った見たいです。

何で、見たいかと言いますと盗聴器で聞いていたのがマスターと坂本君だけですから。

二人ともめっちゃいい笑顔でした。

第二十二話 嬉し恥ずかし戦後対談？（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

第二十三話 Aクラス戦準備（前書き）

連続投稿

第二十三話 Aクラス戦準備

そして点数補給のテストを終えた二日後の朝

いよいよAクラス戦を残すのみとなった俺達は教室で最後の作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中は不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったることだ。感謝している」

壇上の雄二がいつも一緒にいる俺達でも覚えがないほど、素直に礼を言いつた。

「雄二、どうしたんだ？らしくねえぞ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

「そっか」

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいい手もんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そっだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

最後の勝負を前に、皆の気持ちが一つになっているようだ。

「皆ありがとう。そしてAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

クラスの皆はかなり驚いてるようだ。それに俺も驚いている。

教室中にざわめきが広がっている。

『どづいつことだ？』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ！」

Aクラス代表の霧島翔子とFクラス代表の坂本雄二。

ほう。雄二は学年主席である霧島に勝てる作戦があるみたいだな。

おや、明久が何か言いそうだな。

「馬鹿のゆ」

「（明久、余計なことを言って攻撃されるのもバカらしいだろう）」
明久が“馬鹿の雄二が勝てるわけない”と良いそうだったので口を塞げた。

「何か言ったか、明久？」

「いや、何も」

「そうか。しかし、皆の言いたいことは分かる。翔子とまともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

ふう、危ない危ない。

明久の口から手を離して俺は一息を入れた。

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？ まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった」

当然と言えば当然だな。

でも、俺達は今こうして勝ち進んできているのも事実。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

無理な話に思えても、否定する人間はもうこのクラスにはいないよ
うだな。

まあ、勝てないと思っていた試召戦争を勝利に導いてきたのは雄二

だからな。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『『『『『『『』』』』』』』』

皆の意思を確認する必要はなさそうだな。

雄二を皆信じてるようだからな。もちろん俺もな。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

ほう。霧島の成績では日本史もトップクラスだがどんな策があるんだ。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

「でも、同点だったら、きつと延長戦だよ？そうなったら問題レベルも上げられちゃうだろうしブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

確かに明久や秀吉の言うとおりだ。だが雄二は自信があるようだ。

「おいおい、俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「???それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか?」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルでのテスト程度なら何の問題もないだろう」

「雄二。あまりもつたいぶるでない。そろそろタネを明かしてもいいじゃろっ?」

秀吉の言葉にクラスのみんなも頷いているな。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

かぶりを振って、雄二は改めて口を開いた。

「俺がこのやり方採った理由は1つ。

ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

「ある問題とはなんだ?」

どんな問題か教えてもらおうじゃないか?

「その問題は 『大化の改新』」

「大化の改新?誰が何をしたのか説明しろ、とか?そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな?」

明久、流石に小学校の問題ではないぞ。

もっと簡単な問題を想像しろよ。

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純というと 何年に起きた、とかかのう？」

「おっ。ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

大化の改新の年号ですか、確か勉強ゲームで明久は“鳴くよ（794）ウグイス、大化の改新”と間違っていたな。

「大化の改新が起きたのは“無事故”ですから、645年だな」

「そうだ。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

いやいや、間違えてるからな。

おや、明久の顔は少し赤いな。まさか、いまだに間違えて覚えてるのか？

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。

そうしたら俺達の勝ち晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

「あの、坂本君」

「ん？ なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

雄二は霧島を『アイツ』とか『翔子』とか呼んでいるからな。

疑問に思うことは同然だな。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？ なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！！ Aクラスの前にキサマを殺す！」

はあ、バカばっかだな。

「俺が一体何をしたと！？」

「遺言はそれだけか？…待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは抑えつけた後口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

「あの、吉井君」

「ん？なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

バカ、そんなことを言えばどうなるかわかるだろうに。

「……………」

「え？なんで姫路さんが僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと島田さん、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとしているの！？」

どうしてって嫉妬に決まってるだろう。

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉。

「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

「皆冷静になって考えてみるがいい。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

秀吉がそんなこと言うと、皆の視線が姫路（巨乳娘）に向いた。

ふむ。データが無いから真偽はわからんがその可能性が高いのだろう。

「とにかく、俺を翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

嫉妬の集団は少し落ち着きを取り戻したみたいだな。

「アイツは一度教えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

まあ、それは俺もだけだな。

そのことが今回は仇となるようだな。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。　そうしたら俺達の机は」

「『『『『システムデスクだ！』』』』」

そして代表である雄二を筆頭に、俺、明久、巨乳娘、秀吉、土屋でAクラスに向かった。

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

「うーん、何が狙いなのか？」

現在雄二と交渉のテーブルについているのは秀吉の双子の姉の木下優子と言うようだ。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

まあ、木下が訝しむのも無理もないな。

下位クラスに位置する俺達が、一騎打ちで学年トップの霧島に挑むこと自体が不自然なんだからな。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要もないかな」

「賢明だな」

まあ、予想通りの返事だな。

ここからが交渉の本番だぜ、雄二。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

雄二が腕を組み、顎に手を当てながら聞く。

「時間はとられたけど、それだけだったよ？ 何の問題もなし」

秀吉の挑発に乗って、昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。

その勝負は半日で決着がつき、今Cクラスと同等の設備で授業を受けている。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……昨日来ていたあの（、）女装をしてバカですと看板を掛けていたアレの事……」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告は間だされていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、3ヶ月の準備期間を

取らない限り試召戦争はできないはずだよな？」

試召戦争の決まりの1つの準備期間。

戦争に敗北したクラスは3ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことはできない。

これは負けたクラスがすぐさま再戦を申し込んで、試召戦争が泥沼化しない為の取り決めだ。

「知っているだろ？ 実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっているってことを。規約にはなんの問題もない…… Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

だから設備を入れ替えなかったからこそできる方法なんだ。

「……それって強迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

ふむ。雄二の奴それでは悪役だぜ。

まあ、この交渉の仕方は悪役だしな……

しかしここまで悪役が似合うやつも珍しい。

「うーん……わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、その提案受けるよ」

「え？ 本当？」

おや、意外とあっさりとした返事したな。

会話に参加してない明久もそう思ったのか声をあげているし。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」

確かに根本を女子の制服を着せたままで話に行かせたのが良かったようだな。

だが最近はそれに嵌っていると居るとマーナから報告があったな。

出来れば俺も係り合いになりたくないな。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い5人ずつ選んで、一騎打ち5回で3回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

なるほど。きつちり警戒してるあたり、なかなか侮れないな。

「なるほど。こっちから姫路か海谷が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「うん。姫路さんは多分大丈夫だとおもうけど、海谷君が出てくると代表でもかなわないしね」

ほう。まるで巨乳娘を軽く見ているかのような発言だな。

確かに、木下は別の的外れなことを言っているわけではない。

それほど霧島は巨乳娘よりも実力があるわけだ。

だが、それはあくまでも去年の成績だ。

甘く見ると足元を掬われるぜ。

それに俺はここの問題が簡単すぎて測定不能になるだけだ。

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよこれは競争じゃなくて戦争だからね」

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

おやおや、皆凄く驚いているね。

これが雄二の本当の作戦なのさ。

「ホント？嬉しいな」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハ
ンデはあってもいいはずだ」

科目の選択権は俺達には必須だが……“一騎打ちの上科目を選ばせ
る”なんて虫の良い話を受けてくれるわけがないからな、5人制を
承諾したというわけだ。

「え？ うーん……」

悩んでるな、木下。

クラスを代表しての交渉ですから、この会話如何で仲間全員の立場が変わる可能性があるからな。

慎重になるのも当然だな。

「……………受けてもいい」

「うわっ！」

ふむ。明久が急に声がしたのでびっくりしてるな。

静かな、でも凜とした声の霧島がいつの間にか近くに来ていた。

厄介なタイプだな。全く気配が感じられ無いのだから。

何者なんだ霧島は？

「……………雄二の提案を受けてもいい」

「あれ？代表。いいの？」

「……………その代わり、条件がある」

「条件？」

「……………うん」

うなずいて、霧島は雄二を見たあとに巨乳娘を睨むかのように見ていた。

なるほど。そういうことか。

霧島が好きなのは雄二で霧島が他の同性を見てるのは雄二を渡さないためか。

だから雄二の傍にいる巨乳娘を敵視しているようだ。

そして顔を雄二の方に戻して言った。

「……負けた方は何でも1つ言うことを聞く」

なるほど。勝って自分と付きあわせせるつもりか。涙ぐましいね。

「……………（カチャカチャ）」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！　というか、負ける気満々じゃないか！」

そして、こっちは何をやっているんだ？

「じゃ、どうしよう？　勝負内容は5つの内3つそっちに決めさせてあげる。2つはうちで決めさせて？」

まあ、全ては譲ってくれ無いと思っていたが、木下の妥協案が得られたな。

そのとき、明久が姫路（巨乳娘）に小声で話しかけていた。

「（姫路さん、どうする？）」「

「（え？ 何がですか？）」「

「何がって。もし僕らが負けちゃったら姫路さんは……」

「（何のことだかわからないですけど、きっと大丈夫です）」

「（そんな簡単に……もし負けたら、姫路さんは霧島さんに）」

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

「凄い剣幕だな。」

まさか、勘違いしてるのか明久。

「心配すんな、明久。絶対に姫路に迷惑はかけない」

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでもいいか？」

「……わかった」

「よし。交渉成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そつだな。皆にも報告をしないといけないからな」

交渉を終了して、Aクラスをあとにした。

俺達の試召戦争の終結は、すぐそこまで迫っていた。

第二十三話 Aクラス戦準備（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

第二十四話 Aクラス戦

「では、両名共準備は良いですか？」

いよいよAクラス戦だ。

立会人はここ数日の戦争で何度もお世話になっている、Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生だ。

「ああ」

「……問題ない」

「それでは1人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

出てきたのは秀吉の姉の木下優子だな。

対するこちらは

「ワシがやるっ」

その弟である秀吉が相手か。

こっちが不利だな。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

「あちゃあやっぱりか。」

「Cクラスの小山って前に秀吉が罵倒しまくった奴だからな。」

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

「まあ。予測がつくがな。」

「姉上、勝負は どうしてワシの腕を掴む？」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシと代表がCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ？」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測をしてあ、姉上っ！ちがっ……！その関節はそっちには曲がらなっ……！」

「秀吉無事でいてくれ。」

「ガラガラガラ」

「秀吉は急用が出来たから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

笑いながらハンカチで返り血を拭う木下。

ああ、やっぱり怒ってね。まあ、俺が彼女の立場なら同じことをするがな。

「い、いや」

「待て、俺が行こう」

雄二が不戦勝って言い出さないうちに行くとしよう。

この戦いは大将戦に行く前にけりを着けるべきだ、

「お、おい。陸大丈夫なのか？」

「安心しろ。こういうプライド高い奴の鼻をへし折りたいのさ」

「そうか、期待してるぜ」

「ああ。では、代わりは俺が行こう」

「そうですか。それではとりあえず……」

高橋先生がノートパソコンを操作すると、壁二面の大きなディスプレイに結果が表示した。

生命活動 Aクラス・木下優子 ALIVE VS 生命活動 F

クラス・木下秀吉 DEAD

いやいや生きてるよ多分。

さて、どう倒そうかな。

「では海谷君、教科は何にしますか？」

「化学で行きます」

『お、おい。陸の奴。最も得意な科目を選択したな』

『ああ、勝ったな』

『ああ。まず一勝だな』

俺の一言で周りがざわつく。

まあ、俺が得意な科目を選択したんだ当然の反応だな。

「へえ。化学が得意なんだ？」

「ああ。俺をいや俺達を甘く見ると痛い目に遭うぜ」

「それはそれは怖い」

と木下は俺をなめていた。

「それでは、始めてください」

「ああ。試獣召喚サモン」

「ええ。試獣召喚サモン」

いつものように白衣を着て薬とメスを持つデフォルトされた俺の召喚獣が現れた。

対して西洋鎧に、ランスという装備の木下の召喚獣。

両者の召喚獣が現れた。そして点数が表示された。

化学 Aクラス・木下優子398点 VS 化学 Fクラス・海
谷陸 測定不能

『『『あ、ありえない』』』

とAクラスが驚いていた。

『『『どうだ！！参ったか！！』』』

となぜか豪そうなFクラスの皆。

「なるほど。噂どおりね」

「随分と余裕だな」

「ええ。私の目的は貴方を誘い出すのが目的だもん」

「ほう。それではこの試合は捨て試合と言っわけか」

「ええ、そうよ。貴方が出てくることこそが私の狙いだもん」

「なるほど。他のFクラスの連中を倒せば勝てると言っわけか」

「そうよ。まあ、私もタダで負ける気は無いけどね」

「だが、こちらを甘く見るのはどうかな？」

「そうかしら、危険なのは貴方と姫路さんだけじゃないかしら」

「まあそれは、戦つての楽しみさ」

「はいはい。わかったわ」

と言いながらランスを持って突撃してくる木下の召喚獣。

「今まで、貴方の行動から素早く動く相手は苦手でしょう」

「どうかな。やってみないとわからないぜ」

メスで横からなぎ払い、そのまま軌道をそらす。

そのまま俺の召喚獣はメスを数本取り出し振り上げ投げた、そのまま木下の召喚獣を串刺しにした。

そう手足をメスで差し固定されたのである。

「終わりだな。爆発しな」

と言って俺は召喚獣に木下の召喚獣に薬を飲ませそして爆発した。

「そうね。私の負けね。でもこれで貴方の出番はない。そして、本来の試召戦争でなくて良かったわ」

と言って自陣に戻った木下。

そして、Aクラスの連中は勝ったと笑っている。

さてどうかな（ニヤリ）。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

俺がFクラスのところに戻ったのを確認して、高橋先生が次の試合を宣言した。

Aクラスからは佐藤美穂が出てきた。

えっと、Fクラスからは

「よし。頼んだぞ、明久」

「え!?!? 僕!?!?」

何を企んでいるんだ雄二?

この場は姫路に行かせて土屋で勝って行くのが俺達の作戦だぞ。

「大丈夫だ。俺はお前を信じてる」

遊ぶ気か？あとになれば苦勞するのがこっちだぞ。

「ふう……やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ？』

まあ、仕方ないな。

今までの明久を見ていたら普通はそう思うわな。

「吉井君、でしたか？あなた、まさか……」

対戦相手の佐藤、あれは勘違いしているな。うまくいけば倒せるかな。

「あれ、気付いた？」ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

明久が戦闘の為に袖をまくり、手首を振る。

「それじゃ、あなたは……！」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕」

明久は大きく息を吸い、この場にいる皆に告げた。

「左利きなんだ」

テストには関係ないがな。

物理 Aクラス・佐藤美穂 389点 VS 物理 Fクラス・吉井明久 110点

まあ、今まで勉強ゲームで勉強をしてたからな。

少し点数が上がるってもんよ。

でも、負けてしまったか。

善戦したんだけどな……

「いててっ、本気出したんだけどなあ」

「なあ、明久、テストの点数に利き腕は関係ないぞ」

「でもすごいじゃない。いつの間にあんな点数になったの？」

「陸に教えられたからね」

「ああ納得。でも勝負はここからだね」

「ああ、そうだな。でも明久の頑張りが俺たちの勝利を呼び寄せそうだぜ」

雄二は善戦した明久を見て勝てると思ってるようだな。

「では、3人目の方どうぞ」

「……（スック）」

次は土屋か……ここでは科目選択が活きるな。

なぜなら土屋は総合科目の点数のうち、実に80%を保健体育で獲得しているからだ。

その単発勝負ならAクラスにですら負けはしないだろう。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは色の薄い髪をショートカットにした、ボーイッシュな女の子が出てきた。

はて、誰だ？

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

俺達の心がわかったのか、ちゃんと説明をした工藤。

何気に優しいようだな。

「教科は何にしますか？」

高橋先生が土屋に聞いてきた。

まあ、アレしかないがな。

「……保健体育」

土屋の唯一にして最強の武器が選択された。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤が土屋に話しかける。

土屋の実力を知らないようだな。

随分と余裕のある顔だ。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？…キミとは違って、実技で、ね」

明久達の顔がその時だけ赤くなったような気がする。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

工藤さんに明久が指名された。

「フツ。望むところ」

「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんていらなのよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

「……………」

「島田に姫路、明久が死ぬ程悲しそうな顔をしているんだが」

試召戦争で精神的に瀕死に追い込まれた人物は、おそらく後にも先にもこの明久だけだろう。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はい。試サモン獣召喚っと」

「……………試サモン獣召喚」

2人に似た召喚獣が、それぞれ武器を手に持って出現した。

土屋はBクラス戦でも見せた小太刀の二刀流。

一方工藤は

「なんだあの巨大な斧は！？」

明久が工藤の召喚獣を見て驚いて叫ぶ。

確かに破壊力抜群の巨大な斧だからな。

腕輪までしているようだな。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤が笑いかけるのと同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動きだした。

巨大な斧に雷光をまとわせ、ありえないスピードで土屋の召喚獣に詰め寄る。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん」

そして、豪腕で斧を振るう工藤の召喚獣。

これは避けられる攻撃ではないが……

「ムツツリーニっ!」

斧が召喚獣を両断する

「……加速」

と思った瞬間、土屋の召喚獣の腕輪が輝き、彼の召喚獣の姿がブレた。

土屋、なるほど。奴の余裕はそういうことか？

「……え？」

工藤……いえ、みんなにも見えていないみたいだな。

土屋の腕輪の機能は『加速』で、召喚獣の速さが人間の目にはとらえきれないほどのスピードで動きを速くすることが出来るというものだ。

ちなみに俺が見えたのはマーナが撮影をしたのを超スローで再生をしたからわかったのだ。

「……加速、終了」

ポツリと、土屋が咳いた。

一呼吸置いて、工藤の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

まあ、予想の範囲内だ。

保健体育 Aクラス・工藤愛子 446点 VS 保健体育 Fクラス・土屋康太572点

流石、ムツツリーニという渾名は伊達ではないようだな。

「Bクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな」

雄二が驚いている明久に説明していた。

あの時の点数でイマイチ……ある意味恐ろしいな。

「そ、そんな……！ この、ボクが……！」

工藤が床に膝をつく

相当なショックなようだな。

……でも俺の点数を見るとどうなるのかな。

「これで2対1でFクラスのリードですね。次の方は？」

高橋先生は淡々と作業を進めているが。

平常心を保とうとしてますが、若干動揺している。

ま、AクラスがFクラスに負けているからな。

当然と言えば当然だ。

「あ、は、はいっ。私ですっ」

こちらからは当然姫路（巨乳娘）が出る。

Fクラスにいなながら、Aクラスとまともに戦える数少ない人材だからな。

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから歩み出たのは 久保利光君ですね

「やはり来たか、学年次席」

彼の名前は久保利光

姫路（巨乳娘）に次ぐ学年3位の實力の持ち主で、振り分け試験を姫路（巨乳娘）がリタイアし、彼は俺達の学年で次席の座にいる。

「ここが一番の心配どころだ」

雄二が心配するのには理由がある。

久保の實力は姫路（巨乳娘）とほぼ互角だからだ。

総合科目の点数差にして20点程度しかない。

姫路（巨乳娘）が連戦で疲れている今、負ける可能性が高くなっているというわけだ。

今までのならな（ニヤリ）

「科目はどうしますか？」

高橋先生が2人に声をかける。

科目選択権はあちらにあるので、どうなるか分からないがな。

「総合科目でお願いします」

久保は総合科目で勝負をするようだな。

「はい、構いません」

姫路（巨乳娘）は真剣な目で久保君を見ている。

勝てよ、姫路（巨乳娘）

「それでは……」

高橋先生が前と同じように操作を行っていた。

それぞれの召喚獣が喚び出されて、一瞬で決着がついた。

そう今までの姫路（巨乳娘）なら負けていたかもしれないがな。

総合科目 Aクラス・久保利光 3997点 VS総合科目 Fクラス・姫路瑞希 4409点

『マ、マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』

AクラスとFクラスから驚愕の声があっている。

点数差400オーバーですから、当然の反応ですが……

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?」

久保が悔しそうに姫路（巨乳娘）に尋ねる。

つい最近までは拮抗していた実力がいつの間にかここまで離された

んだ。

気になるのも当然だろうな。

そしてどうして俺が姫路の成績を知っていたのか。

そう俺にコーチを頼みに来たのは驚いたがな。

だから、姫路（巨乳娘）の勝ちは予想していた。久保が出てきたときだね。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人のために一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

好きな者の為に頑張れるか、俺には出来ないことだな。

姫路（巨乳娘）は本当にこんな頭の悪いクラスでも、皆のことが好きなんだな。

「さ、3対1でFクラスの勝利です」

第二十四話 Aクラス戦（後書き）

ご意見感想を待っています。

第二十五話 Aクラス戦決着（前書き）

連続投稿

第二十五話 Aクラス戦決着

第10問 問 次の() () に正しい年号を記入しなさい。

『 () () 年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『 1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『 雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

「 さ、3対1でFクラスの勝利です」

高橋先生が信じられないという表情でFクラスの勝利を告げた。

そんな言葉を聞いたとき、俺以外の連中が大歓声をあげた。

『『『う、うおおおおおおお！！！！』』』』

『や、やったぜ！』

『ああ、とうとうAクラスを！』

『姫路さん万歳！坂本万歳！』

『姫路さん愛してる！』

などなどいろんな言葉が飛び交っている。

「陸、やったね！」

みんなと同じように喜んでるそんな明久にたいして俺は…

「そうだな」

そう答えたのだった。

『ま、まさかAクラスの僕達が…』

『そんな』

『うそだろ…？』

俺達とは逆に、Aクラスではまるで通夜のような空気になってい

る。まさに対極とっていいほどにな…

「……みんな、まって…」

そんな霧島の言葉に、辺りの視線が霧島に向く。何だ…？

「…まだ、勝負は全部終わってない」

その一言に、辺りがざわめきだした。

『どづいつことだ…？』

『いや、確かにそうだけど…』

『でも、もういまさらじゃ…』

「おい、翔子。なにを言ってる？」

「…わたしはただ、事実を言ってるだけ。それとも雄二、わたしに負けるのが…怖い？」

そんな霧島の言葉に、雄二がいきり立つ。

「んなわけあるか！そんなに大敗を喫したいならやってやるつじやねえか！」

「では、Fクラス対Aクラスの代表戦の教科はどうしますか？」

高橋先生が雄二に教科を聞く。

代表戦の選択権は雄二が持っていますからな。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

雄二の宣言で、Aクラスにざわめきが生まれる。

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

俺達の勝利は確定しているけど。向こう（Aクラス）は俺達にも勝利の可能性が出てくるのが分かったからこそ、Aクラスの皆はざわついているようだ。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

一度ノートパソコンを閉じ、高橋先生が教室を出ていった。

教育熱心な高橋先生のことですから、小学生レベルのテストも資料として持っているようだな。

「雄二、あとは任せたよ」

ぐっと雄二の手を明久が握りしめる。

「ああ。任された」

「……（ピッ）」

土屋がこちらに歩み寄って、ピースサインを雄二君に向けた。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……（フッ）」

土屋は口の端を軽く持ち上げて元の位置に戻った。

「雄二。勝てよ」

「ああ。陸、お前がこのクラスに来てくれて良かったと思っている。Fクラスの勝利はお前のおかげだ」

「油断は禁物だ。本当の意味でのFクラスの勝利はまだからな」

ここからが本当の勝負だからな。

「ああ。分かった」

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

明久のことか……ああ、あのときのことか。

「はいっ」

姫路（巨乳娘）の元気な返事を聞いて、雄二は楽しそうにやんわりとした笑みを浮かべた。

一方、Aクラスは…

『代表、お願い。一矢報いて！』

『そつだよ、このまま負けっぱなしなんていやだ！』

あちらこちらから声援を送る霧島の姿があった。さて、この戦い、どうなるかな？

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

戻ってきた高橋先生がクラス代表2人に声をかける。

「……はい」

短く返事をして霧島が教室を出て行った。

「じゃ、いつてくるか」

「はい。行ってらっしゃい。坂本君」

「ああ」

「頑張りなさいよ」

「そっじゃのう。頑張るのじゃぞ雄二」

姫路（巨乳娘）と島田と秀吉ミンチレに送り出されて雄二も戦場に向かう。

これで本当の決着だ。

「皆さんはここでモニターを見ていてください」

高橋先生が機械を操作すると、壁のディスプレイには視聴覚室の様子が映し出された。

先に霧島が席に着き、続いて雄二がやってきた。

「では、問題を配ります。制限時間は50分。満点は100点です」

画面の向こうで飯田先生一（日本史担当）が問題用紙を裏返しのまま2人の机に置いた。

「不正行為等は即失格になります、いいですね？」

「……はい」

「わかっているぞ」

「では、始めてください」

2人の手によって問題用紙が表にされる。

「吉井君、海谷君、いよいよですね……！」

俺と明久の間にいる姫路（巨乳娘）がそう言う。

「そうだね。いよいよだね」

「そうだな」

「これで、あの問題がなかったら坂本君は……」

「集中力や注意力に劣る以上、延長戦で負けるだろうね。でも」

「はい。もし出ていたら」

「うん」

誰もが固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が映し出される。

問・次の（ ）に正しい年号を記入しなさい

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

穴埋め形式の問題のようだな。

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

「あ……！」

出たな。

「よ、吉井君つ、海谷君」

「「うん（ああ）」

「これで、私達っ……っ！」

「うん！これで僕らの完全勝利だよ」

『『『『『よっしやあ！』』』』』

揃ったFクラスの皆の言葉

あとは、雄二が100点を取って良いいんだけど……

「最下層に位置した僕らの本当の勝利だ！」

『『『『『うおおおっ！』』』』』

教室を揺るがすような歓喜の声だな。

そして、テストの結果は……

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス・霧島翔子 97点 VS Fクラス・坂本雄二53点

負けてるな。

あの後俺達は視聴覚に向った。

「雄二、あの点数なに…?」

「いかにも、俺の全力だ」

「…雄二。団体戦じゃなかったら俺達、負けてたぞ?」

「…フッ」

「笑ってごまかすな!!」

全く。雄二の奴は…

「…雄二」

そこに、霧島がやってきた。何のようだろう?

「約束、覚えてる…?」

「…ん? 負けた方が勝った方の言うことを聞くってアレか? そうだな、なら…」

「…うん。私の言うことを聞いてもらっ」

…え?

「ちょ、ちょっと待て翔子! 勝ったのは俺達の方だぞ?!」

「…雄二は全く分かってない」

「はあ？何がだ？」

「私は『試召戦争に負けた方が勝った方の言うことを聞く』なんて一言も言っていない…」

た、確かにそうはいつて無いな。

「ま、まて翔子！まさかその約束って…！」

「私と雄二だけの約束…」

「……………」

「雄二、それじゃあ…」

そう言つて霧島が雄二に近づいて…

「雄二、私と付き合つて…！」

雄二に告白した。なるほど。だから最終戦まで行いたかったのか。

「やっぱりな。お前、まだあきらめてなかったのか」

「……私はあきらめない。ずっと雄二のことが好き。だから、これから初デートに行く」

「ちょ、ちょっと待て！まさかお前、試召戦争に勝つても負けても揚げ足取ったりしてこうするつもりだったな！？…ちょ、離せ！こ

ら!.....」

つかつかつかバタン!

霧島は雄二の首根っこをつかみ、教室を出て行った。それはそうと……

「ねえ、どういうこと?霧島さんって確か女の子が好きなんじゃない?」

「恐らく、雄二にずっと思いを寄せてたためじゃないか?」

「じゃあ、姫路さんを見てたのは?」

「雄二の近くにいる女子が気になったにはないかの?」
なるほど。確かにそれなら全てつじつまが合う。

「あの、吉井君。ちょっといいかな?」

「…え?」

そこにいたのは久保君だった。何だろう?

「その、設備の件だけど……」

「あ、そうか」

いろんなことがあって思わず忘れてた。

「設備交換は週明けの月曜日でいいかい？今日はもう日も暮れるし……」

「えっと、うん。それでいいよ。みんなもそれでいいね？」

後ろにいるみんなに確認をすると、あちこちから「それでいい」と返事が返ってくる。

「じゃあ、久保君」

「うん。じゃあ月曜日に。それと、吉井君」

「ん、なに？」

「今回の試召戦争で分かったことがある。それは、精進を怠らないことだ。努力は裏切らないと教えてもらったよ」

「久保君……」

「じゃあ、また月曜に……」

まあ、こういう展開もありかな。

「……吉井君に海谷君。惚れてしまったよ……。この気持ち、まさしく愛だ！」

ただ、久保の最後の言葉に寒気を感じるがな。

まあ、とにかく俺達はAクラスに勝った。

第二十五話 Aクラス戦決着（後書き）

ご意見感想をお待ちしています。

発明とサドと歪んだ愛情（前書き）

まあさんとのコラボです。

まあさんのオリジナルキャラクターの『前田理音』、『吉井深秋』とのコラボ小説です。

まあさんのファンの方達に怒られなければ良いなあ。

発明とサドと歪んだ愛情

学園長室

「それで、アタシに頼みたいことはなんだいクソガキども」

深秋「はい。それは、女装コンテストを開いて欲しいのです」

理音「頼みますよばあ」

「全くアンタは口が悪いうえもう片方は観察処分者かい。はあ。アンタ達何を企んでるんだい？」

「企んでるなんてそんな」

「ああ。俺達は面白そうだから計画しただけだからな」

「思いつきし企んでるじゃないか!!」

と学園長いやババアが吠えた。

「それは良いからどうなんだ」

「するかしないかどっちなの？」

「はあ。これ以上アンタ達と話していたらこっちが頭痛くなるさね。勝手にしな。ただしアタシは関わらないからね」

「そうか。そいつは助かる」

「これで、ボクの行動も文句は言えないね」

と言って俺と深秋は出て行った。

後ろの方から厄介事になりそうさねとババアが言っていたが無視することにした。

「これで、体育館は使えるね」

「ああ。参加者もいるしな」

「もうすでに体育館で実行する準備も出来たしね」

「ああ。開始は明日だ」

と俺と深秋は邪悪な笑みを浮かべた。

次の日の体育館。

陸視点

『文月学園主催！ 女装コンテスト！』

一斉に上がる歓声に俺は思わず啞然としてしまった……。

お前らこんなバカ企画をわざわざ見に来るなんて……そんなにヒマなのか？

『さて始めました。2・Fの生徒前田理音君と吉井深秋ちゃんと

サポートプログラムマーナちゃんとのこの企画!」

何考えてるんだあいつらは……。

確かに面白いかもしれんが巻き込まれる奴の気持ちを考える!! 特に明久の事は。

それにしてもこの日の為に俺に内緒で爆竹や地雷を作らせたのは、このためか。

『時期はいつなのか、目的は何なのか、そういう細かいところはすべて無視して進めて行きましょう!』

目的も無いのか!?

思いきし遊ぶ気満々だな。

『解説を努めますのは私放送部の新野すみれと』

『学年主任の高橋洋子先生です』

もはや突っ込みきれんな。

放送部の新野とかいう奴は知らんが、高橋先生!

高橋先生。貴女も色ものですね。

『』よろしくお願いします』

『審査員席の吉井さん、前田君、マーナちゃん、準備はよろしいで

すか？』

『『『ああ（ノはいノ問題ないです〜）』』』』

『なお、今回参加した方々の写真を後日ムツツリ商店で販売しますのでよろしかったら買ってください』

もはや遊ぶ気満々だな。

あいつらの笑顔が目には浮かぶよ。

そして、この事は土屋も囁んでいたのか。

だから、最近は金回りが良かったのか。

だから俺も無理やり参加させたのか……。

雄二お前は俺が必ず復讐するから覚えとけよ。

『それではエントリー？1番【卑怯】【変態】【女装趣味】【気持ち悪い】と四拍子揃った外道！2-B代表の根本恭二さんです！』

まさか、本当に参加するとは思わなかった。

思いつきし冗談で言ったのだが……。

新生根本恭二恐るべし。

まあ、俺的には面白いからOKだけだね。

『いやあ……、これは思った以上に汚い絵ですねえ……。しょっぱなから誰得な企画が分からなくなってきました……。』
だろうな。

まさか目覚めるとは思わなかった。

きつと歴史に残るだろうな。

『そんな事を言っではいけませんよ。彼の変態としてのプライドをズタズタにしてしまいますから』

『変態としてのプライドなんてむしろズタズタにされるべきだと思いますが気にしないでいきましょう』

高橋先生。貴女の言葉は先生としては正しいかもしれないが……。

それに今のあいつはMにも目覚めてるから罵った方がいいと思うぞ。俺が考え込んでる事を余所に根本は自信満々とも言いたげな表情でステージを歩いている……。

もはや昔の根本とは違うな。

新生根本恭二今ここで爆誕だな。

さて、どう評価するか見さして貰うぞ。

そしてステージの真ん中まで来てターンをしようとした矢先に……
落ちた……。

ド　カン！！

『ぎゃああー！！』

新生根本は叫び声をあげた。

『なお審査員は点数をつける代わりに出場者を強制的に退場させる権限を持ちます』

『審査員がこれ以上は見るに堪えないと思ったらボタンを押すわけですね』

『はい、そうなります』

『深秋ちゃんどうして押したですか？』

『だって、根本はボクが予想していた以上にコスプレが似合わないんだよ。コスプレをバカにしてるよ』

深秋は悔し涙を流しながら言った。

『なるほど。予想以上に最悪だったんですね』

『では、押さなかった前田君どうしてですか？』

『あとで、正気に戻ったらこれを見せてどんな反応をするか見たいから』

『なるほど、面白そうなことだったので押さなかったんですね』

『ああ』

『もし弟さんがこれを見てたらどうします？』

『速攻で落とす。あいつの目を汚させないために』

どれだけ弟が大切なんだ。

それとこれでは、迂闊に失格になれないな。

『ちなみにこの退場させるための落とし穴の中は爆竹と地雷が敷いています。Fクラスの海谷陸君のお手製となっております』

俺の芸術をそんなくだらないことで使うな！！

お前らを楽しませるために作ったんじゃないからな。

それとマーナお前は必ず爆破するからな。

覚悟しやがれ！

ちなみに爆発した根本は幸せそうな顔をしていた。

『エントリー？2番 Fクラス代表の坂本雄二さんです』

雄二……、お前も強制的に出場させられていたんだな……。

だから俺を巻き込んだのか。

少しお前に同情をしたよ。

ガタン（雄二が落ちる音）

ド　カン！！

『ぎゃああー！！』

『おっといきなり厳しい評価。ターンすらさせてもらえませんでしたね』

雄二……………、お前も生贄か……………！！

『坂本君は中央……………、つまり平均点に届かずに終わってしまったようですね』

『そうなりますね』

『平均点以下……………。つまり赤点という事は補習の必要があるかもしれません』

え？

『いえそんな補修は必要ないかと思えます』

『彼にあの恰好のまま後で職員室に来るように伝えてください。どこが悪かったのか一緒に考えましょう』

俺が手を下す必要も無かったな。

しかしあのまま職員室って……！

普通の出場者よりも長く女装してろってことか！？

地獄だな。

『これほど余計なお世話という言葉を体現したセリフを私は今まで聞いた事ありません』

雄二お前の事は忘れない。

俺が雄二の事を記憶していると同時に雄二の声によく似た叫び声が聞こえてきた気がするが……きつと気の所為だろう……。

『さて、エントリー？3番今回は撮る側ではなく撮られる側、ムツツリ商会の若き経営者、土屋康太ことムツツリーニさんです』

土屋……、お前も犠牲者か……。

さらにスポンサーまでしてるのに不憫だな。

『これはレベルが高い。普通に可愛いです』

『土屋君は無口で小柄ですからね。雰囲気も出ているのではないでしようか』

『歩ききりましたね。審査員もこれなら見ていられると思ったのでしよう』

楽しそうだなお前ら。

『続いてエントリー？4番、文月学園を代表するバカ、吉井明久さんです』

チ、チャイナ服……？

似合ってるから余計に性質が悪い……。

嗚呼、久保が……今にもステージに乱入しそうなくらい興奮している……。

「吉井くうーん!!！」

そこへまさかの乱入者。

学年次席の久保利光が、ルパンダイブで明久に襲いかかろうと……

『アキちゃや　　ん!!！』

さらに玉野美紀も乱入を始めた。

いけない明久のピンチだ。

カチツ（木下がスイッチを押す音）

ボタン（明久が落ちる音）

ド　　カン!!！

『ぎゃああ!!！』

明久が助かったけど。

けどなんで落としたんだろう……？

『意外です。結構可愛かったのに落とされてしまいました』

そうかもしれないが明久の心の傷が増えるぞ。

『それに、よもや女装コンテストで乱入者があるとは』

『ええ。確かにそうですね』

『乱入者の久保君と玉野さんが震えながら下唇を噛んでいますね。』

それに二人とも泣いてますね』

『なぜでしょう？今の彼からは学年次席としての貫録が欠片も感じられません』

『木下優子さんはAクラスの威厳を保つためにボタンを押したのかもしれないですね』

ああ、なるほど……。

プライドの高い木下らしい理由だ……。

『エントリー？4番Fクラスの災害科学者、海谷陸君です』

誰が災害だ。

『これは……！ 凄いですね。前々からあいそうと思っていましたが』

『ええ。まさか、ここまでにあうとは思いませんでした』

『流石、恋人にしたい人？1の方ですね』

なんてこと言うんだ……。

『まさか、ここまで浴衣があう方が居るとは思いませんでした』

『そうですね。私もできれば持って帰って色々と着せ替えてみたいくらいです』

お前らな必ず復讐をするからな。

『これも歩ききりました。審査員席の吉井深秋さんに前田理音が満悦です』

『ええ。特に前田君のあんないい笑顔は今だかつて見たことがあります』

理音め……！ オボエテロ……！

『それでは最後のお一人、エントリー？5番』

沸き立つ観客……

期待されているのが良くわかる……。

アイツはファンが多いからなあ……。

男のはずなのに人気が高い。

《本命中の本命と言われ》

バン（審査員がスイッチを押す音）

ガタン（秀吉が落ちる音）

ド　カン！！

『きゃああー！！』

『優勝候補……………』

観客が視線を向けた先には、押したはずの深秋が呆気にとられた様に横を見ている姿。

その横では、息を切らせながらボタンを押している木下が再び現れた。

会場の空気が静まりかえり、空気が凍った……。

落ちた秀吉のドクダグが何故か強く印象に残った……。

『はい、それではこれで文月学園女装コンテストを終了します。皆様、またの機会にお会いしましょう。さようなら』

『さようなら』

“またの機会”なんてあつてたまるか……！

あつたとしてもあの手この手を使って阻止してやる！

最悪学園ごと爆発させるつもりだからな。

その後理音達と合流した俺と雄二と明久は復讐をするために追いかけてくっこをしていた。

発明とサドと歪んだ愛情（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第二十六話 清涼祭準備（前書き）

ここから、GAUさんのオリキャラでゲストキャラのバカと雲雀と召喚獣の主人公、支倉ひばりが登場します

第二十六話 清涼祭準備

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください

『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかも
しれませんね。

写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に、君の生命の危機が感じられます。

海谷陸の答え

『新しいサンプル』

教師のコメント

貴方、清涼祭で何を起こす気ですか？

マーナの答え

『人間になりたい』

教師のコメント

貴女は昔のアニメの見過ぎです。

Aクラス戦が終わり、設備が変わり喜んでいるFクラスの連中。

しかし俺は思いきし困っていた。

なぜなら明久にどうやって再び勉強させるか悩んでいるからだ。

そう明久の動機は姫路を良い環境に送りたいがために勉強をしていたからだ。

しかし、もうその動機は無いのだからだ。

新たな理由作りになければ明久は勉強はしないだろうなと俺が考

えてると。

ガラッ

と扉が開く音はしたのでそちらの方に目を向けた。

「よし、おまえら席につけえ。HRをはじめろぞ」

そういつて西村先生（怪物）が入ってきた……あれ？

「あの、何で西村先生が？」

と姫路が怪物に聞いていた。

「ん？今日から福原先生に代わってこの俺が、Fクラスの担任になったからだ」

「「「「「なにiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!??」「」「」「」

Fクラスの心がひとつになった瞬間。

「まで!どういうことだ、鉄人!？」

「西村先生と呼べ、坂本。理由はな、お前達がAクラスに勝ったからだ」

「は？」

「はあ!？」

「はあああああ!?!」

「Aクラスに勝ったとはいえ、もう試召戦争に参加しないわけではない。他クラスから宣戦布告を受ければ当然試召戦争をしなければならん。だからお前らの成績向上と成績維持をかねて、俺が担任になったのだ」

「「「」

「今日からビシバシいくから覚悟しとけよ!」

と驚いていた。なるほど。これを出しに使えば明久に雄二を成績を上げる事が出来るなと俺は笑っていた。

「さて今日はHRの前に転校生を紹介する」

『先生!転校生は男ですか?女ですか?』

おい待て、お前らさつきはこの世の終わりのような顔をしていたのに転校生の話になると笑顔になるのは何故だ?

それとそこは重要なのか?

「女性だ」

「おおおおおおお!?!」

バカばっかだ……頭痛い。

どうして女だと喜ぶんだ。

確かにこのクラスは女子が少ないがかなりの美人揃いだと思うがどうしてそこまでそう思うか不思議でしかない。

「お前ら、静かにしないと補習室に直行させるぞ！」

「……」

あまりに騒がしさにクラスの担任の西村教諭が生徒達を怒鳴りつけると、

補習室が怖いのか生徒達は水が引いたように静かになった、

「支倉、入ってこい」

静かになった生徒達の様子を見て、西村教諭が転校生を呼ぶ。

ガラツ（扉が開く音）

「……失礼します」

転校生の女の子は軽く頭を下げ、教室に入ってきた。

俺はいや誰もが驚いていた。

なぜなら入ってきた女の子は身長が小学生と変わらないため、小学生が入ってきたのだと思ったからだ。

「先生。彼女が本当に高校生なのですか？」

と俺は確認をしてしまった。

「海谷。信じられないと言いたいようだがお前と変わらない年だ」

「あのちびっ子が？」

そしたら支倉は……。

「あたし、そんなにちっちゃくないよっ!？」

と怒っていた。

「さて、すまないが支倉自己紹介を頼む」

「は、はい」

と支倉は気を取り直して教卓の前に出て自己紹介を شدした。

「支倉ひばりです。前の学校では家庭部に入っていました。趣味はお料理です。」

親の事情でこの文月学園に転校してきました。特技は……」

一息あけると、

「『声帯模写だ』」

俺の声でしゃべった。

シンッと、教室が静まり返る。

「『聞いたばかりの声でも、感情的でなければ、この通りだ』」

ついで鉄人の声。さらに口を開く度に別人の声になっていた。

「ス……」

呆然とした声を誰かが絞り出すと、

「『スゲー……っ！！！！』」「『』」

と、教室は一気に騒然となる。支倉は照れくさそうにしていた。

第二十六話 清涼祭準備（後書き）

ご意見感想をお待ちしています。

第二十七話清涼祭準備その二（前書き）

連続投稿。

第二十七話清涼祭準備その二

支倉の自己紹介が終わった後鉄人は支倉の席は明久の隣になった。

そのとき支倉は明久を見て懐かしそうに笑っていた。

そのことに明久が不思議そうな顔をしてそれから何かを思い出したような顔をしていた。

この事から明久と支倉は知り合いと見るべきだろうな。

と考えてたら鉄人が連絡事項は以上だと言っていた。

それから俺達を見てため息をついてから話を続けた。

「さて、お前達は言うべきことがある。

支倉は知らないだろうがそろそろ清涼祭が始まるのだが、残念ながらこの時期になっても出し物が決まってないクラスがある」

へえそうなんだと言うクラスメイトが言った一言が鉄人を怒らすことになった。

「そのクラスは、うちだ!!」

と大いに怒っていた。無理もない。

「それに1〜3学年の中で一番売り上げが多かったクラスには、『温泉旅行二泊三日』と『高級肉ークラス分』を進呈すると学園長も言ってるんだからやる気を出したどうだ」

『そうか、そうだったな』

『やる気が無かったがやるぞ皆』

『『『『おおっ！！！』』』』

『気合入れるテメエらあっ！！』

『『『『『うおおおおっ！！』』』』』

そんなわけで、Aクラスの設備を手に入れてやる気が全くなかったはずの連中達は、見違えたように張り切っていた。

「凄い張り切ってるわねー…やっぱり男子は肉が好きなの？」

「ふふ、そうみたいですな」

「あはははっ」

女子三人は肉にそこまで執着はないようで、支倉は笑うしかなく、島田は呆れたように、姫路は微笑ましく男子の様子を見ている。

まあでも、

「…頑張らないといけないわね…！」

「…明久君と温泉旅行です…！！」

「……温泉旅行が景品なのは驚いたな」

島田と姫路はやる気を出し、支倉は驚いていた。まあ無理もない。それから雄二が前に出て、やる気がなさそうだが前の件で懲りているのか何をするかを聞いてきた。

明久がパソコンで入力準備をしていた。

「クラスの出し物でやりたい物があれば拳手してくれ？」

雄二が言つと数名が手を上げる。

「ムツツリーニ」

「……………（スクツ）」

名前を呼ばれて土屋は立ち上がった。

「……………写真館」

「写真館だな」

雄二が振り向くと明久に指示を出していた。

パソコンで入力していた。

【候補？写真館『秘密の覗き部屋』】

確かに土屋ならそうするだろうな。

「次は横溝」

「メイド喫茶……といいたけど、流石に使い古されいると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

明久は意見を入力する。

【候補？ウェディング喫茶『貴方の運命の人』】

そこで恋が始まるのか？

「次は、横田」

「ゴスロリ喫茶なんてどうですか？」

「ゴスロリ？」

『女は似合うだろうが、男には似合わないだろ？』

『だよな』

これには批判を多く出ているが一応意見なので明久に入力させる。

【候補？ゴスロリ喫茶『うぶな私を見て』】

君は何をしたいんだ。

「他にないか？須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

須川は立ち上がりながら言つと

「中華喫茶？ チャイナドレスでも着せたいのか？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ」

「それもいいな」

「これも意見だからな」

雄二は須川の意見を明久に指示を出した。

【候補？中華喫茶『ヨーロッパアン』】

中華なのかヨーロッパなのかわからないぞ。

第二十七話清涼祭準備その二（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

爆発と紅の双子姫と王様ゲーム（前書き）

まうさんとのコラボです。

まうさんのオリジナルキャラクターの『光國 葵』、『光國 楓』とのコラボ小説です。

まうさんのファンの方達に怒らなければ良いなあ。

爆発と紅の双子姫と王様ゲーム

場所は2 - F……。

あたしと楓、明久、坂本君、秀吉君、土屋君、海谷君、姫路さん、美波、霧島さん、工藤さんが真剣な顔をして卓袱台を囲み向き合っている。

真剣勝負……！ 恨みつこなし！

さて……やりますか！

「王様ゲーム！」（雄二君の声）

「……イエー……イ……」（全員の相の手）

「明久、ルールの説明を頼む！」

「OK！ここに1～10番の数字と“王”と書かれたクジがあります。

この“王”のクジを引いた人は他の1～10番の人に命令ができます。

例えば1番が王の肩を揉むとか、2番が3番にしつぺをするとか……。

そして王様の命令は

「……絶対……！」

「み、皆ノリノリだね」

「楓はこつ言つゝの苦手なの?」

「そういうわけじゃないのだけど」

「?」

うん。無理もない。楓にこのノリについていけないよね。

「それじゃあ、はじめろ!」

坂本君の指示で全員クジを引く……。

この緊張感……! たまらないね……!

「お前ら、覚悟はいいか?」

「雄二こそ覚悟すべきだな」

「雄二こそ覚悟は良いのかい!」

「へっ! お前らこそな、明久に陸! 行くぞ! せーのっ!」

「「「王様だくれだ!」「「「

「よっし!」

「「「くくくくく!」「「「

王様は坂本君か……!

どんな命令を下すつもりなの!?

「それじゃあ命令だ! そうだな……。5番と! 6番と! 7番と!
9番が! 鉄人に『好きです。付き合ってください』と告って来い!」

5番 アキくん

6番 土屋君

7番 あたし

9番 海谷君

なんて命令しやがるの、この野郎!

「「「貴様あーっ!」「」「」

「なんて命令するんだ! そんなことしたら完全に誤解されちゃう
じゃないか!」

「……………不名誉なっ!」

「お前には人の心が無いのか!?!」

「あたしの乙女心に傷が付くわよ!?!」

あたし達4人は当然猛抗議した。

そんなバカな話があつてたまりますか

「ダメよ、アキ! さっき自分で説明したばかりでしょ?」

「そうだよ、4人とも」

「王様の命令は」

「……………絶対……………！」

楓、貴女はアタシの味方ですよね。

「ゴメン。お姉ちゃん（ファイ）」

目をそむけないでよ！！

「……………ダーーーーッシュ！」

あたし達4人は走って行った……………。血の涙を流しながら……………西村先生に告白する為に……………！

数分後……………。

あたし達4人は

【私は教師をからかった事を反省しています】

と、いう看板を下げて教室に戻ってきた……………。

楓が後になって教えてくれたんだけど、よくそれだけで済んだ物だねと苦笑していた。

不意にアキくん、土屋君、海谷君と眼があつた……………。

そして3人とも血の涙を流しながら、あたしと同じことを考えていると確信した。

（（雄二（坂本君）！ 絶対殺す！）（）

こうしてあたしたちは坂本君への復讐を誓い合つのであったの。

「2回戦！ 行くぞおおおおっ！」

「「「YAHAAAAA!」「」「」

「せーのっ！」

「「「王様！ だ〜れだ!」「」「」

「あ。ボクだね」

次は工藤さんか……。

さてどんな命令を下してくるの？

「それじゃあ 2番が、4番に5番が7番にホッペにチューを」

「ホントですかああああっ!?!」

「七番は誰なのよ？」

姫路さん……4番か……。

アキくんが2番なの？

だとしたらあたしは嫌だな。それに楓も不安そうな顔してるしね。

「よ、吉井君……。吉井君のクジの番号は　　２番……。ですよね……？」

「姫路さん……」

アキくんはゆっくりと自分のクジを姫路さんに見せる……。

そこに書いてあつた番号は

アキくん　３番

「え……？」

「………。(トントントン)」

「え……？」

美波　２番

「あ……ああ……」

「いらっしやい……瑞希……」

「イ、イヤアアアアアアアアッ！」

そっか、アキくんは三番なんだ。残念だな。

「……………(トントントン)」

「え……………」

「お姉ちゃん」

と楓が、自分のくじの番号をあたしに見せてくれた。

楓 7番

そっか、あたしの相手は楓か。うん可愛い妹ならいいかな。

しばらくお待ちください

それから鼻血まみれで机に伏している土屋君と恥ずかしがりながら口をハンカチで拭いている美波。

そして、お互い赤くなるあたしと楓。

「わかりました。そういうちょっとHな罰ゲームもありなんですね……………？それならもう！私だって……………！ 容赦しません……………！！」

「普通は女の子はいやらしい罰ゲームを嫌がる物なのじゃが……………」

「秀吉、もっともなツッコミだがあんまり意味が無いと思うな？」

「なぜじゃ？」

「人の話を聞かない連中の集団だからだ」

「納得がいったのじゃ……」

「いきますよ！　せーの！」

「……王様、だれだ……」

「あたしだね！」

さて、どんな罰ゲームをしようかな。

「じゃあね。1番が美波に告白をすると4番が王様にキスをするので
決定ね」

1番 海谷

4番 アキくん

「寒気がするがいいだろう」

「な、なんか照れるね」

「よ、よろしくね。海谷……」

「ああ。よろしく」

「う、うん……」

「アキくん 海田……」

「……うん」

「俺と付き合え」

「え……!?!」

「回りくどい事はすきじゃねえ。はっきり言いな」

「海谷。あんたにはデリカシーと言つものが無いの!?!」

「デリカシー?なんだそれ?食べるのか?」

P r r r r r P r r r r r

「あ、悪い。メールだ」

デリカシーが無い海谷君が携帯を見ていた。

From 清水美春

本文

お姉様に手を出したらコロス。コロシマス……コロシマス……コロ
コロコロコロ……。

「?何故俺の行動がわかる」

愛ゆえの行動ね清水さん。

それに美波も予測がつくのか嫌なんだけど同情をしてるのね。

ちなみにアキくんがあたしにキスをする前に姫路さん達攻撃をした
為実行されなかった。

それとホツとしていた楓が居たことを教えとくわ。

「次、行こうか……」

「そうだな」

「それじゃあ、せーの！」

「……王様！ だ〜れだ！」

一斉にクジを引く……。

さて次は誰だ！？

「……」

流れる沈黙……。

この空気は……まさか！？

王様 霧島

（ ）（復讐するはあたしにあり！）（ ）

共に坂本君抹殺を誓った仲間とともにアイコンタクトを交わす。

「す、すまんが急用がつ！」

「逃がすかああああつ！」

「邪魔するなあっ！」

「さあ、王様！ ご命令を！」

「は、離しやがれえええええっ！」

「離すわけないだろうがああっ！」

「そうよ。それに王様の命令は絶対よね」

あたしたちから逃げ出せるわけないでしょう。

「……じゃあ、雄二は今から私に何をされても抵抗しちゃダメ」

「待てお前！ 俺に何をする気なんだ！？」

「……そんなの……恥ずかしくて言えない」

「コイツ変態だあああああっ！」

「うらやましいな」

「わ、私もそう思います」

「光圀姉妹本当にそう思ってるのか！？」

「じゃが霧島よ。さっきの命令は残念ながら無効じゃ。きちんと番号で宣言せんとルール違反になってしまう」

チイツ、秀吉君！ 余計な事を！

「そうだ！ 秀吉の言う通りだ！」

バカね！ 助かったと思ったの！？

さつき楓に坂本君の番号を教えてあげたからそして楓が霧島さんに教えてるから結局貴方は逃げられないのよ！

「……………じゃあ……………4番」

「…………………………」

坂本君は再び無言で逃げ出すが、あたし達から逃れられるはずが無く。

会えなく御用となり、別室で霧島さんとゆっくりと夫婦の時間を過ごすことになった。

「一体何があつたのじゃろつか？」

「まるで拷問の痕みたいよね」

美波、痕みたいじゃなくて拷問の痕よ。

坂本君は亀甲縛りに猿轡、全身に鞭の痕があつた……………。

因果応報ね……………。

アキ君を弄るからこうなるのよ。

「それじゃ、ラスト！」

「王様！ だ〜れだ！」

もうラストか……。そろそろ帰らないと買い物に間に合わないからね。

「よし、僕だあ！」

最後の王様はアキくんか……。

「んじゃ、1〜10番の全員は 隠し持ってる僕らの女装写真を焼き捨てる〜」

「そ、そんなあ！」

「それは名案じゃな！」

姫路さんと美波が抗議の声を上げ、秀吉君がアキくんの提案を称えてた。

まあ、あたしも勿体ないと思うけどアキくん嫌われたくないしな。

「そんなの酷いです！あんまりですううううっ！」

「そうよ、吉井！しかもそれだと木下の写真まで燃やすことになるのよ！？」

「大丈夫。僕が持って無い秀吉の写真なんて存在しないから」

後であたしたちに詳しく教えてもらおうからね。

「待て明久よ！ お主今何と　？」

「大丈夫です。あとで私たちが処理しますから」

「それは、助かるのう」

「さあ、大人しく写真を渡すんだ！」

「いやあああああつ！」

さて、今の状況を簡潔に説明しようかな……。

亀甲縛りで動きを封じられた雄二の膝枕で眠る霧島

鼻血の海に沈む土屋君

悲しみのあまり涙が枯れてしまった姫路さんと美波

教室で火を起こし女装写真を処理するアキくんと秀吉君

それを傍観する工藤さんとあたしと楓。

「あはは……。なんか凄い光景だねえ……。」

「そうですね」

「そうだね。人に見られたら誤解されそうだよね」

「「ふふ。そうですね(ね)」「」

ガラッ!

「……………」

木下さんが眉を引き攣らせて無言で教室のドアを閉めた……。

まあ、当然の反応だよな。

楓もどう言えばいいのか困ってるしね。

「「「「解散っ!!」「」」」

爆発と紅の双子姫と王様ゲーム（後書き）

感想をお待ちしています。

第二十八話 清涼祭準備その三（前書き）

連続投稿

第二十八話 清涼祭準備その三

明久が入力をしたのを見て隅で座ってる鉄人もなんか怒りで震えている。

そのうえ小声でしかも、全員に聞こえるように言っていた。

「……補習の時間を、倍にした方が良いかも知れんな」

その言葉に、全員が驚愕した。

だろうな。俺もそう思う。

『せ、先生！ それは違うんです！』

『そうです！それは吉井が勝手に入力したんです！』

『僕らがバカな訳じゃありません！』

と、口々に明久を売り助かろうとする。

しかし、その行動そのものがバカだと言うことに何故気づかないんだ。

「お前らなそういうみっともない良い訳する時点で、バカだというんだ」

「その通りだ！そもそもバカな吉井を選んだ時点で、間違いだと気付かんか！？」

「いや、鉄人のその発言も教育者として間違ってると思うぞ?」

「陸の発言はともかくおいしい物をたくさん食べたいのなら今この中にある奴から決めるが文句はあるか?」

雄二^{ユリウ}俺の発言を無視したことを後悔させるぞ。

「無いな、じゃあこの中から一つだけ選んで手を挙げる」

そう言っつて決をとる。

写真館は殆ど拳がらなかった。

そのことに土屋が落ち込んでいた。まあ、間違いなく営業停止になるだろうな。

土屋の写真だとな。

「次はメイド喫茶。次はウエディング喫茶」

ウエディング喫茶で約半数の人が手を挙げた。

なぜ?そんなに熱くなれるんだ。特に姫路(巨乳娘)に島田^{ミンチレ}お前らの目は血走ってるぞ。

「次、中華喫茶」

また約半数が手を挙げた。

「集計結果。Fクラスの出し物はウエディング喫茶に決まった！野郎共、やるからには売り上げトップを目指すぞ！」

接戦だったが、僅かにウエディング喫茶の方が多く、クラスの出し物はウエディング喫茶に決まった。

巨乳娘とツンデレは狂喜していた。ちなみに周りがものすごく引いていた。

「次に、誰が料理する？」

「俺が引き受ける」

「……………（スクツ）」

須川と土屋君立ち上がる。

二人とも料理なんてできるのか？

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

料理が紳士の嗜み？

それは、初耳だな。覚えておこう。

「まずは厨房班とホール班に分かれる。各自好きなほうでいい。厨房班は須川とムツツリーニ、ホール班は明久のところに来まれ！」

みんなが移動する中、俺と明久の目は巨乳娘の動きを見張っていた。

「それじゃ、私は」

「ダメだ姫路さん（巨乳娘）！君はホール班おまえじゃないと（だ）！」

「そう巨乳娘が料理をしたら解毒剤の量産をしなくてはいけない。」

それに、あれは、奇跡の産物だ。

同じものを作れる保証はない。

さらに、巨乳娘用に解毒剤を研究してるが無効化どころかますます毒性が強まった。

おそらく現存する生物兵器の中でも最強の威力だろう。

『明久、陸。グッジョブじゃ』

『……………（コクコク！）』

その破壊力を身をもって知っている土屋とその様子を見ている秀吉からのアイコンタクト。

一番の被害者だった雄二もこちらを見ていないが親指をたてている。

「え？吉井君に海谷君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんを魅了してくれたほうが痛あゝっ！ み、美波！ 僕の背中にはサンドバッグじゃないよ!？」

「それにこのクラスの女子が少ないからホールで動いてくれた方が助かるからだ」

ツンデレ。やきもちを焼くのはわかるがやりすぎると嫌われるぞ。

「か、可愛いだなんて……吉井君がそういうなら、ホールでも頑張りますね」

「でも”はやめてくれ。専任の方が効率良いんだからな”

ふう。とりあえず”生物兵器製造者”姫路瑞希（巨乳娘）ホールに決定。

さてこのままじゃあ問題が起きる。仕方無い。俺が指示を出すか。

「君達、巨乳娘、ツンデレ、秀吉、支倉の4人は可愛いからホール班に行ってくれ。」

集客に力をいれてくれ。厨房には来なくていい」

と俺が柔らかい口調で4人にうながす。

「意外なことを言うんですね」

「そう真面目にいわれるとじゃな……」

「ウチも驚いたわ」

「……普段何をしてるのですか？」

といい事を言ったのになぜか信じられないものを見た顔をされた。
なぜだ。

ちなみに、俺と明久もホールだ。特に巨乳娘とツンデレが強く発言
をしたからである。

それと同時になぜか顔を青くし震える明久がいたことに俺は疑問に
思った。

こうして俺達の清涼祭が始まった。

第二十九話 清涼祭準備その四（前書き）

三連続投稿

第二十九話 清涼祭準備その四

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートに御協力ください

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

海谷陸の答え

『動き易く、品を保てて人目を引く服装』

教師のコメント

君からまともな意見が出て、意外だと思った先生を許してください。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のものを用意し、裏には口ゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

「アキ、海谷、ちょっと良い？それと支倉さん。悪いけどアキを借りるわよ」

帰りのHRが終わり、現在放課後。

何やら神妙な顔をした島田ツンデレから、明久と一緒に帰ろうとした支倉と俺は声をかけられた。

「ん、何か用？」

「どうしたんだ、島田ツンデレ？」

「あのお。あたしもよろしければ協力をします」

「うん。そう悪いわね。それでねどっちかというところ、相談なんだけど……」

その真剣な様子に、明久と支倉と俺は何かと思いつつも相談に乗る事にした。

そもそもツンデレが明久を頼る事自体珍しい事の為、なおさらに気になった。

「うん、ありがと。海谷アンのコネでどうにかならない？」

「……何を言いたいのかつかめないのだが？」

「それは……そのあんたと坂本なら何とかなるでしょう」

「あ、あのお話が読めないんですけど」

「え？ごめんなさい。実は……本人には誰にも言わないでほしいって言われてただけ、事情が事情だし……けど、秘密の話だから、

「誰にも言わないでね？」

ツンデレの真剣な様子に、4人は頷ずいた。

そして、秘密の話を打ち明けてくれる以上、無下に断る事もするつもりは更々湧きもしない。

「う、うん。わかった」

「明久と同じだ」

「あたしもアキくんと同じ」

とツンデレが支倉の発言に反応しそうになったが堪えて話し始めた。

「……実は、瑞希なんだけど……あの子、このままだと転校するかも知れないの」

「なっ!?!」

その言葉には、流石に俺も支倉も明久も、驚きを隠せなかった。

本人どころか、教師からも話が聞かなかったことゆえ、動揺は隠せなかった。

「説明を頼む。このままじゃあ転校とはどういうことだ？」

「待ってアキくんが処理落ちをしかかっている」

「このバカ、不測の事態に弱いんだから！」

「いや、いきなりこんな話されたらパニックになってもおかしくもないぞ？それよりおい明久、しっかりしろ」

「アキくん、しっかりして」

俺と支倉が明久を揺さぶり起こし、ハッと目を覚ます明久。

よかった意識が戻った。

「陸にひばり……モヒカンになった僕でも、親友と幼なじみといってくれるかい？」

「……どういふ処理をしたら、瑞希の転校からこつという反応が得られるのかしら？」

「大丈夫。アキくんをモヒカンに何んてしないから」

「安心しろ。どんな時でも親友だから落ち着け」

全員が微妙な目で明久を見つめる中で、ハッと正気を取り戻した明久。

そして本来聞くべき情報を得るべく、ツンデレに詰め寄った。

「美波！ 姫路さんが転校って、どついう事さ！？」

「どつもこつも、そのままの意味。このままだと瑞希は、転校しちやうかもしれないの」

「このままって……なるほど。確かに、姫路（巨乳娘）の学習面の成長を促せないバカ揃いのクラスメイト。いつまた最低な環境に落ちるかわからないからな」

俺がクラスにいるバカどもを見て頭を抱えた。

「それって姫路さんは家庭の事情で転校するわけではないだね」

「なるほど。それで姫路さんはやる気を出していたんだね」

「そう言う事。だから瑞希も対抗して“召喚大会で優勝して、Fクラスを見直してもらおう”とか考えてるみたいんだけど、やっぱり瑞希の成績向上の相手が必要なのよ」

なるほど。だから俺にコネでどうにかしろというわけか。

さらに学力はあるのに最低クラスに所属している事自体も、問題としては十分な代物。

「わかった。そういうことなら、陸なんとか方法は無いの？」

「無いわけではないが姫路の両親が俺の名を知っていれば姫路の向上相手として説得が出るのだろうか……」

「知らない可能性もあるからだね」

「そうだ。だから、姫路たち以外にもFクラスの連中が大会に出る必要がある。それと保険として霧島達に頼む必要がある」

「どうして？」

「簡単な話だ。もし俺達が負けたとしても姫路の両親に説得をする事が出来るからだ」

「！なるほど。そういってね」

「？どういって？」

「簡単な話だ。姫路の両親は成績の向上とシステムの事を言ってるんだ。

成績の向上相手は霧島達と対抗するためと言えば問題ないしそのことを霧島達に言えば協力をしてくれるだろうし。

システムについては、こちらが負けないように俺や雄二がけしかければなんとでもなる」

「つまり、姫路さんの競争相手がいれば問題が無いと言っただよ」と支倉が俺の説明の補足をした。

なるほどと明久が納得をした。

「さて、俺は、ババアに呼ばれてるから行くからな。島田準備の方は頼むぜ」

「それは、良いけど一番はアンタが出れば優勝もたやすいでしょう。それと学園長の事をそう言うのは失礼よ」

「そつだよ。海谷君」

「それだが、俺は、出れないんだ」

「どうして？」

「ああ。それは俺が強すぎるから。大会には参加しないようにとババアに言ってたのさ」

「それは、……そうね」

否定しようとしたが出来なかったようだ。俺の点数と実力を知ってるからだ。

「じゃあな」

と俺が行こうとしたとき……

ピンポンパンポン！

『ご連絡します。二年Fクラス、海谷陸君、坂本雄二君、吉井明久君、学園長がお呼びです。直ちに学園長室へ向かってください。繰り返しますー』

やれやれ厄介事が起きたな。

第二十九話 清涼祭準備その四（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

第三十話 清涼祭準備その五（前書き）

四連続更新

第三十話 清涼祭準備その五

学園長室

そこで俺と雄二と明久が集まっていた。

「用件はなんだババア？」

「全くアンタは素直に学園長とは言えないのかい？」

と俺に文句を言ってきた。

「それより、学園長。俺達を呼んだ用事はなんでしょうか？」

面倒だがそう言ってやると

「……やっぱり今までどおりでいい。アンタの敬語はバカにされるようだと不快だね」

「自分で言っといてなんだよクソババア……まあいい。それで、呼んだ要件はなんだ？」

「そうです。陸や明久はともかく俺は呼ばれるようなことはしてません」

「どの口が言っただ」

「そつだよ。雄二だって問題児のくせに」

「用がなければ呼ばないさね」

「それで用事とは何でしょうか？」

雄二は俺達の言葉を無視してババアに聞いていた。

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ。姫路さん達が出ると言う話ですから」

「じゃ、その優勝賞品と準優勝品は知っているかい？」

優勝賞品とは、“トロフィー”と“賞状”と“白金の腕輪”。

そして副賞として、如月グランドパークプレオープンペアチケット。

準優勝者にも賞品はあり、これには“盾”と“賞状”と“大空の腕輪”

こちらにも、プレオープンチケットは授与される。

そのペアチケットについて説明されると、雄二はビクッ！と身体をはねていた。

何かしたのか？

「で、それが何か？」

「話は最後まで聞きな。あわてるナント力は貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

「それで何が言いたい？」

「アンタも落ち着くんだよ！……まあ良いさね。この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」

先程聞こえた話の中に、如月グランドパークという単語があった。

それに関係してるのかなと、俺達はそう決定付けた。

「回収？ それなら、商品に出さなければ良いじゃないですか」

「そうできるならしたいさ。けどね、この話は教頭が進めたとはいえ、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆す訳にはいかないんだよ」

「契約する前に気付いてくださいよ、学園長なんだから」

もっともな話だな。

「うるさいガキだね。腕輪の開発で手一杯だったんだよ！それに悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

「けどチケットで良かったじゃないですか。腕輪に問題があるなら問題ですけど、それなら問題としては軽いしね」

「！？」

そこで学園長や俺の表情が崩れた事を、雄二は見逃さなかった。

これは、後で問い詰められるな。

「で、良からぬ噂ってのは？」

「如月グループは、如月グランドパークに1つのジnkクスを作ろうとしてるのさ。“ここを訪れたカップルは幸せになれる”ってジnkクスをね」

「ジnkクス？ ……どうやってです？」

「プレミアムチケットを使って来た2組カップルを、結婚までコーディネートするつもりらしいのさ。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、何だと!？」

それを聞いて、血相を変えたように大声を上げる雄二。

何に恐れてるんだ。

「どうしたのさ、雄二?」

「慌てるに決まってるだろうが! 今ババアが言った事は“プレオープンプレミアムチケットでやってきた2組のカップルを、如月グループの力で強引に結婚させる”ってことだぞ!？」

「別に言い直さずとも、わかっているが?」

「その2組のカップルを出す候補が、我が文月学園つてわけさ」

文月学園にはその性質上、数多くのスポンサーが存在する、

如月グループも当然、そのスポンサーの1つ。

「くそつ、うちの学校は何故か美人揃いで、試験召喚システムって話題性もたっぷりだからな」

「それに加えて、学生から結婚まで行けばジnkスとして申し分ないだ。」

候補としてこれ以上の学校はないだろうな」

「流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

雄二が神童と呼ばれていた事は、あまり知られてはいない。

それを知っている辺り、流石は学園長と言ったところか。

まあ、俺も知ってるがな。

「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪い事でもないし、第一僕らはその話を知ってるんだから、行かなきゃ済む話じゃないか」

「…………絶対にアイツは参加して、決勝進出を狙ってくる…………行けば結婚、行かなくても“約束を破ったから”と結婚…………俺の、将来は……………」

「……どうやら、安請け合いしたらしいな。妙な所で明久よりバカだよな、雄二」

呆れたように言う俺の意見を余所に、ババアは言葉をつづけた。

「ま、そんなワケで本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

「つまり、用事って言うのは？」

「そうさね。“召喚大会の優勝賞品および準優勝賞品”の手に入れる事がアンタ達に頼む用事さね」

明久は、何かを企んでる目をしていた。

それも、良からぬ事絡みで。

「無論、優勝者や準優勝者から強奪なんてマネするんじゃないよ？譲って貰う事も不可だ。

アタシはお前達3人で召喚大会の決勝に進出しろと言っているんだからね」

考えてた事をモロに言われた為、苦虫をかみつぶしたかのような顔をする明久。

俺は、呆れていた。

「だが、ババア。俺は出場できないはずだが？」

「そのことについては、あんた達がどうにかするんだよ」

「なるほど。他にも参加者を見つけてることだな」

「その通りさね」

俺が出てなくてもどうにかする方法で対処しろというわけだな。

「そんな無茶な!？」

「方法が無いわけでもない。ここは俺に任してくれ」

「Fクラスのどの連中なんだ。陸？」

「ああ。秀吉か土屋にそれと支倉に頼もうと思ってる」

俺が例を上げたクラスメイトを雄二に教えると。

考え始めた。

「……わかりました。この話、引き受けます」

「俺もそれでいい」

「そうかい。それなら、頼んだよ」

“計画通り”という顔で、嬉しそうにする学園長。

それを雄二が見逃さず、一步前に踏み出した。

「ただし、こちらからも提案がある」

「何だい？　言ってみな」

「陸が考えた2チーム同士が戦うのは最後に当たる物として、召喚大会は2対2のタッグマッチ。

形式はトーナメント所為で、1回戦が数学だと2回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

プロバガンダの意味合いも強い以上、試合の派手さに欠ける要素は排除される物である。

特に今回は、新技術のお披露目もある以上、その辺りは念入りさ。

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

「ふむ……良いだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それ位なら協力しようじゃないか」

雄二は先程より目つきを更に鋭くし俺やババアの顔を見ていた。

「で、ペアの話はどうなんだ陸」

「雄二と秀吉または土屋のペア、明久と支倉のペアが妥当だろう」

「どついつチームわけだ？」

「雄二も気づいてると思うが明久と支倉は幼なじみだ。

ならば、お互いをカバーしきれぬだろうし支倉には召喚獣に慣れて

もらうには気心知れた奴の方が良いだろうからな」

「なるほど。それとお節介も入ってるようだな」

「ほっとけ」

「???どうしてひばりを参加させるの?」

「明久。それはな、いつ戦争が起きるかわからないからな。

召喚獣に慣れてない支倉を狙われて補習送りにするわけにはいかな
いからだ」

「なるほど。何時挑戦されるかわからないから参加させてなれさせ
るんだね」

「そう言うことだ」

と俺に話が終わると。

「さて、そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、決勝戦まで進め
るんだろうね?」

「無論だ。俺達を誰だと思っている?」

「絶対に優勝して見せます」

「ああ。お前らが負けるはずがないさ」

俺達は、頷きあう。

「それじゃ坊主ども。任せたよ！」

「「「おうよっ！」「」」

こうして、秀吉または土屋と雄二による“美少女と野獣”または“
諜報と指令”コンビ

そして明久と支倉による“美少女とバカ”コンビが誕生することなる。

「雄二。俺はババアに用事がある。先に帰っていいぞ」

「ああ、わかった。行こうぜ、明久」

「あ、うん」

と雄二達が出て行くと

「作戦通りさね」

「ええ、後で詳しく話さないといけなくなるような気がするけどな」

「そうならないといいさね。それより頼んどいた物はどうなったさね」

「どちらの腕輪もBクラスまでなら耐えられる。

前回の物理の腕輪のデータから調べて改良をしたから」

「そうかい。それでも、Aクラスには耐えられないんだね」

「ああ。時間が無いのもあるがまだまだあの腕輪の実践データが欲しい」

「そうかい。そうすれば、次の腕輪には問題が無いんだね」

「ああ。あとはシステムの解析が終わればなおさら問題もないがな」

「そうさね」

と俺達は話をしていた。

しかし、この話を何者かに盗聴されていた。

そのことを俺やババアは知っているがあえて知らないふりをした。

何故なら裏切り者を動かすために聞かせているのだ。

さてこれからどうなるか楽しみだぜ

第三十話 清涼祭準備その五（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしています。

M i s s i o n i m p o s s i b l e B a k a i n カ ラ ス (前 書 き)

クロさんとのコラボです。

クロさんのオリジナルキャラクターの『烏丸大貴』とのコラボ小説
です。

クロさんのファンの方達に怒らなければ良いなあ。

mission impossible Baka inカラス

mission impossible Baka inカラス

mission impossible Baka inカラス

実行不可能の指令を受け、頭脳と体力の限りを尽くし、これを実行する。

プロフェッショナル達の秘密機関である。

mission impossible Baka inカラス

製作 ムツツリ商会

食堂…

陸のおごりで明久がカレーを食べている。

「おいしいよ。このカレー」

「いつも思うのだが明久。お前普段何食べてんだよ」

明久はカレーを食べながら答えた。

「え？水と塩と油と砂糖にパン粉に」

「もう良い何も言っな」

「え？良いの」

「ああ。たらふく食べな」

「うん。ありがとう」

土屋康太いや今はムツツリーニというべきだろう。

烏丸大貴いや今はレイヴン丸と言っておこう。

その二人が食券を買ったら、MIBと記されたアタツシユケースがニケースが出てきた。

「……………ヒロ、任務。屋上へ」

「了解した」

二人は屋上へ向かう。

屋上…

屋上でアタツシユケースを開けるとテープレコーダーと入っていたのと秀吉の写真が入っていた。

明久は食堂でカレーをお代わりをして食べている。

「おはよう。ムツツリーニ君、レイヴン丸君。その人物は文月学園二年Fクラス、木下秀吉。」

校内ランキングにおいて男性部門、総合部門、共に一位に輝いたば

かりか、新設された秀吉部門においてまで一位を獲得した超絶的な人気を誇る人物である。

とあるルートの情報によると、組織票を含め、女性部門においても一位を獲得したといわれる要注意人物である。そこで今回君たちの使命はこの木下秀吉のお、お宝映像を入手して欲しいのだ。

例によって君たち、もしくは君たちのメンバーが捕らえられ、あるいはしばき倒されたり、全身の関節を外されて折檻されても当局は一切関知しないのでそのつもりで。

因みに、より良質な映像を取ってきた者にはその映像のレア度により報酬を渡すのでがんばってくれたまえ。

なお、このテープはお約束通り自動的に消滅する。成功を祈る」

そして、もう一つの方のアタッシュケースを開けるとまたしてもテープレコーダーと入っていたのとマーナの写真が入っていた。

「おはよう。ムツツリー二君、レイヴン丸君。その人物は文月学園二年Fクラス、サポートプログラムマーナ。

校内ランキングにおいて女性部門、総合部門、共に三位に輝いたばかりか、新設されたロリッ子部門においては一位を獲得した超絶的な人気を誇る人物？である。

とあるルートの情報によると、組織票を含め、女性部門においても二位を獲得したといわれる要注意人物である。そこで今回君たちの使命はこの服とせ、設計図を海谷君に気づかれずに渡して欲しいのだ。

例によって君たち、もしくは君たちのメンバーが捕らえられ、あるいはしばき倒されたり、全身の関節を外されて折檻されても当局は一切関知しないのでそのつもりで。

因みに、この任務を成功した暁にはレアな写真を報酬として渡すのでがんばってくれたまえ。

なお、このテープはお約束通り自動的に消滅する。

成功を祈る」

ドカーン!!

ドカーン!!

明久と陸が食堂で耳を塞ぐ。

「……任務了解！」

「任務了解。それにこの設計図はロリ巨乳の体だ。必ず成功させようムツツリーニ」

「……ああ(グッ)」

そしてスーツを着たムツツリーニとヒロは屋上からバンジージャンプ!

「わざわざバンジーする必要があるのかムツツリーニ?」

「……気分の問題」

「そうか」

文月学園とある廊下……

「」「」「」~~~~「」「」

ドーン……

「きゃあ！ ミルクでビショビショです〜」

食堂で明久が興奮している。

食堂で陸は呆れているようだ。

「せっかく買ったクリームパンが〜」

食堂の明久は興味がないようだ。

食堂の陸は不思議そうな顔をしていた。

「これはシャワーを浴びねばならんのう」

食堂の明久が喜んでいる。

食堂の陸は突っ込んでいた。

「うっ。ミルクとクリームパンが〜」

食堂の明久が複雑そうだった。

食堂の陸は再び突っ込んでいた。

「……………チャンス到来」

離れて見ていたムッツリーニが言う。

「これはチャンスだな。その前に優子の裸だけは見るなよムッツリーニ」

同じくヒロが言う。

「……安心しろ。俺の狙いは秀吉だけだ」

「わかった。裏切ったら許さないからな」

「……了解」

女子シャワー室内のロッカーの中……

「……ここで待っていれば着替えに現れる。来た!」

だが入って来たのは女子三人。

「……ちっ、ターゲットは秀吉のみ、雑魚に用は……ん!？」

女子三人はどんどん服を脱いでいき、下着だけになった。

食堂の明久が顔を赤くしている。

食堂の陸は不思議そうな顔をしている。

「着替えどうしましょう?」

「体操服でいいんじゃない?」

「そうね。替えの制服は無いしね」

食堂の明久が顔を赤くしてカレーを食べまくる。

食堂の陸が急いで水のお代わりを買っていた。

ムッツリーニの鼻から鼻血が出ている。

『ムッツリ商会の掟は非常である。作戦実行のためには情けを捨て、どんな苦難も……』

「そうですね。洗わないと匂いがついちゃいますよね?」

「しかし、瑞希って本当に胸が大きいわよね?」

「そうね。私もうらやましいわ」

「そ、そんなことないですよ。普通です」

食堂の明久が顔を赤くしてカレーを掻き込む。

食堂の陸は驚いていた。

「何よ?それじゃあ私は普通じゃないって言うの?そんな大きな物を自慢げに下げてて、どこが普通よ?」

「それは、私たちに対する自慢しか聞こえないわよ」

「自慢じゃありませんよ。これけっこう面倒なんですよ? 大きいとブラの種類もないし」

ムッツリーニの鼻から滝のように鼻血が出る。

「小さいのだって種類ないわよ?」

「そうなんですか。お互い大変ですね」

「ウチらのは大変小さいって言うの!?!」

「姫路さんに私たちの気持ちはわからないわよ」

「きゃあ!」

島田さんと木下さんが姫路さんの胸をもむ。

それと同時に姫路さんのブラがとれる。

男が見たら大喜びだ。

「おかわり!?!」

食堂の明久が叫ぶ。

「すみません。水もお代わりだ」

食堂の陸も叫ぶ。

「〜(ハート)」 な会話

「美波ちゃんや木下さんだって」

「きゃあ!」

今度は立場が逆転。

そして島田さんや木下さんのブラもとれる。

「〜(ハート)」 な会話

我慢の限界のムツツリーニの鼻血がついにロッカーの中を埋め尽くし……。

ゴゴゴゴ……

「……………だあは!?!」

「「「きゃあー!?!」」」

ロッカーからムツツリーニが飛び出てきた。

その頃ヒロは

秀吉シャワー室……

「なんじゃ?」

(甘いなムツツリーニ。秀吉シャワー室の存在を忘れて女子シャワー室へ行くなんてな……)

「じちそうさま」

食堂の明久が言う。

「満腹になったか明久？」

「うん。それより、さっきからパソコンを弄っていたけど何してたの？」

「何バカどもの末路を取ってるのさ」

「？そうなんだ」

「ああ。それにしても驚いたな。

まさか、わざわざ匿名で設計図のデータをメールで送ってくるとは驚いた」

「え？あの例のうそ企画を実行したバカが居るの？」

「ああ」

「世界って広いね」

「そうだな」

ヒロside

さて、秀吉の生着替え映像を入手して、それと陸のパソコンにスキヤナで取り込んだ設計図を転送した。

その結果オレはそれなりの報酬を貰ったわけだが…

「す、凄い……」

オレが報酬として貰ったのは優子と玲さんのかなり際どい写真だ。
いったいどうやって盗撮してるんだろうか？

見つかった命が無いな。

しかし、オレはこの写真でかなりやばくなれそうだな。

とにかくこの写真は静馬やジジイには見せられないな。

静馬には早いしジジイがしつたら奪うな。

とにかくこの写真を早く家に保管しなくては！

優子に見られたらどうなるかわからな「何の写真見てるの？」「あ
っ!?!?」

突然優子が現れてオレが持っていた優子と玲さんの写真を全部盗ら
れてしまった。

「……………」

優子が写真を見て呆然としている。

今の内に逃げよう。

「な、何よこれー!?!? ヒロちよっと待ちなさい!」

捕まったら死ぬ!

その後結局捕まり写真は全部没収。そして臨死体験をした。

陸side

落ちがついたな。

これが、今回実行した作戦の被害と成果だ。

「それで、言いわけはあるのかい？」

「無いですね。まさか、実行するバカが居るとは思いませんでしたから」

「そうだろうな」

「そうですね。西村先生」

「それで、覚悟はいいのですか!?!」

「そうね。ウチも聞きたいわ?」

「あはははっ」

「ふふふ」

「あはははっ」

「」「」「……」「」「」

「さらばだ!!」

「待ちなさい!!!!」

「まだ、報酬の吉井君の着替え写真を貰ってませんよ」

そして俺も逃げ回るはめになった。

M i s s i o n i m p o s s i b l e B a k a i n カラ ス (後 書 き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

第三十一話 清涼祭準備その六

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

「？かわいらしさ　？統率力　？行動力　？その他（）」

また、その時のリーダー候補も挙げてください。

土屋康太の答え

『「？かわいらしさ」　候補……姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいと言ったところででしょうかね。

吉井明久の答え

『「？可愛らしさ」　候補……姫路瑞希（訂正）　木下秀吉（訂正）
支倉ひばり（訂正）　島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるところです。

海谷陸の答え

『「？可愛らしさ」　候補……清水美春&マーナ（訂正）　姫路瑞希
&島田美波&支倉ひばり』

教師のコメント

どうして訂正をしたのでしょうか？

坂本雄二の答え

『「その他（結婚相手）」 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが、用紙を持って来てくれたのでしょうか？

清涼祭初日の朝。

僕らの教室は教会へと変貌していた。壁にかかるロザリオやらネックレスなど様々なものが教室を飾る。

さすがに本物ではないけれど充分華やかだ。

ホールの女子は、上半身は体にフィットし、腰から裾にギャザーで広がった型、

いわゆる「お姫様ドレス」に身を包み、顔の良い男子はタキシードを着ている。

ドレスはムッツリーニが作ってくれたため初期経費は少なくてすんだ。

ただしタキシードはレンタルだ。

教室の方は問題ないな。あとは料理とメンバーのほうか？

さて、問題は支倉をどう説得するかだな。

秀吉の方は昨日会ったときに説明をしたら参加してくれると言ってくれたから問題ないが。

と俺が悩んでると明久と支倉と一緒に教室に入ってきた。

その時異端審問会が動きそうになったので薬を見せたらおさまった。

どんだけ、女に飢えてるんだ。

「あ、陸。ひばりに話したら参加してくれるって」

「そうか。それは良かった」

「じゃあ頼むよ」

「はい」

「うん」

と聞いて二人も準備にとりかかった。

ピンポンパンポーン！

ん？ 何だ？

『ご連絡します。二年Fクラス、海谷陸君、教頭先生がお呼びです。直ちに教頭室へ向かってください。繰り返しますー』

さて予定通りだ。どう俺を使おうとするか見させてもらっぜ。

「陸って教頭先生と接点あったっけ？」

「いや、無いな？」

「とにかく呼ばれていたのだから、行ってみれば呼ばれた訳もわかるじゃろ」

「そっだな。行ってくるぜ」

「うん。早めに戻って来てよ」

「ああ」

「マーナ。俺の行動をババアのところに送れ」

「了解です」

「さて、どうでる教頭」

そう言っつて俺は教頭室へ向かった。

教頭室前

コンコンッ

「入りたまえ」

ガチャッ

「失礼します」

まあ、一応目上なのでこんな感じに礼儀を払う。

「あの、どのようなご用件でしょうか？」

「いや、なに。君とちょっとした取引がしたくてね」

「取引、ですか？」

ほう？俺に何を求めるんだ。

「そう。君は学園長側の人間だろう？」

「何のことでしょうか？」

なるほど。俺や学園長の読み通りだな。

「いや、隠さなくていい。如月グランドパークのチケットを回収して欲しいとでも頼まれたのだろう？」

「すみませんが自分にはサッパリなのですが」

まあ、俺や学園長が情報を流してるんだこれくらいは当然だな。

「まあ隠すというならそれでもいいがね」

「それで、本題の取引というのは？」

「簡単な話さ。君には私の邪魔をしないで欲しいんだよ」

「邪魔というのは？」

「学園長が君などの生徒に頼み事をしているのと同じように、私も協力してくれる生徒がいてね。」

彼らの邪魔をしないでもらいたいんだよ」

予測通りの奴だな。さてここで奴の機嫌をとって情報を頂くか。

「それで俺にどんなメリットがあるのですか？」

俺が興味を示したことに喜んでるようだな。

「そうだな、私には興味が無いがシステムの解析とそのシステムを君にあげると良いたらどうだい」

そう言っつて教頭は俺に裏切りを誘っている。

「ふむ。悪くない話ですね」

と俺も乗ってみた。

「君ならそう言っつてくれると思っつていたよ」

「確かに、学園長に付くより教頭先生の方が待遇は良いですね」

「それで返事はどうなのかな？」

「わかりました。こちらからお願いしたい条件ですね。よろしくお願ひします」

さて、お手並みお拝見さしてもらっつぜ。

「おお！ それはよかつ」ただし、こちらにも条件があります」何かね？」

「Fクラスの連中には手を出さないでください」

「なぜ？屑どもにこだわるんだい？」

「実験用のモルモットが失いたくないからです」

「なるほど。それくらいならいいだろう。彼らを傷つけないと約束しよう。これで、交渉成立だね？」

教頭は俺が裏切れることは当然と思ってるようだな。

だからか余裕があるらしいな。

だが、それは破滅への道だと言っのに気づかないとは所詮小物だな。

「はい」

さて、こちらの思惑通りに動いたぜババア。

第三十一話 清涼祭準備その六（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第三十二話 清涼祭初日（前書き）

連続投稿

第三十二話 清涼祭初日

教頭室

陸が出て行くと隣の部屋にいた男連中が入ってきた。

「あの、男が俺達の駒なんだな」

「ああ。そうだ。他にも駒が居るが好きに使えばいい」

「それは助かる。それで？ 俺はこの写真の4人を動けなくすりゃいいのか？」

「そうだ。やり方は任せるが、派手にするなよ？ 私の事をばれるのは拙いからな」

強い口調で言い放つ竹原。しかし、男は調子を崩さない。

「へいへい、スポンサーの前で事故を起こさなきゃなんねーってんだろ？」

何度も聞いたし、前金も貰ってるからな。しかし、こりゃあ大した偶然だ」

懐かしむように顎をさする男。

「何がだね？」

「いやなに。この吉井ってヤローにゃ借りがあるだけだ。念入りに返しておかないとなそれに巨乳幼女が居るとはな。今度こそ食して

やるよ」

男はイヤらしく笑いながら、明久とひばりの写真を握りつぶした。

陸視点

やれやれ、こちらが盗聴してることに気づかないとはやはり小物だな。

しかし、研究員の情報ではあいつもこの学園に来てると聞く。

やはり、念入りに警戒をすべきだな。

その後俺はババア室に向った。

「で、どうだい。尻尾はつかめたのかい」

「ああ。前々からの指示だからな調べておいた。これがそのメモリーだ」

ちなみにここにある盗聴器はダミーが流れるようにしてある。

「そうかい。これがあるのなら何とかかなりそうさね。しかし、どうしたんだいっかない顔をして」

「ああ。例の危険な奴が教頭に付いたと言う話を聞いているからなあいつらが無事で済むといいな思ってたな」

「ふん。アンタも人の子さね。アンタの母親も喜ぶさね」

「さあね。笑うかもな」

「それは否定が出来ないさね」

「だろうな。じゃあ俺は行くぜ」

「ああ。気をつけなクソガキ」

と言って俺は教室に向った。

「遅かったな。それじゃ陸も俺達と一緒に闘いを始めるぞ」

と須川が話しかけていた。

廊下の外をみると、そろそろとお客さんが来る。丁度、開店準備も終わり、いつでも受け入れられる体制だ。

「皆さん！2-Fのウエディング喫茶で結婚してみませんか？」

外で受付の人が呼びかける。ちらほらと俺らの教会が覗かれる。それに笑顔で対応する。

さて。気が乗らないが女装をしてホールにでるか。

「お、おい、あの子可愛くないか」

「めっちゃタイプだぜ……」

やはり俺の目に狂いはないな。

女性変身スーツは男性が装備すると美人の女性になれる道具だ。

作った時は何で作ったのかなと疑問に思ったがまさか、こんなことで使うことになるとは思わなかった。

「旦那様二名がお帰りです」

「ではまたのおこしを」

バージンロードを意識して作られた赤い絨毯のうえを秀吉が歩く。

お客が男性なら女子が、女性なら男性がエスコートするという仕組みだ。

だけどのクラスは女子の数が少ない。従って

「旦那様、二名がお帰りです。リクねえ、お願い」

男子が女装をしている。俺と明久それに、近藤と武藤に藤堂に秀吉が真っ先に白羽の矢がたった。

そもそも俺まで女装する必要が無いと思う。

何故なら

「マーナちゃん。御指名だよ」

そう、俺がマーナのデータをコピーしてロボットにして働かせるから問題は無い筈なのに。

ちなみにマーナが似合うと言ったとき爆破したのは内緒だよ。

おかげで俺は休むことなく動きっぱなしだ。まったく、いつの時代も男の欲望は恐ろしいな。

お客さんも満杯になり始めた頃、二人の男、片方は中肉中背の一般的な体格と、小さなモヒカンと見てても面白い髪形。

もう一方は百七十五センチくらいの体格で、こちらは丸坊主。

一つ上の夏川俊平なつかわ しゅんぺいと常村勇作つねむらゆうさくだ。

覚えにくい人は、『夏坊主、常モヒカン』と覚えよう！

何で知ってるからって教頭が事前に教えてくれたからさ。

そうこいつらが教頭が言っていた刺客だ。

「おら、客だぞ！ 案内しねえか！！」

「口が悪い客だな」

と武藤がぶつくさ言っていた。

それから気を取り直して武藤がちよいっとドレスをつまみ、愛想よく彼らに向かう。

「申し訳ありません、旦那様がた。すぐさま席にご案内します」

さて、どんな手で使ってくるかな。

「おい、そのふわふわ髪の女！」

俺を指名か。

「なんでしょうか、旦那様」

行ったことはないがメイド喫茶のような感じがする何故だろう？

そんな気持ちを抑えながら奴らに近づく。

ん？なぜ夏川（坊主）先輩は顔を赤らめているのだろうか？。

あら捜しはしていたが、暴れまわることとはしていなかったはずだ。

「い、い」

「い？」

何が言いたいんだ？

「コ、コーヒー二つ」

「かしこまりました」

おかしい。教頭の話では奴らが罵声を揚げてクラスをめちゃくちゃにするはずなのだが。

何かトラブルが発生したのか？

「な、夏川！ 暴れるんじゃないのかよ!？」

「ファーストインパクトは大切」

「何をいつているんだ」

「さあ?」

他のお客さんに注文を聞きながらも、戻ってから教頭の刺客について武藤達に教えてるので何かしら雄二達に知らせに行く手はずになっている。

そこで武藤達とすれ違う度に情報を交換する。何時仕掛けてくるのかわからないで調子が狂う。

働くこと数分、再びその時はやってきた。

「お、おい!」

近藤とアイコンタクトを交わし、俺が対応に向かった。

藤堂にはドアの近くに待機してもらって、クレーム処理のためにすぐに雄二たちを呼びに行ってもらった。

「お、お、お、」

「お?」

未だ顔を赤くしている夏川。座っているため、頭皮まで赤くなっているのが見える。

ふと震える手元をみると、コーヒーに虫が入っている。なるほど、言いたいことは分かった。

（藤堂）

（こくつ）

再びアイコンタクトを交わし、藤堂は出口のドアを開けた。

「お、お会計をお願いします！！」

ガン（藤堂が足を滑らし、地面に倒れる音）

「お、おい、あの子のパンツ見えるんじゃないか」

「も、萌えー」

教室内がざわめく。

お客さんは可愛いお嫁さんが倒れこむ姿に、クラスメイトは藤堂の乙女チックな行動にそれぞれ驚いた。

「か、かしこまりました」

俺のほうを見て手を振りながら去っていく夏川と、夏川の肩を大きく揺さぶる常村。

「コーヒー二杯で四百円になります」

「「言つてらっしゃいませ、旦那様」」

ほんとうに何もしていかなかったな。いや、されても困るんだが。

隣に居る常村先輩モヒカンが夏川（坊主）先輩の心配をしていたから、具合でも悪いのだろう。

とにかく、これからも警戒はしておこう。

そんな奴らが行った方と逆から聞こえてくる足音。雄二と秀吉と明久と支倉だ。

「やつらは？」

「それが、何もしないで帰っていったんだ」

「ねえねえ、勝ったか聞かないの？」

「明久の顔を見ればわかるよ」

「次の試合が始まるまで手伝うね」

「ああ。それは、ありがたいが身長が届くかな」

「あだし、そんなにちっちゃくないよ!？」

と会話をしていると。

「あれ？ みんな何してるの?」

そんな時、後から女子の声が聞こえてきた。

「おかえり、^{シンデレ}島田に姫路（巨乳娘）。一回戦はどうだ？」

「はいつ。なんとか勝てました」

巨乳娘がVサインをしている。もともと内気な性格の彼女だが今回は話が別だ。

勝ちにこだわるのは当然だろう。

「さて陸、次はどうなるんだ」

「さあな。予測がつかないな。だがもし俺なら他のクラスで何をやる可能性が高いな」

雄二がメンチをきつてくる。それと同時に俺が秘密にしていることが気になるんだろうな

「そうか。阻止は出来ないな」

「ああ。どのクラスに来るかは、わからないからな」

「……雄二、お客様」

「坂本さん、いらっしやい」

ひしつと雄二の腕を抱く坂本さん。

その行動に俺が気づかないときがある。。

「しよ、翔子！何故お前がここにいる！？いや、それよりも何故ウエディングドレスを着ている！？陸、勝手に翔子を入籍させるな！」

「……雄二、タキシードはどー」

「あつちだ」

「……ありがとう」

「気にするな」

「……海谷はいい人」

「海谷！ てめえ、覚えとけよ！」

結婚に一途な彼女を見送って、結婚に頑な雄二を観察しながら、俺らは教会の中へと戻っていった。

第三十二話 清涼祭初日（後書き）

次回は大会の方を書きます。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第三十三話 清涼祭初日その二 大会編

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え

『家庭用のエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

海谷陸の答え

『メイド服』

教師のコメント

確かに制服かもしれませんが貴方場合違う意味に取れます。

海谷陸のコメント

おかしいな。吉井玲さんから喫茶店の制服と言いたらメイド服ですよと教えてくれたけどな。

吉井明久のコメント

姉さん、陸に変なことを教えないで!!

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品をたもつ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのもを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを

』

教師のコメント

裏面までびっしりと書き込まなくても。

吉井明久のコメント

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと思っています。

明久視点

「そうだな。行ってくるぜ」

「うん。早めに戻って来てよ」

「ああ」

ガラツ（扉を開ける音）

ピシャン（扉をしまる音）

雄二の奴どうしたんだろう？

さっきから陸を見てるけど。

そう陸が教頭先生に呼ばれてから教室を出て行くところを見る雄二。

まさか、雄二の奴陸に惚れたのだろうか？

だとしたらどうしよう。

陸は普通に女が好きと言ってたから大丈夫だと思っけどでも雄二の陸を見る目はマジみたいだしどうすればいいのだろう。

「アキくん？さっきからブツブツ言ってるけどどうしたの？」

とひばりが心配してくれてるみたいだ。

よしこは、ひばりにも聞けう。

「ねえ、ひばり。聞きたいことがあるんだけど良いかな」

「?どうしたのアキくん。あたしでわかることなら相談に乗るけど」

「うん。実は雄二の奴いや坂本君がね、陸いや海谷君に惚れたみた
いなんだ。僕はどうしたらいいのかわからないんだ」

「そ、それは、どうしたらいいんだろうね」

「そうなんだ。僕もどうしたらいいのかわからないんだ」

「と、とにかくあたしたちに出来る事は見守ることだと思けうよ」

「見守ること?」

「うん。だってさっきの話はあくまでアキくんの推測であって本当
かどうかわからないからね」

「うん。そうだね。僕達は温かい目で見守るよ」

「……………そして、飲茶も完璧」

「おわっ!」

「きゃっ!」

「むっ、ムツツリーニか……………厨房はどうだ?」

「お、驚かせないですよ」

「……………すまない。それと味見用」

僕の後ろにいつの間にかいたムツツリー二は、木のお盆を差し出した。

その上には、陶器のティーセットとゴマ団子

「わぁ……………おいしそう」

「土屋、これウチ等が食べちゃっていいの？」

「あたしも貰っていいの？」

「……………(コクリ)」

「では、遠慮なく頂こうかの」

いつの間にか来ていた姫路さん、美波、秀吉、ひばりは手を伸ばし、作りたてで温かいゴマ団子を勢いよく頬張る。

「お、おいしいです！」

「本当！ 表面はカリカリで、中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

「確かにおいしいね」

「やっぱり女の子。甘い物が好きなんだなあ、4人とも」

僕はおいしそうに食べてるひばり達を見ててほのぼのしていた。

「お茶も美味しいです」

「本当ね〜……」

「うん。いい味出してる」

おいしさにトリップしているのが、3人の目がトロロンと垂れた。

それを見て、僕も食欲をそそられる。

「それじゃ僕も貰おうかな?」

「……………(コクコク)」

さらに残ったゴマ団子を、僕は一口。

「ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず辛すぎる味わいがとても……ンゴパっ!!」

僕の口からありえない音が出た。

僕は今まで経験したことが思いたしてくる。

ってこれって走馬灯じゃないか。

と僕が意識を取り戻すと。

「あ、それはさっき姫路が作った物じゃな」

「見たなら止めてよ！」

相変わらず姫路さんの料理の破壊力に僕は絶句した。

「？お前らさっきから何をしてるんだ？」

そこへ陸を見つめていた雄二が気づいたようだ。

「あ、雄二。？その紙は何？」

「ん？ なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

ゴマ団子を見るなり、雄二は“僕の食べかけ”を、何の躊躇いもなく口に運んだ。

「…………大した男じゃ」

「雄二。君は今、最高に輝いてるよ」

「？お前らが何を言っているのかわからんが…………ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、辛過ぎる味わいがとっっても…………ンゴパっ！！」

その姿に、デジャブを感じる僕と秀吉。

「…………のう。姫路よ」

「？はい。木下君どうしたんですか？」

「？どうして、坂本が倒れてるのよ」

「？アキくん？どうして顔色が悪いの？」

「姫路よ。このゴマ団子に何を入れたのじゃ」

「えっと、硫酸を入れました」

「姫路さん。貴女は何を入れてるの！？」

「はい。ですから硫酸です」

「……瑞希。普通料理に薬品は入れないわよ」

「そうなんですか？でも商品の表示には書いてますよ」

「姫路さん！！貴女は料理をバカにしてませんか！！」

「うわぁ！久しぶりに見た。ひばりの怒り」

「うむ？昨日から気にはなっていたのじゃが明久よお主、支倉と知り合いなのかのう？」

「えっ。うんそうだよ。僕とひばりは幼なじみだよ」

と僕が秀吉が聞いてきたから答えると周りから殺気が僕に集中してきたがでも僕には秘策がある。

陸がもし襲われそうになったらこの薬をちらつかせると言っていたから見せると収まった。

でも、どうして姫路さんや美波も怒るのかな？

「ああ……何の問題もない」

と僕が考えてると突然の雄二の言葉に、僕達は雄二の方に向いた。

「ふっ。何の問題もない。あの川を渡ればいいんだろう？」

「ゆ、雄二！その川はダメだ、渡ったら戻れなくなっちゃうー！」

「しっかりするのじゃ雄二ー！」

雄二に僕と秀吉が、必死に心臓マッサージ。

「六万だと！？ バカを言え、普通渡し賃は六文と相場が決まって……はっ！？」

雄二の蘇生は成功し、尊い命が救われた。

「……姫路さん、今後料理が上達するまで厨房に立たないでね。」

今回は運が良かったのかわからないけどクラスメイトで済んだけど、ううん。良くない。

もしこれが一般客に出回ったら確実に営業停止にされちゃうからね

「そうね。支倉の言うとおりね。薬品を使った物を出したりしたら問題だもんね」

「……そうします。本当に、ごめんなさい」

しよんぼりという姫路さんに、僕はどう声をかければいいのか
わからなかった。

「それより、アキ。支倉とは幼なじみってどういことよ？」

「そうです。私も気になります」

「どういこともどういこともそのまんまだよ」

「うん。あたしもアキくんとは同じ病院で生まれた直後からの付き
合いです」

「ええええええーっつっつ！！！！！」

と美波と姫路さんは驚いていた。

なんでそんなに驚く必要があるのだろうか？

「所で雄二は、その紙はなんなのじゃ？」

「ああ、これはトーナメント表の紙だ」

そう実は雄二は教室に来る前に学園長室にて、例の試験科目の指定
をしてきた所である。

でもそんな事を言う訳にもいかず、適当に誤魔化した。

「そうなんだ。お疲れ雄二」

「ばつちりじゃ」

「……………お茶と飲茶も大丈夫」

でも唯一の心配事は、必殺料理人の料理が混ざっているかという事。これだけでも、相当な不安要素ではある。

「よし、少しの間喫茶店は陸とムツツリー二に任せる。俺と秀吉は、一回戦済ませてくるから」

「あれ？ あの、木下君と坂本君も出るんですか？」

「うん。あと僕とひばりも出るよ？ 折角だからね」

学園長は僕達に“チケットの裏事情について誰にも話すな”と緘口令を敷いていた。

「あれ？でも木下が坂本で、アキが支倉とペア？普通ならアキと坂本が組むもんじゃないの？」

「実は陸がな勝手にペアを決めてなこうなったんだ。でもまあ、俺より経験がある秀吉がいるからな召喚したことが無い俺にはありがたい。

それに支倉はまったく経験がないからな。今の内に戦い方を教えるために明久と組ませたのさ」

「そっか……………」

一応、姫路さんの為に頑張ると言う事なので、美波も嬉しそうにする。

ついでに言うと、この場に姫路さんが居る為大まかな事は言えない。

「もしかして、賞品が目的なんですか？」

「うん。一応、そういう事になるかな？」

詳しくは言えないし仕方ないごまかそう。

「……誰と行くつもり？」

「え？」

「吉井君。私も知りたいです、誰と行くことかと思っていましたか？」

そこで、攻撃色の美波が僕に詰め寄った。

更に姫路さんまで、僕に詰め寄り始める。

困った時この紙を読めって言ってたっけ。

今がその時だ。

「明久は俺と……」

「霧島のデートの為に協力してほしいって、雄二直々に頼まれたんだよ」

「なっ!？」

雄二が多分フォロー？ を入れようとしたのを、僕が遮った。

どうしてそうしたかと言うとそういうタイミングで言うように指示が書いていたから。

「じゃあチケットは、坂本にあげるつもりなの？」

「うん、そうだよ。僕の興味はチケットよりも腕輪だし、チケットなんて貰っても一緒に行ってくれる宛てなんて全然ないからね」

と言うとひばりが複雑そうな顔をしていた。

何でだろう。

そして、なぜかひばりに温かい目をする美波と姫路さんがいた。

ちなみに賞品として出される腕輪は、優勝の場合が“ 白金の腕輪”で、準優勝の場合が“ 大空の腕輪”

白金の腕輪は、召喚獣を2体同時に呼び出せるタイプと、立会人になれる（教科指定可能）タイプの2つ。

大空の腕輪は、敵の召喚獣を動けなくするタイプと自分の点数を相手に与えるタイプの2つ。

指示書によると表向きは、これらで行くように書いてあった。

「おいこら teme! 俺の人生をなんだと……」

「む。そろそろ時間じゃあ。行くのじゃ雄二よ」

「……くっ！ おっ、覚えている！！」

まるで小悪党の様な捨て台詞を残して、雄二と秀吉は教室を後にした。

「さてひばり、僕達もそろそろ」

「うん。そっだね」

と、僕達が教室を出ようとしたところで……

ガシッ！！

「ねえアキ、支倉、もう一枚のチケットはどうするの……」

「そうです。教えてください」

「え？売ってお金にするけど」

「わ、わかりました。私たちが言い値で買います」

「……まっまず、手に入ってからだよ？」

「そ、そっだね。優先すべきは雄二と霧島さんの分だよね」

と言って納得して貰った上で、僕達は逃げ去った。

「……姫路さん、だんだんFクラスに馴染んでるよ？」

「そ、そうなんだ」

でも、ひばりの様子に僕は違和感を覚えた。

第三十三話 清涼祭初日その二 大会編（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

第三十四話 清涼祭初日その二 大会編その二(前書き)

連続投稿

第三十四話 清涼祭初日その二 大会編その二

それから、校庭に作られた特設会場にて。

決勝は、AブロックとDブロック、BブロックとCブロックによる準決勝の勝者で行われる。

僕とひばりはDブロックの為、雄二達とは決勝で当たる様には考慮されていた。

「えー、それでは試験召喚大会1回戦を始めます。三回戦までは一般公開もありませんので、リラックサして全力を出してください」

雄二視点

一回戦の科目は数学だ。

「出番じゃのう」

「ああ」

俺と秀吉が会場に上がり、相手と対峙。

対戦相手は、2・Dの清水美春と玉野美紀。

「美春達の邪魔をしないでください」

「残念。アキちゃんと当たりたかった」

「ふん、悪いが諦める気はない」

「そうじゃのう。しかし、今ならワシの気持ちを明久も理解してくれそうなのがするのなせじゃ？」

「ダメだよ。アキちゃんの相手は木下君じゃなくて私もしくは坂本くんまたは海谷君。」

「ううん纏めてでいいと思う」

「絶対勝つぞ秀吉！！」

「そうじゃのう。今ワシの中の何かが怒っておるのじゃ」

「美春とお姉様のためにその首をささげなさい」

「はあはあ！！待っててねアキちゃん」

「では、始めてください」

「サモン試獣召喚！！！！」

4人の掛け声で、場に召喚獣が姿を現した。

白い改造制服、手にメリケンサックを持った俺の召喚獣。

青い袴に長刀という、秀吉の召喚獣がFクラスタッグとして。

グラディウスを手にロリカ・セグメンタタを身につけたローマ兵風清水の召喚獣。

緑を基調とした服とタイトスカートで頭にゴーグル、左手に弓を持った玉野の召喚獣がDクラスタッグとして姿を現す。

『Fクラス 坂本雄二&木下秀吉 数学179点&78点』

VS

『Dクラス 清水美春&玉野美紀 数学95点&82点』

「いくぜ秀吉、まずは、玉野を倒す」

「うむ。わかったのじゃ」

「美春を無視しないでください!!」

無視されたのが気に入らないのか突進してくる美春の召喚獣。

対して慣れない召喚獣の雄二。

もはやかわせない状態。

しかし、雄二は笑っていた。

「甘いな!!」

簡単に清水の攻撃をかわしたのである。

「なっ!?!」

「はあはっはっはっは!!無駄無駄無駄あ!!」

「くっ……!!」

相手の防御なんて何のその。まるで鬱憤を晴らすように殴りまくってた。

「……教育者としては、坂本君にはぜひとも負けてもらいたいです」

やれやれ甘いな。

「とどめっ!」

そして俺の召喚獣が相手の腹に拳をブチ込む。点数もあるからかなりの威力だ。

実際にその拳は相手の打ち抜いていた。

「えい、やあ!」

「むっ、はあっ!」

相手が弓で攻撃をしてくるものを、秀吉は長刀を回転させ矢を防ぎ近づいて攻撃。

召喚獣は怪力な上に、体形も異なる故に操作も難しく、単調な攻撃ばかり続く。

まあ例外として、観察処分者で操作に慣れてる明久の場合、それ以上高精度な動きが出来るがな。

「ふむ。陸が作ったシュミレーション通りにはいかのう。やはりな

「なかなか難しいのじゃ」

「まあ、そうだろうな。陸も言ってたしな。実際にするとシミュレーションでは違ってる」

「まあ。雄二も慣れたようだしワシも倒すとするかのう」

と言って秀吉は敵に近づき急所を狙い倒した。

「……勝者、坂本・木下ペア」

立ち会いの教師により勝者が告げられ、敵側のペアは膝をつく。

そしてすごく不服そうな立ち会いの教師が敗者を慰めていた。

俺達は、勝者らしく余裕ある佇まいでその場を去っていく。

「さてと。喫茶店に戻るぞ。陸からのメールで邪魔者が来たみたいだからな」

「うむつ。そうじゃのう」

俺達は一路、喫茶店へと駆け足で戻る事に。

明久視点

「えー。それでは、召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージ。そこで召喚大会が催される。

「三回戦までは一般公開ありませんので、リラックスして全力を出してください」

今回立会いを務めるのは数学の木内先生。

ちなみにこれは雄二の作戦で科目は当然勝負科目は数学となる。

「頑張ろうね、律子」

「うん」

対戦相手の女子二人がうなずき会う。微笑ましい光景だ。

ところで、どこかで見た二人のような……………？

「では、召喚してください」

「「サモン試獣召喚！」」

Bクラス 岩下律子 & 菊入真由美 数学 179点&163点

向こうは二人とも似たような装備だ。忍者服に方や忍刀、そしてもう一人はクナイを持つてる。ムツツリー二の装備をちょっと豪華にした感じだ。それはそうと思い出した。あの二人はBクラス戦のときに最初の部隊にいた二人だ。どうりで見覚えがあると思った。

「さて、ひばり僕達も召喚しようか？」

「うん、うん」

「「試獣^{サモシ}召喚！」」

現れる僕らの召喚獣。僕の装備は改造制服に木刀。

一方、ひばりの召喚獣は青いブレストアーマーに黄緑色の貫頭衣に武器は倭刀だ。

「へえ、可愛いね」

と僕が誉めるとひばりは……

「……ふ、ふええつつつ！！！！？？？」

とひばりはしばらく固まった後、顔を真っ赤にして奇妙な声をあげた。

可笑しなこと言ったかな？

「な、何を言ってるのアキくん！！」

とひばりに怒られた。

本当どうしたんだろう？

それに対戦相手や先生まで温かい目で僕らを見てるのは何故なんだろう？

Fクラス 吉井明久 & 支倉ひばり 数学 118点&163点

「ひばり落ち着いて行く」

「う、うん」

「大丈夫。僕がひばりを守るから」

「……ふ、ふええつつつ！！！！？？？」

とひばりはしばらく固まった後、顔を真っ赤にして奇妙な声をあげた。

あれ、おかしいなこう言っていると女の子は落ち着くって陸が教えてくれたんだけど

「そろそろ開始してもらえますか？」

木内先生が困った顔で僕らを見てる。

相手の二人も呆れ顔だいや顔が赤いように見えるけどどうしたんだろう。

まあ、今はひばりを復帰させないと

「あ、すみません。ひばり、ひばり」

「はっ！？」

とりあえず正気を取り戻したひばり。でもまだ顔が赤いような気がするけど大丈夫かな。

「若干不安もありますが、とにかく始めてください」

そんな木内先生の言葉を合図に勝負が始まる。よし、いくぞ！

「でやあ！」

クナイを持つてる召喚獣にまず向かう。相方の女の子はひばりが担当する。

「負けない！」

そついいながら相手の召喚獣はクナイを振るってくる。

僕はそれを避け、相手のクナイを持つてる方の手首をつかんで、一本背負いの要領で投げ飛ばす。

「きゃ、きゃあっ！」

投げ飛ばされた相手の召喚獣は慌てて立ち上がるが、もう遅い。一気に距離を詰める。

「悪いけどひばりが心配だから！」

そついつて相手の召喚獣の急所を執拗に攻撃をした。

そつ傍から見たらチンピラにいじめられてる光景にしか見えないね。まさに弱い者いじめにしか見えないねこれ。

「今度はこっちの番だよ」

「くっ……!!」

対してひばりの方は初めてのことなので最初は翻弄されてたけどそれでも頑張って戦っている。

うん。いい試合だね。

「……教育者としては、吉井君にはぜひとも負けてもらいたいです」

木内先生のそんな叫びが聞こえてくる。うん。当事者でなければ僕もそう思うよ。

「覚悟！」

僕とひばりの召喚獣の攻撃が決まり勝利した。

「……勝者、吉井・支倉ペア」

すごく不服そうに木内先生が勝者の名を告げる。とりあえず、一回戦突破だ。

「じゃあ、ひばり。いそいで喫茶店に戻ろう」

「うん。そうだね」

さっきまで複雑そうな顔だったのに今は笑顔に戻ってる。

うん、きつとさっきの戦いがひばりの悩みを解決したんだね。

さつと戻らなくちゃ。

第三十四話 清涼祭初日その二 大会編その二(後書き)

ご意見感想お待ちしております。

第三十五話 清涼祭初日その三（前書き）

明けましておめでとございます。

今年初の投稿です。

今回根本がおかしくなってるため見ない方がいいと思います。

第三十五話 清涼祭初日その三

学園祭の出し物を決めるアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

【？可愛らしさ？統率力？行動力？その他）（
また、そのときのリーダーの候補も挙げてください

』

土屋康太の答え

『【？可愛らしさ】 候補・・・姫路瑞希&島田美波&支倉ひばり』

教師のコメント

甲乙がたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】 候補・・・支倉ひばり（訂正） 姫路瑞希（訂正）、木下秀吉（訂正）、島田美波』

教師のコメント

用紙に付いている血痕がきになるところです。

海谷陸の答え

『【?行動力】 候補・・・・・・・・姫路瑞希、島田美波、坂本翔子』

教師のコメント

姫路さんや霧島さんが行動的ですか？島田さんならわかりますがそれと坂本さんではなく今はまだ霧島さんですよ。
先生も結婚式には招待されてますよ。

坂本雄二のコメント

陸！！勝手に翔子を籍に入れるな！！あと絶対に結婚しないからな！！

坂本雄二の答え

『【?その他（結婚相手）】 候補・・・・・・・・霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか？

来店する二人のカップルは、片方はドレス、片方はタキシードととてもお似合いだ。

「お客様、結婚式場はお決まりでしょうか」

「……こちらで」

「ちょっと待てこちらあ！」

「雄二、タキシードに縄なんて似合わないよ」

「そうだよ。坂本君が逃げなきゃそんなことはしなくすむのに」

「明久、俺が本気でこんな格好をしてると思うか。それと、支倉、無理やりやらされて逃げない奴がいると思うか」

「じゃあ霧島さんとの交際は遊びって事!? それは人としてダメだよ!」

「坂本くん。男なら責任を取るべきだよ」

「正論だな。雄二運命を受け入れろ」

「ちげえ! そういう意味じゃ、ぐわっ!?!? 翔子、違う今のは明久達が言っただけで俺はそんなつ、ぐわああ!!!」

これだから雄二いじりはやめられないんだ(ニヤニヤ)。

「そういえば陸はどうして、邪魔者が来るってわかったの?」

「そう言えばそうだな。教えてもらおうか」

「すまない。今は教えられない。だがけっしてお前らを裏切ったりはしない。それだけは約束する」

「ふざけんな!! お前はいつも隠し事をして自分だけで対処しようとしている。」

特に今日はいつものお前とは思えないほど警戒をしている。そんなに俺達を信じられないのかよ」

教会に大きな声が響く。いらだつ雄二。周りの客も少し引いている。無理もない。

だが雄二の怒りももつともだ。

「坂本！ あんた少し五月蠅いわよ」

「ぐ、すまない」

「坂本君、それに海谷君もこれでも食べて落ち着いてください」

姫路（巨乳娘）がおいしそうな料理を、机の上にコトと置いた。とてもおいしそうな料理。

だが、メニュー表にこんな料理はない。

「腕によりをかけて作っただんです。御代はいりませんよ」

「第一回！」（雄二の必死のコール）

「早食い王者決定戦っ！」（俺の必死のコール）

「アキくん。あたしたちは客を呼びに行こう」（爽やかな笑顔で明久に話しかける支倉）

「そうだね、早く行こう」（同じく爽やかな笑顔で答える明久）

「空いた皿でも下げて来ようかの」（真剣な顔に変わる秀吉）

「裏切り者……！」

「さあ、どござ」

「ギヤア……！」

明久視点

あの後雄二と陸の声が聞こえなくなった。

ゴメン陸。僕には助けられなかった。

でも、僕達はそんなに信用できないのかな。

もしそうなら寂しいと思う。

と僕が考え事をしてたら。

「瑞希、もうすぐ二回戦の時間よ」

美波が、部屋に飾られたキラキラと輝く時計を見てそういった。

時刻は十時四十分。僕らと雄二達の二回戦は十一時からだからあともう少し余裕がある。

雄二もそれが分かっているのか、椅子に座ってぐったりと眠っている。

陸も泡を吹きながら寝ている。

ひばりや秀吉はあわただしく動きながら時計を気にしてるから大丈夫だね。

それから木下さんと工藤さんが来て霧島さんを呼びに来てしびしび霧島さんはAクラスに戻った。

「あ、明久。今何時だ」

眠りから目覚める雄二。えーっと、うわっ、やばい!!

「雄二！ 寝てる場合じゃないよ。あと少しで第二回戦が始まる！」

「……後で少し話をしようか」

寝ぼけ眼の雄二はちよっぴり怖い。

「うむ。今は喧嘩してる場合じゃないのじゃ」

「アキくんも急ごう」

それから僕達は慌ててステージのある校庭に向かった。

「それでは、二回戦を始めてください」

「二回戦の相手は……」

「おい吉井。どうしてお前は小学生と大会に出てるんだ？」

そうあれから女装状態で学校に来るようになりさわやかさと真面目になったため更なる恐怖を覚えさせたBクラスの根本だ。

「あたしはそんなにちっちゃくないよ!!これでもあなた達と同年だよ!!それとどうして女装してるの!?!?」

とひばりは気持ち悪そうに根本に言っていた。無論早くこの場から去りたいようだ。

うん、僕も同じ気持ちだよ。

「ちょっと根本君？見た目で判断するのは失礼よ」

そう言って根本に突っ込んでいるのは、たしかCクラスの代表の小山さん、だったかな？

「まだ、付き合っていたんだね」

そう。あれから陸や雄二によるとふたりはわかれたはず。

「別れたわよ？でも、あの姿で毎日毎日来られると参るのよ。だから大会に参加して優勝したら元に帰ると言うわけよ……はあ」

なるほど、そういうわけか。だが小山さん、安心してほしい。

「さて根本君。これはなんだと思う？」

僕は懐からある本を取り出す。これぞ、根本恭二対策兵器。その名も……

『根本恭二個人写真集 生まれ変わった私を見て！』

「な！？そ、それは！」

おお、効果靦面。以前Bクラスとの試召戦争のとき、ムツツリー

二が撮り収めた写真集。

これは根本にとっては墓場まで持って行きたい人生の汚点だろう。

「さて、Cクラス代表の小山。これが見たかったら僕達に負けるんだ」

「よ、吉井。さらに俺の魅力を他の奴らに教えるのか？あまりのいじめに快感を覚えるぞ！！」

「……………いいわ。私たちの負けよ」

「交渉成立だね」

ふう。これでかわいそうな根本を見なくて済む。ひばりも安心してるしね。

かくして、写真集は小山さんの手に渡ることになった。

「ゆ、友香！！それを見て俺を罵ってくれ！！」

根本の可笑しな言葉を聞いて、小山さんは写真集を開いてマジマジと観ている。

「ひばり。勝負は着いたよ。店も気になるし、戻ろう」

「そ、そうだね。それじゃ、えつと遠藤先生。あたし達の勝ちですよね」

ひばりは脇から写真集を覗き込んでる遠藤先生に声を掛けていた。

「あ、はい！吉井君と支倉さんの勝利です！」

よし、これで三回戦進出だ。良かった良かった。

『……あなたとはこれっきりよ。もう、二度と話しかけないで』

『ああ、たまらない。さらに俺を罵ってくれ！！』

去り際にそんな声が聞こえたが、気にしないでいこう。

係り合いになりたくないから。

それにひばりは心なしが僕にしがみついてくるし速足で行ってる。

やはりここから早く出て行きたいんだね。

その頃雄二と秀吉ペアはと言うと。

2回戦も危な気なく勝ち進み、雄二と秀吉は教室へ向っていた。

雄二も秀吉も召喚獣の扱いにはだいぶ慣れ、連携もとれるようになってきていた。

「うむ。だいぶ扱いにはなれたのう」

「そうだな。あとは明久達は大丈夫だろうな……ん？」

『……あなたとはこれっきりよ。もう、二度と話しかけないで』

『ああ、たまらない。さらに俺を罵ってくれ!!』

女の方や嫌そうな顔をしており男の方は恍惚な顔をしていた、とあるカップルの姿が。

女の方の手には、ある写真集が握られている。

「あれは、Bクラスの屑にCクラスの代表か」

「どつやら、あの写真集を見られたらしいの」

「陸の薬は効きすぎるのか？それとも元からああなのかどつちだと思っっ」

「どつちにしろ関わり合いにはなりたくないのっ」

「そうだな」

雄二と秀吉は、巻き込まれる前にさっさと自分達の教室へ速足で向っていた。

明久たちが第二回戦を始めている頃、居残り組みは目が回るくらいの忙しさだった。

あれから復活した俺は休む暇もなく働いていた。

「四番テーブル！ コーヒーとサンドイッチ」

「二番テーブル！ ショートケーキ二つ」

いかにも、結婚式！、という料理を黙々と運ぶ俺たち。

客の流れは途絶えることはなく、淀みなく回転していく。

「次は奴らは何を仕掛けてくるんだ」

「……………陸の予想では他クラスでの悪評」

「そうだ、でもこれだけは先回りしてとめることができないからな」

「しかし、海谷。どうやってお仕置きをするんだ？」

「簡単な話だ。この中の誰かが変装を解いて倒すのさ。あとこの薬で記憶を消しておしまいさ」

「だれがするんだ？」

「誰って？ 暇な奴に」

「……………今ここにいる連中は忙しいだけど？」「……………」

「大会に参加してる連中に頼むに決まってるだろう」

と俺が言つと皆が呆れられた。

「……………吉井はともかく坂本や木下や支倉や島田に姫路さんにどうに

か出来るか!!」「」

「安心しろ。坂本に例のスーツ着せて行かせれば問題ない」

「そうかならいけどでも、着せる必要はないと思うな」

「?何で?」

「」」「外の席を見ればわかると思うぞ」「」

皆がくいつと窓の外を顎で指す。

確かに教室の外にはお客さんがたくさん並んでいる。

昼前だから多くなるのは分かるんだけど、これは少し早すぎだろう。

たしかにこれなら充分だと思うけど、なんか調子が狂うな。

「花嫁さん。注文お願いしまーす」

「すぐに参ります、奥様」

すっかりスーツに慣れた藤堂が、すぐさま対応に向かった。周りから俺を呼ぶ声が聞こえる。

まあいい、考えるのは後だ。本当に奴がいるのかどうかだけを確認をするだけだ。

「はい。いますぐに参ります、旦那様」

第三十五話 清涼祭初日その三（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第三十六話 清涼祭初日その四（前書き）

連続投稿

第三十六話 清涼祭初日その四

「ただいまー……って、うわあつ、大盛況だね」

Bクラス代表の根本とCクラス代表の小山のコンビを雄二と陸の策で倒した僕たち。

廊下に並ぶ長蛇の列を見たときは、クラスを見間違えたかと思った。

「あ、明久、支倉！早くヘルプを『花嫁さーん』はいつ！ただいま」
僕に言うだけ言ってすぐさまお客さんのところに行く陸。

美波や姫路さんがいないのはわかるけど、雄二や秀吉の姿もない。
どこに行ったんだろう。

「陸、秀吉や雄二はどこ行ったんだ？」

「ああ。戻って来て貰ってすぐに演劇部にあいているテーブルがな
いか調べに行ってもらってる！！」

「藤堂、何があつたんだろうね」

「さあな、だが儲かる分には問題ない」

そんな僕たちの後ろから人波を掻き分けてくる一つの集団があつた。

秀吉や雄二に他に男子数名が立派なテーブルを運んでいる。

あれは 演劇部で使っている大道具のテーブルか。

「明久に藤堂よ、ちょうどよかった。後の人数が足りておらんのだよ、手伝いに行ってくれんか」

「了解！」

テーブルのすぐ横を通り二つ目のテーブルを探す。走った距離はクラス二つ分くらいだろうか。

さっきの半分くらいの人数で同じ位の大きさのテーブルを運ぶ男の集団と、その上にちょこんと座る小さな女の子の姿。

まるで家来とお姫様みたいだ。

「あつ！ バカなお兄ちゃんです！」

ぴょんつと机から降りる女の子。そのまま駆けてきて、いきなり抱きつかれた。

この声、どこかで聞いたことがあるような……？

「えっと、キミは誰？ 見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

ひとまず顔を見る為に女の子を引き剥がす。

「え？ お兄ちゃん……。知らないって、ひどい……」

女の子の表情が歪む。あ、マズい！泣かせちゃったかも！？

「葉月と結婚の約束もしてくれたのにー！！」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺^やるわよ！！」」

「「ぶアツ！？」」

後方からアックスボンバーの強襲。美波はいいとして姫路さん、なぜいつも穏やかなキミがその技を知ってるの？

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

「瑞希。そのまま首を時計回りにひねって。ウチは腰を反時計回りに捻るから」

「「こ、こつですか？」」

いかん。殺されかねん。

「ちょっと待って！ 結婚の約束なんて、僕は全然」

「ふえええんっ！ 酷いですっ！ファーストキスもあげたのにーっ
「！」

ゴキ（僕の体が捻られる音）

ユラユラ（その状態のまま両手両足を持って揺らされる音）

ピュー ドサ（僕の体が外に放り出される音）

「おいおい、ドレスに泥が付いたらどうするんだ」

「そうだったわ、悪かったわね坂本。脱がしてから放り投げるべきだったわ」

「ねえっ！ 僕を投げないって選択肢はなかったの!？」

「大丈夫ですよ、吉井君」

「そ、そうだよね姫路さん。いくら美波でもそんなことするわけ」

「裸でも充分可愛いですよ」

「僕の周りはバカばかりだ!」

スパアアンツ!!

姫路さんに雄二に美波の頭に炸裂するハリセン。

突然のことに驚きひばりの方に向く姫路さん達。

「い、痛いわよ支倉」

「そうですよ。支倉さん」

「そつだぞ。何で俺まで?」

「やり過ぎだと言つ事とフォローするところが違つからだよ!」

「でも」

「でも、しかしもないよ。反省しなさい!」

本当久しぶりに見たなひばりのハリセン。

いつの間にか現れて気がついたらもう無いんだよね。

その事にしぶしぶの姫路さん達。

納得がいかない雄二がひばりを見ていた。

それにしても姫路さんが最近壊れつつある。Aクラスの教室のなに?。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ!」

と、女の子が美波を見て満面の笑みを浮かべる。お姉ちゃん……?。

「ああっ! あのときのぬいぐるみの子か!」

思い出した!

そういえば、前に小さな女の子がお姉ちゃんにプレゼントしたいけどお金が足りない、なんて哀しそうにしてらから手伝ってあげたんだったけ。あげたのは確か、大きなぬいぐるみ……だったかな?

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「はいですっ！ でもお兄ちゃんはなんでドレスを着てるのですか？」

「おいつ！ 一段落着いたところでテーブルを運ぶぞ」

つとそっだ。僕はテーブル運びを手伝いに着たんだ。すっかり忘れていたよ。

質問には答えられないけど仕方ないよね！

「それにしても、葉月ってばよくここまでこれたわね」

「それはお兄ちゃん達がテーブルの上に乗せてくれたのですっ」

それを聞いて美波が赤子を抱くように葉月ちゃんを抱く。

「あんたら、葉月に変なことしなかったでしょうね」

「馬鹿者！ 女の子の応援で俺たちは力が沸くんだ！」

「幼女は愛すもんじゃない、愛でるもんだ！！」

「今だからこそ変なことをするんだ！」

三人中二人の発言が完全にアウトだ。だめだ、このクラス。

スパアアンツ！！

バカ三人に頭に炸裂するハリセン。

「君たちが言ってる言葉は犯罪だよ！！」

うん。いつ見てもひばりのハリセンはすごいな。

あれからひばりが説教をして終わってから僕達は移動を開始した。

美波が、はぐれないように、と葉月ちゃんと手を繋ぎ、僕は雄二と反対方向から机を持ち上げる。

よつと。やっぱりこの人数で持つとテーブルも軽いな。

「そついえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん？ どんな話なの？」

「えつとね、ウエディング喫茶に可愛い赤髪と茶髪の花嫁がいるつて」

「明久！ てめえ！いきなり手を離すなっ！！」

ふう、頭が一瞬真っ白になったよ。気を取り直してテーブルを運ぶとしよう。

「あとね、二人で絡むと艶やかさが増すって、どういふことなんだろう」

「明久！ テメエ！ いい加減にしろ！！」

「バカなお兄ちゃんどうしたですか？ 具合が悪いの？」

葉月ちゃん、『無知』っていけないことなんだと今ほど痛感したことは無いよ。

きつと陸が聞いたら落ち込むね。

そして爆破をするんだろうね間違いない。

「こんなところにいたのか、早くテーブルを運んでくれ！」

「あいよっ」

景気よく返事をする雄二と対照的に、僕の気持ちは沈んでいる。テーブルがやけに重く感じる。

ん？なんだろう、ズボンが引つ張られてるような……。

「お兄ちゃん、それ運んだら葉月と一緒に遊びにいこっ」

下から上目づかいでお願いされる。困った。僕はこつこつのに弱いんだよな。

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

心苦しいけど仕方がない。

普通に楽しむだけの学園祭だったらいくらでも一緒に遊んであげられるんだけど。

「むー。折角会いに来たのにー」

「いいぞ、遊んできても」

「いいの、雄二？」

「ああ、どうせ飲食店をやっている他のクラスを偵察するの必要があったんだ」

そこで雄二のフォローが入る。敵情視察は経営戦略の基本だしね。

「んー、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ」

「ふう。、やっと来たな。おい、明久、雄二ー」

教室の前でドレスを着ながら働く陸が出迎えてくれる。

「綺麗なお姉さんです」

「ふくざつな気分だ」

「え？どうして落ち込むのですか？」

と陸が気にするなと言いつきに置いてくれと僕達に指示を出していた。

でも僕の目には陸の背中に哀愁を感じるのは気のせいなのだろうか？

「テーブルはここに置いて」

重いテーブルを教室のはじめに置いて一息つく僕たち。

秀吉が布巾ですぐさまテーブルを拭いて、ムッツリーニがテーブルクロスをかぶせる。

「陸、悪いんだけど僕たちこれからお昼ご飯に行くんだ」

「いいぜ、いつてこい」

「バカなお兄ちゃん、早く行くです」

「じゃあ葉月お姉ちゃんも一緒に行くね」

美波の口調がいつもとは全然違う。妹に対しては優しいお姉ちゃん
でいるんだなあ。

「そうか。ならば姫路と雄二も支倉も秀吉も一緒に行くといいぞ。
召喚大会もあるし、早めに昼を済ませてくると良い」

「そうか。悪いな、陸」

「いいんですか？ ありがとうございます。海谷君」

全部で7人。さすがにドレスや牧師さんの服は脱ごうという話にな
った。

「それでチビツ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

「えつとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店」

「なんだって！？ 雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！ 敵情視察は長ければ長いほど良い！」

「ちょっと待て！」

全力ダッシュを始めようとした僕たちを陸が呼び止める。

喫茶店は姫路さんの転校にかかわる大事なことだ！ 後悔のないように全力を尽くしたいのに！！

「これを渡しておく」

そういつて渡されたのは女性変身スーツとウィッグだった。

「ねえ、陸、これ『いけない事を口走ったのはこの口かしら？』み、

美波！ 僕の首に手を掛けないで！ 怖いよ！！」

「いけない所に走るのはこの足ですか？」

「ひ、姫路さん！だからってなんでロープで両足を縛るの！？」

「お兄ちゃん、いけないものを見る目はこれ？」

「は、葉月ちゃん！キミはそっちの道に染まっちゃだめだよ！」
スパアアンツ！！

再び姫路さんに葉月ちゃんに美波の頭に炸裂するハリセン。

「だから、良い加減にしてよね！！」

と再び怒っているひばりがいた。

その後、葉月ちゃんを交えて怒られていた。

でも陸が渡してくれたものは何に使うのだろうか？。

陸視点

「さて、俺らも働くとするか」

「そつだな」

支倉に説教を受けてるやつら無視して、俺たちは再びホールに戻った。

昼食時、花嫁の人数が明らかに足りてなかったため、明久の着ていたドレスをムッツリー二に着させようとしたが、厨房にいつはずのムッツリー二の姿はなく、そのかわりに書置きが一つ。

『敵情視察』

なるほど。だからムツツリー二なのか。納得がいく行動だな。

「陸、なにゆえ財布を調べてるんだ？」

「ああ。この様子じゃ足りないだろうなと思ってな。それで残金がいくら残っていたっけなって」

「そうか。確かにこの人気だからな」

そういつてホールに戻る須川。財布の中身は　よし、とりあえず
3ダースぐらい買うべきだな。

その頃　Aクラスにて

「明久、ここはやめよう」

「ここまで来て何を言ってるのさ！　早く中に入るよ！」

「頼む！　ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！！」

前回Fクラスに負けたAクラスが経営する、メイド喫茶『ご主人さまとおよび』の前にて。

雄二は心底嫌そうに、立っていた。

「ねえ、アキくん、主人なのかメイドなのか、どっちなのかな？」

「そつだね。どっちなんだろうね」

と疑問に思ってるひばりと一緒に考えてると……。

「ふむ。ここって雄二の大好きな霧島さんが居るクラスじゃからの」
「う」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

「そうよ。敵情視察じゃなかったの坂本？」

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

その空気を破ったのは、連続して聞こえるシャッター音。

「……………ムツリーニ？」

「……………人違い」

スパアアンツ！！

神速の一撃で、ハリセンをたたき込まれたムツリーニは倒れた。

「なにやってるの！？ 土屋君はっ！！」

ムツリーニをハリセンで、はたいたひばりは、そのまま声を上げる。

すぐに復帰して立ち上がったムツリーニは表情を崩さず口を開く。

「……………敵情視察」

ローアングルの写真撮影では、とてもその説得力はない。

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことしたら撮られてる女の子が可哀想だと……」

「……一枚100円」

「2ダース買おう……可哀想だと思わないのかい？」

「アキ、普通に注文してるわよ」

言ってる事は正論だったが、途中あっさりと注文した事で説得力はなくなっていた。

スパパアアンツ!!

突然ムツツリーニと僕の頭がブレ、僕達は倒れた。

「なに自然に注文しようとしてるの!? アキくんは! 土屋君も変な商売しないで!!」

倒れた二人に、ハリセンを突きつけ、説教するひばり。

「うづ。ごめんひばり」

「……ちなみに支倉のウエディングドレスの写真は一枚300円」

「4ダース買おう」

「な、何を注文してるのアキくん／＼！！」

照れているひばり。

面白くない瑞希達。

「ねえ。瑞希」

「何ですか？美波ちゃん」

「ウチら置いてきぼりよね」

「そうですね。私たちがウエディングドレスを着てますよね」

「ウチらの写真なら何ダース買ってくれるのかしらね？」

「そうですね。最低でも6ダースは買って欲しいですよね」

「……………そろそろ当番だから戻る」

「全く、ムッツリー二にも困ったもんだね」

ムッツリー二は僕に写真を渡し、教室の方へ去っていく。

それを見つつ、僕は呆れたようにそう言った後にポケットに写真をしまった。

「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

「やだな、もちろん処分するに決まってるじゃないか。それより

そろそろお店に入ろうよ？

もうすぐくおなかが減っちゃったよ」

「それもそうじゃのう。雄二ももう腹くくるのじゃ」

「……くそっ！」

雄二が吐き捨てるようにそう言い、観念したかのように同伴。

「あっ！ 写ってるの、男の足ばかりじゃないか畜生！」

「やっぱり見てるじゃないですか！」

「く、ごめんなひゃい！ くひをひっぱらないで！」

僕は姫路さんに頬を抓られ、葉月ちゃんに腿をつねられて顔が赤いひばりを連れての同伴となった。

「それじゃ入るわよ。お邪魔します」

美波が1番手となり、いざメイド喫茶へ。

「……おかえりなさいませ、お嬢様」

出迎えたのは知的な美人メイド事、霧島翔子。

「わあっ、きれい……」

長い黒髪にエプロンが映え、黒のストッキングが美脚を際立たせている。

これは女であろうと、見惚れる光景。

「それじゃ、僕らも」

「ふむつ、流石はAクラスじゃの。雰囲気も違っわい」

「はい、失礼します」

「お姉さん、きれ〜！」

「霧島さん……綺麗……」

続いて姫路さんと葉月ちゃんと秀吉と正氣に戻ったひばりを連れた僕が、中に入る。

「……お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と、模範的な礼儀で出迎えた。

「ちっ……」

今度不機嫌そうな雄二がしぶしぶ入ってきた。

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

と、雄二に対して、かなりアレンジが加えられた出迎えが贈られた。

「霧島さん大胆です……！」

「ウチも見習わないとね……」

「あのお姉さんたち、夜の間ずっと遊ぶのかな？」

「良いな。あたしもあれくらいだったらな」

四者四様のリアクション。

でも美波は霧島さんの何を見らなうのか気になるところだ。

「では、お席にご案内いたします」

「ねえねえ、バカなお兄ちゃん。凄くいっぱいお客さんがいますです」

「そうだね。男の人が多いかと思ったけど、女の人も多いみたいだね」

僕も周囲を見回してつぶやく。

「きつと、食事や飲み物がおいしいんだね。女性はそういうのに敏感だから」

僕のつぶやきに、ひばりが自分の考えを述べてくれた。

僕はなるほどと思う。

そうこうしているうちに、団体向けと思われる、複数人掛けの大きなテーブルに案内され、思い思いの席に座った。

霧島さんが見るからに高級そうなメニューを持ってやってくる。

「……では、メニューをどうぞ」

霧島さんが用意したメニューを受け取り、それぞれ注文品を決定。

「うちは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれが良いです」

「葉月もー!」

と、美波達は女性らしいメニューに。

「僕はえーつと……じゃあ、その、オレンジ、ジュースで。後、トーストお願い、します」

「ワシもそれで」

僕はそもそも、喫茶店で注文などする機会などないから。

なので、少々無難な物で行く事にし、秀吉も便乗。

「あたしはケーキセットで。飲み物はコーヒー」

「んじゃ、俺は……」

「……ご注文を繰り返します」

雄二の注文を、霧島さんが遮るように声を上げる。

「……“ふわふわシフォンケーキ”を3つ、“トーストとオレンジジュース”を2つ、

“ケーキセット、お飲み物はコーヒー”を1つ、“メイドとの婚姻届”を1つ、以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞ！」

「……では、食器をご用意いたします」

女子4人の所にはフォークが、明久と秀吉の前にはストローが。

そして雄二の前には、実印と朱肉が用意された。

「しょ、翔子！ これ本当にうちの実印だぞ！ どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながら、おまちください」と、翔子は優雅なお辞儀をして、キッチンと思わしき方向へと歩いて行った。

「……明久それに秀吉、俺はどうしても召喚大会で優勝しなくちゃいけないんだ……！」

「あー、うん。そ、そうだね」

「そ、そうじゃのう」

「さて、そろそろ本題に入るか。葉月ちゃん、この辺りで聞いたん

だよね？」

「うん。嫌な感じのお兄さん2人が、おっきな声でお話してたの」

「もしかして、あの2人？」

たまたま話を聞きつけた木下さんが、入口を指差した。

そこには、坊主とモヒカンの2人組がいた。

『お帰りなさいませ、ご主人様』

『おう。二人だ。中央付近の席は空いているか？』

二人は席に着くと、注文するより先に大きな声で騒ぎだす。

いや坊主の方が騒ぎ出した。

「だからあのスラリと伸びた指が美しいと言ってるだろうが」

「お、おい夏川！ 落ち着けよ、悪評を流しにきたんだろ！ なに良い事ばかり言ってるんだよ」

「翔子、あいつら何やってんだ？」

「……さっきからずっと同じことばかり言ってる。夫の店が褒められるのは良いこと」

「そつなの木下さん？」

「ええ。そうよ。同じことを言ってるわ」

「雄二、これならほっといてもいいんじゃない？」

「ああ、だが俺をいつの間にか縛り付けているメイドをほっとくわけにはいかないな」

「……雄二、実印と結婚届」

「翔子、これ本物じゃねえか！ どうやって盗んだんだ！！」

第三十六話 清涼祭初日その四（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第三十七話 清涼祭初日その五

明久視点

「で、お前らのペアも三回戦は不戦勝だったと？」

「うん。相手が食中毒で棄権したんだ」

「ああ俺の場合は爆発する、爆発すると相手チームの二人ともしやべりながら言っていてなこれは無理と判断され先生による不戦勝が決まった」

あれから坊主とモヒカンの様子を観察していたらあつという間に時間過ぎた。

三回戦、順当に行っていればAクラスとBクラスのコンビにぶつかる予定だったけど、待っていたのは相手が棄権という拍子抜けの結果。

まさか……うちの店のハズレを引いたんじゃないよね。

それに雄二達の対戦相手は陸が何かをした可能性があるけど怖くて聞けない状態なんだ。

それにしても相変わらず雄二は陸を睨んでる。

隠し事をしている陸にも問題があるけどね。

「そうか、こちらの方に協力してくれ」

と陸は気にした様子もなく話し始めた。

常に満員だったホールは、今ではお持ち帰りコーナーまで出来ている。

断っておくが花嫁をお持ち帰りというわけでは断じてない。

「思ったよりサービスが好評でな、食べ物だけ欲しいというお客が増えてきたんだ」

「なるほど、だが材料が足りるのか？」

「明日の分から持ってきている。無論、明日の分は俺が既に注文しておるので心配無用ない」

「そうだな。稼げる時に稼いでいたほうがいい。だが、そうになると……何かインパクトが必要だな」

そういうと雄二は辺りを見渡す。

まるで特定の人物を探しているようだ。誰を探しているんだろう？

「ただいまー！いつ見ても似合うわねその姿」

「ただいま戻りました。そうですね、私もそう思います」

「お兄ちゃんのドレス姿可愛いです」

と、三人娘が帰宅（？）し、このクラスが本当の意味で華やかにな

る。

さすがに僕や陸の魅力では、姫路さんや秀吉と同じ服を着るのは無理があるしね。」

「戻ってきたな。さて、お前らにはまたドレスを着てもらっぞ。」

「ふう、あれ動きづらいのよね。」

「お兄ちゃん、バカなお兄ちゃん。」

「なに、葉月ちゃん？」

「お手伝いするから、あの服葉月にもちようだい！」

なんて良い子なんだ。美波の妹とは思えない。

ガタツつと周りがざわめくけど、そんなことは気にしない。

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいけど、葉月ちゃんの方は数が」

「……………用意は周到」

「ム、ムツツリーニ！何でキミはそんなに準備がいいの！？」

がしつと握手をする僕らのキズナは誰にも負けない！

「……………」

でも陸の視線が痛い。それにひばりの視線も痛いのはなぜなんだろう？

「でも、時間がないから三回戦が終わったら着替えますね」

「だめだ。Fクラスのウエディング喫茶を象徴するために着て行け。宣伝のためだ、我慢してくれ」

そういえば、召喚大会の三回戦からは一般公開が始まるんだった。

不戦勝だったおかげで忘れていたよ。

折角、人が集まるのだから宣伝しておいて損はない。

「でも、お父さんが……」

「坂本、ウエディングドレスを着なくていいわよね？」

「俺がどうかしてたみたいだ。許してくれ」

「？なんか問題あるのか？着替えて行ってくれた方がもつかるぞ」

陸が空気を読まないで話しかけてきた。ホント時々何を考えてるのかわからないよ。

ちなみにひばりのハリセンで陸が倒れている間に。

そのままの格好で急いで出て行く二人。さすがに結婚もしてないのにドレス姿を父親に見せるのはマズイ。

「んじょ、んじょ」

「……………!!!(ポタポタポタ)」

「は、葉月ちゃん！ そんなところで着替えちゃダメだよ！」

ムッツリーニの前で着替えるのはもっとマズイ。

第三十七話 清涼祭初日その五（後書き）

空気を読まない陸。

どこか抜けてる陸。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第三十八話 清涼祭初日その六（前書き）

連続投稿

第三十八話 清涼祭初日その六

「たっただいま！」

「ただいま戻りましたー」

ホールに響き渡る元気な声。どうやら勝ったみたいだ。

「助かる。二人とも疲れているところ悪いが、すぐに着替えて来てくれ」

「あれっ？ アキと支倉は？」

「むっ！ 帰ってきたようじゃのう」

窓の外から見えるのは迫り来る人の壁。

その先頭にいるのは明久とその隣にいる支倉だ。

2-Fのプラカードを持って歩く姿は兄妹みたいに見えるな。

「二人とも、どうだった？」

「勝ちました！」

胸の前でVサインを作る姫路さん。さてこれで次の相手は彼女達に決まったな。

「支倉に明久よ。これで大会に流れていたお客さんの分は大丈夫じ

や。もうホールに戻ってくれんか」

「分かったよ秀吉」

「わかりました木下君」

受付のほうは相変わらず混んでいるけど、ホールのほうはまだ少し空席がある。

先ほどまでいた長蛇の列も大会の方に流れてしまった。

けど、ひばりのおかげでもう安心だ。

「すまないが明久は少し休んでくるぞ」

陸は朝からずっと働きっぱなしだし、なんだか申し訳ない。

姫路さんと美波やひばりがいるから、花嫁の数もなんとかなるしね。

と言っつていつの間にか着替えた陸は教室から出て行った。

陸視点

旧校舎

さて在庫の確認をしておこう。確認をする必要があるしな。

それに、あいつが居る可能性があるのなら警戒し過ぎても問題ない。

「おい」

「？誰だ？」

空き教室で在庫の確認をしていると後から声を掛けてきた。声の主は教頭室にいたチンピラだな。

「谷さんの指示だ。この薬をその在庫にばらまけと言っことだ」

なるほど。常夏コンビは頼りにならないから自ら動いたと言っわけか。

しかし、この薬は何が入っているんだ？確認をしておくか。

「指示は了解した。だがこの薬は何なんだ？」

「知らねえよ！！お前は指示通りに動けばいいんだよ！！」

なるほど。聞かされてないのか。屑に教える必要はないと言っわけか。

だとしたら、面倒だな。こいつらで試すか。

俺が実行をしようとしたときチンピラの一人が口を開いた。

「ひひひ、安心しな。せいぜい軽い嘔吐と下痢だな。有名な科学者様がくれたぜ。ひゃっひゃっひゃ」

俺の反応が面白いのか周りの男たちは下品な笑い声をあげる。

ちっ、虫唾が走る連中だな。奴らの笑い声も気に入らないな。

「じゃあ協力者としてさっさと実行しな」

もう話すことはないと言ったか。こちらとしてもありがたいあんた達でその薬を試してやるよ。

「そうですね」

「ああ。急げよ谷さんを怒らすと怖いからな」

「「「ひゃっひゃっひゃ」」」

さて、どう対処しようかな。楽にはさせないぜ。

俺が動こうとしたときガラツと音をたてて扉が開いた。

「待て、チンピラ共、その人を放すんだ！」

逆光でシルエットが黒く浮かび上がる。丸まった頭、風にたなびくマント。

そこにいたのは、変な赤い仮面を被った坊主頭の男へんたいだった。

「な、なにやってるんですか、夏川先輩」

あまりの出来ごとに俺は啞然としていた。

「お、俺の名前を知っていてくれるなんて……感激だー」

胸の前で手を組み、天に召されるような格好をしている夏川（坊主）

。とてつもなく奇妙な絵だ。

頭にちょこんとついている蒼い花が非常に気持ち悪い。センスも最悪だ。

「はっ!? ち、違う! 俺は夏川俊平という名ではない!」

いや誰も下の名前まで言っていないって。

「やいやいやい、三人がかりでかよわい乙女を襲うなんて天が許しても、この俺が許さねえ……って、どこに行った!」

「先輩の迫力に脅えて逃げていきましたよ」

「イタイ奴だ。関わるよろくな目にあわなそうだぜ」と言って逃げたのは、こんな変な格好をして助けに来てくれた先輩の名誉を護るために黙っておこう。

「お怪我はありませんか?」

「ええ、私は大丈夫です」

むしろあなたを精神科医に連れて行きたい。外傷のない怪我は見つけにくいから。

そして余りの事態に女口調になってしまった。

「それでは」

「あ、待ってください」

「はは、名乗る者ではありませんよ」

だから誰も聞いてないから。

ガラガラとドアを開け去っていく変態。とつとつ病院に連れて行くことが出来なかった。

「結局この薬はいや調べてみるか」

それから俺は研究室に行き調べてみたら摂取したら周りが敵に見える暴れる効果があったことが分かった。

オマケに痛みを感じないようになる効果付きだ。

たちが悪すぎだ。

明久視点

「アキくん。そろそろ四回戦だよ」

「え？もうそんな時間なの？」

時計を見て時間を確認する。

午後二時過ぎ。喫茶店に夢中になっているうちに随分と時間が過ぎ

ていたみたいだ。

「あれ？ アキたちもそろそろなの？」

「そうなんですか？ 実は私たちもそろそろ出番なんですよー」

言葉から察するにどうやら対戦相手が僕たちだとは気づいてないようだ。

なら、黙っておこう。対戦相手だって知ったときの驚いた表情がみたいし。

姫路さんと美波が手に持ったトレイを置く。

僕が教室の外に出ようとすると、くいくいつとズボンの裾が引つ張られた。

「お兄ちゃん、葉月を置いてどこか行っちゃおうの？」

「葉月ちゃん。バカなお兄ちゃんは今から大切な用事があるんだ。だから大人しく待っていてくれるかな？」

いつの間にか戻ってきた陸が葉月ちゃんの頭の上にぽふっつと手をのせる。

膝を折り曲げ視線をあわせるあたり、子どもの扱いに慣れていると思う。

でもどうしてそんなことが出来るんだろう？

「手が足りませんよ〜マスター」

なるほど。マーナちゃんの相手をしてるからだね。

「うー。でも……………」

「その代わり、良い子にしてたら」

そんな彼女を元氣付けるように、陸がふつと微笑んで、

「バカなお兄ちゃんがデートをしてくれるからな？」

「葉月お手伝いしてくるです！」

「ち、違っただよ葉月ちゃん！ 今のは陸が『子どもの夢を壊すのか？』……………」

もはや葉月ちゃんの姿は見えない。約束を取り消すことは不可能となった。

キツ（涙目で陸を睨む僕）

「安心しろ。金は出してやる。それに遊園地くらいなら問題ないだろっ」

「そうだけど。あとが怖いんだけど」

「アキ、ちよつと校舎裏まで来て？」

お姉さんの怖い声。妹を護るために般若になる姉をはじめて見たよ。

「美波ちゃん、次の対戦相手は吉井君たちのようですから。召喚獣でお仕置きしたほうが遠慮なくできますよ」

姫路さん。いまそのことには気づいて欲しくなかった。

「すまない」

「わかってくれただけでも良いよ」

陸にも人としての心が在ったみたいだ。自分の非を認めてくれたよ。

「いい加減にしてよ二人とも!!」

「そうはいかないわ」

「そうです。支倉さんには負けたくありません」

それにして、どうして美波達はひばりに喧嘩を売るのがかな。

『それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者は前へどうぞ』
マイクを持った審判の先生に呼ばれ、僕ら四人はステージへと上がる。

お客さんの席は満員状態となり、中には立ち見している人がいる。

そんな大人気の中、僕らの四回戦は始まるうとした。

『えー、まず、皆さんにお知らせしたいことがあります』

壇上で挨拶をする先生が辺りをぐるっと見渡した。

『写真撮影はご遠慮ください』

さきほどからフラッシュの光が眩しく、シャッター音が絶え間なく聞こえている。

それもそうだ、壇上にはドレス姿の姫路さんと美波とひばりがいるんだ。

姫路さんのお父さんが『明日の決勝戦に来る』と言うことで、雄二が半ば強引に着せたんだけど、ここまでの反響だとは思わなかった。でも、たまに『アキちゃんー!!こっち向いてー!!』……とこんな声が聞こえるのはなぜだろう？

「これなら宣伝効果は抜群だね」

「そ、そうだね。でも恥ずかしいよ／＼!!」

と言ってひばりは顔を赤くして僕の後ろに隠れる様としている。

これで目標の一つ、焼き肉は達成できそうだ。

「そんなワケだから二人とも、しっかりと宣伝よろしくね」

「あ、あの……。やっぱり恥ずかしいです……」

体をまるめて俯いている姫路さん。耳まで真っ赤になってるし、これは相当恥ずかしそうだ。

「あ、アキは恥ずかしくないわけ!？」

美波も顔を真っ赤にしている。僕にしてはドレスなんて肌の露出も少ないし、そんな恥ずかしがることでもないんだけどな。

「け、結婚式は身内だけです」

「か、体のラインが出ないドレスを選ぶわ」

「う、うん。あたしも身内ですよ」

どうやら三人にとってはものすごく恥ずかしいようだ。おかげで宣伝のための声が聞こえない。

これは僕が頑張らないとね。

『四人とも、そろそろ良いですか?』

「あ、はい。それじゃあ」

僕が全員に目配せする。こくつと頷いた後、大きく息を吸い、片手を上にあげる。

「『『『試験召喚！』』』」

僕ら四人の声が綺麗に揃い、それぞれの足元に幾何学模様の魔方陣が現れた。

本来は手を上げたり、声をそろえたりする必要はどこにもない。一種のパフォーマンスだ。

この様子だけで観客席から小さな歓声があがる。

この試合から見始めた人にしてみれば、これだけでも充分に物珍しい光景なのだろう。

そして、本命の召喚獣が姿を現す。

「アキ、たっぷり可愛がってあげるからね」

ぶっそうなことを言う美波の召喚獣は、軍服姿で手にサーベルを持っているという所以外は、ポニーテールに気の強そうな目と、美波にそっくりだ。

ただし、身長は八十センチ程度。

このように、召喚獣は本人をデフォルメしたような格好になる。

「大丈夫ですよ、私のほうに來れば痛みもなく倒してあげますから」
多分だけど、本来隠すはずの阿修羅あしゅらの面をおつちよこちよいで表に出してしまっている姫路さんの召喚獣は、西洋の鎧に背丈の倍はあ

る大きな剣を軽々と持っている。

ピンクのウェーブがかかった髪は健在だ。

「だから、二人ともアキくんに出さないでよ！」

僕の事を心配してくれるひばりでも今の言葉は火に油を注いでるよ。

「手加減なしで行くからね！」

勝負に重要となるその点数はいまだ表示されていない。

特別に設置されている大型ディスプレイに表示する為、時間がかかっているのかもしれない。

『では、四回戦を』

審判の先生が開始宣言をしようとして

「ちょっと待ってください」

僕は止めた。先生は氣勢を削がれた形となり、少し不満げな顔をするけど罪悪感はあるけど今はこれが良いって陸が言っていた。

「はい？なんでしょうか？」

「ちょっとマイクを貸してください」

そう告げると、先生は少し考えてからマイクを渡してくれた。

さて陸が紙に書いていたことを読むとするか。

そう陸の作戦は、宣伝をすることだから。

(姫路さん、美波、ひばり。こっちに並んで。宣伝をするから)

(え？ あ、はい)

小声で三人を呼び、お客さんに向かい合うように整列する。

さて言うかな。

『 清涼祭にご来場の皆様こんにちは』

『 ここにいる僕ら四人は、色物のように見えますが本格的な料理をお出しする2-Fのウェディング喫茶で働いています。よろしければどうぞお立ち寄り下さい』

「 「 「 よろしくお願いします 「 「 「 「

四人+四匹がぺこり、とお辞儀をする。これで少しは2-Fのことが印象に残ったかな？

「 先生、マイクお返しします」

先生にもお辞儀をするのを忘れない。これも陸が言っていた作戦の一つだ。

『 さて、それではCMも終わりましたし、いよいよ召喚大会の始まりです。Fクラスの四人とも、良い試合をお願いします』

観客席から少しだけ笑いが起きる。告げ終わると、先生は少しだけ僕らと距離を取った。

「アキ、良い悲鳴をあげさせてあげるわ」

美波が僕らに対して余裕の笑みを浮かべている。

強敵となるはずの三年生がほとんど受験で参加していない今、彼女たちは優勝候補の一角となっている。

その余裕も当然の事だ。

だけど、そんな相手に僕らが特に雄二や陸が何の策も持たずに闘うと思う？

「美波、『油断大適』という言葉を知ってるかい？」

「アキくん、『油断大敵』だよ」

言葉は一緒なのに、漢字の間違いを声だけで読み取れるとは。幼なじみとはいえ恐れ入ったよ。

「美波、『油断大敵』という言葉を知ってるかい？」

「今のアキみたいな状況のことよね」

くっ、さすが美波。確かに油断した僕が悪かった。

でも陸や雄二の作戦を今実行する時だ。

「確かにでも甘いよ美波。美波達は確かに優勝候補だけど、それ故に勝ちあがってやることは簡単に予想できるんだよ。それなら、対策はいくらでも打てるというものだよ！」

そうその自信を砕いてあげるよ。そして大型ディスプレイに表示される向こうの点数。

『Fクラス 姫路瑞希 & Fクラス 島田美波
古典 399点 & 6点』

「こ、古典！？四回戦は数学じゃなかったの！？」

狼狽する美波。ドイツ帰りの彼女にとって、古典は鬼門なのだ。

「実は美波達に渡した対戦表だけだ」

僕は雄二みたいに悪者の笑みを顔に貼り付ける。

「アレはね雄二の手作りなんだよ」

「だ、騙したわねっ！！」

そうこれが学園長と『如月グランドパーク』チケット回収との約束けいやくで得た僕らだけのアドバンテージ『対戦科目の指定』。

一回戦ごとに毎回変わる対戦教科を雄二が好きなように選べるんだ。

美波たちに渡したのは対戦相手は本当のことを書いてやるけど、対戦教科はちょっとした手を加えてある。

これは対戦表を見た雄二が学園長に科目を指定した際に仕込んでおいた罠だ。

「ひばり。これで楽に勝てるよ」

「アキくん！！それは卑怯だよ！！」

「くっ！　なんて卑怯な連中なの！」

「ちょ、ちょっと待ってあたしはそんなこと知らなかったんだよ！」

卑怯？やれやれ何を言ってるのやらどうやらわかってないね。

「ふふつ。わかってないなあ美波はねえひばり？」

「な、何よアキに支倉。何が言いたいのよ」

「アキくん！？あたしまで巻き込まないで欲しいんだけど」

「良いかい、美波？」

「卑怯汚いは敗者の戯言たわごと」

「アキに支倉アンタらは最低すぎるわっ！」

「あ、アキくん？あたしが知らない間に何が在ったの？」

そんな卑怯な僕らの後ろにあるディスプレイに表示される点数。

『Fクラス 支倉ひばり & Fクラス 吉井明久
古典 135点 & 9点』

「……アキくん？」

「……正直、悪かったと思ってる」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「どうやらアキも坂本の手のひらに踊らされたようね」

反論できない。ひばりの憐れんだ視線が痛い。

「よし、ここは個人戦で行こう！ 僕は美波を受け持つから、ひばりは姫路さんを頼む！」

「う、うん。やる気がうせた気がするけど頑張る　！？　アキくん！　離れて！！」

突如僕の肩に来る衝撃。ひばりの召喚獣が僕の召喚獣を突き飛ばした。

「辞世の句を読む時間はお終いです」

フィールドの一部、さきほどまで僕たちの召喚獣いた所に巻き上がる砂塵。

風が煙を払い、その中心に見える姫路さんの召喚獣。

「それにしても、支倉さんは吉井君に近づきすぎです。やはりねっちり痛めつけられるのがいいですね」

言葉は穏やかに聞こえるが、その口調には感情など一切ない。

あるのは目の前の敵を倒すという本能だけだ。

「吉井君は……そうですね、お仕置きも加えまして吉井君もねっちりでいきますね」

戦闘態勢をとる僕の召喚獣を見て、彼女はそう呟いた。

彼女自身の目の色は見えないけど、召喚獣の目の色が若干赤くなっているように思える。

「瑞希！ アキの召喚獣をボコボコにして！ ウチはアキの本体をボコにするから！」

「わかりました！」

「わからない！ 二人の言っていることが僕にはさっぱりわからない」

「アキくん！ 考えるのは後だよ！ 今はわからず屋達に集中して！」

こうして本当に命を賭けた四回戦が始まった。

第三十八話 清涼祭初日その六（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第三十九話 清涼祭初日その七（前書き）

三連続更新

第三十九話 清涼祭初日その七

「姫路さん！どうして力技で解決をしようとするの！？」

「そうやって口がきけるあたり、支倉さんは余裕がありますね」

疾風の攻撃を繰り返す姫路さんの召喚獣に対し、ひばりは回避を捨て倭刀でダメージを最小限に抑えている。

でもどこまでもつかわからない。助けに行きたいけど、僕は。

「アキ！おとなしく殴られなさい！」

「美波！それは反則行為だよ！」

直接攻撃を仕掛けてくる美波を避け続けていた。

召喚獣はほつたらかしたから、会場の目は全て姫路さんとひばりの戦いへ。

反則行為を止めてくれる人は誰も居ない。

『反則はありません』

見てくれていたのは嬉しいけど、教育者としてそれでいいの！？

でもこのままじゃじり貧だ。仕方ない美波の攻撃を受けるけどひばりの援護に行かないと。

「おおおおおっ!!」

美波の攻撃をお腹に受け、それでも僕は姫路さんの召喚獣に接近させる。

轟音をたてて襲いかかる一撃をなんとかかわして、引き際に合わせ、姫路さんの召喚獣に飛びつかせた。

「くっくっ!!」

「吉井君、邪魔です!」

「アキ! なに抱きついてんのよ!!」

僕の両腕が痺れてくる。痛みフィードバックの影響だ。

僕の身体が痛めつけられる。こっちは主に美波の打撃で。

でも、この一瞬の痛みを耐え切れればひばりが止めを刺してくれる!

「ひばり!!」

歯を食いしばりながら、ひばりに合図を送る。

「うん。アキくんが作ってくれたこの瞬間を待っていたよ」

迫るひばりの召喚獣。振り上げた倭刀の目標は 姫路さんの召喚獣。

「離してください吉井君!!」

「そうはいかないよ。これが僕らが勝つための作戦だから」
そしてひばりの召喚獣が姫路さんに切りつけた。

何回も倭刀で攻撃をしたしかも急所を狙ったの攻撃だった。

「え？ あ、きゃあっ！」

「少しは反省をしなさい！！」

ひばりの召喚獣に最後の一撃を受けた姫路さんの召喚獣。

遅れること数秒、攻撃を受けた分減少した姫路さんの得点がディスプレイ表示される。

『Fクラス 姫路瑞希 & Fクラス 島田美波

古典 0点 & 6点』

さしもの姫路さんでも戦闘不能は免れなかったようだ。

地面に倒れこみ、ポンツと音をたてて消える姫路さんの召喚獣。

それを見届けた後、僕は美波の攻撃で気を失った。

「ひきょうもの」

「二人とも酷いです」

「あ、いや。あれも勝負だったからさ。ねっひばり」

「あれはあたしも卑怯だと思っよ!!」

二人の視線から逃れるようにひばりに話をふる。

でもひばりからもきついことを言われた。

「でも、アキくんは痛い思いしてるのにあたしを信じてくれたのは嬉しい／＼!!」

「ん？何か言った？」

「ううん。何でもなくてもあまり坂本君の影響受けないでね」

「やっぱりなんか悔しいです」

「そうね。もう二人だけの空間ね」

「やはりお仕置きが必要ね」

「だからどうしてわかってくれないの!？」

相変わらずのひばりの突っ込み。けど、これでよかったのかもしれない。

姫路さん抜きで優勝したほうが彼女のお父さんの印象がいいからね。

でも、美波はわかるけどどうして姫路さんも怒ってるのかな？

それから僕らは教室に戻って行った。

(アキ、本当に優勝できるの?)

(もちろんだよ、まかせておいて)

残る人たちはいずれも高得点者だけど、雄二や陸の策があれば負ける気がしない。

(それはそうと、本当に葉月に手を出そうとしてるわけじゃないわよね)

(大丈夫だよ。僕はAカップには興味はないんだ)

僕って意外と信用ないんだな。

「女は胸じゃないのに、……バカ」

「ん？ 何か言った？」

「べつに、あつ！あそこにいるの陸じゃない？」

再び長蛇の列となったFクラスの前で、列に並んでいる人に飲み物を配っているのは陸だ。

「なかなか盛況じゃないか」

「そっちも試合が終わったんだね。どっちが勝ったの？」

「ひばりだよ」「支倉ね(さんです)」「

「?同じチームなのに明久は負けたのか?」

不思議そうな顔をしている陸。

「それにしてもこんなに飲み物を配って大丈夫なのか」

「……………そこは完璧」

いつの間にか戻っていた雄二と秀吉。雄二に一枚の紙を渡すムツリ二。

世が世なら、殿様と忍者になっていたに違いない。

「ふむ、なるほど。陸、このまま続けてくれ」

「了解」

さっと目を通しただけで即座に判断する雄二。教室に入ると結構な数のお客さん。

さっきの試合での立ち回りは無駄じゃなかったようだ。

「あ！バカなお兄ちゃん！お客さんがいっぱい来てくれたんだよ！」

大会での痛みを吹き飛ばしてくれるような笑顔でトトトツと駆け寄ってくる葉月ちゃん。

「そつだね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとね」

「んにゃー。気持ちいいですうー」

「吉井。戻ってきたようだな。どちらが勝ったんだ？」

「ひばりだよ」「支倉ね（さんです）」「」

「？ 吉井は同じチームなのに負けたのか？」

とクラスメイトが不思議そうな顔をしていた。

ある意味負けたのは僕一人のような気もする。

僕らが優勝すれば美波と姫路さんの目的は達成されるわけだし。

「ほら、俺たちも突っ立てないで手伝っぞ」

「そつだね、もう一稼ぎしようか」

「ちょっと視線が気になるけど、売り上げのために頑張りますか」

「そつですね。あと少しです、頑張りましょう」

「そつだね、頑張ろうね」

雄二は受付で、僕と美波とひばりと姫路さんはホールで一汗流した。

第四十話 清涼祭初日その八（前書き）

四連続更新

第四十話 清涼祭初日その八

「それじゃ、準決勝に行ってくるね」

「頑張ってくださいね」

「アキ、負けたら承知しないからね!」

「今回は俺も見学に行くからな」

「海谷君も来るの?」

巫女服のまま付いてこようとする陸。吉と出るか凶とでるか。凶とでも残り時間が少ないから、僕もひばりも何も言わない。

でもひばりの目が怖いのはなぜなんだろう?

(アキくんなら巫女服が似合いそうだよ。……っていけない、いけない。集中しなくちゃ)

「それじゃ藤堂、後のことはまかせた」

「まかせておけ、へまはせん」

「うむ。ワシらも行くかのう」

「ああ。そつだな」

雄二達も出番が近いみたいだ。

『お待たせしました！ これより準決勝を開始したいと思います』

「じゃあ、頑張れよ」

「おうっ！」

「うん」

手を重ねてから僕ら、ステージへと歩み始める。

『出場選手の入場です！赤い入り口から来ますのが二年Fクラス所属・吉井明久君と、同じくFクラス所属・支倉ひばりさんです！』

拍手が沸く。ドクン、と少しだけ脈が速くなった。背中の汗で服がべたりと張り付いた。

『青い入り口から来ますのが三年Aクラス所属・夏川俊平君と、同じくAクラス所属・常村勇作君です！』

さて陸や雄二が言えっつていったことを言うとしよっ。

「センパイ方。もうセコい小細工はネタ切れですか？」

「それはこちらのセリフだ！ 夏川が闘えないから俺一人で戦ってきたんだぞ！」

モヒカン先輩の迫力に少し脅えるひばり。少し涙目の先輩からは苦勞が滲み出ている。

「だが、残念ながら夏川の調子は元に戻った。これで俺らに隙は無くなった」

そういつて掲げるのは一つの封筒。中央には円が描かれていてその中心には『ム』の一字。

「それはなんのつもり？ 金を渡すから僕らに負けてくれってことなの？」

「ちがう！ これはこう使った！」

そういつて封筒から取り出すのは一枚の写真。あれは陸の写真だ。

「ほら、お前の大好きな写真だぞ」

「コレ、リクチャンチガウ」

「ねえ、せ、先輩の相棒はいつから外国人になったんですか？」

ひばりが怯えてる。

「うるせえ！ お前にこいつの気持ちが分かるか？」

邪魔しちゃいけないと思って、ずっと声かけられなかったんだぞ！」

坊主頭が投げ捨てた写真は風の悪戯で僕の足元へ。

この写真は回収してあげた方がいいよね。

ひょいっと拾い上げる。

うん、さっきと同じ。更衣室で着替えをしてる陸の顔のアップ。

あれもう一枚ある。これは更衣室で着替えをしてる僕の顔のアップ。

首元に見える白い鎖骨がとても健康的に見える。

幻覚ではないようだ。

「あ、アキくん！？ アキくんまでどうしたの！」

「ひばり。僕は雄二のせいでお嫁にいけないよ」

「いや、アキくんはお嫁では無くてお婿だよ！！」

ひばりは心配してくれてるけど僕と陸の人生はどうなるのかな。

『あのーそろそろ始めてもいいですか？』

審判役の先生が僕らの間に立つ。なんとか気力を振り絞って僕はゆっくりと立ち上がった。

「「「「試験召喚」」」」

掛け声をあげ、それぞれが分身を喚び出した。向こうの装備はオーソドックスな剣と鎧。

高得点者の召喚獣らしく、質はかなり良さそうな物に見える。

『Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平
日本史 209点 & 197点』

確かにAクラスに所属しているだけのことはある。点数はかなりもつと言えるだろう。

ここまでの得点だと見掛け倒しではなくかなりの強さのはずだ。

この二人、本当に勉強が出来るみたいだ。

「先輩。一つ聞きたいことがあります」

「あんだ？」

「僕らを妨害しようとした理由はなんですか？」

陸からこの話を聞いたとき、一番初めにこの事を聞きたいと思った。

飴がなければチンピラは働かない。

「なんで、そのことを知ってるんだ」

「べつにいいでしょ。で、どうなんですか？」

あくまで感情は隠す。そうしないと今にも殴りかかってしまいそうだから。

「ふん、教えるつもりはねえ」

「……………のため……………ですか？」

「ああ!？」

「他人のために僕たちを妨害したのか、と聞いているんです」

「ああ、そんぐらいだったら言っただけでやるよ。他人のためになんて働いてたまるか!！」

よかった、これで心置きなくブツ倒すことが出来る。

『Fクラス 支倉ひばり & Fクラス 吉井明久
日本史 140点 & 166点』

「なっ!？」

点数が表示されたディスプレイを見て、モヒカン先輩の顔色が変わった。

警戒の色が遠くからでも伺える。

「あれ、坊主頭のセンパイどうしたんですか？」

坊主の先輩は僕らを見て震えている。でもなんだろう、目線が僕ら

の後ろ見ているような。

「リクチャンガイル」

「「りくちゃん？」」

僕らの後方を振り向くと、巫女服姿の陸がいる。

そんな僕らの視線に気づいたのが、ヒラヒラと手を振ってくれた。

「テ、フツテクレタ！」

僕らは相手と一瞬で距離を取った。

坊主頭のチンピラが子供みたいにピョンピョンと飛び跳ねるのは気味が悪い。

あつ、モヒカン先輩も少し離れてる。

「イトコロミセタイ。ダケド、アキちゃんはリクチャンの従姉。従姉倒す。りくちゃん悲しむ」

抑揚のない言葉が元に戻っていく。瞳に禍々しい光が宿り、坊主先輩が叫んだ。

「常村！ 俺は支倉を倒す！ お前は吉井を倒せ！！」

「夏川！ オーケー、行くぞ！！」

試験召喚獣が獲物を構える。戦闘開始だ。

先に動いたのは坊主先輩。姫路さんの召喚獣よりも遅いけど、それでも僕らにとっては充分速い。

「夏川！ 一人で突っ込むな！」

だけど、モヒカン先輩は動き出すのが遅れたせいで、坊主先輩が突出した形になってしまった。

これは大チャンスだ！

「ここは僕が防ぐ。ひばりが迎撃して」

僕の召喚獣がひばりの前に立つ。しかし、坊主先輩は攻撃せず止まった。

どうやら本気で僕には攻撃をしないようだ。ならば、防御を崩すだけだ。

「これでどうだ！」

「攻撃はしない」

よし隙が出来た。

「今だね！」

ひばりの召喚獣は僕の召喚獣を飛び越え、頭上から倭刀を振るう。

「きゃあっ！」

しかし坊主先輩は剣ごと投げて態勢を崩したひばりを投げ飛ばした。

そんな手を使ってくる思わなくて僕は啞然としていた。

攻守交替。追いついたモヒカン先輩の剣が倒れているひばりを襲う。

「ふっ！」

「きゃあっ！」

モヒカン先輩の召喚獣が剣を振るう。ひばりはなんとか転がって避ける。

僕はひばりの援護に行きたいけど、

「邪魔をするな！」

「何度でも言う攻撃はしない」

守備に徹した先輩を倒すのは厳しい。少しづつ得点を削っていくけど、それも微々たる物だ。

本当に僕に攻撃はしないらしい。

木刀を振るう腕が痛くなってきた。

「夏川！」

「アキくん！ 行ったよ！」

接近してくるモヒカン先輩の召喚獣と、それに数歩遅れてくるひばりの召喚獣。

本当に僕を攻撃しない坊主先輩を見て焦ったんだろう。

「舐めたまねを……！ 最初からこの勝負だけに絞ってやがったな」

「うん。先輩達を倒すにはこれしか無いって海谷君も坂本君も言うてたよ」

相手が大きく跳び退って距離を取る。

目標はモヒカン一人。坊主を残しても僕には攻撃して来ないから脅威ではない。

「夏川！ 吉井を攻撃しろ！」

「結婚後に支障をきたすからダメだ」

そのかわり別の脅威を感じる。

「ひばりっ！」

「うんっ」

僕は召喚獣を走らせる。ひばりもその陰になるように召喚獣を走らせる。

「舐めるな！」

迎え撃つモヒカン先輩の召喚獣が剣を振り下ろす。対する僕の召喚獣は防御も回避もしない。

ただ一直線に敵に迫る。

「もらったあ！」

その剣が僕の召喚獣の首を切断する。その時、

「白羽取りだと!？」

僕は剣を捨てモヒカン先輩の武器を押さえつけた。戻そうとしても渾身の力で押さえつける。

「行くよ！」

ひばりが僕の召喚獣の上から飛び掛る。

しかし、それを防ごうと夏川先輩が同じようにモヒカン先輩を飛び越えて斬りかかる。

加速のついたひばりの倭刀と、坊主先輩の召喚獣の剣が衝突する。

結果は相殺。

どちらも同じ分だけ得点を減らした。

「なんだっ!？」

スポットライトの光を遮り落ちてくる一つの物体。それは木でできていた刀だった。

「最初からこれを狙っていたのか!？」

「流石陸と雄二だね!」

そう僕らの本当の狙いは、自分は狙われないと心のどこかで思っている坊主先輩の油断。

左腕を振り上げ、落ちてくる木刀を掴む。

「扱いに慣れていない割にはうまいじゃないか」

「アキくんのフォローしてたら出来るよ」

そしてそのまま坊主先輩の頭に向かって木刀を振り下ろした。

吸い込まれるように相手の頭に直撃する。一閃。

スポットライトが剣の軌道を光の色で描いていた。

ポンッ

坊主先輩の召喚獣が音をたてて消え去った。

「な、夏川！」

モヒカン先輩がうるたえる。だけど、余所見する余裕なんてあるの？

「だめですよ先輩。戦闘中に相手から目を離しちゃ」

「しまっ」

剣を掴んでいた腕を離し、すぐさま無防備な顎を突き上げる。

「流石アキくん」

そして空中にいたひばりが落下しながら木刀を突き刺す。

ポンッ。さきほどと同じ音をたててモヒカン先輩の召喚獣が姿を消した。

『支倉・吉井ペアの勝利です！』

「勝ったよひばり！！」

「うん。そうだねアキくん」

腕は痺れ、体には無数の痛み。だけど心の中は清しい気分だった。

さて雄二の方に行かないといけないな。

「ひばり行くよ。雄二達の方に」

第四十話 清涼祭初日その八（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第四十一話 清涼祭初日その九

あれから僕達は急いで雄二のところに向った。

そして会場では。

「大人しくギブアップしてくれると嬉しいな。弱い者いじめは好きじゃないし」

「くうっ……！」

「す、済まぬ雄二よ」

どうやら雄二の作戦は失敗していたようだ。

「ど、どうしよう。このままじゃ負けるよ」

そうひばりの言う通り。正面で戦っても勝てない。

仕方ない僕がどうにかしよう。ポケットから陸が作ってくれたボタンの型のトランシーバーを出して雄二に送信した。

ちなみに試しに使ったときはやっぱり爆発をした。その時の陸の顔は最高にいい笑顔だった。

(雄二、僕に考えがあるから、指示通りの台詞を言ってほしい)

(考え？一体何を)

(今は迷ってる余裕なんてないよ。とにかくよろしく!)

(お、おう)

よし、これで行ける。念のためひばりにはこっちに来てもらった。

(翔子、俺の話を聞いてくれ)

「翔子、俺の話を聞いてくれ」

(お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ)

「お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ」

僕の指示通りに、雄二は棒読みにならない様気を付けてセリフを合
わせてくれる。

「……………雄二の考え?」

(俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張っ
てお前と幸せになりたいんだ!)

「俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張っ
てお前と幸せになりたい……………って、ちょっと待て!」

「……………雄二」

雄二が僕の方を慌てて向こうとするが、ムツツリー二によって助け
られた秀吉が強引に頭を押さえつける。

一方、霧島さんは雄二の台詞に、うつとりとした表情を浮かべ始めた。

（だから、ここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう）

「だっ、誰がそんな事言うかボケえッ！！」

仕方ないな僕は秀吉に陸特性スタンガンを投げた。

秀吉はそれを受け取ると雄二の首に最大出力でおしつけた。

「ゆるせ」

「くへっ！？」

「……雄二？」

続きの台詞を待ち望む翔子に、僕はひばりに目配せ。

（頼むよひばり）

（はあ。仕方ないな）

僕の頼みでひばりはしぶしぶ手伝ってくれた。

「だからここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう。愛している、翔子」

本人と区別がつかない声帯模写で、最後の台詞が紡がれた。

指示していないセリフまで追加となっていたが、この際はと誰も気にしなかった。

「……雄二、私も愛している」

「ま、待て……俺は、愛してなど……こぺっ!？」

再び秀吉の攻撃で雄二は、そのまま黙らせた。

「ふむ。これでわしらが有利じゃのう姉上!」

「ひ、卑怯な……!」

霧島さんは雄二の亡骸に抱きつき、戦意喪失。

だが雄二の方も力なく頂垂れており、とても戦える状態にない。

「でもアタシ1人でも秀吉に負けないわよ! 行くよ……サモン試獣召喚
!」

「残念ながら姉上よこの勝負の科目が保健体育だった事を恨むのじやな!」

さて、ムッツリーニ頼むよ。

と言うとムッツリーニは秀吉の傍に隠れていた。

「行くぞい、サーモン(新巻鮭)!」

(………サモン(試獣召喚))

「え！？ それ、土屋君の……！」

これぞ秘策『代理召喚（バレない反則は高等技術）』である。

（……………加速）

「ほ、本当に卑怯……………きゃあっ！」

一撃で仕留め、勝負が決まった。

『2 - A 木下優子&霧島翔子 保健体育321点&UNKNOWN

』^N

VS

『2 - F 土屋康太&木下秀吉 保健体育521点&UNKNOWN

』^N

「うむ！ ワシらの勝ちじゃのう！」

秀吉は高らかに勝鬨を上げていた。

「……………ただ今の勝負ですが」

「霧島よ、ワシらの勝ちで良いのう？」

物言いがつきそうなところを、秀吉が遮った。

「……………それは」

「翔子、愛してる）byひびり）」

「……私達の負け」

「……わかりました。坂本・木下ペアの勝利です!」

観客は冷めた目でそれを見ていた。

それもそのはず、召喚獣の勝負を見に来たのにこの終結では、しらくてもしょうがない。

増して、先程が接戦だっただけに、その差は激しい。

「それじゃ、ワシ等はこれで」

ブーイングが出る前に、僕たちはさっさとその場を後にした。

「明久よ、中々の機転であったのう」

「……作戦勝ち」

「でも、アキ君に木下君に土屋君。次は実力で勝つべきだよ」

「うん。ひばりが言いたいことはわかるよ。でも今はひばりや秀吉、ムッツリーニのサポートがあったからだよ」

「うむ。そうじゃのう。じゃが、手加減はせんぞ? 明久に支倉よ」

「それはこちらのセリフだよ秀吉。そうだよねひばり」

「うん。そうだね／＼!」

「ふむ。さてわしらも戻るかのう」

「……（コクコク）」

「そうだね」

「うん。頑張つて動かないとね」

「ところで、雄二はあのままにしておいていいのの？」

「別にいいんじゃない？」

「じゃが、霧島が雄二に一服盛つて、持ち帰ろうとしておつたので……」

「霧島さん！ 雄二にはまだ決勝があるから、薬は勘弁して!!」

僕が引き返してみたのは、うつろな目をしながらタキシードに着替える雄二の姿だった。

第四十二話 清涼祭初日その十（前書き）

連続投稿

第四十二話 清涼祭初日その十

「明久、今日という今日はオマエを殺す！」

「あはは。やだなあ雄二、目が怖いよ？」

あの後、僕は腹を殴りクスリを吐かせた上で冷水につけたら。それにより、雄二は正気を取り戻し今に至る。

ちなみに秀吉とひばりとムツツリー二は、喫茶店があるのでその間に帰って行った。

「だいたい、雄二の作戦が読まれていたのがいけないんじゃないか。相手はあの霧島さんなんだから、充分考えられた事態だと思うよ？」

「ぐっ、それを言われると反論できん……」

やはり雄二は霧島さんの事を意識しているようだね。

「ところで、姫路や島田や支倉は教室にいるのか？」

「え？ まだ確認してないけど、いるんじゃないの？」

いきなりの話題に、僕はは少々戸惑う。

「多分、そろそろ仕掛けて来る筈だと思うんだが……」

「え！？ ……まっまさか、姫路さん達に！？」

「……………雄二」

教室の前まで行くと、ドアの前に立っていたムッツリーニが駆け寄ってきた。

「ムッツリーニか。何かあったのか？」

「……………ウエイトレスが連れて行かれた」

「ええっ！？ 姫路さん達が！？」

予想外の事態に、僕は驚きの声を上げた。

「やはり俺や明久と直接やりあっても、勝ち目がないと考えたか。当然と言えば当然の判断だな」

雄二は勉強をサボっていた分体を鍛えまくっており、中学時代は“悪鬼羅刹”と異名を持っている。

「ってそんな事より、姫路さん達は大丈夫なの！？ どこに連れて行かれたの！？ 相手はどんな連中！？」

「落ち着け明久、これは予想の範疇だ」

「え？ そうなの？」

「ああ。もう一度俺達に直接何か仕掛けてくるか、あるいはまた喫茶店にちよっかい出してくるか、そのどちらかで妨害仕事を仕掛けてくると予想できたからな」

「何だか、随分と物騒な予想をしてたんだね？」

「陸の様子と気になるところがあったからな」

「……………行先はわかる」

と言って、ムッツリーニが取りだしたのはラジオの様な機械。

「何それ？ ラジオみたいに見えるけど？」

「……………盗聴の受信機」

「オーケー、あえて何でもってるかは聞かないよ」

「さて、場所が分かるなら簡単だ。かるくお姫様達を助け出すと
しましうか、王子様？」

と、雄二はニヤついた目つきで僕を見つめた。

「そのニヤついた目つきは気に入らないけど、今回は感謝しておく
よ。」

姫路さん達に何かあったら、正直召喚大会どころの騒ぎじゃないか
らね」

「……………それが向こうの目的だろうか」

「え？」

「さて、作戦だが、ムッツリーニはタイミングを見て裏から助けて
やってくれ」

「……………わかった」

「となると、俺達、特に明久のやる事は1つだな」

「ああ。そう言う事だ」

僕がそれを聞いて、不思議そうな顔をする。それといつの間にか陸とマーナが来ていた。

「それってどういう事？」

「王子様の役目は、昔から決まってるだろ？」

「え？ それって？」

「お姫様をさらった悪者を退治する事さ」

カラオケシヨップ

『さて、どうする？ 坂本と……………吉井だったか？ そいつら、この人質を盾にして呼びだすか？』

『待て。吉井つてのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。坂本は中学自体は、相当鳴らしていたらしいしな』

『ああ。出来れば、事を構えたくはないんだが……………』

『気持ちは分かるが、そうもいかないだろ？谷さんの依頼は木下秀吉と支倉ひばりを含めたその4人を、動けなくする事なんだから』
ムツツリーニの持っていた受信機からの、音楽に混じって聞こえる会話。

それを聞いて、3人＋一機は顔を見合わせる。

(雄二に陸、この連中って)

(黒幕に依頼されたその辺のチンピラじゃないのか?)

(しかし、俺達を狙ってって……秀吉までどうして?)

ムツツリーニに案内された先は、文月学園から歩いて5分程のカラオケボックス。

そのパーティールームに、連れていかれたらしい。

『お、お姉ちゃん……』

『アンタ達！ いい加減葉月を離しなさいよ！』

泣きそうな葉月の声と、美波の怒鳴り声が次に響いてきた。

『お姉ちゃん、だつてさ！ かつわいいー！』

その声を聞いて、明久が今にも部屋に入りそうな勢いになる。

(待て明久、勝手に行動するな)

(まずは人質の救出が優先だ。ムッツリーニがうまくやってくれから、それまで待ってる)

(……わかったよ)

『……灰皿をお取り換えいたします』

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？ ヤっちゃっていいの？』

『だったら俺は、コッチの巨乳チャンがいいなー！』

『あつ、ズリー！ それなら俺、2番目ね！』

明久のボルテージが上がる中、雄二は明久を抑える。

俺は準備をしていた。

『ちよつと、やめなさいよ！』

『あーもう、うっせエ女だな！』

ドン、という突き飛ばした音と、美波の悲鳴。

そのあと、まるで何かがテーブルを巻き込んで倒れたような音。

ガチャッ！

「おじやましーす

キックを顔面に叩き込んだ。

「テメエら、良くも美波達に手をあげてくれたな！ 全員ぶち殺してやる！！」

「コイツ、吉井って野郎だ！」

「どうしてここが！？」

「とにかく、来ているならちよつど良い！ ぶち殺せ！！」

「それは無理の話だな」

俺は、明久を殴った奴を蹴っ飛ばした。

「うっ裏切るのかよ！海谷！？」

「それはこちらのセリフだ。俺の知り合いに手を出したら報復すると言ったはずだ」

「やれやれ……このアホウが、少しは頭を使って行動しろってーのっ！！」

「げぶっ！」

「貸しイチ、だからな？それといい加減隠し事なしにして欲しいがな」

その傍らで、向かって来た相手を壁に叩きつける雄二。

そう言いながら、更に他の奴に拳をたたき込み、今度は膝を鳩尾にめり込ませる。

「で、出たぞ！ 坂本だ！」

「坂本まで来ていたのか！」

雄二を見て、チンピラが浮足立つ。

「坂本よお、このお嬢ちゃんがどうなってもいいのなあ？」

向こうの1人が、葉月を羽交い絞めにしていた。

「良いか？ 大人しくしているよ？ さもないと、ヒデエ傷を……」

「……………」

「負うのはお前」だ

「あがあっ！」

羽交い絞めにしていた男は、後ろ頭を抑えると同時に白目をむいて倒れた。

その相手の後ろにクリスタルの灰皿を振り切ったポーズで立っている、バイトのフリして先に侵入していたムッツリーニ。

「お、お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

「葉月っ！ よかった……怖かったよね……？」

「吉井君っ！」

解放された葉月を美波が抱きしめ、姫路が腕を広げて駆け寄って行く。

「姫路さん！」

「吉井い！ ヤスオをよくも！」

それに備え、明久が腕を広げて構えた所に来たのは、チンピラのパンチだった。

「うわーっ……」

「な、何だこいつ？ 血の涙流してるぞ……？」

鬼気迫る雰囲気、そのチンピラをしばき始める明久。

「姫路さん、ちょっと待ってて！ こいつをシバき倒した後でもう一度……」

「島田に姫路、支倉も先に戻っている！」

「雄二！ キサマまで僕の邪魔をするのか！？」

「落ち着け明久、この場合しようがないだろ？」

「くははははは！ それにしても、ちょうど良いストレス発散の相手が出来たな！ 生まれて来た事を後悔させてやるぜええッ！！！」

「あーあ、雄二の奴完璧キレてやがる。タイミングが悪かったな」

「確かに、霧島さんに追い詰められてるこのタイミングで、雄二とケンカするなんてね」

同情するような言葉だが、その中に情はこめられていない。

なぜなら言葉とは裏腹に、自分達も今痛めつけている相手に容赦の念を込めず殴りつけているからである。

誘拐騒ぎも一段落。

喫茶店の1日目が終了したFクラスにて、明久と雄二、陸と秀吉。

そして……。

「で、あたしもいる必要が在るの？」

ひばりも教室にいた。

「まあ待て。もうそろそろ来る頃だ」

「？ 来るって、誰がじゃ？」

「ババアだ」

「？ 学園長がわざわざここに来るの？」

「ちょっと待ってよ、アキくん達なんて事を言うの!?!?」

普通に考えて、その場にいないとは言え学園長をババア呼ばわりなど褒められた事ではない。

というより、普通にババア＝学園長で通じる事に、流石にひばりも驚いた。

「そう言えばさっき、陸が何か話しておったのう？ あれはその事かのう」

「話ねえ……ダメだよ雄二、一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこつちから行かないと」

「アキ君、一応は余計だよ？」

敬意もなくでもない態度に、ひばりは突っ込む。

だが、誰一人気にする事もなく、話は続く。

「用事もくそも……この一連の妨害の原因は、あのババアと陸にある筈だ。事情を説明させないと、気がすまん」

「ババアと陸に原因が……えええっ!？」

「何じゃと!？」

「ちよつと待つてよ。誘拐騒動と？ それに学園長がらみって、アキくん達一体何をしたの!？」

「あ、あのババア！ 僕等に何か隠してたのか！それに陸も隠して

たのか!!」

明久も怒りを隠せなかった。

その所為でひばり達が危険な目に遭った。

仲間の命運がかかっている以上、文句を言わないと気が済まないよ
うだ。

「……やれやれ、態々来てやったのに、随分と御挨拶だねえ、ガキ
共が」

「あつ、がつ学園長！」

ひばりと秀吉は立ち上がって礼をする。

「来たかババア」

「出たな、諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

「……ねえ木下君、あたしがおかしい訳じゃないよね？」

「寄寓じゃの、ワシもそう思っておった処じゃ、支倉よ」

蚊帳の外のひばりと秀吉は、そのまま黙る事にした。

「確かに黒幕ではないだろうが、俺達に話すべき事を話してないの
は十分な裏切りだと思うが？」

「ふむ……やれやれ、賢い奴だとは思っていたけど、まさかアタシ達の考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初に取り引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。

もつと高得点を、例えば木下優子や霧島翔子の様な高得点をたたき出せる優勝候補を使えば良いからな」

雄二の言葉を聞いて、学園長は周りを見回し支倉の姿に気がついた。

「ん？ ああ、あんたが転校生の支倉ひばりかい？ 何でここにいるさね？」

「騒動に巻き込まれたことと。俺がいるように頼んだ」

学園長は成程ねと頷いた。

「話に戻るけど、そうだよな。優勝者と準優勝者に、後から事情を話して譲って貰うとかの手段も取れた筈だし」

「なのに、俺達を擁立するなんて効率が悪すぎる。陸、説明してやれ。構わないだろ？」

「……ああ、構わないさ」

雄二の言葉に、学園長は頷いた。

それを見て陸はひばりと秀吉に事情説明。

「学園長先生に呼ばれた用事というのが副賞の回収することなんだね」

「そう言う事だ」

「なるほどのう。陸自身が出れないからワシや支倉を参加させたのじゃな？」

「そう言う事だ。あの時俺がババアに1つの提案をしたのを、覚えてるか？」

話が終わった処で、雄二が割り込んできた。

提案とは……

「科目を決めさせろってヤツかい？ 成程ね、あれでアタシを試したってわけかい？」

「ああ。めばしい参加者全員に、同じような提案をしている可能性を考えてな。

もしそうだとしたら、俺達4人だけが有利になるような話には乗ってこない」

「そつだよね」

そつつまり、この4人が決勝に出なければ学園長や俺が困ると言う事。

そして、俺達が困らなければならぬ連中が居る事につながる事も、その4人の周りに起きている。

「じゃあ学園祭の喫茶店ごときで営業妨害（？）が出たり、陸が命じられた食料に薬をばらまこうとしたりしたのは、僕達が勝ち上がっては困る奴がいるってことなの？」

「ああ。それに何より、俺達の邪魔をしてくる連中が姫路たちを連れたのが決定的だった。ただの嫌がらせなら、ここまではしない」

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったのか……すまなかつたね」

と言うと、突然学園長が明久達に頭を下げて来た。

その姿に、明久達も驚きを見せる。

「アンタ達の点数だったら、集中力を乱す程度で勝手につぶれるだろうと最初は考えていたのだろうけど……目論見が完全に潰されて、焦ったんだらうね」

「さて、ここまでであった以上話して貰います？ 陸達が僕達を選んだ真の目的を」

「はあっ……アタシの無能をさらすような話だから、出来れば伏せておきたかつたんだけどね……」

だから、誰にも公言しないでほしい。

そんな前置きをする学園長。

「無能？　じゃあアンタの目的は、チケットじゃなくて腕輪か？」

「そうさね。アタシにとって、企業の目論見なんてどうでもいいのさ」

腕輪とは、優勝者と準優勝者に贈られる2種類の腕輪。

優勝者には、テストの点数を二分して2体の召喚獣を同時の呼びだせる腕輪。

そして教師なしで立会人になり、科目指定をした上での召喚用フィールドを形成できる腕輪。

その2種類の“白金の腕輪”

準優勝者には、敵の召喚獣を動けなくする腕輪。

そして自分の点数を相手に与える腕輪。

「そうさ。その腕輪を、アンタ達4人に勝ちとって貰いたかったのさ」

「僕たちが勝ち取る？　回収してほしい訳じゃなくて？」

「あのな……回収が目的だったら、陸達が俺達に依頼する必要ないだろ？　そもそも、回収なんてマネは極力避けたいようだからな？」

「ねえ雄二、どういう事？」

理解できなかったのか、明久が疑問を投げかける。

俺は呆れるように、かみ砕いて説明。

「新技術は使つて見せてナンボだつてことだ？ デモンストレーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体疑われる、だから俺達は避けたいんだ」

「陸の説明の方がわかりやすいね」

「お前の頭が悪すぎるだけだ！ で、どうして俺達じゃないとだめなんだ？」

「……欠陥があつたからさ」

苦々しく顔をしかめる学園長。

技術屋にとって、新技術の欠陥は耐え難い恥であり、それを生徒に明かすのだから無理もない。

「欠陥？ どんな欠陥です？」

「入出力が一定水準を超えると、暴走を引き起こすんだよ。だからアンタ達が使つなら、暴走は起らずに済む」

「成程な、だから得点の高い優勝候補を使わず、俺達みたいな“優勝の可能性を持つ低得点者”がババアにとっては一番理想的だったってことか」

「ああ。そつだ」

「えーっと、つまり……?」

「つまり白金の腕輪も大空の腕輪も、バカにしか使えないってことだ。そしてババアと陸が選んだバカが俺達って事」

「何だとババア!!それと酷いよ陸!!」

「説明されぬとわからん時点で、否定できないと思うんじゃないか?」

秀吉のツッコミで、明久は苦々しい顔をした。

「とりあえず、召喚フィールド作成の方と譲渡の方と捕縛の方はある程度まで耐えられるんだけどねえ……もう片方の同時召喚用は、現状だと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは出来れば吉井専用にと……」

「それと、召喚フィールド作成の方は点数が高い雄二に持っていた方が都合がいい」

「あのさ、これはほめられてると取っついていいんだよね?」

「何を聞いてたんだよお前は? 平均点程度で暴走する可能性があるって事は、それ以下のバカにしか使えないってことだろ?」

「何だとババア!!」

「いい加減自分で気づけ!! それより、そうなると黒幕の正体は大体絞れてくるな。黒幕は教頭だな。そうだと陸」

「やはり気づいていたか。明久にもわかりやすく言っていると、腕

輪の暴走を阻止されたら困る奴ら。つまり文月学園に生徒を取られた他校の経営者ってことになる。それと、教頭の竹原も関与してる」

その言葉に、全員の視線が陸に集まった。

「俺やババアも教頭が黒幕だとわかっていて泳がしていたんだ。それに俺に自分の方に付けと言っていたからな」

「その通りさね。だからこいつに教頭の竹腹に言い逃れを出来ないように証拠を集めてもらっていたのさ」

「となると、ワシ等の邪魔をしてきた例のチンピラは……」

「教頭の差し金だ」

明久はふむふむ、と頷いてみてふと思う。

「あのさ……じゃあ僕たちは、文月学園の存続が掛かった問題に巻き込まれてたって事？」

「そうだ。試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われているシロモノだからな。そんな状態で暴走なんて問題が起きたら、学校その物の存在意義も問われる」

「騙していた事はすまなかったね。だが、目的は既に達成はされているんだ。このまま何もなければ、全てはまるく収まるんだよ」

確かに表向きは、既に目的は達成された。

だが、このまま向こう側が黙っているとも思えない以上、用心に越

した事はない。

それにしても雄二の奴はどこまで気づいているんだ。

「それじゃ、聞きたい事は聞けたし、もう帰ろう」

「そうだな。家に帰ってやる事もあるし……それに明日も早いしな」

「それじゃアタシは学園長室に戻るとするかね」

学園長が静かに椅子から立ち上がる。

「3人とも、学園長としても個人としても、礼と謝罪をさせてもら

うよ」

「はい」

そう言つと、学園長は出て行った。

「さて、そろそろ教えてくれないか陸？」

「そつだよ。僕達は友達なんだから信頼してよ」

そつ簡単には終われないか

第四十二話 清涼祭初日その十（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第四十三話 清涼祭初日その十一

「信頼してるから教えたくないこともあるんだぜ」

「でも、一人だけでどうにか出来なかったからこうなったんだ。最初から相談をしていたらこんなことにはならなかったんだよ!!」

明久が怒っていた。

無理もない。クラスメイトや幼なじみを誘拐されたんだ。

はじめをつけるため一発は受けるつもりだし。

「そうだな。だからこそ教えたくないのが俺の本音だ」

「いい加減にしろ!!お前は何恐れているんだ?自分が有名な科学者とばれるのが怖いのか?」

「……そんなことで恐れはしない。だがあいつの事を言えば間違いなく巻き込まれるだから言いたくないんだ!!」

「じゃが、ワシらはもう巻き込まれてると思っつのじゃが?」

そう確かに、薬を持ち込まれたうえ危うく第惨事になりかかった。

確かに巻き込まれたと言えなくもない。

でも、いや遅かれ早く奴は来るだろう。ならば覚悟をするか。

「……カル ラ エラーに聴き覚えがあるか？」

「「「???」」」

「どうやら支倉や明久に秀吉は知らないようだな。」

「聞いたことはある。確か狂った科学者とニユースで言ってたな」

「ああ、そいつは俺と同じレベルの男でな薬に関してはあいつの方が上だ。専門だからな」

「ねえ、それと陸が言いたくないと言う事とどういいう関係があるの？」

「簡単な話だ。そいつが教頭と手を組んでるからだ。そしてそいつは俺と友達だったからだ」

「「「え!？」」」

明久達は驚いていた。

「なるほど。その薬を調べてわかったと言うわけか」

「正確には知り合いからの連絡で日本にいる事はわかっていた。ただ手を組んでいるのがわかったのはその薬とチンピラの言葉だ」

「でも、どうしてカル何とかと友達だった事と話したくないとつながるの？」

「明久。普通どんな効果が出るかわからない場合明久だったらどう

やって調べる」

「雄二で試す」

「だろうな。俺なら明久で試す」

「お、お前ら本気で言ってるのか？」

「」「おっ」

「すまない。聞く相手を間違えた。秀吉や支倉ならどうする」

「そうじゃのう。動物実験で試してから自分もしくは被験者で試すのが普通じゃのう」

「あたしも同じ意見だよ」

「俺だってそうだ。だがあいつは必ず作ってから同僚や被験者で試す。しかも無理やりにするんだ」

「それって犯罪じゃないの？」

「犯罪そのものだ」

「なるほど。どうして俺達に教えたくないか見えてきたぞ」

「どっぴいっぴいとっ」

「つまりのう。カル ラと言う男はワシらで実験する可能性が在るからじゃ」

「海谷君はあたし達を巻き込ませないために暗躍をしていたと言うことだよ」

「付け加えるのならそのことを教えれば俺達が警戒しまくって喫茶店がうまくいかなくなる可能性が高いからだ」

「え、えっと」

「簡単に言えば奴は俺に余計なことを言つと学園全員を殺すぞと言ってるのさ」

「ふむふむ。って大変なことじゃないか。どうして警察が動かないのさ」

「そんなことをすれば文月学園は大ダメージを受ける。だからあいつにとって最高の隠れ家と言うわけだ」

「……それでどうするつもりなんだ」

「ああ。そのことだが明久達が戦ってる間に奴を見つけて捕えるしかない」

「危険なやり方じゃのう」

「仕方ないさ。向こうは俺の行動を把握してるし俺も奴の行動を把握している。もっとも今も同じならの話だがな」

「勝算はあるの？」

「正直に言えば0に近い」

「だがそれを実行するしかないということか」

「ああ。残念ながらそうだ」

「じゃがどうして大会中に捕える必要が在るのじゃ大会が終わった後でも探せると思うがのう」

「残念ながらそれじゃ遅いんだよ。ここから先は俺の予想だが間違いはないだろうな」

「どうということだ」

「それはな。この薬の名前は暴走Xだ。今でこそ液体だが開発した当初は錠剤だったかな」

「そ、それって!?!」

「ああ、奴は間違はなく大会の最中の最も興奮しているときに薬を気体にして風に乗せてばらまくだろうな」

「解毒剤はないの?」

「錠剤の時のはある。それに液体のサンプルが在るから作れなくもない。ただ」

「時間が足りないんだな」

「それに効くかどうかもわからないのじゃな」

「ああ。さらに改良されてる可能性が高いな」

「それってつまりもういらなから陸にあげると言うことなのかな」

「その可能性が高いな」

「やれやれ。学園の危機だけかと思っただらとんでもないことに首を突っ込んでしまったな」

「今からでも引きかえせるぞ」

「ああん。何を言ってるんだ。面白くなってきたぜ。それに陸に貸しが出るんだ。」

最後まで乗っかるぜ」

「そうじゃのう。ここまで聞かされておめおめと引き下がれんのだ
や」

「そうだよ。陸の信頼に応えるためにも頑張るよ」

「……アキくん」

「無理強いはしない。今日一晩考えてから答えを出せ。正直に言えばこちらの方が圧倒的に不利だ。」

学園に行かず家に隠れてる方が利口だと思っがな」

「じゃがのう。ワシらだけが助かるのは嫌なのじゃ」

「そうだよ。陸の事だから命を掛けてでも被害を抑えるだろうから

ね

「そう言うことだ。俺達に関わったことが不幸だと教えてやるうぜ」

「お前ら大馬鹿だ」

「そうじゃのう」

「うん。そうだね」

「ああ。そうだな。だかな陸お前も馬鹿だ」

「くくっ。確かに」

「くくく。生き残ろう！！そしてバカのやり方で倒そう」「くくく」

こうして、学園祭初日は幕を閉じた。そして僕達のやり方で勝利しようとして、決めた。

第四十四話 清涼祭二日目（前書き）

いよいよ清涼祭がクライマックスに近づきました。

第四十四話 清涼祭二日目

明久視点

「アキ、支倉、おはよー」

「おはようございます、吉井君に支倉さん」

「あ、二人とも。おはよう」

「おはよう二人とも」

学園祭二日目の朝。疲れが抜けきっていないのだろうか。眠たそう
なめで揃って登校してくる二人。

なんか得した気分。

「吉井君、今日は決勝戦ですね。頑張ってください！」

「そっちも喫茶店頑張ってるね。それで、今朝は特に問題は」

「……異常なし」

「不審な連中はおらんかったぞ」

「そっか。ありがとう」

須川とムッツリーニも一緒に登校してきた。

まだ不安もあつたので、今日は須川とムツツリー二に二人を迎えに行ってもらったからだ。

念のために陸の改良版のスタンガンを持たせて。

「これくらいは当然だ。クラスメイトを護るためならこんな苦勞なるともない（それに何か面白いことをするつもりなんだろう）」

「うんそうだね。僕もそう思う。（それとそのことは二人には内緒だよ）」

「「ああ」」

「お、無事だったか二人とも」

「無事で何よりじゃ」

奥から雄二と秀吉が頭を掻きながら出てきた。

二人のことはあまり心配していなかったみたい。ムツツリー二と須川がついていたからね。

「あれ？ 坂本や木下ももう来てたの？」

「四人とも早いですねー」

「朝一番でテストを受けていたからね。ふわぁ……」

「うん。だから少し眠ろうと言つ話になつてるの」

眠気であくびが出る。全然寝てないから当然だけど。

「もう、そんなので決勝戦は大丈夫なの？ ダレた試合すると、白けちゃうじゃない！」

「そんな心配をしてくれるなら喫茶店の準備でもしてくれ。ふわあ……」

「なんだか他人事ねえ。喫茶店の手伝いはしないの？」

「ゴメン。寝かせてもらえるかな？ここのところあまり寝てない上に、昨夜は徹夜だったから眠くて」

「安心しろ。その分マーナを量産したから問題ない」

奥から荷物整理をしていた陸と沢山のマーナがでてきた。

今朝早く、今日の分の食材や飲み物が搬入されたため、テストを受けない陸も僕らと同じ時間に登校したためだ。

「マスターこれをどこに運べばいいですか？」

「検査しましたが異物とかはありません」

僕達がテストを受けている間、陸は調査をされていて量産型マーナさん達は何百人分って運んでいたんだ。

それでもまだ運びきれないっていうんだから、どれだけ注文したんだって思う。

「それは、向こうだ。御苦労。次の分に行ってくれ」

「了解」

「わかりました」

「仕方ないわね。起きられそうになかったら起こしてあげるけど？」

「ありがとう。それじゃ、十一時までに起きてこなかったら起こしてもらえる？」

「十一時？ 試合は一時からじゃなかったの？」

「一番混み合うお昼どきぐらいは手伝うよ」

時刻は八時。今からなら三時間は眠れる。秀吉やひばりにはきついかも知れないけど僕や雄二ならそれで充分だ。

「んじゃ、その時には俺も一緒に起こしてくれ。屋上で寝ているから。ほわぁ……」

口に手を当てながら雄二が教室の扉に手をかける。

そっか。屋上か。あそこなら後夜祭用の放送機器が設置されているだけだし、誰にも邪魔されずに眠れるな。

天気も良いし、絶好の昼寝場所だ。

「それなら僕も屋上にいるからよろしくね」

「うむっ、ワシももう限界じゃ。早く寝たいぞい」

「あたしは」

とひばりが言うと陸がカギをひばりに渡していた。

「その鍵は俺の研究室のカギだ。そこには布団が敷いてあるそこで休め。時間がきたらマーナを呼びに行かせる」

「あ、ありがとう。それじゃあたしも行くね」

ガラガラと扉を開け出て行く雄二と秀吉とひばり。少しふらつく頭を押さえながら立ち上がり屋上に向かった。

（やっぱり一緒に寝るんでしょうか……？）

（間違いないわ。きっと坂本の腕枕で……）

去り際に聞こえた会話は忘れることにしよう。夢見が悪くなりそうだから。

第四十四話 清涼祭二日目（後書き）

ご意見ご感想をお持ちしております。

第四十五話 清涼祭二日目その二 (前書き)

連続更新

第四十五話 清涼祭二日目その二

陸視点

「ふう」

明久たちが屋上や研究室へ行って三十分がたった。

厨房の責任者であるムツツリー二が調理を開始し、後藤がホールの準備を始める中、ようやく荷物搬送が終わり俺が調査を終えたとき。

「陸、そろそろ教えてくれないか？」

「『『『そうそう』』』」

いつの間にか姫路たち以外のFクラスの連中が俺の周りにいた。しかも楽しそうな顔をしていた。

「ああ。お前らにして欲しいのがだな」

説明中

「『『『なるほどな(ニヤリ)』』』」

誰も意地の悪い顔をしていた。さて、どう動くカララ。

どうやら君は危険な獣を敵にまわしたようだが(ニヤリ)。

それにしてもどうして悪者が似合うのだろうかこのクラスは。

確かに昨日クラス全員に面白いことをするから手伝ってくれと言ったがここまでのりが良いと思わなかった。

教頭室

「で、どうするつもりだ。作戦が失敗続きだぞ」

谷「何焦ってるんですか教頭。これからが本番ですぜ」

カル「ラ、そう。これからが本当の作戦の開始ですよ」

「ほう。どんな作戦かね」

教頭は谷達の方に向いた。

「作戦より前になぜ失敗したかと言つとですな」

「何者かがつけていたからだだから失敗をした」

「当然スパイは始末したんだろうな」

「ああ。俺達の事がばれないようにしたぜ」

「作戦ですが戦いはヒートアップするときこのガスをばらまくとあつという間に観客が暴れ回り原因がFクラスの連中のせいに出来るという魂胆さ。当然死人は出ないがしばらくは入院になるだろうがな」

「そうか。あまり気が進まないがそれしか手が無いのなら仕方あるまい。頼んだぞ」

「ええ。お任せください（まあ、貴方もタダではすみませんがね）」

「ああ。報酬通りに働くぜ（所詮小物は小物だな）」

明久視点

「さてと。行こうかひばり」

「そうだね。島田さん、後の事は任せていいでしょうか？」

「大丈夫じゃなくても行かないとダメでしょうが。だから絶対勝つてきなさい！」

「「おう（うん）」」

「そう簡単には譲らないぜ明久」

「うむつ。やるからには勝つだけじゃ」

結局、僕達は手伝いを三十分ぐらいしかしていない。

疲れているだろうから、と気を遣って寝かせてくれたらしい。

なんだかんだ言っても、このクラスの皆は優しいと思う。

「後で私たちも応援に行きますね……吉井君の応援ですが」

ドレス姿の姫路さんが眩しい。

昨日より煌びやかな衣装のためじゃなく、彼女自身の清純さが原因であることは間違いないだろう。

「行って来いそして俺達をバカにした連中に見せてやろうぜ」

と陸が僕達の前に拳を出してきた。

そのことに僕達は頷き僕達は陸に拳をぶつける。

第四十五話 清涼祭二日目その二 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

第四十六話 清涼祭二日目その三（前書き）

決勝戦

第四十六話 清涼祭二日目その三

「ねえ、決勝戦を前に最後の妨害があるかと思ったけど、結局何もなかったね?」

「確かにな。俺達が決勝の舞台に上がれば、もう手の出し様がない筈」

「じゃが用心に越した事はないって所じゃのう?」

「ああ。それに急に变だと思ったらこの薬を飲めと言っていた」

「例の対策だね」

目的のいくつかは達成されてはいたが、姫路の父親が来る以上は最高の試合を見せる。

それが、4人にとって決勝戦の最高の目的。

そして陸の敵を倒すことがもう一つの目的。

「アキくん頑張ろう」

「うん。そうだね」

「やれやれ、俺達は姫路にしる支倉にしる恋路の邪魔して馬に蹴られる側よつだな?」

「やれやれ、悪役はつらいのう」

「ゆ、雄二に秀吉何を言ってるの!？」

「そ、そうだよあたしたちは別に!？」

僕とひばりが雄二達に抗議をしていたら会場にたどり着いた。

そこで4人の目を引いたのは観客の数。

そして今までにはなかった、係員である教師の出迎え。

「吉井君に支倉さん、坂本君に木下君、入場が始まりますので急いでください」

「じゃあここで、一旦お別れだ」

「ああ。じゃあ、またあとでな？」

明久とひばり、雄二と秀吉は別れ、それぞれ係員の教師に従いそれぞれの入場門へ

『さて皆様、長らくお待たせ致しました!これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います!』

アナウンスが会場に響き渡る。

僕とひばり、雄二と秀吉はそれぞれの入場を待つ。

『出場選手の入場です!』

「さ、入場してください」

まずは僕とひばりが、係員の教師にポンと背中をたたかれ入場。

2人は頷きあつて、観客の前に歩み出た。

『2年Fクラス所属・支倉ひばりさんと、同じく2年Fクラス所属・吉井明久君です。皆様、拍手でお迎えください！』

盛大な拍手が、2人を出迎えた。

『なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝に進んだのは、2年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！これはFクラスが最下級であるという認識を、改める必要があるかもしれません！』

(良かったねアキくんあの司会さん、嬉しい事を言ってくれてるよ)

(だね。姫路さんのお父さんに、好印象になるね)

ここで2人を持ちあげておけば“試験召喚システムのおかげで、最下級の生徒もやる気を出して勉学に励んでいる”と言うPRにもなる。

学園的にも、この展開は望ましい事だろうと陸から補足の説明が聞こえてきた。

『そして対する選手は、2年Fクラス所属・坂本雄二君と、2年Fクラス所属・木下秀吉君です。』

皆様、こちらも拍手でお迎えください！』

僕達が定位置に着くと、次は雄二達の入場。

拍手で出迎えられ、雄二と秀吉が姿を現した。

『なんと、こちらも最高成績のAクラスを抑え決勝に進んだのは、吉井明久君と支倉ひばりとのクラスメイトであるFクラスの生徒コンビです！決勝がFクラス1色とは、これは流石に驚きを隠せません！』

こちらも、最下級の生徒が同様に決勝進出。

PRとしてこれ以上ない条件でもあり、強調されていた。

『それでは、ルールを簡単に説明します。試験召喚獣とは……』

ルールの説明が入るが、ひばり以外の3人ともすでに周知のことゆえ無視。

ひばりは熱心に聞いていた。

「わかっておったとは言え、支倉と明久が敵となるのはの」

「うん。だけど勝負は勝負だよ、手加減はしないよ」

「望むところだ。誰がFクラス最強かを決める、頂上決戦といこう」

「うん。負けないよ」

4人は頷きあい、表情を引き締める。

『それでは試合に入りましょう！ 選手の皆さん、どうぞ！』

「では、始めてください！」

科目は総合科目で、立ち会いの教師は高橋女史。

2組の間に立つと同時に、4人は一斉に叫んだ。

「『『『試獣召喚（サモン！）』』』」

袴を纏い、長刀を持った秀吉の召喚獣。

改造制服を纏い、メリケンサックを持った雄二の召喚獣。

こちらも改造制服を纏い、木刀を持った明久の召喚獣。

青いプレストアーマーに黄緑色の貫頭衣を纏い、倭刀を持ったひばりの召喚獣。

『2-Fクラス 坂本雄二&木下秀吉 総合科目 1494点&912点』

V S

『2-Fクラス 吉井明久&支倉ひばり 総合科目 1002点&1200点』

「へえっ、明久も頑張ったんだな」

「うん。陸やひばりが暗記科目なら点数が増やしやすいくらって教えてくれたからね。まあ、それでも大半教えてもらったけど」

「アキくんはやればできる子だから良い結果が出たんだよ」

それを聞いて、雄二は楽しそうにしていた。

「秀吉、支倉を頼む。俺は明久をつぶす」

「承知！」

まずは雄二と秀吉のペアが先制

秀吉の召喚獣がひばりの召喚獣にとびかかり、雄二の召喚獣が明久の召喚獣に素早く近づき攻撃をしてきた。

「やあっ！」

「はっ！」

まず秀吉の召喚獣の長刀を、ひばりの召喚獣が倭刀で防御。

しかし、秀吉の召喚獣は長刀を離しとっさのことに対応できないひばりの召喚獣に殴り飛ばした。

「きゃあっ！」

「すまぬのう支倉よ、でも勝負じゃからのう！」

「これくらい平気だよ！ 今度はあたしがアキくんを助ける番だから！」

とひばりは起き上りざまに一閃。

秀吉の召喚獣の胸に一筋の傷が入った。

「……油断大敵じゃったのう」

「あたしだつて何時まで守ってもらっただけじゃないからね」

ひばりの召喚獣の攻撃を受け怯んだがすぐに態勢を立てなおし距離をとる秀吉の召喚獣。

たいしてひばりの召喚獣も武器を構え何時でも攻撃出来るようになっていた。

「ひばり、気をつけて」

「よそ見してんじゃねえ！」

「おっと」

「明久。支倉の過去に何が在ったのかは知らねえし聞く気もねえ今はな。だが」

「悪いけど話すことはないよ雄二をさつさと倒してひばりの援護に行きたいんだけど」

「過保護すぎないか明久？」

「慣れてないひばりを助けるのに何がいけないのさ！」

「そんなんだから時には相手を追い詰めるんだよ！！少しは彼女を

見守り信じてやれ!!」

「っ……」

「今のお前に俺は倒せねえ!!」

雄二の召喚獣は、迎え撃っている明久の召喚獣に向けてメリケンサックで攻撃をする。

木刀でメリケンサックをいなしているが、雄二の召喚獣に当てる事が出来ず、逆に雄二の召喚獣の攻撃は当たりだした。

そう、雄二の宣告通りになりだした。

「どうして当たらないんだ!」

「どうしてかだど?そんなこともわからないのか明久?」

「何が言いたいんだよ雄二!」

「簡単な話だ。対戦相手の俺よりも支倉のことしか考えてないから集中できてないだから当たらないんだよ」

「でも、今までは難なく勝ち残ってきたんだ。だから今回も」

「それは常に一緒に行動をとっていたからだ!!バラバラにすればたやすく倒せるんだよ!」

雄二の召喚獣が繰り出すパンチを、明久の召喚獣が木刀でそらす。

しかし、蹴り飛ばされ……。

「終わりだ!!」

倒れた明久の召喚獣に一撃を加えた。

その結果明久の召喚獣は消えた。

「そ、そんな」

「頭を冷やすことだな明久。そして支倉の戦いを見ることだな」

「な、何とか勝てたよ」

と雄二は言うどひばりの方に向いた。そこには秀吉の召喚獣を倒したひばりの召喚獣。

雄二の召喚獣は構え、ひばりの召喚獣も倭刀を構える。

「さて決着をつけるか」

「負けれないよアキくんの気持ちに伝えるためにも」

『2・Fクラス 坂本雄二 総合698点』

VS

『2・Fクラス 支倉ひばり 総合638点』

まず雄二の召喚獣が構え、殴るも倭刀ではじきひばりの召喚獣が突進を始める。

そのまま迎撃するも、ひばりの召喚獣はダメージを最小限に抑えている。

「ちいつ！」

「えいつ！」

倭刀が雄二の召喚獣に襲いかかり、それを回避。

それを狙うかのように、ひばりの召喚獣の足が雄二の召喚獣の顔面にめり込む。

しかし、雄二の拳がひばりの召喚獣に向き、そこから殴りふっ飛ばした。

それでも前に進むひばりの召喚獣。

「まだまだよ！！」

「やるな支倉！」

お互い一步も引かず五分五分の戦いをしていた。

『2・F 坂本雄二 総合科目9点』

VS

『2・F 支倉ひばり 総合科目8点』

「これで決着だ！！」

「負けないよ！！」

雄二の召喚獣は構えひばりの召喚獣も倭刀を構え。

2体はどちらともなく駆け出し、そのまま互いに当てた。

結果。

『2 - F 支倉ひばり 総合科目1点』

『吉井・支倉ペアの勝利です!』

歓声が響き渡り、勝者のコールが告げられた

「勝ったよアキくん!」

ひばりは勢い余って抱きついた。

そして明久も驚きもしたが喜んでいた。

「お疲れ様。そしてありがとう」

「負けちゃった……すまないな、秀吉」

「良いのじゃ。雄二はよくやってくれた……だから、ワシも何も言わんぞい」

「ははっ」

「それにこれでもう死角はないのじゃな」

「ああ。これで俺達は最強だ」

雄二と秀吉は、2人に歩み寄って手を差し出した。

明久とひばりは、ニツと笑みを浮かべその手を握り締める。

「ありがとう雄二。でも次は負けない」

「ふん。ほざけ。返り討ちにしてやるよ」

と言って僕と雄二は拳をぶつけた。

第四十六話 清涼祭二日目その三（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

第四十七話 清涼祭二日目その四暗躍編（前書き）

連続投稿

第四十七話 清涼祭二日目その四暗躍編

明久達が戦ってる頃。

Fクラスの喫茶店は重苦しい空気が漂っていた。

「い、ご注文はなんでしょうか？」

と島田が空気を重くした犯人に対して注文を聞いていた。

犯人の容姿は銀色の髪で顔はリボンに出てくる百蘭と同じ顔をしている。

「???」ああ。注文は陸をいや海谷陸を頼むよ」

「その様な料理はありませんけど（こいつが海谷が言った狂った奴ね。会わせるわけにはいかないわね）」

「???」俺が言ってるのは料理じゃなく人を呼んでるんだよ。それくらいわかるだろう」

と????は島田にナイフを投げつけようとしたとき。

「お客様。他のお客様の迷惑になりますのでやめていただけないでしょうか？」

「???」それは失礼した。ああ君もう良いよ他のところに言ってくれて構わないよ」

「島田ここは俺に任せる（例の準備をするように須川達に伝えてくれ）」

「そう。それじゃお願いね（わかったわ。無理はしないようにね）」

「ああ。（当然だ）」

と言って島田は去った。

「それではメニューを」

????? 「悪いね。……必殺料理人の手料理一択とはどういうことかな?（ニツコリ）」

「問題のお客様対策です（ニツコリ）」

「……………（ガンのくれ合い）」

????? 「そうか。では注文は海谷の命を頼むよ（スマイル）」

「かしこまりました。バカなお客様の命一つですね（スマイル）」

「……………（メンチの切り合い）」

「フウ。すまない聞き取れなかったよ（笑顔）」

「では、繰り返します。バカなお客様の命一つですね（笑顔）」

「はははっ」

「ふふふっ」

「……」

「「上等だ表に出ろ！！」」

廊下

「ようやく本性を出したなマイフレンド」

「カル ラ！！テメエに友達とは言われたくないな！！」

「素直じゃないね（呆）」

「その言葉そっくり返す。それにしても、お前から来るとは思わなかったぜ」

「それは良かった。探す手間が省けたね」

「死ぬほど嬉しいね！！」

「さあゲームの始まりだよ」

「ゲームだと!？」

「うん。それではルールの説明をするよ。この学園のどこかに解毒剤がいや解毒ガスが正しいかな。」

それが隠されているところを君がいや君達が見つけたら陸の勝ち、時間切れになったら俺の勝ちだよ。」

それに安心していいよ。今回は死人を出すと言うスポンサーいや

教頭の指示が出るから人は死なないよ。

まあ、しばらくは入院はしなくてはいけないうけどね」

「手掛かりもなしに探せとは無茶を言うな」

「大丈夫だよ。手掛かりは新校舎のどこかにあるよ」

「制限時間は？」

「授与式が始まる時間だよ。この時にガスがばらまかれるよ」

「ならば、ガスを止めれば俺の勝ちだな」

「うん。確かにそうだね。でもガスが設置されてるところはたくさんあるだよ。

すべて見つかられるのかい？」

「ちっ」

「じゃあ開始だよ」

「????」マスターお迎えに来ました」

「来たね。また会おうマイフレンド」

と言ってカル ラは連れてきたロボットに乗って俺の前から消えた。

第四十七話 清涼祭二日目その四暗躍編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第四十八話 清涼祭二日目その四暗躍編その二

Fクラス喫茶店

俺が戻ってくるとクラスメイトが集まってきた。

『『『で、どうするんだ？』』』

「どうするもこうするもない。予想とは違つが変更する必要がない」

『そうか。じゃあ予定通りで良いんだな』

と須川が聞いてきた。

「ああ。バカ正直に探す必要がないからな（ニヤリ）」

と俺が口の端を釣り上げる……。

そして女子を除いた全員が同じように口の端を吊り上げニヤケている。

「あ、あのう。それでうまくいくんですか？」

と姫路が不安そうに聞いてきた。

「大丈夫だ。姫路の愛が学園を救うことになるからな。明久もほれなおすかもな」

「が、頑張ります!!」

「フウ　ン。瑞希には優しいのね。海谷って？」

「何をいつてるんだ島田？」

「な、何よ？」

「危険なところに行き明久達を助ける島田はかっこいいと思うがな。きっと明久もゴメン美波。危険なところに来て僕を助けてくれるなんて嬉しいよって言ってくれるかもな」

「し、しょうがないわね／＼」

「協力感謝するよ（単純な奴ら）（ニヤリ）（）」

「さあ、俺達のやり方で勝利を掴もうぜ」

『『『 YEAH! Let's Party! 』』』

さあ、反撃開始だ。

会場

「配置に付いたな」

『……ああ、こちらも問題なし』

『しかし、これ効くんだったら』

「ああ。抜群の効果だ。オマケに副作用もないという優れものだ」

「複雑です。私が作った料理をガスにしてばらまくなんて」

「すまないんだが姫路の愛が学園をすくんだ。まさに奇跡が起きるんだよ」

「奇跡ですか？」

「ああ。そうだ。明久への愛が学園を救うまさに勝利の女神だよ姫路」

「わかりました。複雑ですがやりとげた気がします」

「でもどうして瑞希の料理がカル ラが作りだす薬を無効化できると思ったの？」

と島田と姫路が看護師の恰好をして準備をしている。

ちなみになぜ看護師かと言うと明久が好きな服と言う事と病人を助けるのは看護師だとムツツリーニが力説したからである。

まあ、姫路達が着ると言ったのは明久が好きだからと言うことが原因だな。

「ああ。それはな全くの偶然なんだ」

「「偶然？」」

「ああ。なんとか解毒剤を作ろうとしてた時姫路が作ってくれた夜の料理が運悪くかかってね。」

拙いと思って何とかしようとしたとき不思議なことが起きたんだ。そこで気になって調べたら奴が作った薬の効果を無効化したんだ」

「ああ、なるほど。だから奇跡って言ったんですね」

「ああ。そういうことだ」

「でもどうして解毒剤が時間切れになるまで分からないのよ」

「奴は人が嫌がるのが好きだな。

可能性があると思わせておいて探さして見つからず落ち込んでいるのを見て笑い。

時間切れになったら実はここでしたと教えるんだ。そう常に自分が持っているだから」

「最低」

「それじゃ見つからないじゃないですか」

「そう言うことだ。だから、姫路達に会えて感謝している」

「複雑ね」

「そうですね」

「だろ。だから今度は奴にざまあみろって言ってやるっぜ」

「そうね」

「はい」

『マスター時間です』

「わかった。頼むぜ皆」

『『俺達に任しとけ！』』

「さて踊られに行くかな」

第四十九話 清涼祭二日目その四暗躍編その三(前書き)

暗躍編終了です。今回は短いです。

第四十九話 清涼祭二日目その四暗躍編その三

新校舎屋上

「時間切れだよ陸」

「どうか。お前を捕まえれば解毒剤の場所はわかるからな」

「確かに今までなら俺が持っていたね」

「そう言うことだ。力ずくで行かして貰うぜ。いけ量産型マーナ」

『『『YESマスター』』』

「やれやれ、それ戦闘用じゃないよね蹴散らしてフロンティア」

フロンティア「了解しましたマスター」

マーナによく似たロボットはいやフロンティアはガトリングガンを両手に持ち撃ちだし量産型マーナ達を破壊つくした。

「まさに、時間の無駄だったね」

「くっ」

「???」さて裏切り者には報復をしないとね

「???」まあ、俺達を裏切ったんだ。ここで後悔しな」

「時間だよ」

「し、しまった!?!」

「「「さあ、狂っちまいな!?!」」」

「ち、畜生!?!」

「「「はははっ」」」

「……(ガク)」

と俺は膝をついた。

しかし何も起きなかった。

教頭「どういうことだカル ラ？」

「???」「何も起きないぞ」

「おかしいなすぐに発病するはずだが」

「マスター 空气中に薬を無効化する物質感知しました」

「「「な、なんだと!?!」」」

「……フウ。間に合ったな」

「そ、そうかそう言うことが。やってくれたね陸!?!」

「前からお前に言ってみたい言葉が在ったんだ」

「な、何を言いたいんだ」

俺は、トランシーバーを取り出しスイッチを入れた。

『『『ざまあみる!!』』』』

「屈辱だよここまでバカにされたのは初めてだよ!!」

「バカな」

「やってくれたな!!」

「さて西村先生あとはお願ひしますね」

隣の校舎からひもを伝って現れる西村先生。

「やれやれ。これはどういうことですか教頭先生?説明をお願いしますか」

「くっ」

「興がそがれた帰るよフロンティア」

「わかりました。マスタ」

「この屈辱。吉井と言い巨乳幼女と言い忘れないからな」

と言ってカル ラと谷と言う男とフロンティアは教頭を残して去っ

て行った。

「そ、そんな（ガク）」

この後教頭は西村先生によって連行され警察に引き渡された。

前々から警察に睨まれていた教頭は俺が集めた情報を引き渡すとすぐに逮捕状を取ってくれた。

しばらくは戻れないだろうと西村先生は教えてくれた。

さて、明久達を迎えにいかないとな。

第五十話 清涼祭二日目その五

「ご苦労だったね」

「バ……学園長」

「けど、思った以上に大接戦だったねえ。これじゃデモンストラーションが出来ないから、授賞式の準備が終わるまで1科目だけでもテストを受けてきな！」

「……なにいつ（なんじゃと／＼うん。当然の結果だよね）！？」「」

大勝負のシメとしては、あまりにもカッコがつかない物だった。

それから補充試験を受けて授賞式が終わり、いよいよ新技術のデモンストラーション。

ちなみに腕輪はどっちが勝って対処できるようにしてるって陸が言っていた。

それと、僕達が補充テストを受けてる間にクラスメイトが学校全体にガスをばらまいているから誰も狂気化せずに済んだ。

まず、雄二の腕に着けられた腕輪から。

「教科は、数学で良いだろ？」

「そうだね。僕達が受けたのは数学だからね」

雄二の腕輪は科目指定ができ、その科目から点数を引いてフィールドが形成される。

「それじゃ行くぞ！ 起動【アウェイクン】！」

とキーワードが放たれ、腕輪が起動。

雄二を中心に、召喚フィールドが形成される。

「へえっ……じゃあ次はアキくんだね？」

「了解。試獣召喚！」

『吉井明久 数学65点』

「行くよ、同時召喚！」

と、キーワードに合わせて、もう一体の召喚獣“副獣”が姿を現す。

「ほっっ、本当に2体が現れたのう」

「けど、ちよつと操作難しいかな？」

「アキくんなら大丈夫だよ」

「それじゃ、次はひばりだね」

「うん。譲渡」

『吉井明久 主獣 数学103点 副獣 数学103点』

ひばりが使う大空の腕輪の効果は自分の召喚獣を呼ぶことが出来ないが代わりに味方に味方の自分の点数を当てに加える事が出来る。

この効果が、“大空の腕輪”の一つ譲渡の能力である。

「うむつ。次はワシじゃのう。……試獣^{サモン}召喚！」

『木下秀吉 数学83点』

「では行くぞ明久」

「うん。わかったよ」

と言って明久は秀吉に攻撃を仕掛けた。

「^{バインド}捕縛」

「う、動かなくなったよ!!!」

秀吉がキーワードを言うと明久の2体の召喚獣は急に動かなくなった。

そうこれが秀吉が使う大空の腕輪の効果だ。

ちなみに効果は相手を動けなくする事と明久みたいに同時召喚の場合どっちか片方をコントロールできる。

この効果が、“大空の腕輪”の一つ捕縛の能力である。

「のう。支倉よ明久の召喚獣のコントロールを奪ったから動かして貰えぬか」

「えっ!? う、うん」

と言ってひばりが明久の片方の召喚獣を動かしていた。

「美波ちゃん」

「瑞希」

「あとで木下に譲ってもらいましょう（わよ）」

と、2人分の突きさす視線を感じ、秀吉は恐怖を覚えたという。

余談だが、急にひばりの機嫌が悪くなったと明久は不思議に思っていた。

こうして、デモンストレーションは無事終了した。

「お兄ちゃん！ すっっっごい格好よかったよ！」

「ぐふっ！ は、葉月ちゃん……今日も来てくれたんだ。ありがとう」

終わった帰り、すぐに葉月が明久に抱きついて腹に顔を埋める。

というか、鳩尾に直撃していた。

「4人とも、お疲れ様。でも驚いたわ。支倉が勝つなんて」

「ま、まぐれだよ」

「お姉ちゃん、お兄ちゃんすごいですっ!」

「葉月つてば、アキが困ってるわよ?」

これ以上鳩尾を圧迫されるときつい為、明久はやんわりと葉月を引き離れた。

「あの、吉井君!」

「あ、姫路さん。恥ずかしいとこ見せちゃったね」

「いえ!そんなことないですよ。一生懸命頑張る吉井君はかっこよかったです!」

「あ、ありがとう」

「……(ムス)」

「?どうしたのひばり」

「何でもないよアキくん」

「?????」

姫路の反応に明久は驚いていた。

そして複雑な顔をしているひばりに明久は困惑していた。

「そ、それじゃ私は戻りますね」

「う、うん。それじゃまたあとで」

「ふむ。そういえば陸はどうしておるのじゃ」

「呼んだか？」

「それで、どうなったのじゃ」

「教頭は捕まったがそれ以外は逃げられた」

「そうか。だが今回は俺達の勝ちだな」

「ああ。そうだ。あいつの悔しそうな顔を見て面白かったぞ」

「残念だな。僕も見たかったな」

「ああ。そうだな」

「安心しろ。ムツツリーニが撮影をしてくれたから見えるぞ（ニヤリ）」

「そうか。そいつは楽しみだ（ニヤリ）」

「そうだね（ニヤリ）」

「何だかこちらの方が悪役だよな」

「そうじゃのうワシもそう思う。さて話し込んでいるところ悪いのじゃが、喫茶店を手伝うぞ？」

ワシ等の優勝と準優勝のおかげで、客が増えて大変そうじゃ」

喫茶店は確かに大盛況であり、中ではFクラスの面々が忙しそうに右往左往。

秀吉も先程の間にウエディングドレスに着替えており、忙しく駆けて行った。

「じゃあ頑張ろう」

「やれやれ、面倒臭いな」

「文句は言わずに行くよ」

それから僕達は、それぞれの業務を果たすべく、喫茶店へと駆けて行った。

『ただ今の時刻をもって、清涼祭の一般公開は終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「ふうっ……」

「お、終わった……」

「大変だったけど、楽しかったな……」

「うむっ、じゃが流石に疲れたのう……」

「……………（コクコク）」

放送を聞き、体から力が抜けて行った5人。

それに僕達は4人は、特に注目も浴びた為疲れも一際である。

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろ？」

「ん？ お義父さんが気になるのか？」

「なっ！？ べ、別にそう言う訳じゃなくて！」

「あ、アキくんは姫路さんの事が好きなのかな？」

「い、いやそう言うわけじゃなくて僕としてはひばりが悲しい顔をしてるのが嫌であってそ、その」

「まあ、明久がどっちを選ぶのかは別として後夜祭の後で、話をして行くと言っておったのう。
結論はその時じゃな」

「まあ、そう言うことだな」

優勝者と準優勝者を出し、観客全てをわかせる接戦を繰り広げた事もあり、喫茶店は大繁盛。

だから大丈夫だろうと思った全員だった。

「じゃ、ウチらは着替えて来るわ」

女性陣が更衣室へ向かおうとした。

「ええっ、どうして!?!」

「どうして、ッて言われても……恥ずかしいからに決まってるでしよ?」

「すみません。すぐ戻りますので」

「アキくんは大人しく待ってね」

3人は着替えのため、去って行った。

ちなみに葉月はそのままで帰って行った。

「ふむっ、ならばワシも……」

「させるかっ! せめて秀吉だけは着替えさせない!」

「……………(フルフル)」

2人は秀吉の足にタツクルをしていた。

「おいおい、遊んでないで学園長室に行くぞ?」

「学園長室じゃと? もしや、例のあれの清算かの?」

「ああ。喫茶店が忙しくて行けなかったからな、遅くなったが今から行くことと思う」

そう言った雄二に、陸と秀吉、明久は伴う。

それとムッツリー二も、同伴した。

「やれやれ、ワシのこんな姿を見ても、何の足しにもならんじゃろうに……」

「あまりまともに考えるな……そこらの女子より、色気があるからじゃないのか？」

「複雑な気分だが、そういうものかのう？」

そして、学園長室にて。

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

「来たぞババア？」

ノックとあいさつをして、学園長室の扉を開く。

「お主らは……」

「アタシは前に、返事を待つように言った筈だがねえ？」

「あ、学園長。優勝と準優勝の報告に来ました」

「言われなくても分かっているよ。アンタ達に賞状を渡したのは誰

だと思ってるんだい？」

お互いさまとは言え、遠慮のない発言である。

「さて、これで問題は解決したな？」

「ああ。感謝するよ、おかげでデモンストレーションも無事終わっ
たからね」

来賓も満足していたと、嬉しそうに言う学園長。

「それで、腕輪は返却した方が良いですか？」

「いや、それは後で良いさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

「しかし、これからテストが受けづらくなるのう。」

もし高得点を取って暴走を引き起こしたりなどしたら、それこそお
っかないわい」

明久と秀吉が、腕輪を見ながら学園長と話している。

「安心しろ。Bクラスまでなら耐えられるように調整してある。そ
う簡単には暴走はしないぜ」

「それなら安心じゃのう」

「そうだね」

「それにきちんと俺がメンテナンスとデータ収集をするから暴走は
起こさせないぜ」

「それは良かったがカル　ラ達は逃がしたのが痛いな」

「安心しろ。奴らの負けた顔をwebで発信してるからしばらくはしかけてこないさ」

「それなら良いがな」

「本当にあんた達には感謝してるよ」

「さて、それじゃ打ち上げパーティに行くかな」

「そうだな」

「僕お腹がすいたよ」

「そうじゃのう」

明久視点

焼き肉屋

「さて、お前ら。二日間ご苦労だった。売り上げはかなりのものになったから、常識の範疇であれば足りなきゃ追加注文してくれ。それじゃあ、お前ら。食うぞー！」

『『『おおおおおお！』』』

そう言って、Fクラスの男子達はお肉を焼き始めた。

あちらこちらからいい匂いが部屋に充満している。

残念ながらトップは取れなかったがババア長お勧めのおいしい焼き肉屋の情報を手に入れる事が出来た。

そう今ここにいるのがお勧めの焼肉屋だからだ。

あれから姫路さんの問題は解決した。

やっぱり僕達が優勝、準優勝したことが高評価になったみたいだ。

「ひばりちゃん。私たちも食べましょう?」

「うんそうだね」

「そうよ。ウチらも食べましょう」

と言って僕達の方に来て食べていた。

そしていつの間にか名前で呼びあうようになっていて僕は嬉しかった。

ひばりに友達が出来たことが良かったと思う。

こうして、波乱に満ちた学園祭は終わりを迎えた。

第五十話 清涼祭二日目その五（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

番外編 ラブラブ！ 坂本夫妻のマル秘恋愛テクニック講座

ラブラブ！ 坂本夫妻のマル秘恋愛テクニック講座

「……おい翔子、とりあえず俺にわかるように状況を説明しろ」

「……これは私達夫婦が、ゲストの支倉と吉井と海谷のアシスタントで恋愛の秘訣を皆に教えるコーナー」

「驚いた。このタイトル“の”以外全部嘘の事しか書いてないぞ。というか明久に陸、テメエ等悪乗りしてるだろう!!」

「だ、大丈夫だよあたしもどんなものを使うか見せてもらったけど普通だったよ」

「本当だろうな!？」

「……ちなみに制作者兼スポンサーは海谷」

「安心できないだろうが!!」

「安心しろ!!薬は一切使ってない」

「お、お前の場合薬でも性質が悪いが他の発明品はなおさら性質が悪いだろうが!!」

「今回は玲さんが監修に入っているから爆発はしてないぞ」

「ね、姉さんはどうして陸と関わったんだろうか？」

「それについては話が進んだらわかるさ」

「そうだね。じゃあはがきはこちらです。坂本翔子さん、お願いします」

「たまには俺の話を聞け！　そして明久、勝手に翔子を入籍させるな！！」

「……“突然ですが、仲良し夫婦のお二人に相談です”」

ドンドンパフパフ

（マーナが音響を弄って効果音を流した）

「はがきの差出人よ、良く聞いてくれ。俺は今、手足を縛られて床に転がされている。コイツが本当に恋愛相談の相手にふさわしいか、もう一度考えてみてほしい」

「確かに力尽くって言うのはやり過ぎだと思っよ。でも瑞希ちゃんや美波ちゃんから聞いたらそう言う約束したの坂本くんなんですよ？　なのに一方的に拒否して逃げ回ったりするから、だから力尽くの発想に出るとは考えられるよ？」

“普通に付き合ってみて、合わなかったら別れる”って感じだったならここまではならなかったと思っよ」

「確かにな、でもな俺の話を聞かない奴にどう話せと言うんだ！！」

「そ、それは……」

「これで、わかっただろう。俺が言いたいことが分かったんなら俺をここから解放してくれ」

「……させない。それと支倉、雄二はテレ屋さんだから素直に言えないの。だから気にしなくて良い」

「う、うん」

「待て、俺が言ってることの方が正しいだろう!!」

「さて、雄二は置いといて続きを頼むよ坂本翔子さん」

「だから、翔子を勝手に入籍させるな!!」

「……わかった。それにしてもいつ聞いても良い響き……“私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の人の誘惑に負けて浮気をしないかが心配です。どうしたらいいでしょうか?”」

「いや、どうしたらと言われてもな」

「ああ。確かにどう答えたら良いだろうな」

「う、うん(考え中)」

「……夫の浮気には私も困っている。他人事とは思えない」

「そつだよな。こんな一途な妻を困らせるなんて、許せないよね」

「頼むから他人事だと思ってくれ！ 明久も余計な事言っんじゃねえ！」

「……だから、私の考えた浮気防止法を教えてあげる」

「ここからが重要だから良く聞いてくれ」

「翔子よ、それは俺の身に降りかかる不幸の予告とみなしていいんだろっか？ それと陸、誰に向って言ってるんだ？」

「……用意する物は3つ」

ガラガラガラ！ （明久の手で3つの幕の掛けられた台車が押される音）

「？ 浮気防止に、道具が必要なのか？」

「うーん（悩み中）携帯電話にカメラかな？」

「必要だから持ってきたんだろ？ 支倉の考えじゃあでも予防にはならないな。明久、幕を」

「あっ、うん！」

「……1つ目は」

ドロドロドロ！ （ドラムロール b y マーナ）

「1つ目は？」

バサッ！ （1つ目の幕がはぎ取られる音）

「“手錠”」

「翔子、ストップだ！ いきなり犯罪臭がする！！」

「あ、あたしもそう思うよ。それとさっき見たのと違うよ！！」

「……………2つ目は」

ドロドロドロ！ (ドラムロール by 明久)

「やっぱり聞いてないな。んで、2つ目は？」

バサッ！ (2つ目の幕がはぎ取られる音)

「“エプロン”」

「ちょっと待ってくれ。急にお前の考えが読めなくなった。というか、その組み合わせで俺に何をするつもりなんだ！？」

「……………そして、3つ目は」

ドロドロドロ！ (ドラムロール by 陸)

「3つ目は？」

バサッ！ (3つ目の幕がはぎ取られる音)

「“ビデオカメラ”」

「貴様何を撮るつもりだ！？ エプロンと手錠でドレスアップされた俺の何を撮るつもりだ！？」

「……その3つを用意して、夫に浮気の怖さを教えてあげると良い」

「……た、確かにこれをされたら浮気はしないよね」

「……ああ。だが聞いた話と違う気がするんだけどな」

「……どちらにしてこの世の終わりだね」

「明久の言葉も気に入らねえが！ あと俺の事を不憫に思うのなら翔子を止めてくれ。」

「だがそれ以上に俺は今翔子、何よりもお前が怖い」

「……以上、“バカなお兄ちゃん大好き（11歳）”ちゃんからのお八ガキでした」

「差出人小学生かよ！？ 世も末だな！」

「どうしよう！？ 俺その子の家に送ってしまった（ガクッ）」

「お、お前も知らなかったのかよ！！」

「ああ」

「陸って時々バカになるよね」

「アキくん悪いこといはないから早く逃げってね」

「？うん」

「……所で翔子、さっきのは冗談だよな？」

「……カメラは5台以上が望ましい」

「まあ待て、じっくりと話し合おうじゃないか」

「まさかここまでとは」

「予測できなかったね」

「うん。どこに突っ込めばいいのかわからなかったよ」

「ちなみにこれは、この異常なラブラブカップルだからこそなせるテクニクだから、

普通にやったら犯罪なのでマネしないように」

「明久に陸、何他人事の様にしてやがる!？」

「他人事だもん」

「ごめんなさい。今回はあたしもどう言えばいいのかわからないからコメントを控えるね」

「……ちなみに姫路や島田や支倉の家にも送ったから安心」

「あ、あたしの家にも送ったの!？」

「……(コク)」

「」「」ゴメン(ごめんなさい)。雄二(坂本君)(哀愁)」「」

「わかってくれたなら良いんだ(哀愁)」

第五十一話 ダブルデート（如月グランドパーク編）（前書き）

如月グランドパーク編です。

第五十一話 ダブルデート（如月グランドパーク編）

「明久」

「ん？何、雄二」

「そういえば例のチケットはどうした？」

「例のチケットって 如月グランドパークのプレミアムチケットの事？」

「ああ。確か今週末がプレオープンの日のはずだが、姫路もしくは支倉を誘ったりはしないのか？」

「な、何を言ってるのさ雄二！だって、あのチケットを使って入場したら、如月グループの力で一緒に行った人との結婚を強要されちゃうんでしょ？そんなことになったら姫路さんが可哀想じゃないか」

「そりゃ、向こうも『如月グランドパークを訪れたカップルは幸せになれる』なんてシンクスを作り上げようと必死だからな。来園するカップルが結ばれるように色々な手だしをしてくるだろうが」

「うんうん。そうだよな」

「だが、姫路も支倉も満更じゃないと思うぞ」

「……ほえ？」

「陸もそう思うだろ？」

「そうだな。少なくとも断られはしないだろうな」

「あ、あはは。二人とも冗談ばかりー。」

僕と姫路さんもしくははひばりが結婚できるなんて、そんなのあるわけがないよ」

「それに今更誘おうとしても無理だよ。その肝心のチケットがないんだから」

「ほう、もう金にでも換えたのか？」

「違うよ、身近に結婚を考えている人がいたからその人にあげただ」

「そうか。そんな奴がいるのなら都合がいいな。如月グループも大喜びだろうよ」

「そうだね。うまくいけば全員が幸せだもんね」

「その連中上手くいきそうなのか？」

「うん。後は時間ときっかけの問題だと思っただ。」

「そうか。うまくいくといいな」

「大丈夫。きつとうまくいくよ」

と明久が自分の席に戻ったの確認すると雄二が聞いてきた。

「それで、陸もう一枚のチケットどうなったんだ」

「安心しろ。それは支倉に渡してある」

「そうか。それにしてお前はお節介だな（ニヤリ）」

「ああ。俺もそう思うよ（ニヤリ）」

「週末が楽しみだ！！（ニヤニヤ）」

週末

明久の家。

「ZZZZZ」

「アキく〜ん朝だよ〜起きて」

「もう少し寝かせて」

効き覚えが在る声で僕を起こそうとしている。

でも僕はせつかくの休みだからもつと寝ていた。

だから僕を起こそうとしている誰かは知らないけど諦めて欲しい。

「だめだつて。早く起きなさい！！」

「もう！こうなったら奥の手を使っちゃうんだからね」

「『アキくん？』」

その声で僕は覚醒した。

「『早く起きないと、チュウをします。それも、お嫁にいけなくなるほどすごいチュウをします』」

「うわあああああっつ！！！起きますっ！！！起きたっつ！！！起きますっ！ねえさ」

僕はフトンをはね飛ばし、転がるようにベッドから飛び出した。

と、そこでイイ笑顔のひばりがいた。

「あれ……？ねえさんは……？」

「『やっと起きましたか？アキくん』」

ひばりは、僕の姉、玲の声で明久にしゃべりかけた。

「って、ひばりだったのか。てつきりねえさんが帰ってきたのかと………ていうか、それやめてって言ったよね！！心臓にわるいからっ！ー！」

とりあえず姉さんではなくひばりだったことに安心したがでも僕をだましたのは間違いないから僕はひばりに文句を言った。

「『なに言ってるの。なかなか起きないアキくんが悪いんでしょっ？』」

でもひばりは効かなかった。

「う。わかったよ、ゴメン。だから、もうねえさんの声音でしゃべるのやめてくれないかな……」

僕はこれ以上のひばりの攻撃に耐えられそうにないから謝ることにした。

「すぐに起きればいいのに、フトンの中でうだうだしてるからだよ。まったくもう」

そう言いながら、ひばりはドアへ向かう。

「朝ご飯用意してあるから、顔洗って、歯を磨いて、ちゃんと着替えてくるんだよ」

「へい」

「『そんなに姉さんと暮らしたいので……』」

「サー！イエッサー！」

直立不動で敬礼した僕に満足したひばりは、上機嫌でキッチンに向かった。

食事が終わり。

僕は気になることひばりに聞いた。

「ねえひばり？」

「何アキくん？」

「どうしてひばりがここにいるの？」

「それは、アキくんの両親に頼まれたからだよ」

「だから、ここに入ってきたんだね」

「そつだよ」

「僕はそんな話聞いてないんだけど？」

「え！？ そうなのあたしの家にアキくんのお母さんから電話が在ってアキくんの世話を頼まれたんだよ」

「か、母さんなんで勝手なことを！！」

「あと手紙も届いていたんだよ。手紙によるとねアキくんの生活費はあたしに預けると書かれてるよ」

とひばりは僕に手紙を渡してきた。

そして書かれていた内容は僕は啞然としていた。

ここには書かれてないが母さんが言いたいことが分かってしまった。

そつひばりと同棲しなさいと書かれているのだからこのことはひばりには内緒にしておこう。

知られると僕は間違いなく殺されるね。異端審問会や姫路さん達に。

「そ、それとアキくん」

「ん。なにひばり」

「気持ちのいい日だしどこかに遊びに行こつよ」

とひばりが誘ってきた。

確かにここで寝てるよりひばりとどこかで行った方が良いかもね。

と僕が思ってた時に携帯が鳴った。

僕は渋々出ると

『はいもしもし？どちらさまですか？』

『……………キサマヲコロス』

『え！？なにになに！？本当に誰！？メチャメチャ怖』

と怨念めいた声が聞こえてきた。そして切れた。

「？？どうしたのアキくん？」

「さっき怖いことを言われたんだ」

「そうなんだ。でも気にしなくていいと思つよ」

「どうして？」

「間違い電話である可能性が高いと思うよ」

「そ、そうかな」

「それより早く行くとうアキくん」

「そうだね」

そして僕とひばりは家を出てひばりが行きたいと言つ遊園地に行くことにした。

そして、僕は啞然とした。

第五十一話 ダブルデート（如月グランドパーク編）（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第五十二話 ダブルデート（如月グランドパーク編）雄二編（前書き）

連続投稿。今回は短いです。

第五十二話 ダブルデート（如月グランドパーク編）雄二編

雄二視点

とある休日の朝。

体の上に普段とは違う心地よい重さを感じ、重い瞼を開いた。

「……………雄二、おはよう」

カーテンの隙間から差し込む光を受けて艶やかな光沢をだす黒髪と、絵画から飛び出してきたような端正な顔立ち。

俺の幼なじみ、霧島翔子、がそこにいた。

ベットに腰掛け布団の上、ちょうど俺の腹辺りに手を乗せている。

「……………今日はいいい天気」

スツと立ち上がり、薄緑色のカーテンを開く翔子。陽光が更に強く部屋の中に差し込んできた。

「ん？ああ、そうみたいだな」

強い光に目を細めながら、窓の外の景色を見る。

山奥の渓谷を思わせるような澄み切った空気が遠くの景色を事細かに見せる。

晴れ渡る青い空には太陽の光を遮るものがただ一つとして存在しない。

「？」

その隣にいる幼なじみの姿を見て疑問に思う。

今日は休日だからいつもの制服姿ではない。ここはいいんだ。

上は白い長袖のカーディガンで、その下に薄いピンクのカットソーを着ている。

下は薄手の膝下程度のスカートで、下着が透けない為のインナーが見える。

説明が長くなってしまったが、ようするに今日の格好は随分と気合が入っているんだ。

二人で買い物に行く時はこういう格好をしているんだが、何か約束をしていたか？

「改めて、おはよう。翔子」

「……うん。おはよう雄二」

「よいしょ、っと」

布団を押し分け、ベッドから出る。

だが、そうなるのとまた一つ疑問が増える。なぜこいつはここにいる

んだ？

寝起きのため本調子には程遠い頭で思考を張り巡らせる。

約束？いや違う。覚えがない。勉強？それなら翔子の家でいいはずだ。

他の理由を少し考えて、一つの結論に辿り着く。そうか、そういうことか。

「悪い翔子。俺の携帯を取ってくれ」

「……電話でもするの？」

「ああ、そうだ」

翔子が渡してくれた携帯を操作し、番号をプッシュする。

コイツがここに居ること。それは

「ああもしもし。警察ですか？不法侵入です」

拉致目的だ。

「……雄二。これは何？」

俺が警察に電話をしているときに翔子は俺のお宝の一冊を俺に見せてきた。

「な、何だそれは！？俺はそんなの知らないぞ」

俺はとっさに電話口をふさいだ。

「……雄二の部屋の机の三番目の引き出しの二重底の下に参考書のカーバーをかぶせてあった」

『もしもし』

「すみません。勘違いでした」

俺は諦めて電話に断りの言葉を入れて切った。

「……そう。それなら、この本は燃やすだけで許してあげる」

「待て翔子、それは許した時の処分じゃない！」

「……じゃあ、燃やしても許さない」

「どつちにしろ燃やすのかよ！？燃やさないと云う選択肢はないのか！？」

結局その本は処分され、俺は断末魔を上げる事に。

「朝ばらから何の用だ？」

「……これ」

上着のポケットから、ある一枚の小さな紙切れを取り出す。

その様相から言って、チケットである。

「そ、それは如月グランドパークのプレオープンチケット!!」

「どこでそれを!？」

「……優しい人が善意でくれた」

「俺が知っている優しい人はあいつしかいね（怒り）」

俺はすぐに携帯電話の番号通知をOFFにして明久バカの番号を呼び出す。

数秒の呼び出し音の後に奴は軽快な声で電話に出た。

『はいもしもし?どちらさまですか?』

『……………キサマヲコロス』

『え!?!なになに!?!本当に誰!?!メチャメチャ怖（ブツツ）』

少しだけ気分がスッキリした。

「……………雄二、行こう?」

「嫌だ!」

「……………じゃあ、選んで」

拒否の姿勢を崩さない俺に、翔子はある物を取り出した。

それは、結婚式場のパンフを俺に見せてきた。

「……すまん、話の流れがさっぱり分からない」

「約束を破れば、即拳式つて誓ってくれた」

「誓ってない！ 婚姻届に判というのは覚えがあるが、拳式は覚えがない！！」

翔子の理不尽な提案で俺は、ピンチだが

だが、この程度の困難に屈する俺ではない。なんとかして脱出を図らなければ！

第五十二話 ダブルデート（如月グランドパーク編）雄二編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第五十三話 ダブルデートその三

如月グランドパークの前

「……恋人同士は皆こうしている」

「待て翔子！ お前は仲睦まじいと言う意味の腕を組む行為と、腕を壊すというサブミッションを同様に考えていないか！？」

俺が無理やり入れられるそうになったときに聴き覚えが声が聞こえた。

????「あれ？坂本君と霧島さんもデート」

聞き覚えが在る声が聞こえた俺は振り返ると明久バカがいた。

「……吉井たちもデート」

「ち、ちがうよあたしたちは遊びに来ただけだよ」

「なんだ？支倉もいたのか？」

「いたよ！！声を掛けたのはあたしだよ！！」

と支倉が怒っているが俺にはどうでもいい。

「よう明久。良くもはめてくれたな」

「雄二こそやってくれたね」

「……何時までも吉井を見つめない」

「そうだよアキくん。せつかく遊びに来たんだから早く行こうよ」

「そ、そうだね」

「そ、そうだな」

この時俺と明久はどうやって逃げようと考えていた。

それに明久も俺と同じで無理やり結婚は嫌なようだからな。

ならば俺は、明久を犠牲にして逃げ切つて見せる!!。

パーク内

そこには見知った連中が待っていた。

「いらっしやいませ」

「如月グランドパークへようこそ」

「ねえ、秀吉に陸どうしてここにいるの?」

そう何故ここに陸と秀吉がここにいるのか俺も知りたい。

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか?」

「……はい」

「はい」

翔子や支倉がポケットから例のチケットを取り出す。

「ねえ、どうして僕を無視するの!？」

確かに明久はともかく俺には教えて欲しいな。

「おお。これは特別招待券ではありませんか？」

「からへ…例の連中が来た。ウエディングシフトの準備を始めるのじゃ。確実に仕留めるのじゃ!」

「……ウエディングシフト?」

「?????」

如月グループの企みを知らない支倉や翔子には良く分からない単語だろう。

それでいい、そして今日一日が終わるまで知らないでいてくれると助かる。

まあ、明久は別にかまわんがな。

「気にしないでください。こっちの話です」

「では、最初に記念写真を撮りますよ?(パチン)」

「……………記念写真？」

「はい。お似合いのお4人の愛のメモリーを残します」

「……………雄二とお似合い……………（ポツ）」

「な、なんか照れるよアキくん／＼」

陸の言葉で翔子と支倉は仄かに頬を赤らめていた。

「……………お待ちせ。ではチーズ」

突然俺達が良く知っている男が現れた。

あまりにも知り合いの登場で俺は怒りをこらえる事が出来ず行動をとることにした。

「翔子、すまねえ！！」

「……………???」

きょとんとしている翔子のスカートを掴み、軽く捲り上げる。

下着が見えるか見えないかというギリギリの高さまでスカートが持ち上がった。

「……………っ！！（ギラッ）」

「染みついた習慣はごまかせれなかったようだな」

「さ、坂本君何してんの!？」

「ひ、ひばりいつまで目隠しをしてないといけないの?」

「……雄二、えっち」

「もうやらねえよ」

スパアアンツ!!

「痛ってえ!!」

支倉のハリセンが俺をはたいた。

「反省をしてよね!!それと霧島さんに謝ってよ」

「……うん。続きはベットで」

「もうやらねえよ!!」

スパアアンツ!!

再びハリセンが今度は翔子をはたいた。

「……痛い」

「そ、そう言うことは学校を卒業してから。ふ、二人きりの時にすべきだよ」

「……支倉は吉井としないの?」

「し、しないよ／＼／＼、そう言うことは学校を卒業をしたあと」
「ニヨ／＼／＼」

と顔を背ける支倉。しかし鎖骨まで真っ赤になっていた。

それから支倉が落ち着いてから翔子が話した。

「……雄二は素直じゃないからそんなふうに言うけどきちんと反省
をしてる」

「本当？」

と支倉が俺の顔を見上げてくる。

ちっ仕方ない。

「ああ。本当だ。わ、悪かったな」

「……雄二照れてる？」

「なっ！？ち、違うぞ翔子！断じて照れないからな。それと俺はお
前の下着になんか微塵も興味がないっ！」

「……それはそれで、困る」

「ぐあああああっ！理不尽だああっ！」

「ねえ、この場合どうすればいいと思っアキくん？」

「そつだね。こればっかは雄二の方が悪いからほどほどのするよつに言つてあげた方がいいと思うよ」

翔子はアイアンクローをかまし、その握力で頭蓋がきしむ音が響く。

「では、写真を撮ります」

「……はいチーズ」

その間フラッシュが焚かれ、ピピツという電子音と共に撮影終了。

それから支倉の説得でアイアンクローから解放された俺は本当にあいつは俺の事が好きなのだろうかと俺は疑問に思った。

「……雄二、見て。私たちの思い出」

「……なんだ、この写真は」

写っているのは翔子の後頭部と折檻に悶える俺。そして

「サービスで加工も入れておきました」

その二人を囲うようなハートマークと『私たち、結婚します』という文字。

その周りを笛を吹く天使が飛び回っている。

……どうみてもこの二人に幸せは訪れそうにない。

対して明久のは。

二人仲良く映っていてそして 俺達と同じように二人を囲うようなハートマークと『私たち、結婚します』という文字。

その周りを笛を吹く天使が飛び回っている。

「それではこの写真をパークの写真館に飾ってもよろしいでしょうか？」

「キサマ正気か？明久達はともかくこれを飾ることでここに何のメリットがあると言っんだ！」

「……雄二、照れてる？」

「この写真に照れる要素は見当たらない！」

「は、恥ずかしいけど良いよね／＼」

「う、うん／＼」

明久達は甘酸っぱいな。見ていてムカつくな。

『ああ、写真撮影してる！ねえねえ、リユータ！私たちも撮って貰おうよ！』

『オレ達の結婚の記念に、か？おい、係員！オレ達も写ってやんよ』
その時偉そうなチャライカップルの2人組が来た。どっちも頭の悪そうな顔をしている。

「申し訳ありません。こちらは特別企画ですので…」

「ああ！？いいじゃねえか！オレ達はオキヤクサマだぞ！コラあ！」

「キヤー！リユウタ、カツコイイー！」

『だいたいよお、あんなジャリどもよりオレたちを写した方が評判的にも良くねえ？』

『そうよっ！あんなアタマの悪そうなおトコどもなんて写す価値なんてないわ！』

「……（ツカツカツカ）」

「待て翔子。どこに行くんだ」

「……あの二人、雄二達の事を悪く言ったから」

「あのなあ……。その程度でイチイチ目くじらを立てていたらキリがないぞ？」

あんな連中に何を言われても気にならないし、何より視界に入れておくだけで不愉快だ。

「行くぞ、翔子」

「……雄二がそう言うのなら」

翔子もその光景は嫌だったようで、促すと渋々ついてきた。

「ひばり、僕達も行こう」

「う、うん」

それに明久達も嫌なようだから歩き出したようだ。

「ああっ！？ グダグダ抜かすとマスコミにここの態度について当初すっぞゴルアっ！！」

「そーよっ！ アタシたち、オキヤクサマなんだからねっ！」

宣伝のためのイベントでこういう客が来るなんて、如月グランドパ
ークも縁がないな。

と思いつつ、逃亡していく俺達だった。

爆発と努力っ娘と四角関係 前編（前書き）

今回は暮灘雪夜さんとのコラボです。

もし陸達がバカと努力っ娘と四角形の世界に行ったらという設定です。

今回は話の流れ上前編後編に分かれます。

暮灘雪夜さんに怒られないか心配です。

爆発と努力っ娘と四角関係 前編

文月学園

とある研究室

ドツカ ン!!

突然起きる爆発音。

しかし誰も気にしない。

何故なら爆発音が毎日聞こえてくるが何も起きないため誰も気にしなくなった。

いや相手にしたくないのが正しいのだろう。

陸「完成だ!!」

雄二「出来たのか陸？」

「ああ。問題ない」

マーナ「ついに完成しました」

そう俺坂本雄二は陸に頼んで並行世界にいけるように頼んだからだ。

えっ!?!?どうして並行世界に行きたいのかって簡単な話だ。

俺は翔子から離れて自由が欲しいからだ。

マナ「その名も並行君」

陸「ネーミングセンスがないな」

雄二「そうだな」

マーナ「そ、そんな！？インターネットで検索してこれいしかない
つて太鼓判おしてもらったのに（落ち込む）」

「世の中広いな（遠い目）」

「そうだな。明久並みのネーミングセンスを持った奴が他にもい
るとは思わなかった（遠い目）」

「まあ、それはさておきまずは実験してからやるべきだな」

「ああ。さすがに帰ってこれなくなるのは困るからな」

「では、受け渡しは一週間後で良いですか」

いつの間にか復活をしたマーナ。

「ああ。それでいい。頼むぜ」

「任せる。完璧にしてやる（ニヤリ）」

「頼むぜ（ニヤリ）」

「お任せください」（ニヤリ）」

俺達三人は笑い合った。

だがしかしこの時俺達は盗聴されていた事を知らなかった。

場所は変わり暗躍者たち視点

Aクラス教室

「……雄二何を企んでるの？」

Fクラス教室

明久「雄二の奴何を企んでるのだろうね？」

秀吉「そうじゃのう。ワシらに内緒で頼み事とはのうっ。」

ムツツリーニ「……現在調査中。だが平行移動がどつどつと言っていた」

美波「なによそれ？」

姫路「なるほど。わかりました。坂本君は並行世界に行こうとしてるんですよ」

4人「どうして並行世界に？」

姫路「はい。これは推測の域を出ないのではっきりとは言えません
が別の場所に行って遊びに行こうとしてんですよ」

ムツツリーニ「……なるほど。確かに奴はどこかに旅行に行く準備をしていた」

明久「ええっ！！それじゃ雄二だけ楽しむつもりなの？」

秀吉「落ち着くのが明久。否定できる要素がないのも確かなのじやがこればかりは雄二に聞いた方がいいのではないのかのう」

美波「そうね。霧島さんと二人きりで行くのかもしれないものね」

姫路「はい。私もそう思います」

「……どちらにしても確認は必要」

「そうだね。じゃあ一週間後に陸の研究室に行こうよ」

「む。それは構わんがそれじゃとワシらが盗聴していると気づかれると思つのじゃが？」

「そうね。邪魔はしたくないしね」

「それでしたら霧島さんに聞いてみたらどうでしょうか？」

「そうね。確認を試みましょうか」

「わかりました。あとで霧島さんに会いに行きましょう」

「」「」「」「」
「」「」「」

と暗躍組が動き出した。

一週間後

再び陸の研究室。

「準備は出来てるぜ陸」

「そうか。では行くか。マーナ」

と言ってマーナは並行君を起動させた。

しかし、そのときこの場にはいない奴の声が聞こえてきた。

「……雄二。陸と二人きりで何をするつもり？」

「そうだよ。僕達を混ぜてよ」

「……独り占めは許さない」

「そうじゃぞ。雄二」

「ダメですよ坂本君。霧島さんを置いていってば」

「そうよ。男らしくはないわよ坂本」

「ま、待てどうしてお前らがここに居る」

「……雄二の事なんてお見通し」

「……俺を忘れるとはうかつ」

「ちっ、ムツツリーニを甘く見たせいか」

「それより早く降りろ！定員オーバーだ！」

「ま、マスター。ダメです。起動してますから降ろすことが出来ません。このまま全員で行くしかないです」

「仕方ない。このまま行くぞ」

「了解マスター」

キュウイ　ン！！

シュパ　ン！！

こうして俺達は余計な連中を連れて並行世界に飛んだ。

バシュ　ン！！

「ここは、どこだ陸？」

「待ってる。今調べてる」

????「ここで何をしているの」

「ああ。機械が故障してるからな。困っているのとニジがどいかと調べてるんだ」

「????」それは、大変だね。良かったら僕の工房に持って行ったらどうか?」

「それはすまないな明久」

明久? 「ううん。気にしなくて良いよ。あつてもしよーこちゃんに聞かないとダメだったよ」

「そうか。すまないが聞いてくれ」

明久? 「うん、わかったよ」

「ん?。明久このこと知ってるのか?」

「ううん。知らないよ」

「だよな。じゃあさっきのは誰?」

「……そういえば見たところ明久と同じ姿をしていた」

「じゃあ。間違いなくここは並行世界と言うこと?」

「そうだ。よし出た。ここは霧島の家の前だ」

「……通りで見たことが在ると思った」

「しかし、なぜ夜なのじゃ」

「簡単な話だ。定員オーバーで行ったからずれたんだ」

「なるほどな。だがどうして明久（仮）がここにいるんだ？」

「それについてはわからないな。予定した世界とは違うからな」

「「「え！？そうなの」「」」

と俺と陸と気絶しているマーナ以外が聞いてきた。

「ああ。そうだ。俺達が本来行くこうとしたのは」

とその時暗闇に浮かぶ二人組が現れた。

「???」明久。彼らがそう？」

明久（バカ努力Ver）「うん。そうだよ」

「なあ、雄二？」

「言いたい事はわかるが翔子は俺の背後にいる」

「……海谷」

「何だ？」

「……あれが並行世界の私なのね」

「そうだ」

霧島（仮）「……困っているのよね」

「そうじゃ」

霧島（バカ努力Ver）「……秀吉。帰る道が違う」

「む。お主。ワシの事を秀吉と言ったのう」

霧島（バカ努力Ver）「……そうだけど。どうしたの？」

「すまないがここで話すと長くなる。どこか落ち着ける場所はないか。それにいつまでもこれがここにあつたら邪魔になると思うからな」

霧島（バカ努力Ver）「……わかった。それについては明久の工房に運んでおく。ついてきて」

「わかった。行くぞ皆」

「う、うん」

と全員がうんと頷いて移動をした。

霧島鄭客間

霧島（バカ努力Ver）「……それで、貴方は誰？」

「すまない。自己紹介が遅れた。海谷陸」

明久（バカ努力Ver）「聞いたことない名前だね」

「それは、そうだ。信じられないと思うかもしれないが俺達は並行

世界の住人だからな」

霧島（バカ努力Ver）「……確かに信じにくい話だけど秀吉の反応やどうしてもう一人私が居るのが納得が出来る」

「そうか。信じてくれて助かる」

明久（バカ努力Ver）「それで、元に帰れるの？」

「修理して少し改造を加えれば問題ない」

霧島（バカ努力Ver）「……そう。なら直るまで此処にいればいい」

「ありがとう。霧島」

霧島（バカ努力Ver）「……気にしなくて良い。明久が興味を持ったから入れただけだから」

「それでも感謝するよ」

明久（バカ努力Ver）「じゃあ今からしようか」

霧島（バカ努力Ver）「……それはダメ。今日は遅いから明日にした方が良い」

明久（バカ努力Ver）「そうだね。しょーこちゃんの言う通りだね」

霧島（バカ努力Ver）「……あとでどこに就寝出来るところを案

内する。明久、行こ」

明久（バカ努力Ver）「うん。それじゃまたね」

と二人が出ていった。

「むづ。寢床は何とか出来たがわからないことで多いのう」

「……（コクコク）」

「そうね。ウチはアキと霧島さんが同じ家に住んでる事が驚きよ」

「そうですね。私も驚きました」

「……私も雄二以外に興味を持つなんて驚き」

「そうだな。俺としてはここは楽園だな。ま、明久がモテルのは気に入らないけどな」

「……雄二はもう少し嫉妬するとか心配して欲しい」

「待て、あだだだだっ！ ちょっと待て！ お前が俺に何を要求しているのか分からねえ！」

「……わかるまで教えてあげる。……身体に」

「ふぐああっ！」

と雄二がお約束の状態になった。

「でも、どうして僕や秀吉の事を下の名前で呼んだのかな」

「それは、おそらくこの世界では仲がいいのだろうな」

「そうですね。そう考えるとつじつまが合います」

「そうですね。アンタの事を霧島さんは知らないみたいだし」

「それはそうだ。並行世界はどれだけあるかはわからないからな」

「では、この世界は霧島さんと明久君が仲が良い世界なんですね」

「ああ。それは間違いないだろうな」

「……そう。そんな世界もあるのね」

と霧島さんが寂しそうな顔をしている。

「この世界ではそうかもしれないが俺達がいた世界では違うんだ。同じではない。だから気にする必要はないと思うが」

「……それは、わかっている。でもこの世界の雄二はどうしてそうなったのかそれが気になる」

「そうですね」

「そうですね。じゃ明日。坂本の家に行って聞きに行きましょう」

「……そうですね。確認に行ってくる」

「ふう。……好きにな。俺は修理をしなくてはいけないからお前らについてはいけないが可笑なことだけはするなよ」

「わかってるわよ。アキとは違うから」

「じゃあ僕達はどうしようか？」

「そうだな。することもないしな」

「そうじゃのう」

「……俺としては良い映像が取ればそれで良い」

それから俺達は明日の行動を決めたとき。

霧島（バカ努力Ver）が入ってきた。それから寢床が決まったからと教えてくれた。

霧島（バカ努力Ver）「……貴女達の部屋はあそこ。貴方達の部屋はあっち。覚えといて」

「……わかった。でも不思議。自分と同じ存在なのに全然違うと思う」

霧島（バカ努力Ver）「……そうね。私もそう思う。でもそれはそれで新鮮で良いと思う」

「……私もそう思う」

こうして俺達的一天が終わった。

爆発と努力つ娘と四角関係 前編（後書き）

ご意見感想をお待ちしております。

爆発と努力っ娘と四角関係 中編（前書き）

今回も暮灘雪夜さんとのコラボです。

もし陸達がバカと努力っ娘と四角形の世界に行ったらという設定です。

話が予想以上に長くなりそうなので今回は中編を投稿します。

暮灘雪夜さんに怒られないか心配です。

爆発と努力っ娘と四角関係 中編

次の日

朝食を食べた俺達は……。

それぞれの行動をしている。

陸は修理をすと言って明久（バカ努力Ver）に着いて行く。

「それじゃ私たちも行きましょう」

「そうね」

「……（コクコク）」

「雄二。僕達はどつする？」

「そつだな。することないし街でもぶらつくか」

「そつじゃのつ」

「……確かに」

その時霧島（バカ努力Ver）に呼び止められた。

霧島（バカ努力Ver）「……待って貴方達に話が在るの」

「……？何ですか？」

霧島（バカ努力Ver）「……貴方達と私達は同じ姿をしているから。うかつに動くと迷惑になるの。だから、ここにいてくれると助かる」

「……それはわかる。でも私たちも確認したい事が在る」

「そうですね。私達はうかつには動けませんからでも私たちも外せない用事なんです」

「そうね。無理を承知でお願いするけど」

霧島（バカ努力Ver）「……貴女達は何を確認をしたいの？」

霧島「……雄二の事」

霧島（バカ努力Ver）「……雄二の何を気になるの？」

姫路「私たちの世界では坂本君と霧島さんが仲がいいんです」

とここで雄二が否定をしようとしたところを明久、秀吉にムツリ
ーニに口をふさがれたうえ気絶させられた。

美波「だから、こっちではどうしてこうなったのかの理由が知りたいのよ」

霧島（バカ努力Ver）「……余計な事。どうしてそこまで干渉されないといけないの!?!」

霧島「……それは」

霧島（バカ努力Ver）「……貴女達にとって自分達と同じでないといけないの？だとしたら貴女達はわがまま！！」

美波「そ、そうじゃないわよ」

姫路「そうです。それは勘違いです」

霧島（バカ努力Ver）「……貴女達の言い分に違いはないと思う。私と明久の仲を邪魔するつもりなら容赦はしない！！」

霧島「……私達は貴女の邪魔をする気はない。世界が違う以上私達には関係ない。それに海谷も言っていた」

霧島（バカ努力Ver）「……そう。ならどうして干渉をしてくるの？」

霧島「……私がいえ私たちが知りたいのは貴女と雄二と吉井の過去に何が在ったのか知りたいの？」

霧島（バカ努力Ver）「……それを知れば納得するの？」

霧島「……貴女が吉井が好きのように私は雄二が好き。多分それはお互い過去に何が在ったからだと思う。……少なくとも私はそうだった」

霧島（バカ努力Ver）「……そう貴女も」

霧島「……（コクン）」

霧島（バカ努力Ver）「……わかった。それで納得して私と明久にこれ以上余計な干渉をしてくれないのなら出ても良い」

姫路「ありがとうございます（素敵な笑顔）」

美波「ありがとうございます。無理を言っでごめん」

霧島「……ありがとうございます」

霧島（バカ努力Ver）「……でも条件をつける。絶対に先生たちや学校にいる人たちにおかしいと言わないようにして欲しい」

霧島「……わかった」

姫路「わかりました」

美波「そうね。それくらいは守るわ」

霧島（バカ努力Ver）「……じゃあ準備して」

と言って霧島（バカ努力Ver）は明久（バカ努力Ver）を呼びに行くと言ってここから出て行った。

秀吉「とりあえずワシらの行動は決まったのう」

明久「そうだね」

姫路「そうですね。そうです。せっかくですから私弁当を作ろうと思います」

美波「そう。それじゃウチも作るのを手伝っわ」

霧島「……私もする」

とバカ爆発女子が弁当を作ろうと移動を開始した。

明久「ま、待って！！勝手にしたらダメだよ」

秀吉「そ、そうじゃのう。ワシもそう思うのじゃ」

ムツツリーニ「……（コクコク）」

とその時

陸と明久（バカ努力Ver）と霧島（バカ努力Ver）が一緒に来た。

「何の話をしてるんだお前ら？」

霧島（バカ努力Ver）「……さっきちらつと聞こえたのが弁当がどうのこうのって」

明久（バカ努力Ver）「うん。僕もそう聞こえた」

姫路「すいません。実は私たちも弁当を作りたいので台所を借りていいですか？」

美波「ダメかしら？」

霧島「……頼みたい」

とバカ発明女子が聞いてきた。

ちなみに陸は顔を青くしていた。

霧島（バカ努力Ver）「…………別にかまわない」

そしてその一言が地獄の大鎌が振り下ろされた。

その一言でバカ発明女子は台所に行った。

そう俺達には地獄が手招きをしてるように感じた。

その時俺達はすぐにアイコンタクトをしてすぐに逃げようと会話した。

そこですぐに実行をしようとして体を動かしたとき地獄から声が聞こえた。

そうそんなに時間が経ってないのに弁当を持って台所から三人は居間に入った。

『出来ました』

『ウチも出来たわ』

『…………私も』

早い、あまりに早さに俺達は驚いた。

霧島（バカ努力Ver）「……早くて当然。ここの台所は時間の流れが違うから」

「……な、何ですと（じゃと）！」「」「」

と信じられない言葉に俺達は聞きかえした。

明久（バカ努力Ver）「うん。それはね。僕達が小さい時に困ってる人を手助けをしたらね。くれたんだ。時の間というテープね。それを張ると時間の流れが変わるって言ってたんだ」

明久「そ、そんなこと可能な陸？」

「出来なくもないがそれでも簡単には出来ない。かなりの設備と広さが必要だ」

雄二「つまり、どんなに広い台所だろうが設備の方が場所を取るから現状ではありえないと言うわけか」

「ああ。そうだ」

秀吉「むう。それは恐ろしいのう」

ムツツリーニ「……さすが並行世界」

そう俺達は余りにも信じられない事に絶句した。

姫路「でも、残念です（落ち込み）」

霧島「……特別な秘薬がなかった」

美波「？瑞希に霧島さん一体何を入れるつもりなのよ？」

姫路「はい。隠し味として塩酸や硫酸ら薬品を入れたかったです
が手持ちに無かったんで入れませんでした」

霧島「……特性惚れ薬」

美波「……霧島さんののはともかく瑞希だけは台所に立たない方がい
いわね（啞然）」

6人「うんうん」

雄二「ちょっと待て翔子の方もまずいだろっが！！」

明久（バカ努力Ver）「でも、流石に冗談だよね〜弁当に薬品を
入れるなんて」

霧島（バカ努力Ver）「……私もそう思う」

姫路「えっ？どうしてですか？化学反応起こしておいしくなるんで
すよ」

霧島「……味見してる？」

姫路「しません。だって……、その……、味見でつまみ食いしたら太
っちゃうじゃないですかあ」

「」「」
「」「」

場が一気に静まった。

霧島（バカ努力Ver）「姫路。貴女はこれからはけっして台所に立ってはダメ」

霧島「……私も同意見」

姫路「そんな！！（ガクツ）」

姫路（巨乳娘）はこの世の終わり様な顔をして床に崩れた。

霧島と霧島（バカ努力Ver）の鶴の一言で巨乳娘を倒した。

あまりにの唾然とした結果に一瞬誰も理解が出来なかった。

ただ言える事は一人の犠牲でこの世界は救われたと言える。

そう。今霧島と霧島（バカ努力Ver）は勇者だと思つ。

明久&雄二&陸&秀吉&ムツツリーニ「……（泣いてお互いを抱きしめあう）」

霧島「……雄二浮気は許さない」

美波「やっぱりあんた達、愛し合ってたのね！！」

姫路「海谷君、不潔です！」

5人「ち、違う誤解だ（よ／じゃ）！！」

バカ爆発女子「問答無用！！」

そして俺達は命がけの追いかけてっここが始まった。

明久（バカ努力Ver）「皆仲がいんだね」

霧島（バカ努力Ver）「うん。私もそう思う」

いや一部から暖かい視線を僕らに向けている。

それから数分して……

霧島（バカ努力Ver）「そろそろ時間だからそこまでにしてくれない」

霧島（バカ努力Ver）の言葉に俺達は命が助かった。

明久（バカ努力Ver）「じゃあ〜行こうかしよーこちゃんに皆」

と俺達がああと返事をしたとき何か違和感を感じた。

明久「ちょ、ちょっと待ってよ。どうして女子の制服を着てるのそ
つちの僕！？」

そう余りの自然だったため違和感が在ったが気にしてなかったがど
うして明久（バカ努力Ver）は女子の制服を着ていた。

明久（バカ努力Ver）「ああ。これね」

霧島（バカ努力Ver）「明久の制服をクリーニングに出してるか

らだから代わりに私が用意したのを着てるの「

爆発と努力つ娘と四角関係 中編（後書き）

ご意見感想をお待ちしております。

爆発と努力っ娘と四角関係 後編その1（前書き）

今回も暮灘雪夜さんとのコラボです。

もし陸達がバカと努力っ娘と四角形の世界に行ったらという設定です。

話が予想以上に長くなりそうなので今回は後編その1を投稿します。

暮灘雪夜さんに怒られないか心配です。

爆発と努力っ娘と四角関係 後編その1

瑞希「美波ちゃん」

美波「瑞希」

瑞希&美波「^{アキ}明久君着てください（べきよ）」

と姫路（巨乳娘）と島田^{ツンデレ}が明久に女子の制服を無理やり着せようとしている。

明久「え！？どうして僕まで着ないといけないの！？」

瑞希「対抗すべきだからです！」

美波「そうよ。アキの魅力をこの世界に教えるためよ！」

明久「た、助けてよ陸！！」

ふむ。時間も足りなくなるし、明久が俺に助けを呼んでるし仕方ない助けるか。

「まあ待て。ツンデレに巨乳娘。残念ながらそれは明久のサイズが合わないからな」

瑞希「どうしてですか！？」

美波「そうよ。教えなさいよ！！」

ムツツリーニ「……サイズが合わない」

「そう言うことだ。俺達の世界の明久の方がウエストが細いんだ」

瑞希「そ、そんな（ガ ン）」

美波「うそよ！そんな事なんてありえないわよ。そうでしょう海谷
！」

そんなツンデレや巨乳娘の言葉を聞き俺は首を横に振った。

雄二「なるほど。世界が違うから食事も違う。だから体型も少しは
違うと言うわけか」

「そう言うことだ。こっちの明久より明久（バカ努力Ver）のほ
うが健康的で色つやも良いと言うわけだ」

明久「つまり、僕は食事のおかげで助かったと言うことなのかな？」

秀吉「そういうことじゃのう」

瑞希「……しくしくしく……世界って残酷ですね……」

美波「違つよ瑞希。残酷なのはきつと、神様なのよ……」

と落ち込む二人を連れて俺達は霧島の家を出て学校に向かった。

学園校門前

明久「へえ。この辺はかわらないんだね」

「その様だな。まあ、変化ばかりしても困るけどな」

雄二「確かにそうだな。そういえばどうして陸がついてきているんだ？」

「ああ。それはな部品が足りないからこの学園長に頼んで部品を分けてもらおうと思ってな」

秀吉「なるほどのう。そういうことじゃったか」

ムッツリーニ「……納得」

霧島「……それで修復にどれだけ時間がかかるの」

「部品さえそろえば30分で出来る」

明久（バカ努力Ver）「そっか。残念だな（落ち込む）」

「安心しろ。暇になったら会いに来てやるさ。もしくは二人で遊びに来るのも在りだぜ」

明久（バカ努力Ver）「うん。ありがとう」

霧島（バカ努力Ver）「その時はよろしく（海谷。私と明久を邪魔はしないで！）」

と霧島（バカ努力Ver）が俺に小声で警告をしてきた。

「ああ。（安心しろ。俺もそこまで野暮じゃない。二人の仲がさら

に進むよう応援するぞ)」

霧島（バカ努力Ver）「それじゃ学園長室に向うからついてきて（そうならいい）」

学園長室前

コンコンと扉を霧島（バカ努力Ver）をノックした。

「開いてるよ」

中から聞き覚えが在る妖怪の声が聞こえる。

「失礼します」

霧島（バカ努力Ver）について俺らは堂々と、入室した。

そこには、机で書類に目を通して見ることが在るしわくちやの妖怪がいた。

俺達が机の前に行くと、ババアは面倒そうに顔を上げ、俺達をみやると、フンと鼻を鳴らす。

「アンタ達かい。で？ 何の用だい？ そのピンクタイフーンが何か問題でも起こしたのかい。それともクソ生意気な男が何かやったのかい。とつとと話な」

罵倒された。どうやこつちでも変わらないようだ。

明久や雄二は変わらない事に呆れていた。巨乳娘たちは驚いていた

がな。

明久（バカ努力Ver）「うんおばあちゃん。実はね……」

と明久（バカ努力Ver）がババア長に説明をしていた。

と話が終わったのかババア長はため息をつきながら俺達を見た。

そしてこうつぶやいた。

ババア長（バカ努力Ver）（やれやれ世界が違ってても迷惑事だけは持ってくるんだね。はあ。）

霧島（バカ努力Ver）「……お願いできないでしょうか？」

明久（バカ努力Ver）「だめかな？おばあちゃん」

ババア長（バカ努力Ver）「仕方ないさね。部品については手配してやるさね。今日の午後には届くようにしてやるよ。但し、あんな達はここに居ても迷惑さね。使っていない空教室が在るから終わるまでそこで待つてることだね」

「わかった。しかし、休み時間や食事の時トイレは出て行くが構わないな」

ババア長（バカ努力Ver）「好きにしな」

こうして俺達は使われてない教室に向った。もちろんこの世界の霧島と明久と別れた。

空教室

雄二「で、どうするつもりなんだ陸」

と雄二が話しかけてきた。

「何の事だ雄二？」

明久「そつだよ。何をたくらんでるの？」

秀吉「そうなのじゃ」

ムツツリーニ「……隠し事はいけない」

さてどうしようかな。

爆発と努力つ娘と四角関係 後編その1 (後書き)

ご意見感想をお待ちしております。

爆発と努力っ娘と四角関係 後篇その2（前書き）

今回も暮灘雪夜さんとのコラボです。

もし陸達がバカと努力っ娘と四角形の世界に行ったらという設定です。

今回で一様一区切りをします。

暮灘雪夜さんに怒られないか心配です。

爆発と努力っ娘と四角関係 後篇その2

俺の傍にいつの間にか秀吉達も集まってきた。

霧島「……………問題はどつやってこの世界の雄二に出会つか」

美波「そうね」

姫路「難しいですね」

美波「この時間帯ならFクラスにいるのは間違いないと思うけどね」

霧島「……………でも騒がれたくない」

姫路「そうですね。それに素直に話してくれるとも思いませんしね」

バカテスガールズも悩んでるようだ。別な事で。

さて本題に戻るか。

「別に企みと言っわけでもないが今マーナにシステムにハッキングをしてるんだ」

秀吉「何のためにそんな事をしておるのじゃ」

「何のためだと？（はあ）わからないとは残念だよ秀吉」

秀吉「だから何なのじゃー！」

「好奇心を満たすためだよ」

秀吉「好奇心じゃと?」

「そつだ。秀吉だつて役者として演技者と満足いくように他の奴らから学ぶだろ。それが好奇心だ」

秀吉「むづ。そう言われては何も言えんのじゃ」

雄二「そついえば居たな。静かだったから消えたのかと思つたのだが」

マーナ「ひ、酷いです〜それとマスター。ダメです。進入できません」

「ほう。面白い。さてどれほどか試してやるよ」

マーナ「ファイト一発」

「気が散る。邪魔をするな」

マーナ「……（落ち込む）」

雄二「なるほど。ここの情報を頂いて自分の研究に役立てるんだな」

明久「そつか。あのありえないものを再現するためだね」

ムツツリーニ「……それがあれば編集も製品づくりも時間の事を気にしなくていい」

秀吉「なるほどのう。好きなだけ演劇の練習もできるのう」

4人「頑張れ!!」

「だ!か!ら!気が散るから黙って置け!」

俺がこの学園の強固なプロテクトを破りながら調べていたらうるさい連中が騒いでいた。

「ちっ」

明久「どうしたの?」

「何者かがこっちにハッキングをしてきた」

雄二「大丈夫なのか?」

「この程度大したことない」

マーナ「現在召喚獣システムのデータをコピーしてます」

「続ける」

マーナ「了解。ついでにダミープログラムを散布します」

明久「始めて役に立ったね」

秀吉「そうじゃのう」

ムツツリーニ「……意外」

マーナ「静かにしてください。気が散ります」

雄二「へえ。意外と言っただな」

「暇なら誰も入ってこないよう見張って置け。説明するのが面倒だ」

ムツツリーニ「……了解」

明久「わかったよ」

雄二「そうだな」

秀吉「任せるのじゃ」

数分後

マーナ「コピー終了。ログアウトします」

「ふう。まさかここまで進んでるとは……」

明久「終わったの？」

「ああ」

雄二「で、どうなんだ？」

「予想以上だ。これから設計図を作るつもりしてるものすらあったぞ」

秀吉「ふむ。良くはわからんが大収穫のようじゃのう」

ムツツリーニ「……おつかれさま」

「ああ。だがこれがあれば試験召喚獣戦争がさらに面白くなるぜ」

雄二「ほう。ならば楽しみにして置くぜ（ニヤリ）」

「ああ。これなら連中もやる気を出さず。それに、これなら誰が最強か決定戦も起せそうだからな（ニヤリ）」

秀吉「やれやれ。学園長の苦勞が目に浮かぶのう」

ムツツリーニ「……同感」

明久「そうかな。僕は楽しみだけど」

俺達が話をしていると扉が開いた。

明久（バカ努力Ver）「良かった。ここにいてくれて」

そう入ってきたのは明久（バカ努力Ver）と見覚えがある赤い髪の野性的な顔の男が入ってきたのだ。

そして入ってきた野性的な男は俺達を見て啞然としていた。

驚いていた男は何度も目をこすって確認をしていた。

そして、明久（バカ努力Ver）に確認をしてきた。

「……明久。話をして欲しいと言うのはこいつらか？」

明久（バカ努力Ver）「うん。そうだよ。ゆうくん」

雄二（バカ努力Ver）「……明久から話は聞いていたがそれにして驚いたな」

確かに俺達も驚いた。

明久「こっちの僕は雄二の事をそう呼んでいるんだ。寒気がするよ」

雄二「同感だ。何を考えてるんだそっちの明久は！」

君達に取って驚くポイントはそこなのか？

雄二（バカ努力Ver）「言いたい事はわかる。俺もそう呼ぶなど言ってるんだが……」

明久（バカ努力Ver）「え？どうしてゆうくんはゆうくんだよ」

雄二（バカ努力Ver）「……となるからな。諦めがついた」

確かに気にしない方がよさそうだな。悩むだけ無駄だな。

雄二（バカ努力Ver）「それで、聞きたい事って何だ？」

沈んだ空気を元に戻すために話を振る雄二（バカ努力Ver）。

霧島「……聞きたい事が在る」

雄二（バカ努力Ver）「翔子か？」

霧島「……（コクン）」

雄二（バカ努力Ver）「それで聞きたいこととは何だ？」

霧島「……私の方では雄二とは結婚を前提とした付き合いをしてるの」

雄二「ちょっと待て！！つきあうとは言ったが結婚前提とは言っていないぞ！！」

霧島「……雄二うるさい」

雄二「だから俺の話をぎゃあああああああああ！！」

霧島は俺特性のスタンガンを使ってゴリラを気絶させた

雄二（バカ努力Ver）「お、おつかねえ」

霧島「……私がいえ私たちが聞きたいのは吉井とこっちの私が仲がいいのか聞きたいの？」

雄二（バカ努力Ver）「……そこで伸びてる彼氏は良いのか？」

霧島「……大丈夫。頑丈だから」

雄二（バカ努力Ver）「そ、そうか（引いている）」

霧島「……返答は」

雄二（バカ努力Ver）「……それは軽々しくは言えないな。それにどうして俺達の過去話をお前達に教えなくてはいけないんだ？」

霧島「……どうして？」

美波「そうよ！」

姫路「そうですよ！」

雄二（バカ努力Ver）「それじゃお前ら教えてくれるのか？つらい記憶を。出来れば思い出したくないものを」

美波「そ、それは」

姫路「そうですけど」

霧島「……わかった。教える。但し雄二（バカ努力Ver）以外の男子は出て欲しい」

「それじゃ行くか」

秀吉「良いのか」

「構わねえよ」

ムッツリーニ「……残念」

明久「そうだね。でも話したくないなら仕方ないよね」

「そう言うことだ。いつか雄二の口から聞けばいいさ。行くぞ」

明久（バカ努力Ver）「どこに行く？」

俺達は空教室から出て行った。

霧島視点

海谷たちが出て行くのを確認したから戻った。

雄二（バカ努力Ver）「じゃあ教えてもらおうか？」

彼が異なる世界の雄二が真剣な顔をしていた。

霧島「……（コクン）そうあれは」

話の内容上長くなるので詳しい内容は原作6・5巻の雄二と翔子と幼ない思い出を見てください。

雄二（バカ努力Ver）「なるほど。そう言うことか」

私の話を聞いていた雄二（バカ努力Ver）は俺にもそこまで勇気が在ったらなとつぶやいていた。

霧島「……今度はそっちの番」

雄二（バカ努力Ver）「ああ。わかってる。って言ってもあまり差はないんだ。そうこっちの世界の翔子をいや俺すらも助けてくれただ明久は」

霧島「……確かにそれなら納得がいく」

美波「そうね。世界が違ってもアキはアキってことね」

瑞希「そうですね」

確かに納得がいくけどこの話はまだ続きが在る。でもそれを聞く事は出来ない。

それでも詳しく知りたい人は暮灘雪夜さんの作品のバカと努力つ娘と四角形の第6話 僕とオペラと錆び付いた時計を見るとわかると思います。

雄二（バカ努力Ver）「用はすんだな。それじゃ俺は行くからな」

霧島「……ありがとう」

雄二（バカ努力Ver）「気にするな。そっちの俺と仲良くな」

霧島「……うん。そっちの世界の雄二は良い人」

雄二「おかしいだろ！普通は俺を助けないか？」

雄二（バカ努力Ver）「決まってるだろ。係り合いになりたくないだけだ」

雄二「ふざけるな！！上等だ！勝負だ！」

雄二（バカ努力Ver）「ふむ。まあ良いだろう。Aクラスを攻める準備運動くらいにはなるだろう」

雄二「ほえずらをかかしてやる!!」

マーナ「合意」とみていいですね」

美波「急にどうしたのよ?」

瑞希「そうですよ。マーナさん」

マーナ「マスターがもし戦闘になったら召喚獣を使った戦いにしろと言っていました。これならお互い傷つかず納得のいく戦いになると言っていました」

霧島「……雄二頑張つて」

美波「フィールドはどうすんのよ」

マーナ「私が張りますよ」

瑞希「出来るんですか?」

マーナ「出来ますよ」

姫路達は文句を言っているけどこの状態なら止める方が危険。

雄二「翔子。あの二人を抑えてくれ」

霧島「……わかった。二人とも下がるよ」

美波「どうしてこんなことをしても意味がないじゃない」

瑞希「そうですね」

雄二（バカ努力Ver）「言いたい事はわかる。だがな頭に血が上った奴に通じると思うか？」

その言葉に二人は……

美波&瑞希「……………」

黙って下がった。

マーナ「科目は？」

雄二&雄二（バカ努力Ver）「日本史で」

マーナ「わかりました。承認します」

そして教室内のみフィールドが展開された。

雄二&雄二（バカ努力Ver）「サモン試獣召喚！」

と二人の雄二はお互いの拳を前に突き出して呪文を唱えていた。

Fクラス	坂本雄二（バカ努力Ver）	日本史	220点	V S	F
クラス	坂本雄二（バカ努力Ver）	日本史	399点		

そして、お互いの点数が表示された。

それと同時に雄二（バカ努力Ver）の方にはルーレットが回っている。

対して雄二（バカ努力ver）の方はシステムを使いますか？例の装備を使いますか？と聞かれていた。

「……はい？」

雄二（バカ努力ver）とマーナを除く全員が驚いていた。

雄二（バカ努力ver）「？何を驚いているんだ？ふむ（考え中）……なるほどそっちにはないシステムが在るんだな（ニヤ）」

雄二（バカ努力ver）は最初は驚いていたけどすぐに私たちの反応の意味に気付き理解していた。その上なしにしてもいいんだぜといっている。余裕しゃくしゃくなうえ自信が在る見たい。やはり侮れない。

雄二「舐めるな！知らないものがあるうが俺は負けねえ！」

挑発に乗っている雄二。でも頭の中は冷静に作戦を立てている。

雄二（バカ努力ver）「そうか。ではそうさせてもらうぜ」

雄二（バカ努力ver）はAクラス戦の前座くらいにはなるかなと言っている。でも私にはわからない。

どうして相手の土俵に乗る必要があるの？……！そういうことだね。実践データを取りたいわけね。

そうすれば元の世界に帰っても雄二達は有利になる。生きたデータが手に入るから。

その証拠にマーナがデータを取ってる可能性が高い。うっん、確実に取っている。

雄二。そこまで私達Aクラスと戦い勝ちたいの？

本当に勉強だけがすべてでない事を証明するのに戦争をする必要が在るの？

私にはわからない。雄二の気持ち。

霧島視点終了

雄二視点

雄二(爆発ver)「ストップ」

ルレットを止め選ばれたの姫路の剣だ。

俺の点数では姫路ほどのダメージはないだろうが有利のはずだ。

対してあいつは真紅に塗られた、ナックル・ガードー体型のガンレットだ。リーチは俺の方が上だ。

俺を甘く見たな。

雄二(バカ努力ver)「じゃあ始めるぞ」

雄二(爆発ver)「もう始まっている」

雄二（バカ努力Ver）「そうだな」

戦いは切って落とされた。

雄二視点終了

その頃明久達はと言うと

「「「……」」」

Aクラス

「はい。明久ア　ン」

「ア、ア　ン」

はい。二人だけの空間でした。

「……明久。次の場所に行こう」

「……そうだね」

「……食堂に行こう」

「……そうじゃのう」

俺達は急いでAクラスから離れた。

優子（バカ努力Ver）「これくらいで逃げるとはまだまだ甘いわね。これでも控えてるのよ」

遠くの方から達観している木下姉（バカ努力Ver）の聲が耳に残った。

食堂

ここに来てても驚いた。

姫路（バカ努力Ver）「？あれどうして、明久君がここにいるんですか？」

秀吉（バカ努力Ver）「む。どうして？ワシがそっちにいるんじゃない！？」

こっちの世界の姫路はよく食べるようだ。

なぜなら彼女が食べていたのはピラフとカツサンドとナポリタンとオムライスだからだ。

「……沢山食べるんだね姫路さん」

姫路（バカ努力Ver）「？どうしたんですか？明久君。急に他人行儀になるなんて？いつもはみいちゃんって言ってるじゃないですか？」

「じ。実は……」

~~~~~説明中~~~~~

姫路（バカ努力Ver）「なるほど。そういうことですか？」



秀吉（バカ努力Ver）「理由はわかったのじゃ」

「そうか。少し驚いたがまともそうだな」

「そうだね」

「当たり前なのじゃ」

「……これはこれであり」

それからいろいろあったが話の関係上省きます。

放課後

翔子の家

明久のラボ

姫路（バカ努力Ver）「運ぶものはここにおいとけばいいんですか」

「あ、ああ」

明久（バカ努力Ver）「ありがとう。みいちゃん（ニコ）」

姫路（バカ努力Ver）「これくらいなんともないですよ」（笑顔）

霧島（バカ努力Ver）「海谷。早く組み立てる」

「ら、ラジャ」

それから数分して

「完成だ」

明久（バカ努力Ver）「出来た」

姫路（バカ努力Ver）「完成です」

霧島（バカ努力Ver）「これで邪魔が消える」

それからみんなが集まって俺達は元の世界に帰った。

だが姫路（バカ努力Ver）の言葉また会いましょうが俺は気になった。

深夜

陸の研究室

ドツカ      ンー！

????「ふふっ…きちゃいました」

????「面白そうな予感がするのっ」

????「今度こそ出番を」

「????」俺の定番

まだまだ平穩はこないようだ。

爆発と努力っ娘と四角関係 後篇その2（後書き）

コラボには続きはありますが、暮灘雪夜さんが復帰され進まれましたら改めてお願いする予定です。

ご意見ご感想をお待ちしております。

**科学者と姉御と泣き虫と不思議なカバン（前書き）**

今回はrocklessさんとのコラボです。

rocklessさんに怒られないか心配です。

## 科学者と姉御と泣き虫と不思議なカバン

放課後

明久視点

西村先生に呼ばれて職員室に向ったクラスメイトで親友の海谷陸を見送りながら朝から気になっていた物に僕は釘付けだった。

それは陸の席に鞆が一つ置いてあることだ。

いや僕だけでもない。雄二は勿論秀吉も気になっていた。

僕が聞いても何でもない開けるなよとしか言わなかった。

おかげで僕は授業に集中できなかつたんだ。

え？いつものことだつて失敬な偶には聞いているよ。

奏「それは聞いてないと同じだと思うよ」

明久「え？」

後ろから声を掛けてきたのはrocklessさんが書かれています。現在連載中の作品。え？代表？私がですかあ？！のオリキャラで主人公の僕らFクラスの代表音尾奏さんだ。面白い作品なので良かったら見に行ってください。

宣伝も終わったし本題に戻ってあれ？どうして僕が考えていた事を

音尾さんが知ってるの？

優紀子「それは顔に出ていたのと喋っていたからだ」

呆れた顔で話掛けてきたのは同じくrocklessさんが書かれて完結している作品 姉御とテストと召喚獣のオリキャラで主人公の僕らFクラスの副代表の一人で僕達の悪友坂本雄二の双子の姉の坂本優紀子さんだ。完結してますがこの作品も面白い作品なので良かったら見に行ってください。

「え！？そんなに出てたの？」

「ああ。バカ丸出しだったぞ」

このブサイクな声は間違いない坂本雄二だ。

「なんだと！ふん。雄二だって朝から陸の目を盗んでカバンを開けようとして挑戦して失敗してるじゃないか！」

「あ、あれは陸が鉄人に預けてるからだ」

確かに、そのせいで僕達は補習室に行く羽目になった。

秀吉「確かにのう。雄二の言う通りじゃのう」

ムツツリーニ「………だけどカバンの中身は気になる」

うん。ムツツリーニの言う通り僕だけでもないクラスメイト全員は気にしてるはずだ。

そこで僕は周りを見渡し陸がいないことを確認すると僕は皆に話しかけた。

「ねえ皆。今陸はいない。だから……見ちゃっつ？」

『！』

恐る恐る言葉を口にするのと、教室に残っていた男子全員がこっちを向いた。

「あの、明久君。それって本当にいいんですか？」

「そうよアキ。人には見られたくない物が入っているのかもしれないし……」

「そうですねよ。吉井君。あれほど見るなというものを見るのはいけないと思います」

女子三名に即座に反対されたけど、そんな僕に秀吉や優紀姉やクラスの皆が加勢してくれた。

『いやいや違っぞ。姫路に島田に音尾』

『海谷なら、見られて困るようなものは入れないさ』

『それに教室に置いてあるんだから、皆のものだろ』

『生ものが入ってたら困るからな』

「そうじゃぞ。それにもし爆発物だったら困るからのう」



「……確かに危険物だったら困るからな」

「……わかりました」「」

そんな矢継ぎ早なセリフの間に、そのカバンを僕の卓袱台に置く。

姫路さん達も納得してくれたし心置きなく開けられる。

改めて僕は皆に聞きかえした。

「これはあくまで安全確認のため。決して、陸の秘密を暴いてやろうとか、そういう邪な考えではないよね？ そうだよね？」

「……その通り」「」

皆の声が揃った（のかな？）。僕は、満を持してそのファスナーを開く。

「……」「」

皆で中をのぞき込んでみる。

しかし、思っていた以上に物がギュウギュウに押し込まれていて、なにがなにやらわからなかった。

仕方ないので、僕が一つ一つ中から取り出していくことにする。

とりあえず一番上に置かれたものから、思いっきり引っ張り出した。

「メダル」

「……メダル!?」

ゲームセンターで出てる誰もが知っているメダル。

但しゲームセンターで出ているメダルより大きい事と赤い色で鳥の絵が書かれていた。

一部を除いてどこからどう見ても、それはメダルだった。

「なんでメダルなんだよ! 陸の研究に必要なのかよ!? それにこのメダルに触れると何で鳥肌が立つんだ!？」

「あ、待って雄二。なんかメダルの下に紙が……」

僕は陸のカバンの中にあつたそれを取り出し、そして、そこに書かれていた文字を読み上げる。

「『鳥人間大会アジア代表優勝賞品』……『鷹のコアメダル』」

「いつ出たのっ!」

「しかもアジア代表って何ですか!？」

ツツコミを入れた美波や音尾さんだけでなく、ここにいるメンバー全員が、既に『陸のカバン』の意味不明さに冷や汗を垂らしていた。……陸……君は一体……。

「ま、まあ、そういうこともあるかもしれませんっ! た、たまた

まですよ。ほら、他の物はちゃんと研究に役立つものですよ、きつと」

「そうかなあ……」

姫路さんの言うことも尤もかもしれないけど、僕は既にこのカバンに多大な不安を抱いていた。とはいえこのまま閉じるというのも精神安定上とてもよろしくない気がしたので、メダルを置いて、次を取り出すことにする。

「？何だろう？さ・い・き・ん・へ・い・き！？細菌兵器だって！？」

「「「きゃああああああっ！！」「」」

「なんて物を持ってきてるだあいつは！」

教室内に女子の悲鳴が木霊する。無論優紀姉は怒っていた。

僕はそれを投げ捨てようとして右手に持った水筒の容器みたいな物を、改めてじつくりと

「つて、あれ？ これ、オモチヤだ」

「ふええええん…ふえ？」

「大丈夫だから泣くな。ん？」

さつきまで肩を震わせ泣いていた音尾さん。それを慰めていた優紀姉が僕の声の聞いて僕から謎の容器を受け取る。彼女はそれをスイ

ツチを開けた、そして……。

(プシュウ)

蓋を開けた瞬間、容器から花束が飛び出した。……典型的な、子供だましのマジックアイテム。

……。

「……(だから、なぜ……)」「」

虚しく容器から咲き乱れる花を眺めながら、全員で考え込む。……これが必要になる研究って、一体どんな研究だったんだろう。

空気がとてもいたたまれなかったので、次の物を取り出す。

『書籍』男を落とす方法　くこれで貴女に首ったけ』

「……」

「……(はあ)」

「?????」

「美波に姫路さん二人とも、どうしたの？」

美波と姫路さんが本に並々ならぬ興味を示しているようだ。

音尾さんは何の事だかわからない見たいだし優紀姉は呆れていた。

なんだっただらう。

「あとでウチも読んでおこうかな……」

「私も、そうします」

「あんた達読んでどうする気だ」

「?何でしょうか読んではいけないのに読まないといけない気になるのは?」

確かに音尾さんの言う通りなんで読む必要があるんだらう?

そんな疑問を抱えながら、次の物。

「っ……。……除霊用『清めのお塩』」

「「「いやああああああっ!!」「」」

姫路さんと美波と音尾さんが、ブルブル震えてしまっていた。

「それが必要になる研究ってなに! なんなの!??」

「それは、多分」

「待って下さい明久君! 聞きたくありません! 知りたくありません!」

「そ、そうだね……」

僕はそつと、そのお塩の袋を脇によける。ちなみに、袋には『安心！ 神無ブランド』と書いてある。……ブランドとかあるんだ、その業界にも……。

いよいよ陸のカバンの中身は混沌としてきたけれど、ここでやめるわけにはいかない！

僕は勇気を出して、再びカバンに手を入れた。

どうやら二つでワンセットになっているらしく、二つともまとめて取り出してみる。

「十字架と……ニンニク」

「陸は研究のために毎日放課後なにと戦っているのか!？」

流石の優紀姉も、驚きを隠せないみたい。……陸……君の研究って、本当に一人でこなせるものなの？

それに本当に人類に役立つてるの？

いよいよ陸の『カバンの中の研究品』が怖くなってきたけど、もう僕の手は止まらない。

「……………コーヒー」

「そんなもん何に使うんだよ!」

「ね、眠気を取るだけじゃないでしょうか?」

「姫路。この瓶に書いてるんだが一口飲むと天国に行けると書いてるぞ」

「「「……………（君は一体何に使ってるんだ!？）」「」」

誰もが陸の事がわからなくなっていた。

いまさらながら陸の事を親友と思うことはやめた方がいいのかもしれない。

それから気を取り直して、改めて陸のカバンの調査を再開する。

「銀の弾丸」

「……………敵は吸血鬼だけじゃない」

「あたしらの学校の中って…………夜、色々徘徊しているのか…………」

優紀姉も信じられないという顔をしていた。ここまで来たら、僕も怖くなってきたよ。

陸の『研究』に非日常の影を感じつつ、僕はどんどん調査を進める。

「？ なにこれ…………霧吹き？」

出てきたのは、ちっちゃな霧吹きだった。試しに机の上でシャツと吹いてみても、とくにどうということはない。

「……………これはまさか」

皆で首を傾げていると、ボソツとムツツリーニが呟いた。

「……………電気を消してくれ！」

ムツツリーニの突然の指示に戸惑いつつも、電気のスイッチのそばにいたクラスメイトが電気を消してくれた。

教室内が、暗闇に包まれる。

すると、

「ちよつとアキ。光ってるわよ」

「綺麗です……………」

美波と姫路さんが、点々と光る机の上の紋様に見惚れている。

でも……………見惚れているのは美波と姫路さんだけで、他の皆は、テレビで見る知識と、先日のある出来事を思い出し、表情を強張らせていた。

（ねえ吉井君。これってまさか？）

（うん。この前ここでムツツリーニが鼻血を垂らしたんだ）

それを聞いて音尾さんも優紀姉も表情が変わった。そう、これは紛れもない

「……………（る……………ルミノール反応！？）……………」



ルミノール反応。それは、科学捜査において血痕を探す際に用いられる、化学反応。血の付着していた場所が、特殊な薬液を振り掛けることによって、淡く発光する現象。

「……（け、血痕を追う必要のある研究ってなに！？）」「」

とうにかこの薬液って、陸の自作なんだろうか？

……電気をつけて、室内に光を取り戻す。姫路さんと美波が若干残念そうだったけど……あれ以上暗闇にいたら、どうにかなくなってしまったかもしれない。

今見たことを早めに忘れようと、僕はカバンに手を入れる。

「携帯ゲーム機」

「それでも遊んでいる暇とかあるんだっ！」

ある意味とても普通の物なのに、今となっては逆に怖かった。陸のカバンに入ってるってことは、もしかして、これさえ何かに使うのかな？

ちなみに、入ってるソフトは、『真・女神 生』だった。……やっぱり、遊んでいるだけ？ でも……。

……今の考えは忘れよう。

カバンの中身も残り少なくなってきた。ゴールはもうすぐだ！

「えと、カロリーメイト、手回しラジオ、長期保存用飲料水……」

「陸……あんた、何かに備えてるのか？」

普通に考えれば、単純に地震などのために備えているだけだと思えるけど……。今までの品揃えを見た後では、なにかそれ以外の『災害』に備えている気がしてならない。

教室を、不穏な空気が満たし始めた。

……ああ、今になって気が付いたよ。陸のカバンは……パンドラの箱だったんだ。開けちゃいけないものだったんだ。

だから開けるなといったんだね。ゴメン。

でも……パンドラの箱だと言うのなら、最後には希望が残されているハズだ。

僕は未来を信じる！

ここからは、もう勢いでいくしかない！

「氷の仮面」

「陸！ ダメだよ封印を解いちゃあ！」

「発煙筒」

「最早活動場所が校内とは思えねえ！」

「ドツグタグ」

「陸。あなたはアメリカの研究所だけじゃなく他にも所属しているの!?!?」

「遺書」

「いつ死んでもいい覚悟があるんですか!?!?」

「血の付いた、もう一つのドッグタグ……」

「……………戦友が死んだ?」

「リップクリーム」

「こんな状況でも手入れには気をつけているの、海谷君!」

「あれ? カバンの隠しポケットに、ビニールに入れられた白い粉が……………」

「……………何か運んでる?」

「焦げたサングラス」

「誰かの形見っばいぞ!」

「ん? あれ? カバンの裏に何かついて……………発信機?」

「まだ危機は去ってねえのかつ!」

「あ、手紙あるよ。読むね。『リク……………。お前がこの手紙を読んで

いる時、俺はもう生きていないだろう。すまない。しかしもう、お前に託すしかないんだ。あの日、俺たちはエリア51で……」

「読まなくていいです！ もう聞きたくないです！ 聞いちゃいけない気がします！」

「ボールペン」

「たまに日常が挟ますね！」

「あ、もうないや」

「なんか変な終わり方したな……」

というわけで、陸のカバンの中身を全部出し終わった。……卓袱台の上を見ると、今や、どうやってこの小さなカバンの中に全部収まっていたのか想像出来ない物量の、カオスな物品が散乱している。

いやいや、いくら僕でも、陸が研究の他にこんなにたくさんの任務をこなせるとは思えない。

だから僕は携帯電話をスピーカーホン状態にして皆に聞こえるのを確認すると、陸に電話をかける。

『もしもし』

数コール後に陸は電話に出た。

「あ、陸。僕だよ」

「明久か。一体どうしたんだ？」

「ねえ陸、あの、カバンのことなんだけど……」

「カバン？なんのことだ？」

「なんの事って？今朝持つてきた物だよ！」

「？それがどうしたんだ？ふああああ。駄目だな……最近、深夜まで汗だくで校内を全力疾走することが多かったから……眠くてしよ  
うがない」

「深夜まで校内全力疾走！？　ちょ、陸、君の研究や深夜何をつて

「

「あ、ちょっと待て明久。昨日捕まえたミカエルが逃げ……よつと  
！『ほら』すみません西村先生。悪いお待たせ。なんだって？」

「なに！？　今なにが逃げそうになったの！？たいそうな名前の存  
在なに！？しかも傍に鉄人がいるの！？」

「ん？なにをいってるんだ？鉄人に呼ばれているかごほっ！……ち  
っ……こりゃあ、まだ『呪い』が残ってたか……」

「陸、呪いって何！？」

「は？　明久、何を言ってるんだ？呪いなんてアルワケナイダロウ」

「なにその三文芝居！　なんか隠してる！？　隠してるの！？」

『明久、さつきからおかしいぞ?』

「う、うん……ごめん。ちょっと、落ち着くよ……」

数回深呼吸を繰り返し、冷静さを取り戻す。……よし、大丈夫。

と、電話のむこうから妙な音声が届いてきた。

『……《緊急任務さね、リク、ニシムラ! パリ上空に『奴』が現れたさね! 現地のエージェントと合流して、今度こそ『奴』を討

』》

そこで、ぶつと、不自然に謎の音声が途切れる。

え? 今の……何か?

『明久。俺、ババアに呼ばれたから、もう電話切るぜ』

『準備をするか』

「いやいやいや! パリだよね! 今から鉄人と一緒にパリ向かうんだよね!」

『ハハハ。ナニライツテイルノヤラ』

『全くだ。ナニライツテイル』

「最早演技にさえなっていないよ! 陸に鉄人! 君ら、一体本当は何者」

『明久、さっきから何を言ってるんだ？ 俺は、ただの高校生兼科学者だ。大丈夫か？』

『全くだ。俺はただの教師だぞ』

「……う、うん。ごめん。そ、そうだよ、さっきのは僕の聞き間違ー」

『《リク、ニシムラ、何してるさね！ 早くして！ アンタたちが居ないと……『奴』に地球が滅ぼされるのは時間の問題だよ！》』

「！？」

『あ、悪い、明久。ちょっと、急ぎのバイトが入ったから、そろそろ』

『急がないとな』

「バイト！？ バイトなの！？ 君らが関わっているその地球規模の何かは、バイトなの！？」

君の異常行動は、深夜の暗躍だけじゃなくバイトにも及んでいたの！？」

『げほっ、がほっ、ごほっ。……くっ隠していたが……全然力が湧かない……』

『……拙いな』

「なんか大ピンチだよ！？ 何気に今、地球大ピンチだよ！？」

『何言ってるんだ、明久。寝不足で俺の体調が悪いだけで、別に地球とかは関係ないぜー』

『本当に大丈夫か吉井?』

「そ、そう、だよな。うん……さっきまではそう信じていたんだけど……」

『あ、じゃあ、そろそろ切るぞ』

「え? あ、うん。そうだね……ごめん、呼ばれてたのに変な電話しちゃって。」

ちよっと僕、色々あって、動転してて……」

『ま、気にすんな。少し気分が楽になったし』

「それじゃ、気をつけて」

『ああ。じゃあ……このケータイ、海外じゃ通じないから、切るぜ』

「!?!?」

『じゃっ』

『陸!?!?』

ツー、ツーと、無機質な電子音が聞こえてくる。

僕と陸のやりとりを聞いていた皆に、確認の意志を込めて、キツパリと告げた。



「皆 陸や鉄人は」

「『本物だ』」

（陸サイド）

俺は、鉄人と一緒に片づけをしていた。

「やれやれ。これなら間違いなく全校生徒がもつとやる気を出すな」

西村「確かに、これならさらに生徒を集める事が出来るな」

実はさつきまで新システムの調整をしていたところだった。

あらゆるゲームの中で面白いところを探していたら地球が宇宙人とかに乗っ取られるやつを見て。

これを試してみたら意外と好評だったから何人かの生徒で集まって試作していたところだった。

おかげで毎日が徹夜で大変だった。

普通のプログラムなら問題ないがオカルトが加わるため余計に大変だった。

マーナ「マスター？」

「ん？何だ？」

俺のパソコンの中で仕事をしているマーナが話しかけてきた。

「あのく例のカバンはなんですか？」

「カバン？そう言えば明久も気にしていたな」

「はい。あれは何ですか？」

「ああ。あれはな冗談で作ったなりきりセットだ」

「……確かそれって売れなかったような」

「一般にはな（ニヤリ）」

「ま、まさか（ガタガタ）」

「とある企業には好評だからな」

「全くだ。まさか、あれが売れるとは思わなかったぞ」

ババア長「おかげでアタシの学園には入る金が増えておお助かりだからね」

そうすべては学園の為に作成をしていたのだ。でも何で明久はおかしな勘違いをしたんだろう？

振り返ってみるかさつき明久から電話来た時に丁度集まった皆で試してプレイをされていてミッション説明をしていた時にかけてたんだけど……声が小さいで途中で一回大音量にしたな。

でもつるさすぎて慌ててミュートにして、もう一回ぐらい音量調整をしたっけ？

やっちまったなあ。聞かれたらどうなあ。

ま、いつか。どうせすぐに忘れるだろうからな。

それにいくらアイツがバカとはいえ、荒唐無稽な妄言を信じることはないだろ。

それに明久の声と一緒に他の皆の声も聞こえていたから、もし明久が俺の言うことを信じていたとしても、なんとか言ってくれるだろ。

よし、明日皆に会ったら、カバンの説明をするか。

ちなみに、翌日。

「「「お勤め、」ご苦勞様です！」「」

「……は？」

学校に行ったら、何故かFクラスの全員に全力で敬礼された。

「お前ら全員席につけ！」

「「「西村先生もお勤め、」ご苦勞様です！」「」

「……は？」

ホームルームをしに来た鉄人も驚いていた。

この後、俺と鉄人はどうにか説明しようとしたのだが……

何故か誰もまともに受けてくれなく、なぜか俺と鉄人に2つ名が……

まあ、鉄人は新たに加わったようだけど。

俺に『GUARDIAN（守護者）』を鉄人に 『GUARDIA  
NOFIRON（鉄の守護者）』

……何でこんな事になったんだろうか？

ケータイ？制限を掛けてたから海外にかけれないだけだが。

**科学者と姉御と泣き虫と不思議なカバン（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

番外編 幕間 『陸と美春の出会い』（前書き）

今回は美春と陸の出会いを書こうと思ひまして書きました。

番外編 幕間 『陸と美春の出会い』

Fクラス

「一つ聞いていいか」

「なんだ？」

「どうした？」

「どうして俺は鉄人につかまっているんだ」

そう俺は雄二ユウジのせいで鉄人こと西村教諭につかまっていた。

オマケに腕輪の効果で召喚獣を使えなくしたうえで鉄人にこられねは捕まるというものだ。

「お前が逃げようとしてるからだ。だから鉄人に頼んだ」

「坂本に海谷。（はあ）お前達は どうして素直に俺の名を言えないんだ」

「「時と場合だ」「」

「お前らは反省するという言葉を知らないのか!？」

反省？ナニソレ？それ食えるの？

「（はあ）まあいい。それで坂本？」

「？なんですか？西村先生」

「俺に海谷を捕まえさせた理由を教えろ」

「ああ。それについては皆が戻ってきたら教えるさ」

「そうか」

それから数分して

美春をヒモで縛った状態でクラスメイトが戻って来た。

一部を除いてボロボロになっていた。

「酷いです。お姉さま。美春が一体何をしたと言ってるんですか？」

「それはね。美春が素直に海谷との関係を教えないからよ（笑顔）」

「そうですよ。教えないからこうなったんですよ（笑顔）」

俺が言うのもなんだけど島田に姫路。お前ら悪魔だな。

「い、今のお姉さまはこ、怖いです（ガタガタ）」

普段強気のあいつも恐れているな。無理もない。

「雄二。連れてきたけど何をするの？」

明久がゴリラに聞いている。



そうだ。何のつもりだ。

「決まっているだろ。陸と清水との関係だ」

「「「は?」「」」

と聞き返しているのは俺と美春と鉄人だ。

「そうよね。そろそろ教えてくれてもいいと思っわよね」

「はい。私もそう思います」

「え? 幼馴染じゃないの?」

と明久が聞き返していた。

良く言った明久。俺もこれに乗らねば。

「明久の言う通りだ」

「美春もこのブタ野郎と同じです」

「果たしてそうかな」

となぜか自信満々の雄二が笑っていた。

「ウチも気になるのよね」

「はい。私も気になります」

「どじいじいこと？」

ちっ、雄二の奴め。自分のことは棚に上げて俺や明久を弄る事に知恵を回しやがって後で覚えてろよ。

しかし、過去の思い出かあれは思い出したくないな。

そう。美春と出会ったのは幼稚園の頃だ。

あの頃は父親の愛は嫌がっていたが男嫌いではなかった。

美春視点

陸の奴過去を思い出しているのですか？

何故思い出す必要があるのです。

悲しい記憶を忘れたほうがいいのです。

回想

陸「ペットボトルロケットだ」

友達A「おい！みんなまたりくがジッケンするぞ！」

友達B「こんどはどこまで飛ぶかな」

美春「ナニしてるの？」

陸「イメージッケンをしてるんだ」

友達A「オンナにはわからないオトコのロマンだからな！」

友達B「タイチヨウ！モクヒヨウはあっちです」

女友達A「またやっての！」

女友達B「オトコってエッチよね」

美春「でしたらこれをいれてみてください」

陸「？なんだろう？まあいいか。いくぞ！！」

男友達「「おう」」

そうやって美春のおとうさんがくれたものをいれたペットボトルロケットをとばそうとしていた。

しかし。

ドッカ　ン！！

陸達「「「わあ！！ばくはつした！！」」」

そう言えばこの時は泣いてましたね。あの頃は素直でした。

はあ。それがどうしてこうなったのでしょうか。

美春視点終了。

美春に出会ってから俺の運命は変わった。美春のせいで大変な目に在った。それが最初の出会いだった。

何度も爆発をさせた美春にもかかわらず怒られるのは俺だけだった。あんときは理不尽だったな。

俺が小学生に上がったころより面白い事を見つけ皆で実験をしていた。

俺が爆発に美学を覚えたのは打ち上げ花火を見たとき綺麗だと思っ  
た。

今まで怖いものだった爆発が誰もが喜ぶ物だった。それにそれを見  
ていた美春が綺麗だった。

だから、俺は爆発に興味を持った。今度は俺の手で美春の喜ぶ姿が  
見たかったから

高学年になるたびにいろんな爆発を起こした。

美春達を巻き添えにして怒っていたけど最後は誰もが笑顔だった。

あいつに会うまでは……。

美春視点

そうあいつに在ったのが私と陸が小学校5年の時です。

初めはあいつの評価は内気で臆病ものだと思っていました。

それにまだこのころの陸は天才と呼べるものではありませんでした。他の子より少し上という評価でした。

本人も気にしてなかったし美春達も気にしてなかった。

それに皆と遊ぶ方が好きな男の子でした。このころからです。美春が心から許せる男は陸でした。

陸は男女ともに人気者でした。

そしてそんな陸だからこそあいつも仲間に入れました。

これが間違いだったのかもしれない。

陸の実験を見たときあいつは笑っていた。

初めは面白いのかと思っていました。

でも違っていたのです。

あいつはここにいる全員をどう爆発に巻き込み陸を苦しませようと考えていたんです。

何回か遊びそして陸が目を離れた時事件が起きました。

自分以外を対象にして爆発を起こしました。

当然この事は問題になり陸はこの学校には居られなくなり転校をし

ました。

美春達は陸が悪くないと先生に言いましたが聞いてもらえませんでした。

それから年月がたち美春が中2の頃再会をしました。

でもその時は美春が知っている陸では無かったです。

美春視点終了

転校した俺に居場所はなかった。当然だ。問題児である俺に近づく物好きはいないだからひたすらいろんなものに勉強した。

その結果俺は小学校を卒業と同時に海外留学が決まった。

俺は最も相性が良かったプログラムとロボット工学だった。それを勉強をし合間に薬学や以前から好きだった爆発に研究をした。

その時俺の周りの評価は壊れた人間。人の皮を着た化け物と言われている。

俺が美春と再会したのは俺が教授について調査をしていた時だった。再会できたのは嬉しかった。しかし、俺はもう昔の俺に戻れなかった。

だからぶっきらぼうな会話だった。

例えば美春父が襲ってきたときに薬を放り込んでやったときの話だ。

初めの方は効果が在ったが。

陸「むう。ここまでまで耐性が在るとはサンプルが欲しいな」

美春「そんなことを考えるより美春を救う方法を考えないさい」

陸「わかった」

美春「え？」

美春父「グオ　　オオオ」

陸「グットラック」

ぽい

ドッカ　　ン！！

プスプス

陸「やはりこっちの方が効果的だな」

美春「いいかげんにしなさい！！」

パシ　　ン！！

黒こげになった美春がスリッパではたいた。

美春視点

それでもまだ美春は見捨てられなかった。

あいつと再会しなければ戻れたのかもしれない。

陸を傷つけ研究仲間を死なせたあいつさえいなければ。

陸がアメリカに戻る頃美春は見送りに行こうとしていた時あいつに出会った。

どんな手を使ったか知らない陸の研究仲間の一人と手を結んでした。だから美春を狙われるのは当然だった。そのせいで陸は傷つき美春に謝っていました。

だからこそ陸は美春から離れた。そして、美春も陸を守るため嫌うことにした。

柄にもなく感傷に浸りましたね。

美春視点終了

詳しくはいつか語るがあいつとカル　ラがいる限り美春や俺の友達は襲われるそれだけは避けたい。

だからこそ、この思いは封印している。

さて雄二にはお仕置きが必要だな。

?????」……雄二。浮気は許さない」



「待て翔子！。まだ陸から話は聞いてないぞ！」

「……問答無用」

と言って雄二は霧島によって連れ去られた。

「……さてお仕置きの間だ（ニヤリ）」

「ま、まって！」

「問答無用」

「」「逃げる！」「」

「待て！！お前ら！！」

美春視点

でもまあ、今の陸は昔に戻りつつある。まあ、あ、あくまで美春が好きなのは美波お姉さまです。

でも、少しくらいは気にしてあげます陸。

美春を待たした罪後悔させてあげます。

番外編 幕間 『陸と美春の出会い』（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

第五十四話 ダブルデートその四（前書き）

久しぶりの本編です。

## 第五十四話 ダブルデートその四

それから気を取り直して俺達はパーク内を見回した。

3Dの体感アトラクションに絶叫マシン、コーヒーカップやメリーゴランド。

デフォの物もあれば、見た目だけで想像もつかない場所もある。

「……翔子、いい加減腕を放してくれ」

「でも、カップルは腕を組む物」

「この状況がカップルに見えるか!!」

腕を翔子にサブミッションに極められつつ。

「う〜ん。ぱつと見は見えなくもないかな」

「そう。僕には見えるけど」

明久お前は眼科に行けお前の目は可笑しいから

『ねーねーそのラブラブなカップルの4人組』

そこへ、ひよこひよこことキツネが近づいてくる。

このテーマパークのマスコットキャラの、キツネのフィーである。

「ほら、そう見えてる」

「明らかにそいつや明久の方が変だろ!!!」

『そんなラブラブなカップルに、キツネのフィーがとっても面白いアトラクションを紹介してあげるよ?』

おどけた動作で、紹介を促すフィー。

しかし俺は、そのボイスチェンジャーを介していない声に聞き覚えを感じていた。

「……姫路さんここで何してるの?」

『何のことでしょうか明久君? (黒いオーラを放出)』

間違いない。明久にすらばれるようではな。

「……ここでアルバイトか姫路?」

空気が凍った。

『キツネのフィーがとっても面白いアトラクションを紹介してあげるよ?』

それを取り繕うように、フィーは紹介に戻る。

「しらを切ると言うなら良いだろう。じゃあフィーとやら、お前のおススメを教えてくださいませんか?」

『あ、う、うんっ。フィーのおススメはね、向こうに見えるお化け屋敷だよ。そして、そちらのカップルはあっちが勧めだよ』

俺達の方は噴水を挟んだ向こう側に見える、廃病院を改造したという話題のお化け屋敷である。

ちなみに明久の方は武器を持って待っているFFF団を指していた。

「そうか。じゃあお化け屋敷“以外”の処に行くぞ？」

「僕達もそうしようか？」

「そうだね」

『ままま待ってください！ どうしてですか！？』

「どうしてもクソもあるか！ お前らの手で余計な仕掛けを施されてる事は明白だろう！」

いくら成績が良くても姫路は騙し合いはさっぱりだよつだ。

簡単にボロが出る。

『そ、そんなの困りますっ！ お願いですからお化け屋敷に行ってくださいー！』

「断る！」

そのお願いに、残りの人生を捧げる気はない。

という姿勢で断固拒否し、その場を後にしようとする俺。

そこへ……

『そこまでよ坂本にアキ！ フィーをいじめると、このノインが許さないわよ！』

「その鋭い声は島田だな！」

さっそうと登場したのは、マスコットキャラのノイン。

『失礼ね！ ウチのどこが男らしいのよ！？』

「……美波ちゃん。そこまでは坂本君は言っていないよ」

『ところでひばりちゃん。女の子同盟の約束はどこに行ったのですか？ まさか、裏切るとは思いませんでした』

『そうね。ウチも思わなかったわ』

『え？ 何の事？ ひばりどういうこと？』

『アキくんには関係ないことだよ』

『お話お願いしますね？』(ニッコリ)

『ウチも聞きたいわ』(ニッコリ)

『アキくんに攻撃をしようとする二人に裏切り行為と言われるのはどうかと思うよ』(ニッコリ)

その離れた場所では、ファンシーなキツネ達と女の痴話喧嘩しそれを慌てふためく男という、珍しい光景が展開されていた。

そこへ、1人のスタッフが翔子に近寄り説明。

先ほどのスタッフの一人で、陸と一緒にいた男。

そう秀吉だ。

「……雄二、お化け屋敷に行きたい」

「秀吉！？ 翔子を使って畏にハメようなんて汚いだろ！」

「……雄二、行く」

再び翔子に関節を極められる俺。

それに構う事なく、何時のまにかムツツリー二に島田に姫路が集まってきた。

「……それではこちら、誓約書をサインを」

ムツツリー二はバインダーにはせられた書類を取り出した。

それを秀吉が受け取って、俺に差し出す。

「何だこれは？」

「ただの誓約書でございます。」



「では、こちらにサインして下さい」

「誓約書が必要なお化け屋敷って何だ？ そんなに危険なのか？

……だがまあ、面白そうではあるな」

と、俺は少し楽しそうにボールペンを受け取って書類に手をかける。

#### 【制約書】

- 1．私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います。
- 2．婚礼の式場には如月グランドパークを利用することを誓います。
- 3．どのような事態になろうとも、離縁しないことを誓います。

「ペンはこちらをどうぞ」

「……はい雄二、実印」

「朱肉はこちらよ」

「俺だけか！？ 俺だけがこの状況をおかしいと思っているのか！？」

と、喚き散らす俺。

普通おかしいだろ。

「冗談です。誓約書は良いので中に入れて下さい」

「……うん。冗談」

「カーボン紙を入れて写しまで用意している癖に冗談と言い張るのか？」

「言い張るも何も、本気で冗談ですから」

「お前は喋るな」

俺は色々言っただけでやりたかったが、常識を求めるのも酷だと思いきらめた。

「それでは、その大きな鞆は邪魔になりそうですので、預からせて頂きます」

「……お願い」

と、翔子が持っていたカバンを、秀吉が預かる。

それは偉く大荷物だった。

「零れちゃうから、横にしないでほしい」

「わかりました。気を付けます」

「では、行ってらっしゃませ」

何が入ってるんだろうと考える俺を、翔子は再度肘関節を極めて一路お化け屋敷へ。

俺の抵抗も虚しく、扉の前に立たされてしまう。

「ワシじゃ、お化け屋敷にターゲットが入った。明久の作戦を実行するのじゃ」

扉が閉まる寸前、秀吉の声が聞こえた。

明久考案の作戦か。一体どんなものになっているかわからんが、奴ごときの策にひっかかってたまるか！

第五十四話 ダブルデートその四（後書き）

ご意見感想をお待ちしております。

第五十五話 ダブルデートその五（前書き）

連続更新です。

## 第五十五話 ダブルデートその五

足元がおぼろげに光る長く暗い廊下を歩く。

非常灯でさえも雰囲気の一部に取り込まれているようで、緑色のボンヤリとした光が、いい味を醸し出していた。

「流石如月グランドパークの目玉だけのことはあるな。迫力満点だ」

「……………ちよつと怖い」

翔子が俺の手を怖がりで握る。あまりビビらないコイツがこんなになるとは、珍しいな。

何か出るんじゃないか、そう思う気持ちが一歩踏み出すごとに高まり、それに比例して翔子の手も強く握られてきた。

「ひゃあっ!」

「うおっ!?!?どうした翔子!?!」

痛えっ!驚いたからって関節を極めるな!

「……………今、首筋に何か」

「首?」

後ろを振り返ってみるが、当然仕掛けなど見つかるはずもない。

見つかったら見つかったでそれは問題があるんだがな。

「ほら、行くぞ」

「……うん」

順路 というポスターに従って進む。

一階にも他の仕掛けが多々あったが、特に驚くこともなく通過できた。

そして俺たちは錆びた手すりに掴まりながら二階へと上がっていった。ゆっくりと歩を進める。

曲がり角を過ぎたところで二階での仕掛けが作動した。

【 じの方が よりも 】

冷たい風に乗って幽かに聞こえる声。なるほど、触覚・視覚に加え聴覚で驚かす気が。

「……この声、雄二……？」

「ん？そうなのか？」

どうやらこれは俺そっくりらしい。秀吉に声真似でもさせたのか。

確かに自分の声が聞こえてくるなんて怖いと言えば怖いだが、あいつらにしては普通の演出だと

【姫路の方が翔子よりも好みだな。胸も大きいし】

「…………雄二。覚悟、できてる…………？」

「怖えっ！翔子が般若のような形相に！確かにこれはスリル満点の演出だ！」

なんて恐ろしいことを考えるんだ。まさか俺を生かしてここから出さないつもりか！？

なんてビビっていると、バンツと背後から音が聞こえてきた。

よっしゃ！ナイス演出！助かったぜ！

「翔子！何か出てきたぞ！」

音のした方に音を向けると、そこにはさっきまで何もなかったはずなのに、突如あるものが現われていた。それは

「…………気が利いてる」

…………短銃！？

「畜生っ！よりによって処刑道具まで用意してくるとは！全く趣旨は違うが最強に恐ろしいお化け屋敷だっ！」

「…………雄二。逃がさない」

チュインと後方で音が鳴ったと思うと、暗いためか前方で火花が散るのがよく見える。



ジグザグに逃げなければ命を落とす。そんな気持ちだ。

「……雄二、避けないで」

「避けるわ、バカッ！」

前回も言ったが大切なことなのでもう一度言わせてもらおう。

コイツ、本当に俺のことが好きなのか……？

階段を三段飛ばしで駆けあがり、三階へと到達する。

三階は今までに加え嗅覚も刺激するようで、フロア中に消毒液の匂いが漂っていた。

「……雄二の匂いが消えた……」

お前は匂いで俺を追ってるのか！？

これ幸いと思い、より匂いの強い方へとへと逃げる。通った順路など一切覚えていない。

少し進んで 順路 の看板が階段の下、つまり外（外）に向かっているのを見て俺は感極まった。

階段を駆け下り急ぎ外を目指したところで強烈な違和感が頭を掠めた。

「……雄二、どっ」

なぜ

「……雄二」

なぜ、出口に向かうほど匂いが強くなる!?

「……ゆ、雄二。た、助けて」

「アキ、どうしてひばりとデートしてたの?」

「そうですねよ明久君。やっぱりあの大会で言ってた事は本当なんですよ?嘘をついちゃだめですよ」

「だからどうしてアタシ達の話を受けないの二人とも!!」

そこにはお化け屋敷よりも恐ろしい光景が広がっていた。

”人の振りみて我が振り直せ”

この言葉通り、俺は急いで翔子に説明し事なき事を得た。

若干わき腹が痛い、それは走った所為だということにしておく。

「お疲れさまでした。どうでした？結婚したくなりましたか？」

「アレと結婚を結びつけて考えることができるのはお前らぐらいだろうな……」

「おかしいですね？危機的状況に陥った二人の男女は、強い絆で結ばれるという話なのですが……」

「まあ、襲い来る危機が結ばれる相手自身でなければそうなるかもしれないが……」

「だめだ、頭が痛い。陸お前は遊んでるんだろ。やっぱりなあいつの顔は見分けづらいが笑ってやがる。」

しかし、おかげで少し安心した部分もある。

遊んでる陸の作戦なら、脅迫や詐欺まがいのことはされそうにないからな。

これなら死に物狂いで脱出するような真似はしなくても良さそうだ。

『さあ、次はあの乗り物に乗ってみたらどうでしょう？』

「さあ、翔子。少し休憩するとうかが」

「……うん」

「ちょっとお兄さん！ノイン君が誘っているんですよ、なんで無視

するんですか!？」

そそくさと逃げようとした俺と翔子を係員に扮した陸が呼び止める。  
ちなみに今いるノインはムツツリーニが変装していると思われる。

「黙れ!なんで馬が一頭しかいないメリーゴランドに乗らなくちゃいけないんだ!」

「ですから、お二人が同じ馬にお乗りになればよろしいかと」

「ああ!どうせそんなこつたるうと思つてたさ!」

今、つまらなさそうな顔をしてるな。よし勝った。

「……わかりました(これに乗ったら逃がしてやるうと思つたがやめた)」

……な、何だと!!それを早く言え!!

「……そろそろ、お昼」

「……坂本さんがそういうなら」

噴水の上にある大時計の針は一時を回っている。そうか。そろそろ昼飯か。

「……って待て!勝手に翔子を入籍させるな! ソイツの名字は霧島だ!」

「……大丈夫。すぐに変わるから」

「話も終わったようですね。それでは、お昼なので」

「お前らな!!」

「……あの、私のバッグ」

「それでは、豪華なランチを用意してありますので、こちらへいらして下さい」

秀吉がスタスタと歩き出す。昼飯も用意してあるのか、さすがはプレミアムチケットだな。

「翔子、どうした?」

「……なんでも、ない」

「?????」

一瞬寂しげな顔をしていたような……?」

「……雄二。急がないとはくれる」

「お、おう」

俺たちがついてくるといふ自信があるのか、秀吉の姿が随分と遠くに見える。

まあ、豪華な昼飯と聞いたからには馳走にならなきゃ損だな。

「こちらでランチをお楽しみ下さい」

案内されたのはパーティー会場のような広間だった。

そこら中に丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルが用意されている。

この雰囲気、レストランというよりは

「……クイズ会場？」

そう。一応テーブルの上には豪華な料理が用意されているが、ＴＶでよく観るクイズ会場のような雰囲気になっていた。

「いらつしゃいませ。坂本雄二様、翔子様」

ボーイとウエイトレスが現われ、俺たちを席に案内する。……ようやく来たか。

「秀吉、島田、ここではボーイとウエイトレスの真似事か？」

「秀吉？ 何のことでしょうか？」

「そっそうですよ。別に、これから本格ムぐっ！」

秀吉は顔色一つ変えず、丁寧に切り返す。

逆に隠し事がへたくソな美波の口を滑らせようとしたのを、ギリギリでスタッフ改め陸がそれを塞ぐ。

「しつ失礼しました（バラしてどうすんだよ？）」

「むぐむぐっ！（ごっごめん……）」

「それでは、こちらへどうぞ」

「あ、ああ……」

ボーイに連れられて会場の中を移動する。

「お客様は未成年とのことなので、こちらをご用意させて頂きました」

そういうと、ボーイはパチンと指を鳴らした。

奥から来るのは格好こそは先ほどとは違うが、この作戦の核ともなっている人物だった。

「陸。ようまた会ったな」

「陸？誰ですか？私の名はフランソワーズ・ナツコ事、通称ジエームズですよ」

「人種氏名にウソをつくな！ しかもどう考えてもその名前で通称ジエームズはないだろ！」

「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカリませーン」

この恨み忘れないからな。

「それではオレンジジュースでございます」

「り……ジューズよ、ワシはノンアルコールジュー」「オレンジジュースでございます」

秀吉の口を強制的に塞ぎ、頑なに意思を変えない陸。まさかコイツ……。

「おい陸、お前怒ってないか？」

「いえいえ、別に、お客様たちが僕が考案したお化け屋敷で愛を育んでいる間に、外で汗水流してメリーゴーランドの馬の撤去作業をしていた俺の努力が水の泡になったなんて、全然怒ってもいませんよ」

間違いない、キレてやがる。

コトリと置かれたのは通常より大きめのサイズのグラス一つ。

なるほど、二人で分け合えっただけか。

怒らせると何が起るかわからんし、ここは従っておいた方が得策かもな。

「あ、そうそうストローを入れるのを忘れていました」

「「「……………」」」」

いいか。今の状況を説明する。よく聞いてほしい。



まず秀吉。ポーカーフェイスだと思いかもしれないが、表情が固まっているだけだ。

次に翔子。目をキラキラと輝かしている。こっちに来る視線が痛い。

最後に俺。滝の様な脂汗が次から次に出てくる。

眼に入って多少痛いがこの状況から目を離したら何が起こるかわかったもんじゃない。

ようするに、だ。

「陸、よくこんな物を探してきてくれたな」

「本当は使う気なんかなかったんだけどね」

ハート型ストロー。決して飲み口がハート型という訳ではなく、二本のストローが宙でハートを描いているんだ。

当然二人一緒に飲み会えば鼻先が触れ合うほどの距離になる。

そんな絶滅種がいま目の前にある。

「どうしても怒りが我慢できなくてな」

「やっぱり怒ってんじゃないか！」

結局飲み物は一滴も俺の口に入っ来て来ることはなかった。

だってそうだろう？俺が飲もうとするたびに翔子も飲もうとするんだぞ。

デザートも食べ終え、他に何の仕掛けもないのか、と安堵しかけたその時。

皆様、本日は如月グランドパークのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！

司会服を着た秀吉、島田の二人がアナウンスを告げる。

なんと、本日はですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めるようとしている高校生のカップルが、いらっしゃってるいのです！

島田が紙を見ながら文章を読み上げる。

それにしても高校生で結婚とはな。気が早い奴らだ。

そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させていただきました！題して、【如月グランドパークウェディング体験】プレゼントクイズ〜！

出入り口が閉じ会場内の光は秀吉、島田の二人を照らすスポットライトのみとなった。

本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事5問正解したら弊社が提供する最高級のウェディングプランを体験して頂けるというものです！もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍という事でも問題ありませんが

そつだな確かにそんなこともありうるかもな。

司会者たちを照らしていた光が消え、ドラムロールの音が会場内に響き渡る。

そして会場内の二人が照らし出された。

それでは、坂本雄二さん&翔子さん！前方のステージへとお進み下さい！

「……逃げさない」

「離せ翔子！俺はどうしても逃げなければいけないんだ！」

俺の行動を先読みした翔子が腕を握る。暗闇に乗じて逃げようとしたのにつ！

「……ウェディング体験……頑張る……！」

「落ち着け翔子。そうだったものはだな、きちんと双方の合意の下に痛ただだだっ！耳が千切れるっ！行く！行くから放してくれっ！」

ただの体験だと自分に言い聞かせ、渋々と壇上にかかる。

スタッフの誘導の下、俺と翔子は解答者席へと案内された。

それでは【如月グランドパークウェディング体験】プレゼントクイズを始めます！

読み上げるのが島田から秀吉に変わり、俺らの前に大きなボタンが一つ出てきた。

コレを押してから解答するというオーソドックスなシステムのようだ。

そうだな……。正解したらプレゼント、ということは、間違い続けたら無効になるのだろう。

それなら俺が間違い続けるとするか。

では第一問！ 坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょう？

おかしい。問題文の意味がわからない。

ピンポーン！

しまった。油断しているうちに翔子が勝手にボタンを！だが、いくらコイツでも正解の存在しない問題に答えることなんて

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！ 恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」

お見事！ 正解です！

しかも正解！？

秀吉を睨みつける。すると、秀吉は観客に見えない角度で俺に片目を瞑った。

さては……出来レースかつ！

いいだろう。それならば 俺は意地でも間違えて見せよう！

では第二問！ お二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうか？

ピンポーン！

「鯖の味噌煮！」

正解ですっ！

「なにいつ！」

お二人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です！

「待ていつ！ 絶対その別名はこの場で命名したたる！ 強引にも程があるぞ！」

では第三問！ お二人の出会いはどこでしょうか！

ダメだ。聞いてねえ……！だが、向こうのやり口はわかった。今度は確実に間違えて見せる。

翔子が動くよりも早くボタンを押し、間違った解答を

「……させない」

「ふおおおっ！？目が、目があっ！」

ピンポーン

はい、解答をどうぞ！

「……小学校」

正解です！お二人は小学校の頃からの長い付き合いで今日の結婚にまで至るといふ、なんとも仲睦まじい幼なじみなのです！

幼なじみの目を突くという光景がどう見たら仲睦まじく見えるんだ！

問題を聞いてから動き出すのでは遅いようだ。こっとなったら

第四問参ります！

ピンポーン！

ぬかったな秀吉！わかりません・知りませんは100%間違いになるは

ず！

「 知りません！」

正解です！

「なにいつ!？」

だが、問題を読み上げられないだろう。どうやったら答えが『知りません』なんて

あなた達の愛を妨げる物を知っていますか?という問いに対し『知りません』なんと素敵な愛情なんでしょう。

皆さん、この二人に惜しみない拍手を！

「(こんなこともあるかと陸が考えていたのじゃ)」

悩んでいた俺に秀吉は、俺にアイコンタクトでそう話してきた。

「……雄二、嬉しい」

それにしても問題が質問へと変化している。

……もはや間違えることは不可能だ、と諦めそうになったその時、

「ちょっとおかしくな〜い? アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ〜?」

忘れるはずもない不愉快な口調、高圧的な態度。入場口で絡んでい

たチンピラどもか。

「アタシらもウェディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど？」

「で、ですが」

「ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルア！ オレたちもクイズに参加してやるって言ってんだボケがっ！」

「うんうんっ！ じゃあ、こうしよーよ！ アタシらがあの2人に問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち！ 間違えたらアタシらの勝ちってコトで！」

勢いよく壇上にかかる乱入者は、設置してあるマイクの一つをひったくる。

「…………ゆ、雄…………？」

解答者席の陰で誰にも見えない様に翔子の手を握る。これで前みたいに勝手に歩けない。

さあ、準備は万端。あとは向こうの問題に間違えるだけだ！

「じゃあ問題だ！」

俺達の方を指差し、男の方が濁声で問題をだした。

「ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！」



「……………」

言葉を、失った。

「オラ、答えるよ！ わかんねえのか？」

おかしい。俺の記憶ではヨーロッパは国というカテゴリーに属していたことは一度もないのだから。

その首都を答えるなんて不可能だ。

……坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます、【如月八イランドウエディング体験】をプレゼントいたします

「おい待てよ！ 答えられなかっただろ！？ オレたちの勝ちじゃねえかコルア！」

「マジありえない！？ この司会、バカなんじゃないの！？」  
バカップルがぎゃあぎゃあ騒ぎ立てる中、ステージに幕が下りてくる。

「ねえ、ひばり。ヨーロッパって国だった？ 確か違うと思うんだけど？」

「うん。確かにヨーロッパは国ってカテゴリじゃないから、その首都なんて答えられないよ」

「だよ。まさか僕より酷いバカがこの世に存在するとは思わなかったよ」

「あつ、あはは……」

どこからともなくバカと支倉の声が聞こえるな。あいつらもここで食事してたのか？

それにしても明久以上のバカがいるとは、世界って広いもんだな……。

第五十五話 ダブルデートその五（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第五十六話 ダブルデートその六（前書き）

連続投稿。

これでデート編は終わります。

## 第五十六話 ダブルデートその六

「おめでとございます。ウェディング体験が当たるなんて、ラッキーですね」

「……凄く嬉しい」

会場を後にすると、未だに翔子の鞆を抱えている陸がヒョコヒョコと近付いてきた。

まったく、何がラッキーだ。狙っていたクセに。

「そういえば翔子、お前の持ってきた鞆は何が入っているんだ？随分と大きいが」

「……別に、何も」

翔子が困ったように答える。何かあるのだろうか？

「霧島さん、ウェディング体験の準備があるので、こちらに来てもらってもよろしいですか？」

そう聞くのはいつの間にか服を着替えている姫路だ。今日の主役は君たちだ、と言わんばかりの地味な服を着ている。それが余計に甚だしい。

そんな姫路の後ろから三十歳前後の女性スタッフが歩み出て頭を下げる。いかにも業界人といった風貌の人だ。

「初めまして。貴方のドレスのコーディネートを担当させていただきます。一生の思い出になるようなイベントにする為、お手伝いさせて下さい」

「おいおい、随分と本格的だな。まさかスタイリストまで付けて来るとは。」

「ってことは、俺は長い時間待たされるのか？」

ドレスを着てメイクをするってことは数時間もかかるような大作業になるだろう。」

「それは暇だな。俺も翔子と一緒にいちゃダメか？」

「花嫁の準備姿は殿方に見せるものではないのでご遠慮下さい」

「それに、どうせその間に実印を奪うつもりだろう？そんなのさせると思っか？」

「ちっ、見透かされていたか。」

「安心ください。その点についての対応は考えてあります」

と、いうと姫路は何かを取り出すフリ（・・・）をした。首の後ろでバチンツと大きな音が響く。

「雄二、迂闊だな。前ばかりに気を取られるとは」

「……陸、てめえ、覚えとけよ」

俺の意識は闇へと沈んでいった。

それではいよいよ本日のメインイベント、ウェディング体験です！  
皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい！

園内全てに響き渡るのではないかと思える程の拍手が聞こえてきた。司会の秀吉も微笑ましい表情だ。島田は裏方にでも回ったのか姿が見えない。

「雄二、時間だぜ」

舞台袖で陸が耳打ちしてきた。コイツをブチのめせば……。

「俺に何かがあれば世界中の警察と軍隊に追いかけてまわされたいのならかまわないが」

「やれやれ……。まあ、あくまでもただの体験だしな。適当に付き合って、さっさと終わらせるか……」

少し大きめに陸に聞こえるように諦めの言葉を呟く。

恐らくこいつらの狙いは、指輪交換から誓いのキスまでの一連のシーンだ。

それをテレビで放映でもして俺と翔子を世間的に結婚させるつもりだろう。

だがそれなら俺は誓いの言葉に入るまでの間、特に神父の前に立った時こそ最大のチャンスだ。

一番邪魔者の陸でも、さすがに神父は勤めないだろう。

「時間だ」

「あいよ」

トントン、と小さな階段を昇る。

そのままステージに上がると、そこから見える光景に少々面をくらった。

「おいおい……。なんだよこのセット」

数え切れないスポットライトに、ライブステージの様な観客席。

スモークの設備はおろかバルーンや花火の用意までしてあるように見える。

向こうにある電飾なんていくらかかっているか見当もつかん。

それでは新郎のプロフィール紹介を



ん？俺のプロフィール紹介か。となるとそう言えば最初の計画は明久と陸が立てていたな。

という事は明久が陸が一枚絡んでいるとみて間違いないな。

さっきのクイズ同様、変なことにならないければ

省略します

手え抜きすぎだろ。

「ま、紹介なんていらねえよな」

「興味ナシ」

「ここが俺たちの結婚式に使えるかどうかの問題だからな」

「だよ〜」

最前列に座っている連中からそんな声が聞こえてきた。

声の主は……さっきクイズ会場で騒いでいたチンピラどもか。まったく、期待を裏切らない行動だ。

他のお客様のご迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮頂けるようお願いします

「これ、アタシらのことってんの〜？」



……ははっ。コレで翔子に花嫁衣装が似合っていないければ興ざめも  
いいところだな。

本イベントの主演、霧島翔子さんです！

アナウンスと同時に幾筋もの光の線が壇上の一転のみを照らす。

清涼祭の時なんかとは比べるのさえ無礼に値するような煌びやかさ。

それはまるで魔法。

純白のドレスに身を包む彼女は、何も知らない無垢な少女のようで

「……雄二……」

凜と透きとおりながらも幼さを残す声の彼女は、ヴェールの下に素  
顔を隠し、シルクの衣装に身を包んでいた。

「翔子、か……？」

「……うん」

確認せずにはいられなかった。こんな綺麗で立派な女性が、俺の知  
ってる翔子なのか。

「……どう……？ 私、お嫁さんに、見えるかな……？」

「ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない」

考えを巡らせることもなく勢いで返事をしてしまった。

婿には見えない、なんて言葉を付け加えられただけでも上出来だと思っ。

「……………雄……………」

翔子は小さな声で俺の名を呼び、小さなブーケを抱え直した。そして、その場で動きを止める。

「お、おい。翔子……………」

「……………嬉しい……………」

目の前で少女が俯き、ブーケに顔を伏せる。

そして、それ以上言葉を発することなく静かに震え出した。

ど、どうしたのでしょうか？ 花嫁が泣いているように見えますか？

泣いている？

言われてみて初めて気がつく。俯いて肩を震わせて 翔子は静かに泣いていた。

「お、おい。どうした……………」

会場から静寂が消え、少しずつざわめきが生まれだす。

そんな中、彼女は小さな、だがはっきりと聞き取れる声で呟いた。

「……………ずっと……………夢だったから……………」

夢、ですか？

「……………小さなころからずっと……………夢だった……………。私と雄二、二人で結婚式を挙げること……………」。

私が雄二のお嫁さんになること……………。私一人だけじゃ、絶対叶わない、小さなころからの私の夢……………」

幼い頃のある出来事がきっかけて抱かれた、コイツの俺への思い。それは偽りの物であるはずなのに　　どうしてここまで強い気持ちを抱けるんだ。

「……………だから……………本当に嬉しい……………他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……………」

そこで翔子は言葉をとぎらせ、静かに泣いた。

観客席から聞こえるもらい泣きの音。不覚にも、少し、ほんの少しだが、俺ももらい泣きをした。

ひばり「そうだったんだ。だからあんなにも嬉しそうなんだね」

明久「そうだね」

どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は本当に一途な方のようです。さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか？

あくまで冷静。だが、顔には涙を拭いた痕がある秀吉が俺に答えを求めてくる。

どうやらポーカフェイスでも耐えられなかったようだ。

さて翔子の問いに対し、俺は、俺は

「あーあ、つまんなーい！」

思わず口を両手でふさいだ。今、俺は何を言おうとした！？何かとてつもなく、今後の人生に大きな影響を与える一言を口に出そうとしなかったか！？

「マジつまんないこのイベントおゝ。人のノロケなんてどうでもいいからあ、早く演出とか見せてくれな〜い？」

「だよな〜。お前らのことなんかどうでもいいっての！」

どうやら俺の窮地を救ってくれたのは最前列に陣取るチンピラのようだ。会場が静まり返っていたお陰でよく分かる。

「ってか、お嫁さんが夢ですつ、って。オマエいくつだよ？ なに？ キャラ作り？ ここのスタッフの脚本？ バカみてえ。ぶつちやけキモいんだよ！」

「純愛ごっこでもやってんの？ そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドおゝ。あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない？ ギャグにしか思えないんだケドおゝ」

「そっか！ コレってコントじゃねえ？ あんなキモい夢、ずっと持ってるヤツなんていねえもんね！」

「え〜っ!? コレってコントなのお？ だとしたら、超ウケるんだケドお〜！」

口々に文句を言い、翔子を指差して笑い始める二人組。すると、

どうやら！ 命はいらないみたいだな！！

う、海谷君！ 落ち着いてっ！ ステージが台無しになっちゃいます！！

海谷、落ち着きなさいって言われてたでしょ！

そんな放送が入り、マイクの電源が切れた。舞台裏の方から誰かが暴れるような音が聞こえてきた。

どこで暴れているのかと、チンピラどもものいる席から舞台裏の音がした方に一瞬視線を移す。

そんな短い時間の中に、

皆さん！花嫁を探して下さい！

マイクを通さない分鬼気迫る秀吉の地声が会場中に響き渡った。

壇上に翔子の姿がなく、ブーケとヴェールが寂しそうに落ちていた。

「……はあ。やれやれ」

なんとなくヴェールを拾い上げる。

それは羽のように軽いはずなのに、涙で湿って少し重たくなっていった。

「さ、坂本雄二さん！霧島翔子さんを一緒に探して下さい！」

スタッフが一人、肩で息をしながらこちらにやってくる。

俺にアイツの行先に心当たりがないか聞きたいのだろう。

「悪いが、パスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな」

「え？　ちょ、ちょっと、坂本さん……！」

説得を続けるスタッフも、無視の姿勢を崩さないでいると諦めたように去って行った。

そのまま退場していく客に混ざって駆け足で会場を出ていく。

さっき言ったのは半分ウソだ。便所に行きたいのは本当だが、あともう一つ、今回どういいうわけか感情を出しまくりの陸を止めなければいけなかった。

結婚式場の裏、出口とは反対方向でソイツと出会った。

「なんだオメエは？」

「リユータ。コイツ、さっきのオトコじゃない？」



「みてえだな。んで、その新郎サマがオレたちになんか用か、アア！」

ふん。あいつにしては粹な計らいをしてくれるじゃねえか。

瞼が大きく腫れあがり、視界を塞いでいる。

言葉と共に血が出てきて、元々かもしれないが歯も数本無い。

無数の痣と血の痕で、自慢の茶色い肌はボロボロだ。

だがそれは顔の左半分だけ。顔の右半分は対照的に原型を留めていた。

こいつらはさっき俺を窮地から救ってくれたんだ。きちんと礼をしないとな。

「いや。大した用じゃないんだが」

初めてだから上手くできるかわからんが、

「ちょっとそこまでツラあ貸せ」

均等になるように、整形手術でもしてやるよ。

「よっ。随分と待たせてくれたな」

「……雄二」

如月グランドパークの中にあるグランドホテルで待つことしばし。

玄関から翔子がトボトボと俯きがちに出てきた。

「さて。それじゃ、帰るとすつか」

秀吉から受け取っておいた翔子の鞆を担ぎ直し、駅に向かって歩き出す。

「……」

翔子は何も言わず、静かに俺の後ろをついてきた。

俺達の間には話はなく、時々聞こえてくる冷たい風の音だけが俺の耳に入ってくる。

「……雄二」

ふいに、翔子が聞き取れるかどうかギリギリの小さな声で呟いた。

「……なんだ？」

「……私の夢、変なの……？」

翔子の足音が消えた。顔など振り向かなくても声の調子だけで分か  
喜んでいるときの声、悲しんでいるときの声、怒っているときの声、  
楽しんでいるときの声。

長い刻を俺たちは共有してきた。

「まあ、あまり一般的ではないかもしれないな」

「……………」

再び黙り込む翔子。

長年の夢を大勢の前で笑われ、否定された。

その喪失感、俺には想像も出来ないほど計り知れないものなんだ  
ろう。

しかし、だからと言って嘘をついて慰めるつもりもない。

俺は、後ろを振り返り面と向かって翔子に言い放った。

「この際だから言っておく。お前のその気持ちは、過去の話に対す  
る責任感を勘違いしたものだ」

七年前の出来事。翔子が俺に好意と勘違いした気持ちを抱くように  
なっただけ。

一日たりとも忘れたことはない。

あんなことがあったせいで、コイツは俺のようなロクデナシに時間を費やすことになってしまった。

だから俺には、お前の気持ちは勘違いだ、と教えなければならぬ義務がある。

これ以上、無駄な時間を過ごさせない為に。

「……ゆう、じ……」

翔子が息を呑む。俺に面と向かってこんなことを言われて、傷ついたのかもしれない。

「けれども」

だが、どこにもコイツが傷つく必要なんでない。

おかしいのはコイツの勘違いだけで、一人の人間を長い間思い続けるという行為は胸を張れる誇らしいことのはずだ。

「けれども、俺のお前の夢を笑わない。お前の夢は、大きく胸を張れる、誰にも負けない立派なものだ」

会場で拾っておいた物を俯く翔子に被せてやる。

「但し、相手を間違えていなければ、だけどな？」

それ以外、お前はどこも間違っていない。お前はそのままにいる。

「……これ……さっきの……ヴェール……」

花嫁衣装の一つである白い薄手を手で押さえ、翔子は驚いたように顔を上げた。

「折角の体験だったんだ。これくらいの思いではあってもいいだろ？」

「……………うん！」

それ以上俺は彼女の顔を見ることができなくて、再び前を向いた。つと、そう言えば、もう一つ言っておかなきゃいけないことがあったんだ。

「それと、翔子。弁当旨かった」

俺は軽くなった鞆を翔子に放った。

「……………あ……………私のお弁当……………。気づいて……………くれたんだ……………」

「さて。さっさと帰るぞ。遅くなると色々誤解されるからな」

「……………雄二」

「特におぶくろのやつは、いくら言っても」

「雄二っ！」

「……………なんだ？」

歩みを止め、少しだけ振り返ると、自らの手でヴェールを持ち上げ、

「私、やっぱり何も間違ってたなかつた」

満面の笑みを浮かべる幼なじみ、霧島翔子、がそこにいた。

そして、俺と翔子の携帯になぜか警察と軍隊に追いかけてまわされるバカツプルの写真が送られてきた。

そして、メッセージが書かれていた。貴方の夢は間違いなく誇り高い物です。俺には出来ない夢です。

これからも大事にしてください。

どうやら本当は翔子だけに送るつもりだったんだろつがどうせばれるだろつから俺にも送ってきたようだ。

ホントお節介な奴だ。

週明けの学校にて。

「おい、明久に陸」

「ん？おはよう、雄二。どうしたの」

「ん？何の用だ？」

「如月グランドパークでは随分と色々やってくれたな」

「あははっ。何を言ってるのさ。昨日、ひばりと一緒に在ったじゃないか」

「素敵な夢をプレゼントしたのだが気に入らないのか？」

「……そうか。お前はお節介な奴だ」

「なるほど。やっぱりなんかやったんだね」

「何の事だか？」

あくまでしらを切るのかよ。まあいい、お前に関しては手は出さないで置いてやるよ。

借りもあるしな。

「ところで、明久。お前にプレゼントがある」

「え？なにになに？食べ物？」

「今話題の恋愛映画のペアチケットだ。気になる相手がいれば、一緒に行くといい」

必要以上に大きな声で告げてやった。教室内にいる全員に聞こえるような声で。

「ペアチケット？うん、そんなのもらっても、使い道に困って  
」

「それじゃあな」

強引に明久の手の中にチケットを握らせ、明久の席から離れる。

「あ、アキっ！　そう言えば、ウチ週末に映画を観たいと思って  
たんだけど」

「あ、明久君っ！　私も丁度観たい映画があつたんですけど！」

「ほえ？　何々？　どうして2人してそんなに殺気立ってるの！？  
このチケットは換金して生活費に痛あゝあゝっ！　もげちゃっ！  
人体の大事なパーツが色々と取れちゃっよ！」

「どうしてそんなことをするの美波ちゃんに瑞希ちゃん。そ、そん  
な事をするのなら、あ、アタシが行くよ」

「おい。島田や姫路だけでなく我らの女神にまで手を出してるぞ！  
」

「許さねえぞ！！吉井！！」

「！！！！吉井殺す！！！！」

自業自得だ、バカ野郎。



第五十六話 ダブルデートその六（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第五十七話 プールと水着の楽園（前書き）

現実の季節と違いますがプール編です。

## 第五十七話 プールと水着の楽園

先週末に行われた如月グランドパークでの【ダブルデート】も無事  
終わりいつも通りの平穏な週末の夜……

化物化した美春父から逃げてきた美春と共に俺は学校の校門の前に  
居た……。

何故学校の校門前にいるって？簡単だ。逃げていたらここに着いた  
からだ。

なぜ逃げているかと言うといつものように化物化した美春父に追い  
かけまわされる美春を助けるために道具を持って行ったのはいいが  
アクシデントが起きた。

いつもなら美春父に対応する物を持って対応してんたのだが……。

今回はなぜか美春母によって阻止され逃げるはめになった。

美春「わ、悪かったわね、陸。それでこれからどうするのですか？」

陸「そうだな。美春父には発信機を着けているから俺の研究室に  
行って受信機を取りに行くしかないな」

「陸の家にはないのですの？」

「在るにはあるがそこまでに美春父と美春母に出会わずすむ方法が  
あるか？」

「……在りません」

「……じゃ行くか」

「（はあ）……そうですね」

空気が重くなった。仕方ないさつさと学校に入って取りに行くか。

そう思い、宿直室に向かった。確か今日の宿直は西村先生だったよな……。

「失礼しまーす」

「失礼します」

宿直室の扉をあけるとそこには

「……でいい訳はあるか？」

「「こいつが悪いんです！」」

大きなタンコブを作った明久バカと雄二ゴリラが正座させられていた……。

「って明らかに悪いのは雄二じゃないか！ 雄二がまともな差し入れを持ってきてくれていればこんなことにはならなかったのに！」

「それは違つだろ！ 元はと言えばお前がガス代をまともに払つていなかったからだろうが！」

「……お前ら何やってるんだ？」

「どうした、海谷に清水？」

「研究室に資料を忘れてしまつて……。こいつら何やったんだ？」

「夜のプールに不法侵入だ……」

「ああ、それは……大変ですね……」

バカとゴリラはまだ不毛な言い争いをしている……。

「……もういい！ 良く分かつた！」

「分かつて頂けて良かったです。あれ、陸にし、清水さん？ いつの間にいたの？」

「ついさっきな……。しかしお前らも懲りないな……」

「……ブタ野郎には理解出来る知能もありません」

「……なるほど」

「納得しないでよ……！」

「はいはい。それじゃあ補習頑張つてな……」

「逃がすか！ 陸、君も補習を受けるんだ！」

「その通りだ！ お前だけ逃げようつたつてそうは行くか！」

「離せ！ バカ！ ゴリラ！ 俺は何も悪い事をしてないだろうが  
！！」

「海谷お前もついでに補習を受けていけ。こいつらの相手を俺一人  
でするのは骨だ……」

「……何でこんなことになるんだ。しかし、鉄人。女の子をこんな  
暗い場所を一人で帰らす気か」

「安心しろ。お前の研究室はベットもある。一晩泊っても大丈夫だ  
！」

「そういう問題じゃないだろう！！」

「やっぱり研究室が在るんですね（キラキラ）それじゃ美春はそこ  
で寝てきますね」

「と言う訳だ。良かったな。お前の研究室は人の役に立ってるぞ！」

「納得できるか ー！！！」

俺の叫びは夜の学校に木霊した……。

## 補習室

「明久、雄二！ 『私は所有者の許可なくプールを使ったことを反  
省しています。』を英訳しろ！」

「り、陸？ど、どうしたの！？」

「早くしろ！！遅いと新薬の実験をお前らでするぞ！！」

「「サー！ イエスサー！」」

「……何で軍事口調なのかわからんが急げ！！」

「「サー！！ イエスサー！！！」」

回答中

「サー！ 出来ました！ サー！」

「よし！ 雄二！ 明久の英文を訳してみる！」

「サー！ イエス！ サー！ 『私は所有者の許可なく貧民層の人たちを使った事を反省しています』」

スッパーン！！（ハリセンでたたく音）

「貴様は何処の奴隷商人だ！！」

「痛い！ 痛いよ陸！ ハリセンなんて何処から出したの！？」

「企業秘密だ！」

「そのハリセンにはどんな秘密があるんだ！」

「とにかくもう一度最初からやり直しだ！ 分かったか！？」

「ちょっと待て、陸！ これ以上やったら死んでしまう……。」

「安心しろ。人間この程度では死なん！」

「……陸、お前は一体何を経験した…？」

「誰か…助けて　　|!!!!!!!!」

次の日

「つてなことがあつて散々な週末だったよ……」

「そうじゃったか。それは災難じゃったのう……」

「一番の災難は俺なんだが……」

気遣うように柔らかな表情を浮かべてくれる秀吉。

「おかげでプールの罰掃除だよ、はあ」

「……重労働」

隣で土屋康太ことムツツリーニがボソリと呟いた。

そして、俺はとばかり……。

「うっすっ」

気だるそうな声とともに雄二が教室に入ってきた。

「雄二、例の話はうまくいったか？」



「ああ、鉄人もそこまで鬼じゃなかったらしい」

外見が鬼なのは間違いないがな。

「例の話って？」

「褒美とは言えるほどじゃないが『掃除をするのならプールを自由に使ってもいい』と約束をとりつけたんだ」

「え？そうなの？」

つまり、今週末の学校のプールは俺らの貸切状態ってことだ。

「だから、秀吉とムッツリーニも今週末にプールに来てくれないか？」

折角の貸切なら俺たちだけで使うというのも勿体ないからな。

まず最初にムッツリーニが頷こうとして、

「もちろん、掃除はして貰うけどな」

「……」

俺の言葉を聞いて動きを止めた。

「ワシは構わぬぞ。貸し切りのプールなぞ、こんな時でなければなかなか体験できんじやろうし」

「え？結構大変だと思うけど、いいの？」

「うむ。お安い御用じゃ」

秀吉は問題ないようだ。ありがたいことだ。

「……………秀吉とプール掃除……………」

「雄二、姫路と島田と支倉も」

「ブラシと洗剤を用意しておけ」

さすがムツツリーニ。エロの分銅おもりは何よりも重いようだ。

「さて、あとは向こうの三人だな。おい、姫路、島田、支倉！」

大きめの声で俺は三人を呼んだ。

島田「どうしたの海谷？」

姫路「どうしたんですか海谷君？」

支倉「何の用事かな海谷君？」

「三人とも今週末は暇か？学校のプールを貸し切りで使えるんだが、暇なら一緒にどうかと思ってな」

「……………え……………」

プールという単語で三人が一瞬固まった。

「あ、さては三人ともトンカチだったりして」

「それを言うならカナヅチよ」

明久どうしてそんな勘違いをする。

「別にそういう訳じゃないのよ。ただ……」

「ただ？」

「プールって言ったら……水着でしょ？」

「そ、そうですよね。水着、ですよね」

「うん。……水着だよね」

「そっだよ」

はあ。ほんとどうしてわからないんだ。

「……バカ」

「……鈍感」

「……鈍すぎ」

（はあ）全くどうしてここまで鈍感になるのか調べてみるべきだな。

「まあ、お前らにはお前らの悩みがあるんだろうが……。一つ言っ

ておくと、秀吉は来るぞ。  
水着姿を明久に見せに、な」

そんな雄二の言葉を受けて、なぜか島田と姫路は急に目つきを変えて秀吉に鋭い視線を送った。

「ひ、卑怯よ木下！ 自分は自信があるからって！」

「そ、そうですっ！ 木下君はズルいです！」

「???? お主らは何を言っておるのじゃ？」

「そうだよ。二人とも木下君は男だよ」

突然二人に非難され、秀吉は困惑の表情を浮かべた。

全く最近には姫路達まで女扱いをされているのか。違った意味でお前たちの思考を調べて見るべきだな。

「で、どうするんだ二人とも？」

「い、行くわ。その、イロイロと準備をして……」

「そ、そうですね。準備は大事ですよね」

複雑そうな顔をしているけど、一応二人はOKのようだ。さて支倉はどうするんだ？

「ひばりはどうするの？ 僕としては皆と遊びたいんだけど」

「（考え中）……しょうがないな。アタシも行くよ」

「そうなんだ！ありがとうひばり」

「きゃあ、ちょ、ちよつとあ、アキくん／＼／」

そう言っつて明久は支倉を抱きしめていた。いやだっこしてるが正しいな。

やれやれ。そんな事をするから他の恋する乙女が攻撃をするってことを学習しろよな。

……？そう言えば静かだな。いつもならお仕置きをされてるはずだが……？

「ねえ瑞希、明日水着を買いに行かない？」

「いいですね。買いに行きましょう……明久君を連れて」

その一言でクラスの皆が殺気立った。

「待て、みんな落ち着くんだ。僕は今の発言に関し何も返答を」

「うむ。ならばワシもご相伴させてもらおうかの。いい加減水着を新調せねばならんかったことじゃし」

「「「キシャアアア」」」

「くそっ！なぜ僕がこんな目に」

次々と飛んでくるカッターを防ぐ明久。

「あ、そうだ雄二。霧島さんにもきちんと声をかけておいてね」

「……言われなくてもそのつもりだ」

無然とした表情で雄二が意外な返事をする。

ん？ おかしいな。きつと雄二のことだから、声をかけずに済ませるつもりだと思ったんだが。

「うんうん。雄二も大人になったね」

「その視線が気になるが、多分お前の考えてる問題じゃない」

「???? それじゃ、どういう問題さ」

「いいか、想像してみる明久。俺の立場で、後々になってからこのことが翔子に知られるという状況を」

雄二が妙に真剣な顔をしてそんなことを言ってくるので、俺も真剣に想像してみた。

ふむ、雄二の立場で、水着の女子とプールで遊んだという事実が霧島に知られたら……

「樹海の奥……いや、湖の底……」

「東京湾……いや、マリアナ海溝……」

「……今すぐ結婚」

「げっ！？翔子。なんでお前がここに」

なるほど。道理で素直じゃない雄二が声をかけるわけだ。

「……私に黙って女の子とデート」

「とりあえず、この頭を掴んでいる手を離して冷静に話し合おう」

「……私も、勝負水着買いに行く」

「き、霧島さん！別にウチと瑞希と木下は勝負水着を買いに行くわけじゃないのよ！ね？瑞希？」

「そ、そうです！誰も明久君に見てもらおうと勝負水着を買いに行こうなんて思っていないんです！」

ふむ。明久はわからなかったようだが買い物に明久を連れていく事も問題だと思いつきし白状してるぞ島田に姫路。

「とにかく全員オツケーのようだな。んじゃ、土曜日の朝十時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」

そんな雄二の締めめの台詞で、この場は一端お開きになった。

第五十七話 プールと水着の楽園（後書き）

ご意見感想をお持ちしております。



第五十八話 プールと水着の楽園2（前書き）

連続投稿。

## 第五十八話 プールと水着の楽園2

土曜日

明久視点

「おはよー。絶好のプール日和だね」

その週末。どこまでも澄みわたる青空の下、僕は校門前に立つ秀吉と姫路さんに手を挙げて挨拶をした。

「おはよう、二人とも」

続けてひばりが挨拶をした。肩からショルダーバックを引っ提げている。

「おはようじゃ明久に支倉。良い天気じゃな」

「おはようございます明久君にひばりちゃん。今日は良い一日になりそうですね」

二人が笑顔で挨拶を返してくれる。

「今日も元気そうだな明久に支倉」

「あ、陸おはよう」

「おはよう海谷君」

良かった。今日は機嫌が悪くなくて。

陸の後ろにもう一つ人影があるのに気づく。

あれはムツツリーニ？挨拶が聞こえなかったんだろうか。

「ムツツリーニ。おは」

「……………！！（カチャカチャカチャ）」

ムツツリーニは鬼気迫る表情でカメラの手入れをしていた。

「あ、あのさ、ムツツリーニ」

「……………（！）」

せわしなく動く手をとめて、こちらに歩いてくるムツツリーニ。

さすがにエロよりも友達をとってくれるあたりいい奴だと思つ。

「おはよ」

「……………陸。例のものは……………」

あ、あれ？ おかしいな。なんだか目から水がでてきた。

「ああ、ちゃんと持ってきた」

陸は持って来ていた鞆をムツツリーニに手渡した。

カメラの三脚や一眼レフやデジカメやレフ板やら鞆の中から出てくるわ出てくるわ。

「ムツツリーニ。準備はいいけど、無駄になっちゃうんじゃないかな」

「……………なぜ？」

「いや。だって、ムツツリーニはどうせ鼻血で倒れちゃうでしょ」「ウエディングドレスですら鼻血を出してたんだよ。

それよりも露出の多い水着姿でムツツリーニが意識を保てるはずがない。

火を見るよりも明らかなことだ。

「……………甘く見てもらっちゃ困る」

今度はムツツリーニが持ってきた大きなスポーツバックを開けて僕に見せてくる。

「……………輸血の準備は万全」

「うん。最初から鼻血の予防を諦めているあたりが男らしいよね」  
鞆に一杯に入っていたのは携帯用の血液パックと注射器。

おそらく血液パックだけじゃ間に合わないとの判断だろう。

「準備と言えば、秀吉は新品の水着を買ったか言ってたよね？ 忘れずに買ってきた？」

「うむ。無論」

「ちなみに買ってきた水着じゃが」

「……………！！（くわっ！）」

心ときめく秀吉の言葉にムツッリーニが目をむく。もちろん僕だつて興味津々だ。

秀吉はどんな水着を買ってきたんだ！？

「ん？秀吉。明久達と一緒に水着を買いに行ったんじゃないのか？」

「……………それがじゃのう。なぜか姉上が行くなと言われのう」

「……………そうか」

そんなことはどうでもいいから焦らさないで早く！

「トランクスタイルじゃ」

「バカなあああああっ！！！！」

「……………アキくん？」

「支倉も気づいているだろうがこの学園の人間のほとんどが第三の性別秀吉として認識してる」

後ろからひばりと陸の声が聞こえてくるけど、そんな事はどうでもいい。

なんで！なんで！神は僕らにこんな試験を与えるんだ！

今からでも遅くないと他の水着を調達を考えていると、

タタタタッ

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ！」

「わわっ！？」

後ろの方から足音が聞こえて、急に背中に何か飛びついてきた。  
なんだ！？

「もう葉月ってば。アキがびっくりしてるでしょ？」

少し遅れて聞こえてくる美波の声。ってことは

「やっぱり葉月ちゃんだ。おはよう」

「えへへー」

背中越しににこりと笑顔を見せてくれる葉月ちゃん。

「バカなお兄ちゃんは冷たいですっ。どうして葉月は呼んでくれな  
いんですかっ？」

「あ、うん。ごめんね葉月ちゃん」

けど、呼んだらきつと僕は血の海に行くことになると思うんだ。

「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃって。どうしてもついてくるって駄々こねてきかないもんだから……」

「別にいいじゃない。一人ぐらい増えても」

すかさず美波をフォローする陸。

「あつ、爆発のお兄ちゃん」

陸のことはそう呼ぶんだ。

「あれ？ 坂本はまだ来てないの？ ウチが最後だと思ったのに」

「いえ、もう来ていますよ？ 今職員室に鍵を借りに行って あ、丁度戻ってきたみたいです」

姫路さんの説明の最中に、校舎の方から雄二と霧島さんが歩いてくる姿が見えた。

「おはよう雄二、霧島さん」

「おう。きちんと遅れずに来たようだな」

「……おはよう」

偉そうに言う雄二と静かに挨拶してくれた霧島さん。

もしかしたら似た者同士じゃなくて、お互い足りないものを補っているのかもしれない。

「お兄さん、おはようですっ」

「ん？ チビツ子も来たのか」

「チビツ子じゃないですっ。葉月ですっ！」

「ああ、悪い悪い。よく来たな葉月」

「はいっ」

楽しそうに葉月ちゃんの頭にポンポンと手を置く雄二。顔に似合わず子供好きな雄二は葉月ちゃんの来訪を喜んでいるようだ。

「んじゃ、早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついていってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉通り一旦男女に分かれる。

姫路さんと美波とひばりは霧島さんに、僕と陸とムッツリー二と葉月ちゃんと秀吉は雄二に　　って、あれ？

「こらこら、葉月ちゃんと秀吉は女子更衣室でしょ。霧島さんについていかないとダメだよ」

僕らについてこようとする二人の背中を押す。



「えへへ。冗談ですっ」

「ワシは冗談ではないのじゃが……?」

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下」

「し、島田!? ついにお主までそんな目でワシをみるように!?  
嫌じゃ! 女子更衣室で着替えるのだけは嫌なのじゃ!」

「木下君。わがまま言わないでください」

「姫路まで!?!」

「木下君って男だよね?」

「そうじゃ!! 支倉よ何故疑問に思っておるのじゃ!?!」

頑なに女子更衣室を拒む秀吉。

けど、そんなに嫌がられても、男子更衣室で一緒に着替えるのはマズいし……。

「あの……。それなら、木下君は一人で別の場所で着替えるっていうのはどうですか?」

おずおずと姫路さんが手を挙げて提案した。流石は姫路さんだ。そうすれば全員文句はないだろう。

「ぬ、ぬう……。まあ、仕方ないじゃろう。水着が水着じゃし……」

などとブツブツ言いながら、秀吉はギョツと水着の入っている鞆を握りしめた。

「安心しろ。あそこに秀吉専用更衣室がある」

そんな秀吉に雄二は話しかけていた。

「何でワシ専用の更衣室が在るのじゃ!？」

「……少なくともこの学園全体では秀吉は第三の性別として認識されてるようだな」

「じゃあ。決まったし早く行こうか。時間が勿体ないし」

「ああ。そうだな」

「……………(コクリ)」

こうして僕らはそれぞれの更衣室へと向かった。

第五十八話 プールと水着の楽園2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第五十九話 プールと水着の楽園3 (前書き)

今回はGAUさんファンに怒られないか不安です。

## 第五十九話 プールと水着の楽園3

可愛い女の子、水着、プール。これから導かれる答えは一つ。

僕はいま理想郷アガルダに立っている！

陸「明久、何やってるんだ？」

冷静にツツコミをいれないでほしい。

明久「そういえば陸。誰に電話してたの？」

「してたというよりしてきたが正しい」

「……ひょっとして清水さん来るの？」

「……ああ。（はあ）美波お姉さまが行くのなら美春が行かなくてどうするだそつだ」

「……そうか。ゴメン余計な事を聞いて」

「……気にするな」

前々から陸の様子を見てると清水さんの事が好きだと思っただ。

ただどわざと嫌われるような行動を取ってるし清水さんもどわざと嫌ってるように見える。

どうしてかな？それに陸は僕達から常に距離を取ろうとしてる。

まるで仲良くなることによって何か起きるから可能性が高いから  
そうならないようにしているように思える。

雄二「……………（陸を見て考え事をしている）」

「ふむ。やっぱり女子はまだ着替え終わっていないか」

「そ、そうみたいだね」

「……………（コクリ）」

「ああ。それに女性は着替えに時間がかかるから待ってたほうがい  
いだろうな」

トランクスタイプの水着に着替えた僕ら四人はプールサイドで女子  
の登場を今か今かと待ちわびていた。

授業をさぼって鍛えた雄二の肉体に匹敵するぐらい陸の体は引き締  
まっっていて、男の僕でも憧れるような美しさだ。

「ムツツリーニ。心の準備はできてる？ 命に関わるからね？」

「……………問題ない。イメージトレーニングを256パターン、昨  
晩済ませてある」

「……………256パターンもあるのかよ」

それなら安心だ。



そ、そっか。確かに相手は小学生だ。何も狼狽する必要はない。

「お兄ちゃんたち、お待たせですっ」

冷静に相手を観察する。

胸元には大きく『はづき』と名前が書いてあるけれど、小学生には不釣り合いな大きな胸のせいでその字は形をひしゃがせていた。

ふむふむなるほど。冷静になればどうということはない。

「懲役は二年程度で済みそうだね」

「……………実刑はやむをえない（ボダボダボダ）」

執行猶予はつきそうになかった。

「お前らは冷静なふりをしてるだけだろう!!」

「…………陸。バカどもに突っ込んで無駄だ」

陸が何かを言ってるけどそれよりもそれにしても、とても美波の妹とは思えない。

その、なんというか、名札のあたりの盛り上がり部分が特に…………。

「こ、コラ葉月っ！ お姉ちゃんのソレ、勝手に持って行ったらダメでしょ!? 返しなさいっ!」



声のした方を向くと、美波が慌てた表情で胸元を隠しながら出てきた。

「ねえ、美波。ソレってなに？」

「……………パッド」

「ほえ？」

僕の質問には美波ではなくムツツリー二が答えてくれた。

その視線の先にはぷっくりお腹が膨らんでいる葉月ちゃんの姿。

「ふむ。葉月ちゃん。パッドがずれてるぞ」

「あう。ありがとうございます。爆発のお兄ちゃん」

葉月ちゃんが水着の中に手を入れてゴソゴソと何かを弄る。

するとぷっくり膨らんでいたお腹はへこみ、胸が膨らんだ。ああ、なるほどパッドが入っていたのか。

「ん？ 今美波が返しなさいって言っていたのは、葉月ちゃんがつけている胸パッド」

「この一撃に、ウチの全てを賭けるわ……………！」

「だ、ダメだよ美波！ その一撃は僕の記憶どころか存在まで消し去りかねないから！」

どうやら僕は気がついていけないことに気がついてしまったみたいだ。

「? 明久。確か姫路達と買い物に行かなかったのか?」

「……………うつつ。やっぱり恥ずかしいからいいって言われたんだ」

お腹への一撃に悶絶している僕のすぐ傍で陸が話かけてきた。

「うふう……………。折角用意して来たのに……………。葉月のバカ……………」

ようやく痛みを抑え、立ち上がると哀しげに呟く美波。

胸元をずっと腕で隠しているからよくわからないけど、多分美波が着ているのはスポーツタイプのセパレートだ。

「な、何よ。やっぱりこの格好、どこか変なの……………?」

胸を隠すように体を縮こませる美波。

なんでそんなに自分に自信を持ってないんだろう。

「そんなことないよ! その……………うまく言えないけど……………すつごく似合ってるよ!」

「え……………? アキ。それ、本当……………?」

「う、うん……………。手も足も胸もバストもほっそりしていて、凄く綺麗だと脚の親指が踏み抜かれたように痛いっ!」

「今、ウチの胸が小さいって二回言わなかった？」

プールに入る前に意識が沈んでいきそうだ。

「島田、そう怒るな。明久は口ではああ言っているが、明らかに前の水着姿を意識しているぞ」

「ゆ、雄二！ 何を言っているのさ！ 僕は別に動揺してなんか…  
…っ！」

「その通りだ島田。少なくとも明久の好みの水着だぞ」

「陸まで！ 悪ノリが過ぎるよ！」

「あ。そ、そうなの……？ もう、アキってば。素直に言えばいいのに……バカ」

美波が蚊の鳴くような小さな声でそんなことを言い出した。

くそっ、そんな顔をされたら素直に話すしかないじゃないか。

「美波の胸、小さいね」

「アンタの目を潰すわ。左右均等に、丁寧」

うまく話せないって言うておいたじゃないか。

そんな感じではしゃいでいると、更衣室の方から第三・第四の刺客が同時に現れた。

「……雄二。他の子を見ないように」

霧島さんは、少しおとなしめな白のビキニと水着用のミニスカート  
の組み合わせた姿。

トップモデルのような美しさを持つ彼女は、なんの変哲もないプー  
ルサイドを花束が敷き詰められたレッドカーペットのように見せ、

ブスッ

そのまま流れるような動きで雄二の眼を潰した。

「ぐあああつ！ 目が、目があつ！..」

「凄いわ……。坂本の目を潰す仕草まで綺麗だなんて……」

「……何で目をつぶす必要がある」

「そうかな。僕はあの姿が見られるのなら、雄二の目なんて惜しく  
ないね……」

「そりやお前らには実害がないからなつ。それと普通は陸の反応が  
当然の反応だ」

のたうつ雄二が何か言っているけれど、それよりも今は霧島さんの  
方が重要だ。

「……そう言われると、嬉しい……」

霧島さんがほんのりと頬を染めて俯く。この仕草はもう反則と言っ

てもいいんじゃないだろうか。

「お、お待たせ」

この恥ずかしがり屋の声は、ひばりだ。

パーカーで隠してるけど大人しめな白のビキニに水着用のミニスカートの水着。

「今日のひばりは踊る」

「……アキ？どうしたの？」

「……何が言いたいんだ？」

「あははははっ。多分アキくんはよく似合ってると言いたいんだと思っ  
思っ  
思っ」

「そうそう」

「……さすが幼馴染」

「……そうね。ウチにはわからないわ」

「あははははっ」

しまった。ついおかしな言葉になった。さっきから僕を憐れんだ目で見られてるよ。

話を変えないと……。

「どづしたの？……さつきから静かだね。ムツツリーニ  
さつきから輸血作業に忙しいのか、ほとんど喋らないムツツリーニ  
に水を向ける。」

でも、ムツツリーニは何の反応も見せずによそを見たまま固まっていた。

「あ、あれ？ ムツツリーニ？」

「……………す……………い、明久」

「え？ なに？ 聞こえないよ」

かほそく話すムツツリーニの声はよく聞こえない。

かろうじて名前が聞き取れたから、僕に話しかけているのは確かだ。

「……………先に、逝く……………」

「む、ムツツリーニ！？ムツツリイニ ……！」

嫌だよ！まだ料金先払いの商品を受け取ってないのに！畜生誰だ！

誰がムツツリーニをこんな目に遭わせたんだ！

涙を拭くのも忘れ、最後にムツツリーニが見ていた方向を向くと、

「す、すいません。ちょっと背中 of 紐を結ぶのに時間がかかったちゃ

つて……」

そこに生物兵器がいた。

「危ない僕っ！（ブスッ）」

秘技、セルフ目潰し発動。

「あ、アキ！？ アンタ何やってるの！？」

止めないでくれ美波。あれ以上直視していたら間違いなく僕は出血多量で死んでいたんだ。

「明久、いったい何をやってるんだ？」

「アキくん！？急にどうした！？」

「陸！ゴメン。でも見たら死ぬよ！！」

声の聞こえてきた方向に警告を発する。僕のような犠牲者が出ないことを祈って。

「あの。明久君がどうかしたんですか？」

「あ、瑞希。なんだかよくわからないんだけど……ああ、そういうことね」

なんだ？美波は少し悲しみが混じった声だけどやられてないようだ。

まさか、この大量破壊兵器に耐性があるのか？

「……なるほど。そういうことだったんだねアキくん」

「そうか、明久はこれの事を言っていたのか」

「あ、あれ？陸は大丈夫なの？」

「ああ。アメリカでもっとすごい人がいたからな（遠い目）」

「どんな人なの？」

「……汗をかいたからってバスローブ姿で街を歩いていたぞ」

「……ゴメン。聞かなかった方が良かったよ」

何故だろう？ものすごく身内がそんな恰好をしてたような気がするの  
のはなぜなんだろう。

「……うっっん。ま、まさかだよね」

ひばりも該当する人に心当たりが在るみたいだ。

「うう……。やっと翔子に奪われた視界が回復して」

「……雄二は見ちゃダメ（ブスッ）」

「ぐあああっ！ またか！？ またなのか！？」

またしても雄二が目つぶしを受けたようだ。



いつもは冷静な霧島さんですら声が震えていたような気がするし。

「み、皆さん何をしているのでしょうか……？」

生物兵器という自覚がないのか、姫路さんが混乱している。

「姫路。気にするな。巨乳娘の水着がよく似合ってるからどう言え  
ばいいのかわからないだけだ」

「は、はあ……」

誰かが時間稼ぎをしてくれてるようだ。声の調子からして陸だろう。

僕はこの隙に大きく深呼吸。心の準備を整え、ゆっくりと目を開け  
た。

まず見えたのは一か所に集まる霧島さん、ひばり、美波の三人。

目が涙で霞んで良く見えないけど、三人とも下を凝視しているよう  
だ。

そつだよ、最初からボスに挑もうとしたのが間違いだったんだ。

まず最初は中ボスで目を慣らしてから挑むべきだったんだ。

……よし、逝くぞ！

「フバハバハッ  
姫」

『いく』という漢字が間違っていた時点で僕は負けを認めていたの

かもしれない。

「あ、明久君？」

視界に飛び込んできた姫路さんの水着姿はとにかく鮮烈だった。

赤いビキニにゆったりとしたパレオ。

守ってあげたくなくなるような小さな肩と、少し触れただけそう折れてしまいそうな細い首。

そして、重力に負けず形を保っているとおあるパーツがなにより危険だった。

「そ、そんなに変ですか……？」

さっきの美波と同じように、自信なさげに体を縮こませる姫路さん。いけない！何か言わないと！

「へ、変じゃないっ！　かなり似合ってるよ！」

「本当ですか？」

「本当だともっ！　赤いパレオがとても似合ってるよ」

「ふふっ、ありがとうございます。でもこの水着は赤というよりピンクですよ」

どうやら機嫌が直ったみたいだ。よかったよかった。

「う、うう……。俺は未だに目が見えないんだが……。全員揃ったのか？」

「いや、秀吉がまだ来てない」

秀吉は秀吉専用更衣室で着替えている。それにしても少し遅いと思う。

トランクスタイプならただ履くだけでいいのに。

「待たせてすまぬ。ワシが最後のようじゃのう。着替えはさほど手間取らんかったのじゃが」

元気そうな秀吉の声。ほっと一安心。

「  
×《ううん、そんなに待ってないよ秀吉》  
」

「落ち着け明久、ここは地球だぞ」

落ち着いていられるわけがない。

秀吉の水着は確かにトランクスタイプだ。だけど

「ど、どうじゃ……。？ 似合っておるかの……。？」

「わっ、お姉ちゃん、とっても可愛いですっ」

「『可愛い』じゃと？ 島田妹よ、何を勘違いしておるのか知らんがワシは男じゃぞ？」

「ふえ？ でも、葉月はその水着、女の子用だと思うです」

「なんじゃと」

そう。秀吉の水着は女物のトランクスだった。

「それは気がつかなかったの」

「気づかなかったのか？普通上が在ったら女性用と気づくぞ！」

陸の突っ込みも気してないみたいだ。

それにしても、秀吉はそこまで焦ってはいないようだ。台詞も棒読みだし。もしかして、

「秀吉？ まさか僕らの気持ち察してわざと買ってくれたの？」

「き、木下……！ アンタまさか……」

「木下君……！ 返答次第によつては……」

「……本当に木下君は男なのかな？ 実は女だったじゃないのかな」

「ち、違つものじゃ。支倉も勘違いして欲しくないのじゃ。り、陸よ！ この水着は似合っておるかの？」

「木下。話をすりかえるんじゃないわよ」

「木下君。しっかりとした弁明をお願いしますよ」

「木下君。本当に男なの？」

三人の威圧感に押され、プールサイドの隅においやられる秀吉。

「でさ、秀吉の水着似合ってたと思うの？」

「ん？俺にも聞いているのか？そうだな、似合ってるとは思っない」

うん。そう言っと思ったよ。陸だって似合っないなんて言わないよな。

『トランクスも好感触っ』

僕らのそんなやり取りの隣で、霧島さんは心配そうに雄二に声をかけていた。

「……雄二。私の水着、似合ってる？」

「ん？ああ。似合ってると思うぞ。赤い水着がお前の真っ赤な赤色の肌にとてもよく似合ってる。

ところで、もう夕方なのか？空がやけに赤いんだが」

携帯電話の場所を頭に思い浮かべていたのは秘密だ。

第五十九話 プールと水着の楽園3（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

## 第六十話 プールと水着の楽園4（前書き）

今回もGAUさんファンに怒られないか不安です。

連続更新です。これでプール編終了。

今回はバカテストを投稿します。

## 第六十話 プールと水着の楽園4

バカテスト

問 以下の問いに答えなさい

ライフラインが料金未払いで止まる場合その順番を正しい順に答えなさい。

土屋康太の答え

『ライフラインの意味がわからない』

教師のコメント

『そうですか』

姫路瑞希の答え

『電話 ガス 水道 電気』

教師のコメント

『さすが姫路さんですね。本当はガスと水道と電気だけでよかったのですが』

『しかし、問題があまりにも難しすぎましたかね。間違いです』

『姫路さんでも解けない問題なら、他に誰も』

吉井明久の答え

『電話 電気 ガス 水道』

教師のコメント



『まさか、貴方が正解するとは思いませんでした』

支倉ひばりの答え

『電話 電気 ガス 水道』

教師のコメント

『正解です。そう言えば支倉さんは吉井君と幼馴染でしたね。なるほど。吉井君の実体験を知ってるからわかったんですね』

軽く準備体操をしてプールに飛び込む。初夏だからか、プールには入っている水は少し肌寒かった。

「あの、明久君にひばりちゃん」

少し泳いで体を温めようとしていると、梯子を使ってそろそろと水に入ってきた姫路さんとひばりが近くにやってきた。

「ん？ なに、姫路さん？」

「どうしたの？瑞希ちゃん」

「明久君やひばりちゃんは水泳は得意ですか？」

「あ、うん。まあ、人並みには得意だよ」

「あたしはそんなに得意ではないかな」

「そうなんですか」

泳げないと鉄人から逃げられないし。それにひばりがおぼれたら大変だしね。

「実は私、全然泳げないんです」

「あ、そうなの？」

「じゃあいつしよに頑張ろう」

ある意味予想通りだ。姫路さんには悪いけど、凄い速さで泳いだりする彼女の姿は想像できない。

「ん？ 瑞希って水泳苦手なの？ ひばりは何となくわかるけど」

プールサイドに腰掛けて話す美波。姫路さんと対照的で、美波は運動全般は得意だったりする。

「はい。恥ずかしいんですけど、水に浮くくらいしかできなくて…」

…

「あ、あたしは……」

「そういうことなら、いつも勉強を教えてもらっているお礼に、ウチが瑞希やひばりに泳ぎを教えてあげよっか？」

ちよっと得意げに美波が胸を張る。

葉月ちゃんと一緒にいる時もそうだけど、美波は面倒見がいいと思う。

「は、はい。宜しく願います」

「いいの？」

「任せてっ。こう見えても水泳は得意なんだから」

そう言っつて、美波は勢いよく水に飛び込んだ。

「二人とも水に浮くことはできるのよね？じゃあ、まずは……」

姫路さんの手を取りすぐに手取り足取り教えていく。

僕が泳げるからってわけじゃないけれど、美波の教え方は丁寧でわかりやすい。

なんだかいつもと逆の立場を見ているようで面白い。

勉強では、Aクラスレベルの姫路さんがCクラスレベルのひばりやFクラスレベルの美波にいつも教えてあげているけど

「こうして見ていると、美波がAで姫路さんやひばりがFみたいだね」

「寄せて上げればBくらいあるわよっ！ー！ー！」

「べへべへっ！ー！ー？」

何！？　なんでいきなり殴られたの！？

「……来年には、きっと」

美波が顔を逸らして小さく呟く。

なんだかよくわからないけど、今の最後に付け加えられた言葉は卑怯な気がした。

「あ、明久君……。そういうことは、面と向かって言われると、その……」

「あ、アキくんの……エッチ」

そして僕の正面では姫路さんとひばりが顔を真っ赤にしている。

確かに水泳がFクラスレベルだなんて少し軽率な発言だったかもしれない。反省しよう。

『……雄二。ちなみに私はCクラス』

『？　何を言ってるんだお前は？』

霧島さんは自分のクラスを忘れてしまったようだ。

「ふふふ……。瑞希、ひばり。それは無駄な脂肪の塊なのよ？　だから、いっぱい運動して燃焼させましょうね」

「み、美波ちゃん。少し怖いです」

「あ、あまりじろじろ見ないで」

美波はビシビシと水泳を教える気だ。

さあ、僕はどこかに行こう。姫路さんやひばりも泳げない姿を見られるのは嫌だと思うから。

『瑞希、しっかりやらないと浮き袋が三個に増えるわよ』

『！ 頑張ります！』

『ひばり、頑張れば背が伸びるわよ』

『！』

離れ際に姫路さんの大きな声とひばりのやる気が聞こえてきた。

「お兄ちゃんっ」

「わぶっ！？」

突然背中に何かに乗ってきて、こらえきれずに水中に沈んでしまった。

「な、何！？」

「えへへー。お兄ちゃん、葉月と遊ぶですっ」

水面に顔を出すと葉月ちゃんの笑顔が見えた。

なんだ。さっきのは葉月ちゃんが飛び乗ってきた衝撃か。

「うん、いいよ。何して遊ぼうか」

「じゃあ、『水中鬼ごっこ』をしますっ」

「水中鬼ごっこ？ 要するに水中でやる鬼ごっこのことかな？」

なるほど。普通に外でやるのはまた別の面白さがありそうだ。

「ルールは普通の鬼ごっこと同じですっ」

そう言うと葉月ちゃんはじゃんけんもせず逃げて行った。

僕も子供じゃない。甘んじて鬼を受け入れよう。

「よし、行くぞー！」

「鬼さんこちら、手のなる方へ」

既に五メートル近く離れてしまった葉月ちゃんを追いかける。

「わっ、お兄ちゃん速いです」

意外と葉月ちゃんのスピードは遅く、すぐに距離を詰めることができた。

葉月ちゃんが後ろをチラチラと振り返る。

よし、捕まえ

バシャバシャバシャバシャ

「うわっ!？」

「ひかかったですっ」

近づいた途端足で強く水を飛ばしてきた。さては、さっきまでは手を抜いていたな。

「やったなあ」

先ほどより開いた距離を追いかける。やっぱり美波の妹だけあって本気を出すと速いなあ。

「えいつ」

「おっと、もうその手は食わないよ」

葉月ちゃんの真後ろから少しだけ外れて攻撃を避ける。そうだ、真後ろにいるからいけないんだ。

なら、横から近づいて葉月ちゃんを捕まえれば。

「わわっ!まずいです」

「捕まえた」

今度は捕まえるのに成功した。葉月ちゃん、ゲットだぜっ!

「捕まえられたです」

「じゃあ、今度は葉月ちゃんが鬼だね」

「でも、バカなお兄ちゃんはエッチです」

え？なんでそう思われてるんだろう？

「捕まえる時に葉月の胸を触ってくるなんて」

「は、葉月ちゃん。それは誤解だよっ！い、いや誤解ってわけじゃくて狙ったわけじゃないって意味ひいひい！！巨大な水しぶきが二つもこっちに来る！」

すぐに戦線を離脱する僕。

『バカなお兄ちゃんは意地悪です。さっきまでは手加減していたなんて』

そんな声は水を蹴る音で掻き消された。

『あれ？プールを使ってるのは誰かと思ったら代表だったの？』

『………愛子っっ』



美波の折檻から僕を守ってくれるひばりと話をしていると、聞き慣れない声がプールに響いた。

『Aクラスの工藤か。どうしてこんなところにいるんだ？』

雄二が名前を呼んでいる。工藤さん？ ああ、そういえば前にムツリーニが試召戦争で戦っていたっけ。

面白そうなので僕もそっちに向かう。

「ボク？ ボクは水泳部だけ」

「そうか。だが、今日は水泳部は休みになっているだぞ？」

「うん。すっかり忘れていて学校に来てやと思っていたんだけど人の声がしたから寄ってみたんだ。良かったらボクも混ぜてもらっていい？」

「あ、別に構わないぞ。俺たちのプールってわけでもないし」  
言葉を区切って雄二が僕の後ろを指差した。

「既に一人、誰か増えているみたいだしな」

見てみると、そこには陸の幼馴染がいた。あれ？さっきまで僕美波ひばりと一緒にいたんだけど？

「お姉さまっ！ どうしてプールに行くのなら美春に声をかけてくれないのですか！？」

美春はこんなにもお姉さまのことを愛していますのに！」

「美春！？ アンタどうしてここにいるのよ！ プールで遊ぶなんて誰にも言わなかったはずなんだけど！？」

「美春にはお姉さまを害虫から護る為のトクベツな情報網がありますから！」

あれは清水さんだ。美波の知り合いで陸の幼馴染、でも美波とは仲良しってわけでもなさそうだ。

現に美波は清水さんから逃げ回ってるし。

「……………（はあ）」

「なにやら賑やかになってきたのう」

秀吉が危なげない泳ぎですいすいこちらにやってきた。

その後ろには姫路さんと葉月ちゃんがゆっくり泳いでこっちに向かってくる姿が見える。

…………… 姫路さんまだそこにいたんだ。さっきはあんな速かったのに。

「あれ？ 優子 じゃないみたいだね。弟君だっけ？」

「ふむ。そうじゃが。お主は姉上の友人かの？」

「うん。クラスメイトなんだ」

クラスメイトだけあって、秀吉がお姉さんでないと見ただけでわかったようだ。

凄いな、僕なんて秀吉が男装していないと区別が付きにくいのに。

「あのさ、ボクも泳いでいいかな？」

「ああ、かまわない。ここは学校のプールだからな」

「ありがとう。それじゃ、水着に着替えてくるね」

スポーツバックを掲げて更衣室の方に向かう工藤さん。すると、その途中で振り向いて、

「覗くなら、バレないようにね」

と言い残していった。

え、えっと……つまりこれは、本人公認の覗き、ってことかな……？

据え膳食わぬは男の恥って言うし、ここは誘いに乗るしか

「……雄二。今動いたら捻りつぶすから」

「明久君。余計な動きを見せたら大変なことになりますよ？」

「アキくん？エッチな事はしないよね」

「陸？わかってますね！」

なんだろう。この象をも殺せそんな鮮烈な殺気は。

こうなったら仕方がない。ムツツリーニに全てを託そう！

「って、ムツツリーニがないね。どうしたんだろう」

「ムツツリーニならほら、あそこに」

カメラを構える余裕も無く、必死に血液パックを付け替えている姿がやけに哀れだった。

しばらく遊んで、休憩のために僕と雄二はプールサイドのベンチに腰掛けて皆の姿をなんとなく眺めていた。

陸が持ってきたビーチボールを、

「いくわよ」

そんな掛け声をかけて美波が高く打ち上げ、

「お姉さまのボールは渡しませんわ」

なんて状況が続いている。周りのみんなはそんな状況を笑顔で見つめている。

うん、とてもいい雰囲気だ。

「でもさ、よかったよ」

「なにがだ？」

「少し心配だったんだよ」

「ああ、天気のことか。それなら俺も」

「陸が盗撮道具しか持って来ていないんじゃないかって」

僕はそんな親友はいらないから。

「ちょっと待て！お前の中ではすでにカメラは盗撮なのか！？」

「はは、何を言ってるのさ雄二」

それ以外に何か使い道があるとでも？

キーンコーン

「あ、十二時だ」

プールまで響く文月学園の厳粛とした鐘の音。

テープだとは分かっているけど、この音が鳴っている間はどっしりも静かになる。

『いつもこの音で目が覚めるもんな』

黙れ悪魔。初登場のくせにしゃしゃりでるな。

「丁度いいタイミングだ。休憩にしよう」

「そうですね。少し休みましょうか」

休憩の為に皆がプールから上がってくる。

僕はその水着姿をあまり直視しないように気をつけながら、最初にあがってきた姫路さんに声をかけた。

「お疲れ様。結構楽しんでたよね」

「あ、はい。ありがとうございます。でも何で上を見ているんですか？」

それは間違えて直視してしまったからです。

「ところで、どうしてプールを借りることができたんですか？」

首の後ろをトントンやっていると姫路さんがそう尋ねてきた。

そっか。そういう場合は説明していなかったっけ。

「まあ、ちょっとイロイロあってね。プールの掃除を引き受ける代わりに一日貸切にしてもらったんだよ」

もちろん体裁の悪いことは言わない。

「え？ お掃除ですか？ このプール全部を？」

「うん。でも、一人でやるわけじゃないよ。僕と雄二と陸とムッツリー二と秀吉の五人でやるんだ」

「それならウチも手伝おっか？」

「あたしも手伝うよ」

その会話を聞いていたのか、傍にいる美波やひばりが掃除への参加を申し出てくれた。

「私もお手伝いします。遊ぶだけじゃ悪いですし」

「ありがとう。でも、掃除は僕らだけで充分だよ。道具も五人分しか借りてないし」

その気持ちだけで充分だ。

「そうですか……あっ！それならっ」

姫路さんが何か良いことを思い出したかのようにポン、と手を打つ。

その瞬間、僕と雄二とムッツリー二は本能的に何かを感じ取った。これは、もしか……？

「ちょっと失敗しちゃって人数分用意できなかったから黙っていたんですけど」

僕ら四人は瞬時にアイコンタクトを交わした。

「実は、今朝作ったワッフルが三つ」

「第一回っ！」（雄二の声）

「最速王者決定戦っ！」（僕の声）

「水泳対決　っ！！」（僕と雄二の声）

「イエーツ！」（秀吉とムッツリーニの合いの手）

姫路さんの台詞を聞き終える前にタイトルコールが入る。

その異様な光景に陸以外は全員目を丸くしていた。

「明久、ルール説明だ！」

「オツケー！　ルールはとっても簡単。ここのプールを往復して、最初にゴールした人の勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負です」

そう、本当にただの水泳勝負。誰が一番速く泳げるかというものを競うだけの単純明快なもの。

ただし、この勝負は一位とそれ以外の順位の間には大きな違いがある。

なぜなら、姫路さんの特製殺人ワッフルは三つで、僕らは四人……



ってちょっと待てよ。

「なんで陸は『俺は関係ない』って顔をしてるの？」

地獄に行かない確率を上げるには一人でも多くいた方がいいはずだ。

そう言うと、陸は意地の悪い笑顔のまま

「明久、黙ってたけど実は俺もお昼ごはんを用意してきたんだ」

「じゃあ、それを食べれば」

「だけど、8人分しか用意してないんだ」

陸は意地の悪い笑顔のままそう言い切った。そこまで言うのなら人数を数えてみよう。

姫路さん、美波、葉月ちゃん、霧島さん、ひばり、工藤さん、清水さん。

「おい、なんでお前が人数に入ってるんだ」

「何を言っている雄二。作った人が食べるのは当然の権利だろう？」

「そんなことはないよ。陸もレースに参加しようよ（ぐいっ）」

「やめる明久。俺がいったらお前達がワッフルを食べられないじゃないか（ぐいっ）」

力強いな。

「そうだな。おい、姫路。悪いがワツフルを陸にやってお前が受け取るはずの陸の昼食を」

「やはり参加させてもらおう。良く考えると何も食べられない人が可哀想だからな」

陸。死のレース参戦決定。

「よくわかんないけど、五人の中では誰が一番速いのかは興味があるわね」

「そうですね。体力なら坂本君と海谷君が一番に見えますけど……」

「……動きの速さなら吉井や土屋も引けを取らない」

「順当にいつて、海谷君、坂本君。次がアキ君といったところかな」

「それじゃ、ボクが判定をしてあげるよ」

工藤さんがスタート兼ゴール地点に立つ。

二十五メートルのプールだから、五十メートル勝負は往復になる。

「ちょっと待って、僕はゴーグルをつけないと本気で泳げないんだ」

「俺もだ、時間をくれ」

僕らは更衣室に行き自分の鞆を漁る。……よし、あった。

「負ける覚悟はできたか？」

「ほざけ。ぜってえ負けねえ」

陸の挑発的な言葉に雄二は闘争心むき出しで答えた。

「はい、行くよ！ 位置について」

工藤さんのコールが響く。

呼吸をすることに、心は落ち着き、神経が研ぎ澄まされてゆく。

ムツツリーニは出血で弱っているから大丈夫。

秀吉は弱ってないけど、きっと体力で負けることはないはず。

「よーい」

罰を逃れるのは二人。敵は二人、その中でも確実に勝てないと思うのは一人。なら

「スタートっ！」

「くたばれえっ！！」

工藤さんの合図と同時に僕と雄二は陸めがけて全力で跳び蹴り放っていた。

「ふっ。甘いな」

くそっ！避けられたか！

「その作戦は読んでいた。二人ともまだまだ甘いな」

「じゃあ、これも読んでいたか？」

「っ！？」

陸、僕たちは何も考え無しに跳び蹴りを放ったわけじゃない。

「行くぞ明久！」

「オツケー雄二！」

「アウェイクン  
起動」

「サモン  
試獣召喚。 ダブル  
二重召喚」

本当の目的は腕輪の有効範囲内に確実に入るためだったんだ！

「くっ………なんてな？ アウェイクン  
起動」

「「！！」」

「まだまだ甘い。俺も教師と同じものを使える事を忘れては困るな  
しまった。フィールドを打ち消すなんて！。これで僕達の勝ち目は  
低くなった。」

『ねえお姉ちゃん。水泳なのに、どうしてお兄ちゃんたちはまだプ

「ルの中に入らないですか？」

『見ちゃダメよ葉月。バカがうつつちやうからね？』

『アキくん。な、何考えてるの！』

遠くから何か失礼なやり取りや叱責が聞こえてきた気がする。

「あのさ、闘いもいいけど、木下君とムツツリーニ君はそろそろ折り返しだよ？」

僕達が落ち込んだときに、審判からあまり嬉しくない情報が舞い込んできた。

「そうは行くかつ！俺はムツツリーニを止める！お前らは秀吉をやれ！」

「了解！」

雄二はムツツリーニのレーンに、僕は秀吉のレーンに、陸は陸のレーンに飛び込む。

「明久！あとは任せた！」

「裏切り者っ！」

ああ、でも秀吉を止めないといけないし、仕方ない。

もともと勝てなかったかもしれないんだから陸は諦めよう。

そのかわり、秀吉はなんとしてみせろ！

「な、なんじゃ明久！？ お主は隣じゃろっ！？」

「ダメだよ秀吉！ ここは通さない！」

脇を抜けて進もうとする秀吉。くそっ、強引に足を動かされて掴みにくい。

そっか、足を掴もうとするからいけないんだ。葉月ちゃんのと きみにたいに体ごと

「逃がすもんかあああっ！！」

ズルッ

すると突然、掴んでいたものから抵抗がなくなった。

「……………？ なんだろうっ？」

その場に足をついて手に残った物を確認する。

なんだろう、コレ。どこかで見ていた気がするんだけど……………。

「あ、明久君っ！ なにをしているんですかっ！？」

「へっ？」

「それです、それ！」

姫路さんが血相を変えて僕の手を指差している。

これって、ええと

「そういえばコレ、秀吉の水着に似ているね」

「んむ？ そういえばやけに胸元が涼しいのう」

「……………死して尚、一片の悔い無し……………！！」

ムツツリーニを中心に広がっていく赤い波紋。

「うおっ！ 大丈夫かムツツリーニ！？ この出血量はマジでヤバくないか！？」

「……………構わない。むしろ本望……………！」

「わああっ！ ムツツリーニが大変な事に！？ 血がものすごい勢いで出ているんだけど！！」

「とりあえず、出血を押さえる。俺がすぐに輸血パックを持つてくるー！」

「き、木下っ！ とにかく胸を隠しなさい！ 土屋の血が止まらな  
いからー！」

「いいいいヤじゃっ！ ワシは男なのじゃ！ 胸を隠す必要はない  
のじゃー！」

「木下君、わがまま言っちゃダメです！ 土屋君が死んじゃいます！」

「……やっぱり木下君は女の子だよ」

「……愛子。救急車の手配、頼める？」

「はい。やっぱりFクラスの皆は面白いねえ」

「バカなお兄ちゃんたち、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

「陸。バカに染まらないでくださいね」

結局、ムツツリー二は何度も峠を迎えながらも、僕らと救急隊員の懸命な延命措置で一命を取り留めた。

そして、週明けの教室。

「……海谷、ちょっと聞きたいことがある」

「なんで俺なんだ？それと俺だけなのか？」



「既に他の二人はそこにいる」

「鬼」

「悪魔」

「正座で許してやってるだけいいと思うが」

「時間も前からなら充分悪魔だ。」

「……どうして」

「一度言葉を区切り、大きく息を吸う鉄人。」

「どうして掃除を命じたはずなのにプールが血で汚れるんだ！？」

「鉄拳をくれてやるから、生活指導室で詳しい話を聞かせろ！」

ガン、と机を叩く音を感じさせないぐらいの大声量。

「説教なんて冗談じゃねえっ！むしろ死人を出さなかったことを褒めて貰いたいくらいだ！」

「そうですね！本当に危ないところだったんですからね！」

「黙れ！お前達の日本語はさっぱりわからん！拳で語り合った方が早い！！」

「ええい、この暴力教師め！逃げるぞ明久！」

「了解っ！」

「貴様ら、今度は反省分とプール掃除では済まさんぞっっ！」

しかし、猿にも意外に知恵が付いていたようで、痺れた足で逃げる事はできずすぐに捕まってしまった。

そしてそのまま刑務所へと連行された。諦めた感じで付いていく陸。

殴られながらも一応事情を話すと、鉄人は溜息混じりに一言、

「……………今度の強化合宿の風呂は木下を別にする必要があるようだな

……………」

などと呟いていた。

第六十話 プールと水着の楽園4（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第六十一話 強化合宿編（前書き）

強化合宿編に入ります。

## 第六十一話 強化合宿編

雄二視点

「翔子」

「……隠し事なんてしていない」

「まだ何も言っていないぞ？」

「……誘導尋問は卑怯」

「今度誘導尋問の意味を辞書で調べてこい。んで、今背中に隠したものはなんだ？」

「……別に何も」

「翔子、手をつなごう」

「うん」

「よつと ふむ、MP3プレーヤーか」

「……雄二、酷い……」

「機械オンチのお前がどうしてこんなものを……。何が入ってるんだ？」

「……普通の音楽」

ピッ 結婚しよう。愛している、翔子

「……………」

「……普通の音楽」

「おい、翔子。俺はこの台詞を言っていない気がしたがな」

「……………言ってた」

「ほう、やけに声が鮮明でないような気がするけどな。……………どっちだ」

「……………子供はまだできていないと思う」

「違っつ！誰の声を ん？鞆にも何か隠してないか」

「……………これは何でもない」

「……っと、盗聴器と小型録音機か。……………つて！！盗聴器と小型録音機だと……」

ピッ >に隠して置けば安心だなく

「……………ちなみに雄二が隠したものは焼却済み」

「なにい……！。翔子お前は何ということ……！」

「……………安心して代わりに海谷がベテラン女性カメラマンに頼んで私

の写真集を作ってくれた」

「ま、まさか!?!」

「……………（コクン）……………そして、代わりに私の写真集を入れてあるから」

「要るか！ お前の写真集なんざ!」

「……………確かに、いらぬ。ごめん」

「え？ あ……………そ、そうだな」

……………と思つたら何だ？ やけにものわかりがいいというか……………。

「……………今日から、雄二の家で一緒に住むから」

「バカ言つてんじゃねえ!! テメエの家があるだろうが!」

「……………妻が夫と一つ屋根の下で住むのに、理由は要らぬ」

「理由云々以前の問題だと何故気付かない!? つーかさつきから流してきたが、お前は俺の妻でも何でもねーだろうが!」

「……………大丈夫、予定ではそうだから」

「予定でもねえ!」

「……………それでもういい?」

「さりと話を換えやがってまあいい。お前がそう言っつてことはまだ何か隠してるな」

「……ずるい」

「ポケットか　なにになに？　『私と雄二の子供の名前リスト』か。……ちよつと待てや」

「……お勧めは、最後に書いてある私たちの名前を組み合わせたやつ」

「『しょうご』と『ゆうじ』で『しょうゆ』か。……なぜそこを組み合わせるんだ」

「……きっと味のある子に育つと思う」

「俺には捻くれ者に育つ未来しか見えない」

「……ちなみに、男の子だったら『こしょう』が良い」

「『しょうゆ』って女の名前だったの……」

雄二の視点終了



新学年になって二ヶ月が経過し、だんだんと夏至が近づいてきた今日この頃。

山からは少し強い風が吹いて、徐々に日没までの時間が長くなる。そんな季節。

明久「なんで反省文なんて物があるの？」

陸「仕方ないだろ。プールを汚したのは俺らなんだから」

美春「（はあ）自覚がないのも困りものです」

ひばり「そうだよアキくん。今回はあたしたちが悪いんだから」

明久は支倉に説教を受けながら鉄人へ反省文を提出するために朝早くに学校に向かっていた。

「それに悪いのはアキくんだよ。締切を守らないなんていけないことだよ」

となりで支倉がなにか喋ってるけど、明久には子守唄がわりにしかならないようだ。

そんなやり取りを交わしながら俺たちは文月学園の校門をくぐる。

「む？ 今朝は早いものう」

「おはよう秀吉」

「秀吉も早いじゃないか」

「おはよう木下君」

教室に足を踏み入れると、最近男と女の性別をあいまいにするクラスメイト、木下秀吉が話しかけてきた。

「ワシは部活があるからの。お主らはなんで早いのじゃ？」

「僕たちは反省分の提出のためなんだ」

「それは明久アキくんだけだ（よ）」「」

俺は突っ込みながらシステムディスクに鞆を下ろす。リクライニングシートに座った。

「そう言えば、明日から強化合宿じゃな」

「もう秀吉は準備したのか？」

「無論じゃ、後は持っていくだけとなっておる」

「そつだよね。僕とひばりも昨日のうちにすませちゃったんだ」

鞆を常に学校に置いてある俺と違い、明久は鞆の中身をロッカーに移す。

「でも、確かに五泊六日なんて修学旅行みたいだから楽しみで」

と、その時。明久は何かに気付いたようだ。

明久視点

「ん？ なんだろう？」

ロッカーの中身は昨日鉄人に殆ど没収されたから空になっているはずなんだけど。

疑問に思って中を覗き込んでみると、空っぽであるはずのロッカーに見覚えのない封筒が入っていた。

手紙だろうか？

《吉井明久様へ》

ま、まさかこれは……。あの絶滅危惧種と名高い

「ラブレター？」

「り、陸！何で僕の後ろにいるの！？」

ま、マズイ！見られた！？

「ラブレター、とな？」

「明久、その封筒は何なんだ？」

おおお落ち着け吉井明久。

ここで焦ったら「これはラブレターです」って言ってるようなもので、バレたら嫉妬に狂ったクラスメイトたちに殺されるだろう。ここは冷静に対処するんだ！

「Sprich nicht so laut!（訳：そんな大声で話さないで!）」

「驚いた。ドイツ語を話せるとは思わなかった」

「陸よ、驚くポイントはそっちなのか?」

「だってあの明久がドイツ語を喋ったんだぞ。これはまさか島田<sup>ツンデレ</sup>の為に覚えたとも取れるぞ」

陸それもどうかと思う。

「と、とにかく大したことじゃないから、見なかったことにしてくれない?」

さすがに、何かがあった、ってことは隠せてないと思うから情に訴えることにする。

雄「やムツツリー二ならともかく、この二人なら見逃してくれるだろう。」

「む、むう……。そこまで言うのであれば……」

「ふむ。一生に一度あるかないかの出来事だからな。いいだろう」

「ありがとう助かるよ! それじゃっ!」

手紙を鞆にしまい、僕はダッシュで教室を後にした。

時間は　大丈夫。手紙を読む時間くらいは充分にある。

尾行の気配がないから、クラスの皆にはバレる心配が無いとみてよさそうだ。

「ここなら、誰もこないかな」

思わずそんな独り言が口をつく。

着いた場所は体育館の裏。

この時間なら部活も終わり始めてるから余程のモノ好きがいらない限り誰も来ない絶好のスポットだ。

「これ、誰がくれたのかな……？」

僕の名前以外は何も書かれていない簡素な封筒。差出人の名前も書かれていない。

一体どんな子が、どんな想いを込めて僕にこの手紙を贈ってくれたのだろうか。

そんなことを考えるだけで胸が高鳴る。

「（落ち着け、落ち着け僕）」

はやる気持ちを抑えゆっくりと手紙の封に手をかける。

緊張しているせいか、中身を取り出すのに少しだけ手間取った。

そして、問題の中身に触れた。……………よし！

『あなたの秘密を握っています』

なかなか斬新な告白だ。まるで脅迫状と見違えてしまうほど。

これを書いた人はきっと文章に関しては姫路さんの料理と同じくらいおつちよこちよいなんだろう。

これは流行の最先端、YANDERE、というやつか。実際に見るのは初めてだ。

『あなたの傍にいる異性にこれ以上近づかないこと』

これは……………あれだね。彼氏になったら「他の女の子に目を奪われちゃダメだぞ」って遠まわしに言ってるんだろう。なかなか奥ゆかしい人じゃないか。

『この忠告を聞き入れない場合、同封される写真を公表します』

丁度写真が入るようなサイズの封筒が同封されていたので、その中身を改める。

そこに入っていたのは三枚の写真。

おそろおそろ一枚とって確認する。写っていたのは ウェディングドレス姿の僕。

……これは、あれだね。

僕の事が好きで女装も受け止められるというアピールのつもりだろう。随分と寛容な心の持ち主だ。

ここまで許してくれるならきつと多少のバカも許してくれるに違いない。

そんなことを思いながら二枚目の写真に手をのばす。

写っていたのは　ウエディング姿の僕（パンチラ　エディション）

トランクスだからセーフ、トランクスだからセーフ、トランクスだからセーフ。

そっ心に刻みこんで、一旦息を吐く。

大丈夫、僕は強い子だ！　これくらいなんともないねっ！

おそらくこれは僕を試しているんだろう。

あまり話したことの無い僕の心の強さを確かめるためにこんな写真をいれたんだろう。そう思いたい。

気合いを入れ直して三枚目。

ゆっくりと引きだすとこの写真だけ逆向きになっているように僕の足が見えた。

ドレスをが映ってないところを見ると、どうやら普段着のようだ。

これは僕を好きになった理由が映されているんだろう。そんな淡い期待を込めて勢いよく取り出した。

写っていたのは　　ひばりに女装させられていた僕。

「もついやああああっ!?!」

その写真は見事にひばりが、僕の女装の手伝いをしてるように見える。



第六十一話 強化合宿編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第六十二話 強化合宿編2 (前書き)

連続投稿です。

## 第六十二話 強化合宿編2

「明久。一体何があつたのじゃ？」

教室に戻つた明久を見て、秀吉が心配そうな声をかけてきた。

「顔色がだいぶ優れてないようだが？」

俺も同じように心配をしてきている。

明久視点

「べ、別になんでもないよ。あははっ」

ラブレターだと思つていた手紙が実は脅迫状だったなんて、そんなの恥ずかしくて言えない。

僕のわずかに残つたプライドにかけて、ここは隠しておきたいところだ。

「ウソばかり。さっき窓から妙な叫び声が聞こえてきたし、何か隠してるでしょ」

「あ、美波。おはよう」

秀吉の陰から美波が現れる。今日は少しご機嫌斜めのようにだ。

「おはようアキ。それで、何を隠しているのかしら？ ひばりとい  
いアキまでまさか……」

「やだなあ美波。本当に何も隠してなんか」

「まさか、ラブレターを貰ったなんて言わないわよね？」

「美波、言葉に気をつけるんだ。ラブレターという単語に反応して皆が僕に向かってカッターを構えている」

相変わらず恐ろしいクラスメイト達だ。級友を刺殺するのに何の躊躇いもないなんて普通じゃない。

「え？アキくんも貰ったのラブレター？」

「皆、カッターはまだ早いわ。だいたい、どう考えてもアキがラブレターなんてもらえるわけないでしょう？」

「美波ちゃん。その前に皆行動がおかしいよ。落ち着いてよ」

「うつつ、ひばりだけが僕の味方だよ」

「大丈夫だよ。それよりアキくんも貰ったのラブレター？」

「え？アキくんもって」

ひばりはラブレター貰ったようだ。だとするとあの事を思い出しているに違いない。

「さて、アキ、ひばり、何を隠しているか吐いてもらいましょうか」

確かに僕の事に彼女の予想は正しい。だけど美波は最後のツメを誤

った。

あんな言われ方をして、すすごと引き下がっては僕の沽券に関わる。

それにひばりを傷つけないためにもこうなれば意地でも正直に答えるものか！

「ふふん！ そのまさかさ！ 今朝僕の靴箱にラブレタが」

ドスツ（カッターが畳に刺さる音）

「次は耳よ」

スパコ　ン（ハリセンで美波を叩く音）

「痛わよひばり！」

「話たくないのを無理やり聞くなんて失礼だよ」

「むづ。確かにそうじゃのう」

「ああ。どつやら支倉も聞きたくないようだし話たくもないようだしな」

秀吉と陸もひばりの肩を持ってくれるようだ。

「だけど……」

「……」（笑顔）

ひばりは笑顔でハリセンを持ち上げていた。

「心の底からごめんなさい」

美波はひばりに謝っていた。

FFF団『『『……』』』』

他の連中は気にはなっているがひばりの前では行動を取れないみたい。

「明久。それより大丈夫か。脅迫状を貰ったと聞いたが」

「陸。うん。何で知ってるの！？じゃ、じゃなくてきよ」

陸が知ってるのも気になるけど誤魔化すために脅迫状なんです、と言いかけて僕は思った。

脅迫って人に話しちゃうとまずいんじゃないっけ？

それに誤魔化せてないし

よくTVとかでも脅迫犯が『警察や他人には知らせるな』なんて言ってるし、脅迫されている事実が多くの人に知られるのは僕としても避けたい。

これはなんとかしてしまかさないと！

「きよ、きよ……」

「『きよ』、何よ?」

ああ、どうしたらいいんだ!?

> 落ち着けよ、吉井明久<

(お前は、僕の中の悪魔。何かいい知恵をくれるの?)

> 競泳用水着でいいじゃないか。<

(え?確かに時期的にあってるからそれでもいいけど……)

> 待って、明久<

(僕の中の天使、君は前回出て来てもう出てくるなと言っておいたはずだが?)

> 巨乳の妹特集のエロ本でいいじゃないか<

(そおいつ!)

> ピギヤ ッ<

それは完全に死亡フラグだ。

「アキ?」

元々勝気な吊り目がさらに吊り上がる。攻撃態勢まであと一步の状態だ。

窮地を脱するために僕の脳がだした答えは

「きよ、競泳用水着愛好会の勧誘文！」

悪魔の意見を採用した。勧誘文って付け加えることで、少しは自然な感じになったかな？

……というか、コレは本当に僕の脳が真剣に考えた窮地を脱する方法なのだろうか？

「ほ、本当なの、アキ？」

「そ、そうなのアキくん？」

勿論嘘に決まっている。

でも、そんなことを言ったら『じゃ、何を隠しているの？』と返されてしまう。

こうなった以上、最後まで嘘をつき続けるしかない。

「勿論本当さっ！」

少し引き気味の美波を無理矢理信用させるように力強く断言する。

「そ、それにしても捨てる素振りがなかったけど……。もしかして、入会する気なの？」

「ま、まあね！ 前から興味があったからね！」



いけない！ 本当に引き返せないところまで来ている。

「でも、よりによって普通の水着じゃなくて競泳用だなんて……。一体どのへんに興味を持ったの？」

「そ、それは……」

さあ、困った。

ハッキリ言っただけは競泳用水着についての知識はかけらもち合わせていない。

誰か、誰か僕に妙案を

>密着具合<

「密着具合」

天使！いつの間に戻ってきた！ これでは僕が変態扱いされるじゃないか！

「島田。わかってると思っただけじゃが一応言っておくと、今のも全部明久の嘘じゃからな？」

明久にそんな趣味があるがなからう？」

「ええっ！？ 凄いいリアルなウソだったから危うく騙されるところだったじゃない！」

「傷ついた！ 今の一言で僕は毎晩枕を涙で濡らすほどに傷ついた

！」

「それで、明久、本当はなんなんだ？」

陸が呆れた顔でが訪ねてくる。

あつ！そう言えば陸が知ってるのは確か実験で僕のネクタイにカメラをしかけてたよ。

だから知ってたんだ。（はあ）誤魔化す必要がなかったよ。

「実は、今朝僕宛てに脅迫文が届いてたんだ」

「あ、なんだ。良かったあ……」

脅迫状と聞いて胸を撫で下ろすクラスメイトに疑問を抱かないわけでもない。

「して、その脅迫状にはなんて書いてあったのじゃ？」

「これには『あなたの傍にいる異性にこれ以上近づかないこと』って書いてあるんだ」

「ふむ。その文面から察するに、手紙の主は明久の近くにおる異性に対してなんらかの強い気持ちを抱いておるな。大方嫉妬じゃろうが。つまり」

「うん。このクラスのたった三人の異性、つまり姫路さんか秀吉かひばりに好意を寄せているヤツだっことがわかるね」

「明久。金属バットを取りに行った島田が戻ってこないうちに逃げるのじゃ」

え？僕の推理間違ってた？

「で、アキくん。何をネタに脅迫を受けてたの？」

「……ひばり。世の中には知られたくないものがあるんだ」

「それは……ごめんね」

ごめんひばり。いくら幼馴染でも教える事はできないんだ。

僕が哀愁に漂っていると、

「おはようございます」

教室の扉から癒し系の可愛らしい声が聞こえてきた。

「この声は やっぱり姫路さんか。おはよう」

「おはよう瑞希ちゃん」

「姫路か。おはよう。今朝は遅かったのじゃな」

「はい。途中で忘れものに気がついて、一度家に帰ったのでギリギリになっちゃいました」

「おはよう」

鞆をシステムディスクに下ろし、姫路さんは僕らの近くに来る。

丁度良い。頭が良くて常識のある姫路さんにこの状況をどう打破すべきか聞いてみるか。

「ねえ、姫路さん」

「はい」

「僕のウエディング姿の写真ってどう思う？」

「アキくん。それはどうかと思うよ」

「明久お前は何を聞きたいんだ？」

切り込み方を間違えた。

「うーん、そうですね……」

そんな変な質問に真剣に考えてくれる姫路さん。なんて良い子なんだろう。

とりあえず変な風に思われる前に止めるとしますか。

「とりあえず、三ダースほど買いたいと思いますね」

「明久ここは三階だ！いくらお前でも落ちたら捻挫程度じゃすまない！」

「離して陸！僕はもう生きていける気がしないんだ！」

「そ、そうじゃ！ ムツツリー二じゃ！ムツツリー二ならばこの手の話には詳しいはずじゃ！事情を説明して」

「えっ！？土屋君が焼き増ししてくれるんですか？」

「違う！！だから止めるんだ明久！これ以上は本当に危険だ！」

「うるさい！もう僕に構わないでくれ！」

「アキくん落ち着いて！！！」

生きていてもろくな目にあわなさそうだ。

「明久よ！ムツツリー二に脅迫犯を見つけ出してもらおうのじゃ」

「おおっ！なるほど！」

そうか！まだ諦めるには早かった！

盗撮や情報収集のエキスパートとも呼ばれるムツツリー二なら脅迫犯を突き止められるかもしれない！

そうすればこの写真を取り戻すことだって……！！

「ナイスアドバイスだよ秀吉！」

早速相談しようムツツリー二を探す。

すると、教室の隅で小さくなって誰かと話をしているヤツの姿が見

えた。

「それじゃ、僕はムツリーニに話があるから！」

姫路さんたちに手をあげて教室の隅へと向かう。

ムツリーニのいる席に倒れこむように駆け寄る。

すると、僕の行く手を遮るように大きな体が邪魔をしてきた。

「後にしろ。今は俺が先約だ」

「あれ？ 雄二？」

目的地に先に陣取っていたのは、僕の悪友の坂本雄二だった。

やけに縮こまっている気がするけど気のせいだろうか。

「雄二、ここは譲ってくれないかな？」

「すまない。今回はどうしても譲れないんだ」

いつも謝らないコイツが言葉だけでも謝るなんて……。それほど込み入ってるのかな？

「ムツリーニ、何の話？」

「……………雄二の結婚が近いらしい」

「雄二と霧島さんの結婚？ そんな既に決まってることより、僕が校

内の皆に女装趣味の変態として認識されそうってことの方が重要だよ！」

「なんだと？お前が変態だなんて、それこそ今更だろうが！」

「黙れこの妻帯者！ 人生の墓場に還れ！」

「うるさいこの変態！ さっさと嫁にでも行っちまえ！」

「……………」

「……………」

「……………傷つくならお互い黙ってればいいのに」

「ごめん。ちょっと時間をちょうだい。」

「で、でも、まだ結婚の話程度で済んで良かったじゃないか。僕はてつきり、あのペースだともう子供が出来たことにされているのかと」

「……………明久。笑えない冗談はよせ」

「え？ なに？ 笑えないの？」

「そこまで言うなら一応話を聞くよ。雄二に何があったの？」

「一応は気に入らないがまあいい。実は今朝、翔子がMP3プレーヤーと盗聴器と小型録音機を隠し持ってたんだ」

「？別に普通じゃない？雄二だってMP3プレイヤーは持って来てるし、盗聴器と小型録音機はムツツリーニがいつも持って来てるよ」

雄二に関して言えば、鉄人に没収されたけど。

「いや、アイツは結構な機械オンチだからな。そんな物を持っていて、しかも学校に持ってくるなんて不自然なんだ」

霧島さんは機械オンチなのか。姫路さんといい、頭の良さそういうのってあまり関係がないのかな。

「そこで怪しく思って没収してみたんだが、そこには何故か捏造された俺のプロポーズが録音されていたんだ」

「……………」

「っと、思いだした。俺はちょっとあいつらに用があつたんだ」

雄二は腰を上げて、重い足取りで陸たちの方に歩いていった。

『おい陸、秀吉』

『ん？雄二おはよう』

『おはようじゃ雄二。気のせいか顔に青筋が浮かんでおるぞ』

『単刀直入に聞く。お前ら俺の声を真似たことはないか？』

『ないな』



『あるぞ』

『聞き方がまずかったな。俺の声を真似て翔子に結婚のプロポーズをしたことはあるか?』

『すまぬ。それはワシじゃ』

『そうか。それより、陸何てことをしてくれただ!!』

『?待つんだ。何の事かわからない。一から事情を説明しろ』

『説明するまでもない』

『雄二!やるのならこっちも反撃をさしてもらっぞ』

数分後

「は、話の続きをしようか」

雄二は、ボロボロになりながら戻ってきた。

ねえ、陸と戦って勝てないとわからないの。

「MP3プレーヤーは没収したが、中身は恐らくコピーだろうし、オリジナルを消さないことには……」

そう言って雄二が取り出したものはどう見ても再生専用のプレーヤーだ。

その中身を消したところで問題の解決にはならないだろう。

「そんなわけで、ムッツリーニにはその台詞を録音した犯人を突き止めてもらいたい」

「霧島さん自身が録音したって可能性はないの？」

「翔子も録音はできると思うが、会話の前後を削除するなんて高度な技術は無理だ」

「……………それで？」

「何度も言うがアイツは機械オンチだからな。きっと機械に詳しい奴が裏にいるはずなんだ」

「……………明久は？」

と、ムッツリーニが僕の方を向いてきた。今度は僕の事情を聞いてくれるみたいだ。

あまり長々と言いたい話でもないし、端的に説明しよう。

#### 事情説明中

「そんなわけで、その写真を撮った犯人を突き止めて欲しいんだ。写真を撮られた覚えなんてないから、きつと盗撮の得意なやつがこっそり撮影してたんだと思う」

「なんだ。明久も俺と同じような境遇か」

「……………脅迫の被害者同士」

「こんなことで仲間ができても……………」

そうやってそれぞれの説明が終えたところで、ガラガラと教室の扉が開く音が響いた。

どうやら担任の先生がやってきたみたいだ。

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

「……………とにかく、調べておく」

「すまん。報酬に今度お前の気に入るような本を持ってくる」

「僕は陸が僕の家を持ってきて忘れて帰ったハードな物を持ってくるよ」

「……………必ず調べておく」

鉄人が入ってきたので僕たちは自分の席についた。

僕と雄二は特に目をつけられているので、こつこつと時くらは目立たないようにしないと身体がもたない。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ、旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題はないはずだが」

前の席から順番に冊子が回されてきたので、僕も一冊取って残りを後ろに回した。

「集合場所の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

確かに集合場所と場所を間違えたらシャレにならない。

学力強化が目的とはいえ、皆で泊まり込みのイベントに参加できないなんて寂し過ぎる。

どうやら、今回僕らが向うのは卯月高原という少し洒落た避暑地らしい。

この街からは車だとだいたい四時間、電車とバスの乗り継ぎで行くと五時間くらいかかるところだ。

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

パラパラと冊子を捲って集合場所を確認する。

AクラスとBクラスは学校からリムジンバスがでるらしい。

違いと言えばAクラスは二階があってBクラスはないということだけ。

僕らは良くてトラックの荷台、悪くて電車の網棚の上かもしれない。

「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは 現地集合だから

な  
」

『『案内すらないのかよっ』』』

あまりの扱いに全級友が涙した。

「あのー……西村先生」

そんな悲痛な叫びが出た後で僕はおずおずと手を挙げた。

「どうした吉井？」

「実はいまお金なくて……」

「お前は……電車賃すらも無いのか」

鉄人の目からも涙が出た瞬間だった。

第六十二話 強化合宿編2（後書き）

ご意見感想をお待ちしております。

## 第六十三話 強化合宿編3

ひばり視点

放課後

手紙を広げて、あたしはため息をついた。

別にあたしは、ラブレターの類を貰うのは初めてではない。

文月学園に来てからも二度ほど貰ったし、中学時代も何度か貰ったことがある。

そのたびに丁重にお断りしているの。でもこの際、それはおいておくの。

今問題なのは、問題は、差出人不明のこの文である。

『支倉さん。君に近づくゴミは排除します。だから安心してください』

これはラブレターなのだろうか？ううん。これは、あたしの周りにいる人たちに対する警告文だと思う。

あたしは顔をしかめた。

はあ。やっぱり気分が優れないのか、体が重い。

目をつむり、こめかみを軽く指で押さえながら、天を仰ぐ。

「……大丈夫。もう長月中じゃないんだし、文月にそんなことする人、きつとこない……」

つぶやいて手紙をしまつと、あたしは重い足取りでアキ君が待つ教室に戻っていった。

ひばり視点終了

明久視点

学校

次の日

陸がいつの間にかババア長と話をつけていて陸の知り合いのバス会社に連絡をしてくれたおかげで僕はお金の事を気にせず普通の時間に学校に来てバスに乗って行くことが出来た。

景色がゆっくりと流れる。

車窓から見えるのは単調な灰色の街と違って、色鮮やかな緑の森。

ノリのいい運転手のおかげで快適に走り、僕たちを目的地へと導いていく。

いつもとは少し違う雰囲気、僕の心は酔いしれていた。

「あと二時間くらいはこのままですね」



僕の正面に座っている姫路さんが操作していた携帯電話をポケットにしまう。

「二時間か。眠くもないし、何をしたいようかな」

狭い車内でできることなんて限られている。

携帯ゲームもあるけど、せっかく皆で来たんだからそれは避けたい。隣に座っている雄二を見ると、窓の淵に肘をつき退屈そうに欠伸をしていた。

「陸。なんか面白いことないの？」

通路を挟んで隣にいる陸に喋りかける。

「そうだなあ。明久が支倉に告白すれば俺は面白いかな」

「それは僕の一生が懸ってそうだね」

適当に言ってることは分かっているけど、陸は時々やりかねない。

「美波、何を読んでいるの？」

雄二の対面、つまり僕の斜め前に座っている美波は手帳ぐらいの小さな本を読んでいる

漢字が苦手な美波が本を読むなんて珍しい。

「ん、これ？ これは心理テストの本。1000円均一で売ってたから買ってみたんだけど、意外と面白いの」

「へえ〜。それ何円だったの？」

「……………」

「え？なんでそんな哀れむような目で僕を見ているの？」

「（はあ）アキくん。その本の値段は1000円だよ」

僕なんか変なこと言った？

「あ、あのさ。僕にその問題を出してよ」

この空気がいたたまれなくなって僕は話題を変えることにする。

「うん。いいわよ」

特に気にした様子も無く、適当にページを捲る美波。

「それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げて下さい』」

色のイメージか。その色が似合う人って感じでいいのかな？

「『？緑？オレンジ？青』それぞれ似合うと思う人の名前を言ってもらえる？」

「ん〜……………順番に、『緑 美波、姫路さん オレンジ 秀吉 青

ひばり』って感じかな」

ビリィッ！

美波の手元から凄いい音がした。

「み、美波さん……？ どうして本を真ん中から引き裂いているのですか？」

「アキッ！」

「は、はい……」

「どうしてウチや瑞希が緑でひばりが青なのか、説明してもらえない？」

うわっ！なんか知らないけど凄いい怒ってる！ 心理テストでも怒られるなんて、僕はテストと名のつくものとは相性が悪いのだろうか？

「ど、どうしてと仰られましても……」

前にムツツリーニが教えてくれたんだけどその時が美波の下着がライトグリーンだったから、何て言ったら窓から捨てられるだろう。

「怒らないから正直に言ってみて？」

「僕の家はまな板って緑色だから」

「坂本、窓開けて」



陸が美波によつて破かれ投げられた本を読む。

それに投げた本人が声をあげて抗議する。そんなに読まれたらマズイ物なのだろうか？

「……なら投げるなよ。悪いちよつと気になつたからな」

「面白そうだな。島田、俺もちよいと混ぜてもらえるか？」

「いいわよ」

「島田よ、ワシも参加していいかの？」

「別にいいけど」

美波はなぜか不満げな声をだす。まるで秀吉を妬むようなことでもあつたみたいだ。

それはありがたい。……ところで明久。さっきの答えじゃが」

「ん？」

「次の色でイメージする異性を挙げて下さいとあつたのじゃが、オレンジでイメージするのは誰じゃ？」

「秀吉」

「……少し、嬉しいから困る……」

あれ？、秀吉は少し頬を染めてうつむいていた。一体何があつたん

だろう。

「ところでムッツリーニは参加しないの？」

「どつやら眠っておるようなのじゃ。色々調べものをしておったとか」

陸の陰を覗き込むと、ムッツリーニがコクコクと船を漕いでいる姿が見えた。

「そつとしておいた方が良さそうだね」

「うむ」

寝ているところを起こす方が可哀想だ。

「あの、私もいいですか？」

「そうだね。皆でやるつよ」

何故か不機嫌な美波に代わって僕が返事をする。

美波も姫路さんを仲間外れにする気なんかないはずだ。

「ところで美波ちゃん。私は美波ちゃんの気持ちよくわかります」

「！瑞希」

さらに友情が深まってると感じてだね。ホント仲がいいよね。

「ま、いいわ。第二問いくわよ」

美波が溜息をつきながら読み辛くなった本を開く。僕はいつも本を引き裂く力で拘束されているのか。

……生きるためには筋トレをするしかなさそうだ。

「『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を順番に2つ挙げて下さい』だって」

「俺は5・6だな」と雄二

「ワシは2・7じゃな」と秀吉

「僕は1・4かな」と僕。

「私は3・9です」と姫路さん

「俺は8・4で」と陸。

「あたしは1・4かな」とひばり

それぞれの答えを聞いた後、美波はゆっくとページを捲った。

「えっと、『最初に思い浮かべた数字はいつもまわりに見せているあなたの顔を表します』だって。それぞれ」

美波が順番に指を差しながら、

「クールでシニカル」 雄二

「落ち着いた常識人」 秀吉

「死になさい」 明久

「温厚で慎重」 瑞希

「やさしい」 陸

「温厚で優しい」 ひばり

と、告げた。

「ふむ。なるほどな」

「常識人とは嬉しいのう」

「ねえ、僕だけ罵倒されてなかった？」

「温厚で慎重ですか」

「やさしい、ね」

「そつだといいな」

美波の言葉に一喜一憂する僕ら。

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だって。それぞれ  
「



さつきと同じように美波が順番に指を差して、

「公平で優しい人」 雄二

「色香の強い人」 秀吉

「惨たらしく死になさい」 僕

「意志の強い人」 瑞希

「惨たらしい」 陸

「自分の気持ちを前に出せない」 ひばり

と、告げた。

「秀吉は色っぽいのか」

「姫路は意志が強いそうじゃな」

「ねえ、僕の罵倒エスカレートしてなかった？」

「坂本君は優しいそうです」

「……これはただの占い。気にしない気にしない」

そんな感じで美波の心理テストを何問かやっているとき、

「……………何やってる？」

さつきまで寝ていたムツツリー二が目を覚ましていた。

「目が覚めたようじゃな」

「……………空腹で起きた」

「あれ？ もうそんな時間？」

携帯電話を取り出して現在時刻を確認する。今は1時15分。

いつもならとつくに昼食を済ませている時間だ。

「確かに良い頃合いじゃの。そろそろ昼にせんか？」

「そうだね。あまり遅くなると夕飯が入らないし」

「あ、お昼ですね。それなら」

と、姫路さんが傍らに置いてある鞆を手繰り寄せて中から何かを取り出そうとしていた。

嫌な予感が全身を駆け巡る。

「実は、お弁当を作ってきたんです。良かったら」

姫路さんが取り出したのは重箱と呼ばれる大きなお弁当箱だった。

どこに入っていたの？と聞きたくなるようなそれは大きなお弁当箱。

中に入ってる料理の数だけ死が待っている。

「姫路。悪いが俺も自分で作ってきたんだ」

「すまぬ、ワシも自分で用意してしまったの」

「……………調達済み」

「俺もな」

即座に自分の昼飯を見せる雄二・秀吉・ムツツリー二・陸の四人。  
自衛策は万全のようだ。

「そういうわけで、明久にでもご馳走してやってくれ」

雄二は勝ち誇った顔を僕に向けてきた。

大方、清貧生活を送る僕がお昼ご飯なんて用意できないとも思っているんだろう。

「ごめん。実は僕もひばりにお昼ご飯を作ってもらったんだ」

「うん。そうなの、瑞希ちゃん、ごめんね」

そう言って鞆からお弁当箱を取り出す僕とひばり。

「そうですか……………残念です」

姫路さんには申し訳ないけど、僕も自分の命が惜しいんだ。ふふっ。  
ひばりがいてくれて助かったよ。

「おっと手が滑った（パシッ）」

「……………足が滑った（グシャッ）」

雄二が僕の弁当をたたき落とし、それをムツツリー二が踏み潰した。

「ああっ！ 弁当が！ 僕の弁当が！！気を付けてよ。全く食べ物  
を粗末に」

「してはいけないからこの弁当の中身は責任を持って俺が処分させ  
てもらおう明久は姫路の弁当を分けて貰え」

「……………（ガンのくれ合い）」

「おっとゴメン雄二、僕も手が」

「滑らない様にきっちり掴んでおいてやるからな」

「……………（メンチの切り合い）」

スパコ　ン！！！！

「坂本君に土屋君。説明お願いできるかな」

突然雄二とムツツリー二の頭に何かはたかれた音が聞こえた。

そしてひばりを見て納得が行った。

なぜならいつの間にか手にハリセンを持っているひばりが雄二とム  
ツツリー二をはたいたからだ。

それはもう背筋が凍るくらいの笑顔でひばりは雄二達を見ていた。

「「そ、それは……」」

「それは？」

その様子を見ていたら。

「あの、明久君。良かったら……」

姫路さんがおずおずとお弁当を僕に差し出してくれた。すっっっく嬉しいけど、

中身が中身だけにリアクションが取りにくい。

「あゝ、えっと、その……」

「アキ。良かったらウチのお弁当も食べてみる？」

どうやったら上手に腹痛の演技が出来るか考えていると、美波がそんな助け船を出してくれた。

これで消え去った策が息を吹き返す！

「ありがとう！ 美波も分けてくれるんだね！ それならいっそのこと、皆でお弁当を広げて少しずつ摘もうよ！」

雄二の『なんてことを提案しやがるこの野郎！』という視線が痛快だ。

「ワシらはワシらで交換しようとするかの」

「……………（コクコク）」

「そうだな」

む。秀吉とムツツリーニと陸は逃げたか。まあいい。他にも生け贄はいるのだから。

「俺も遠慮しておこう。パンだから分けにくい」

「いいや！分け合えるに決まってる！残ってる分は僕たちに渡して雄二はその分取り分を多くすれば」

「そうか明久！俺の弁当も食ってみたいか！それなら好きなかへ食え！」

「もごあつ！？」

口の何かを無理矢理詰め込まれた。反論を防ごうと雄二がサンドイツチを突っ込んできたみたいだ。これじゃ何も言えない！

急いで飲み込もうと口を動かす。ふんっ！こんなBLTサンドなんか、挟んであるベーコンが香ばしい香りを放ってこんがり焼かれていて

「（「くん） うまい」

カリッと焼いたトーストの表面には食品の味を殺さないようにつつ

すら丁寧にバターが塗られていたし、レタスは瑞々しいものが使われていた。スライスされていたトマトは甘味があつて、薄焼きした卵やピクルスが入っているなど、雄二の独特なこだわりが感じられた。

「これ、雄二の手作り？」

「……悪いか？」

「いや、別に……」

なんと言うか、普通に美味くて驚いた。本当になんでも器用にこなすヤツだなあ。

「それじゃ、はい。ウチのもどうぞ」

今度は美波が僕にお弁当を進めてきてくれた。ふむふむ。ミニハンバーグにお手製のグラタン。綺麗にまかれた卵焼きが色合いを整えている。さっきまでご機嫌斜めだったのにこうしてお弁当を分けてくれるなんて、美波も優しいところがあるね。

「それじゃ、早速」

どれから貰おうかな？（まともな）女の子の手料理なんて迷ってしまう。うーん……よし、まずはハンバーグにしよう！

「あのね、その……。勇気を出して言うけどね……。そのハンバーグなんだけど、実は、アキに食べてもらおうと思つてね」  
「ん？ なに？（もぐもぐ）」

「二つに一つはハバネコを入れてみたの」

「ふん」

僕が食べてるこれは普通だ。おそらくハズレ？なのだろう。

「そして二つに一つはカラシを入れてみたの」

「君はバカかいつ!?!」

辛あつ! これ物凄く辛いあつ! もう口の中が大変な事になってるよ!?!

『陸よ。これはお主が作ったのか?』

『ああそつだ。結構自身作なんだが、どうだ?』

『……………美味しい』

一メートルにも満たない通路が天国と地獄の境目だ。

「明久。これはチャンスだぞ」

水を求めてのたうち回っていると、僕の肩に雄二の手が乗せられた。チャンスって……………そうか! 確かにこの状態なら味覚は完全に破壊されているから、もしかすると姫路さんの料理に耐えられるかもしれない! そうとわかれば、この無敵状態が終わらないうちに

「姫路さん、お弁当貰うねっ!」



「あ、はい。一杯食べてくださいね」

「いったただっきまーす！」

ひばり視点

アキくんが瑞希ちゃんの弁当を食べて悲鳴を上げて倒れた。  
なるほど。そういうことなのか。

「……瑞希ちゃん。弁当に何を入れたの？」

「はい？えつと酢酸とカリウムと胃腸薬を入れました」

「瑞希ちゃん。味見してる？」

「いえしてません。だって味見したら太ちゃいます」

「……そうなんだ」

「？ひばりどうしたの？」

「そうですね。どうしたんですか？」

「瑞希ちゃん。まずはその弁当を食べてください」

「？はい？」

「いいから」

あたしは有無を言わずに食べさせた。

「きゃあああー!」

バタ（姫路が倒れる音）

「み、瑞希？」

倒れた瑞希ちゃんを心配する美波ちゃんを見た後気まずそうに眼をそむける坂本君達にあたしは話しかけた。

「……さて、坂本君達。申しびらきはある？」

四人「ありません」

この後、アキくんを横にしたあと瑞希ちゃんが作った弁当を坂本君達に食べさせた。

第六十三話 強化合宿編3（後書き）

ご意見感想をお待ちしております。

第六十四話 強化合宿編 4 (前書き)

連続投稿

## 第六十四話 強化合宿編 4

遠くから声が聞こえる。

『だめじゃ。反応せん』

『……………心音もない』

『まだだっ！あと一回行くぞ！』

耳に馴染んだ声。とても焦っていた。ひどく怯えたようすだ。

『陸、俺に変われ！疲れていては正確にできない。交代だ！』

『くっ！わかった、雄二。後は任せる』

『待つんじゃ、明久がピクリと動いたぞ』

『……………心音図もでた』

ゆっくりと目を開ける。ぼやけた視界で見ると、大勢の人たちが僕の顔を覗き込んでいた。

顔の表情は見えないけど、何となく安心した雰囲気を感じる。

これなら僕も……………安心して眠れる。

『……………バイタルサイン停止』

『明久！起きろおっ！！』

その言葉のすぐ後に来た胸への衝撃。気がつくと僕は知らない部屋で寝かされていた。

「明久、起きたか！ 良かった……。電気ショックが効いたようだな……」

心底安心した表情でアイロンみたいな道具をしまう雄二。

……冗談だよな？ 僕の命がそんなイチかバチかの状態になっていたなんて。

部屋の中に置かれていたいやに高価そうな機械や、胸に張り付けられていたパッチが何なのか怖くて尋ねる事ができない。

「ところで、ここは合宿所？」

「ああ、そうだ。まったく贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り変えたらしいぞ」

作り変えたってことは、召喚獣を喚び出せるようにしていると見て間違いないだろう。

「この部屋、結構広いんだね。僕たちだけなの？」

「それがなのじゃが。最初はワシらだけで使うはずじゃったのじゃが。お主が倒れての支倉が鉄人に直訴してお主と支倉だけが同じ部屋でなつてのワシらは別室なのじゃ」

そうなんだ。……ってあれいくらなんでもそれはまずいんじゃない。

「明久。お前の疑問は当然だ。だが俺達にはそれを拒否できないんだ」

「そうじゃのう」

「……アレを食い続けるよりはマシ」

「ああ。それに異端審問会も動かせは俺達の命は風前の灯だ」

どうやらひばりを怒らせたのが響いてるみたいだ。

そして持つて欲しい僕の理性。

「けど以外だったよ。ムツツリー二なら盗撮の準備をしていると思っただのに」

「……なにを言ってる」

「ごめん。ちょっと驚いてさ」

「……そんな物は機械をとりに行く時に済ませた」

やっぱりエロの分銅はなによりも重いようだ。

「けど、本当に明久の意識が戻って良かった」

「……情報も無駄にならずに済んだ」

「情報？ 昨日俺と明久が頼んだ例のヤツか。随分早いな」

情報？ ああ。僕の写真と雄二の結婚報告の犯人のことか。

「……………昨日、犯人が使ったと思われる道具の痕跡を見つけた」

「おおつ。さすがはムッツリーニだね」

「……………手口や使用機器から明久と雄二の件は同一人物の犯行と断定できる」

「それで、その犯人は誰だったの？」

「……………（プルプル）」

尋ねると、ムッツリーニは申し訳なさそうに首を振った。

そりゃそうだよな。昨日の今日でそう簡単に犯人なんて見つかるわけがないよね。

「……………『犯人は女生徒でお尻に火傷の痕がある』ということしかわからなかった  
「君は一体何を調べたんだ」

普通の人は名前や顔を知っている相手でもお尻の火傷の有無なんて知らない。この男の調査方法が気になるどころだ。

「……………校内に網を張った」

そう告げながらムッツリーニが取り出したのは小さな機械。これは



？

「……………小型録音機。昨日学校中に盗聴器を仕掛けた。」

ピッ 《 ちらっしゃい》

「随分と音が悪いね」

「校内を全て網羅したのなら仕方ないだろう」

辛うじて女子の声だというのはわかるけど、人物の特定はできそうにない。

《雄二のプロポーズを、もう1つお願い》

《毎度。二度目だから安くするよ》

《……………値段はどうでもいいから、早く》

《流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃあ明日 と言いたいところだけど、明日からは強化合宿だから、引渡しは来週の月曜で》

《……………わかった。我慢する》

対する女子の声は、独特の話し方と台詞の内容から簡単にわかった。

「あ、危ねえ……………。強化合宿があつて助かった」

「タイムリミットが来週の月曜まで延びたね」

「……………それで、こっちが犯人特定のヒント」

《相変わらず凄い写真ですね。こんな写真を撮っているのがバシたら、酷い目に遭うんじゃないですか？》

《ここだけの話、前に一度母親にバレてね》

《大丈夫だったんですか？》

《文字通り尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだか》

《それはまた…………》

《おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対して酷いと思わないかい？》

それ以降は他愛のない商談がいくつか続いた。

「……………わかったのはこれだけ」

「なるほどね。それでお尻に火傷の痕か」

「今の会話を聞いても女子なのは間違いなさそうだな」

音が悪いから心配だったけど、自分で乙女と言ってるからには女子か秀吉のどちらかなのは間違いない。

「だけど、場所が問題だよな。仮にスカートを捲ったとしてもわか

らない可能性があるし、」

「赤外線カメラでも火傷の痕なんて映らないだろうしなあ……」

「おぬしら、さっきから何の話をしておるのじゃ？」

「明久のはともかく雄二のは話についていけないのだが」

そう言えば二人には詳しい事情は説明してなかったっけ。

「実はね　（以下略）」

簡単に僕らの事情を説明する。

「そうじゃったのか。それにしても尻に火傷とは……」

「陸、何か方法はないの？」

陸ならもしかしたらすぐさま事件解決かもしれない。

「それなんだが。無実を証明するには女子の協力が必要なんだが  
だが　」

「うん」

「向こうはこちらの話を聞いて信じてくれるかが問題なんだ」

確かに。美波はおろか最近は姫路さんも僕の話の信じてくれない  
からな。

「そうだ！ もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえばいいのか！」

「明久。なぜにワシが女子風呂に入ることが前提になっておるのじや？」

「それは無理だ、明久」

雄二が何かを僕に放ってよこした。これは強化合宿のしおり？

「3ページ目を開いてみる」

雄二がなぜ無理だと言っている理由がわからないまま、とりあえず言われたとおりにする。

合宿所での入浴について

|                  |       |        |
|------------------|-------|--------|
| ・ 男子ABCクラス…20:00 | 21:00 | 大浴場(男) |
| ・ 男子DEFクラス…21:00 | 22:00 | 大浴場(男) |
| ・ 女子ABCクラス…20:00 | 21:00 | 大浴場(女) |
| ・ 女子DEFクラス…21:00 | 22:00 | 大浴場(女) |
| ・ Fクラス木下秀吉…20:00 | 21:00 | 個室風呂?  |

「……くそっ！ これじゃ秀吉に見てきてもらうことができない！」

「そっついうことだ」

「どっつしてワシだけが個室風呂なのじゃ!？」

われながら妙案だと思ったのに。残念……。

そうやって五人でうんうんと唸っている時のことだった。

ドバン！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

すごい勢いで僕らの部屋の扉が開け放たれ、女子がぞろぞろと中に入ってきた。

「な、なにごとじゃ!?!」

「木下はこっちへ! そっちのバカ四人は抵抗をやめなさい!」

「窓から逃げようとしても無駄よ。包囲網はすでに敷いてあるわ!」

先頭に立つ美波と秀吉のお姉さんが、咄嗟に窓から脱出しようとした僕らの機先を制した。

「なぜお主らは咄嗟の行動で窓に向かえるのじゃ……?」

「くそっ! ダメだ。窓の下に多くの人が待ち構えている」

「そして陸はまだ諦めていないのじゃな」

陸だけじゃない。僕と雄二とムツツリーニだって隙あらば逃げ出そうとしている。

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ?」

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなたたちが犯人だっ

てことくらい、すぐにわかるというのに」

後ろから出てきて高圧的に言い放ったのはCクラス代表の小山さんだ。後ろで並んでいる大勢の女子も腕を組んでうんうんと頷いている。

「犯人？ 犯人ってなんのことさ？」

「コレのことよ」

小山さんが僕らの前に何かを突きつけてきた。なんだろう？

「……………CCDカメラと小型集音マイク」

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

ふむふむ。コレが女子風呂の脱衣所に

「え！？ それって盗撮じゃないか！ 一体誰がそんなことを」

「とぼけないで。あなたたい以外に誰がこんなことをするっていうの？」

ふざけるな！ムツツリー二なら見破られるような設置の仕方はしない！

「まさか、本当に明久君たちがこんなことをしていたなんて……」

「アキ……………。信じていたのに。どうしてこんなことを……………」

「美波。信じていたなら拷問器具は用意してこないよね」

彼女からは信頼のかけらも感じられない。

素早い動きで周りを取り囲まれ、僕とムツツリー二と陸は石畳の上に座らされた。

これは大ピンチだ。こんな時に頼りになるのは

「雄二頼むっ！ この場をなんとか収めて」

『……………浮気は許さない』

『翔子待て！ 落ち着ぎゃああああっ！』

ダメだ！向こうでは既に刑が執行されている！

「まずは一枚目ね」

Sっ気全開の美波に重石が僕の膝の上に乗せられる。ぬうっ！これは重い。

「……………ぐうう」

「俺は無実だ」

隣を見るとムツツリー二は一枚、陸はすでに二枚の重石を抱いている。これは体格の差だろうか。

「さて、二枚目ね」

美波はノリノリだ。これはご機嫌をとっておかないと命に関わる！

ここはお世辞を言っでごまかさないと！

「あのね美波、僕の家をまな板って使いやすなんだ」

「二枚追加ね」

「ふ！ごおおっ！」

なんで！？頑張っつて褒めたのになんで数が増えたの？

「明久君。それは美波ちゃんを家に誘ったって事ですか……？」

「あははっ。やだなあ優しい姫路さんはそんな重そうな物を僕の上に載せたりなんてふぬおおっ！？」

「質問にはきちんと答えてくださいね？」

最近、彼女の笑顔は綺麗なだけじゃなくなってきた気がする。

……なんて軽口を叩いている余裕はすでない！ 雄二が使えないいま、ここは陸に救助を求めるべきだろう。

膝の痛みをこらえて、辺りを見渡す。

「……………ぬう」

ムツッリーニは小山さんの手によって三枚目が追加されていた。



そのムツツリーニから少し離れたところに先ほどまではなかった灰色の柱が突然出現している。

「陸。きちんと反省しろです」

「美春！？もう膝の感覚がないんだが！」

僕の位置からは既に陸の膝しか見る事ができなかった。

第六十四話 強化合宿編4（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

第六十五話 強化合宿編5（前書き）

連続投稿です。

第六十五話 強化合宿編5

????「何やってるの!」

スパパパ                      ン!!

突然聞き覚えのある声と何かはたかれる音が聞こえた。

女子陣『『だ、誰よ?はたいたのは?』』』

「「ひ、ひばり(ちゃん)……」

ひばり視点

瑞希ちゃんと美波ちゃんがあたしに気づいたみたいだね。

これはどういふことか説明してもらおうかな。

「ねえこれはどういふこと?」

「ひ、ひばり、」、「これは……」

「これは?」

『あんだ達何やってるのよ。(はあ)あのね支倉さん。私達はあの4人が覗きの』

「……証拠はあるのですか？」

「あなた達以外に誰がやるっていつの?!」

「証拠も無いのに決め付けるないで!」

『な、何言ってるのよ! 盗撮はコイツらに決まってるじゃない。その2人だって同じ意見なのよ!』

とヒステリな女性。確か小山だったかな。彼女はアキ君の傍にいる美波ちゃんと瑞希ちゃんを指差しました。

「ひ、ひばり……悪いけど、他にそんなことをする人がいるの?」

「それに土屋君だっていますし……」

はあ。残念だな。二人とも。

『ね? だから、私達はこうやって』

「それで?」

『は?』

「もう一度だけ聞くけどアキくん達が犯人だという証拠はあるんですか?」

『だから証拠なんてないわよ! でもこいつらが犯人で決まってるわよ。ねえ、みんな』



僕はひばりを連れて僕達が止まる場所に移った。

明久視点終了

「さて、これからどうするんだ」

「どうするもなにも犯人を見つけたいんだがな」

「そうじゃのう」

「……支倉の行動を無にしたくない」

「そうだな」

俺はそのことを確認をしたあと俺は言うべき事を言うことにした。

「……それと、今回の犯人と関係あると思われるのがな支倉に脅迫状ともいえる手紙を送られていた」

「」「なんだと(じゃと)!!」「」「」

「なるほどのう。ワシらから支倉を離れるように仕向けたという」とじゃのう

「そうだ」

「だが犯人の思惑から外れた。つまり、第二手が来るんだな」

「ああ。だから明久に支倉の傍に居らせたんだ」

### 第三者視点

「???1」ち、まさかここでひばりちゃんがそっち側につくとは

「???2」どうするんだよ

「???3」案ずるな。俺達の計画に失敗はない

「???1」その通りだ。俺達は谷先輩とは違う

ひそかに犯人は動いていた。



第六十五話 強化合宿編5（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第六十六話 強化合宿編 6 (前書き)

連続投稿です。

第六十六話 強化合宿編 6

「はあ、いい湯だ」

「「「そうだな」」」

「……（コクコク）」

あの後僕達の部屋に西村先生が来てひばりだけ別の場所に入浴をすることになった。

それから数分して入浴の時間になったから、僕らはお風呂に入ることにした秀吉とひばりは個室風呂だったけど

「くさて、犯人はどうやって見つけようか……」

「くそうだね。 お尻に火傷がある女の子だけじゃ特定するの難しいもんね」

「くそれと支倉の脅迫も関わってるな」

「くどういこと？」

「くああ。じつはなラブレターが支倉に届けられたのは覚えているな。偶然だが支倉に脅迫まがいのラブレターがの内容を聞いてなそれ」

「くどうして、ひばりはそんなこと教えてくれなかったよ」

「<簡単だ。巻き込みたくなかったんだろ>」

「<……僕はどうすればいいんだろ？>」

「<答えは一つ。俺達の無実と支倉の脅迫犯を捕まえるそれだけが>」

「<そうなの？>」

「<ああ。この事は西村先生には話している。だから支倉の事は心配するな>」

「<……それにさっきのカメラとマイクは、脅迫犯の物と同じだった>」

雄二と陸と犯人をどうやって探すか悩んでいると、ムッツリーニが傍に来てそう呟く

「<なんだと？ それは本当か、ムッツリーニ>」

「<……間違いない>」

「<そうか。それは嬉しい事実だな>」

「<そうだな……犯人が捕まらない限り俺らの容疑が晴れたわけではないしな。そいつを捕まえれば万事解決だな>」

陸の言う通りだ。

全部同じ犯人の手によるものなんだから、その人物を捕まえれば全部解決するもんね。

「<でも、どうやって捕まえるんの？ 覗きはできないよ？>」

「<そうだな。 覗きをしたが最後、俺達は支倉の信頼を失うからな>」

「<そうだな>」

「<それだけはヤダよね>」

それに本当に覗きをしたらひばりが怒ってくれた意味がないしね……

「<支倉の脅迫犯はわからないが雄二のプロポーズの犯人は分かっている>」

「<な、なんだと！！>」

雄二は陸に詰め寄っていた。

「<犯人は美春。安心しろ。美春に拷問を受けたときに美春本人に聞いたところ自白した。その分だけは消すと約束をしてくれたぞ>」

「<そうか。お尻にやけどをした女性は清水だったか>」

「<あの家は独特だからな（遠い目）>」

「<雄二の犯人は分かったけど肝心のひばりの脅迫犯がわからないじゃ>」

「<そのために美春に盗聴を頼んだ。まあ代償として遊園地に行くことになったがな>」

「<……それに俺も動いている>」

「<そうだね。とりあえずは情報待ちと言っことだね>」

「<そうだ。だから支倉の傍を離れるなよ明久>」

「<う、うん>」

僕らは情報を手に入れることを期待しててゆっくりと今日の疲れをとることにした。

こうして僕らの強化合宿1日目が終了した。

第六十六話 強化合宿編 6 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

第六十七話 強化合宿編7 (二日目)

「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

強化合宿二日目。

今日の予定はAクラスとの合同合宿となっていた。学習内容は基本的に自由。

質問があれば周囲や教師に聞いてもOK。要するに自習みたいなものだ。

「明久は何をするつもりなんだ？」

ノートパソコンを持った陸が僕の隣に座る。

何かの書類を持っている。学園での課題かな。

「僕は睡眠学習でもしようかな」

「お前は教師の前でどうと口にするんだな」

腹の底まで響く声を聞いて振り向くと、腰の辺りで腕を組み仁王立ちで立っている鉄人の姿があった。

「おはようございます。西村先生」



「吉井、支倉はどうした？」

挨拶したけど返ってってきたのはひばりのことだった。

「ひばりなら……アレ？」

「……………」

鉄人「……一緒じゃないのか？」

陸「……あれほど離れるなど言ったのに」

「い、ごめん探してくる」

そうやって僕は陸と鉄人のところから離れた。

陸視点

「ふむ。騎士<sup>ナイト</sup>としての自覚が欲しいな」

「手厳しいな海谷」

「……………大切なものを失ってわかることもありません。ただそれを明久が理解してからでは遅いですよ」

「大切なものか」

「ええ」

「さて俺は行く。念のため支倉にはガードをつけておく」

と言って鉄人は去って行った。

好意に無自覚な明久。何故あんなに鈍感なのか不思議でしかない。

……まあいい。今は俺に出来る事をしよう。俺は持ってきた書類を見ながら考えていた。

それにしてもずいぶんと面白いアプローチだな。

確かに今の状態ではテンション維持が難しい。

ここ文月学園では試験召喚しシステムという最新技術で人気がいると言っても過言ではない。

しかし、問題点も同時に浮き出てきた。

例えば装備してるものだ。学生が選ぶのではなくコンピュータが決めている。

その上装備変更が出来るのが学年末試験の点数の時でしか変えられない。

これではやる気を出せと言っても無理がある。

そこで学園老は俺を呼び寄せた。システムの改良と生徒集めをするために

そこで、俺は明久や他の生徒と話して一つの結論が出た。いやそれ

は正確ではないな。

前々から出ていたことだった。

それはゲームみたいに出来たらやる気が出ると言っ多くの意見が在った。

つまりそれが結論であり今すべきことである。

そこで、俺は明久からゲームを借りいろいろ調べた結果。新システムが組み込めるようになった。

詳しい話は登場した時に話すが確かにこれなら学力を上げられる。

……と言ってもまだ設計図段階で試運転もしてないから何とも言えないのが現状だな。

陸視点終了

「！明久。戻ってきたか。……支倉はどうした？」

「うん。風邪引いて今横になってるんだ」

戻って来て僕は陸の隣に座りひばりの話をして数学の教科書を手に取る。

まずは、連立方程式から手をつけるとしよっかな？

「……はあ。支倉。お前は報われないな」

「??どうしたの?」

「どうしたもこうしたも病気で弱ってるんだからそばにいてやれよ」

「僕もそう思ったんだけどね。そうするとひばりが無理しそうだしそれに養護の先生が傍にいてくれるみたいだから」

「そうか。でも休み時間には傍にいてやれよ」

「うん。そうだね」

さて、改めて連立方程式から手をつけるとしよかな?

「あれ? アキは数学から始めるの?」

「美波」

「はあ。昨日好き勝手に拷問していてよくその相手に普通に話しかけるもんだな」

教科書を開いて公式を確かめっていると、美波がこちらに寄ってきた。でも陸がブツブツと言っていたけど何だったんだろう?」

「ウチも数学を勉強しようと思ったのよ。ねえ、一緒に勉強しない」

「うん。いいよ」

美波は漢字が読めないだけで、数学に関してはBクラス以上の実力

がある。

なら、ここは断る理由もない。分からない所があったら陸以外にも聞くこともできるしね。

「じゃあ、隣に失礼するわね。？あれアキひばりはどうしたの？」

左には陸が座っているので、美波は僕の右隣に座る。

「うん。じつは風邪ひいてね。寝込んでるんだ」

「そう。それは大変ね。あとで様子を見に行ってくるわ」

「うん。ありがとう」

「気にしないでいいわよ」

と美波はそう言つと学校で使う教科書ではなく、少し薄めの参考書を取り出した。それを使うようだ。

もしかしたら、教科書は漢字が多くて使いにくいのかもかもしれない。

「ん？これが気になるの？」

僕の視線に気づいたのか、美波は美波が持っている参考書を僕の目の前に出してきた。

「ちょっと見せてくれない？」

「いいわよ」

パラパラとページを捲る。すると、綺麗な字で全ての漢字にルビが振られていた。

でもこれは、美波の字というより……

「これ、姫路さんの字だよね？」

「そうよ。瑞希がわざわざ書いてくれたの」

これを全部書くとなると、一週間かそこらでは無理だろう。

なんて僕が感心していると、

「呼びましたか？」

そうやって姫路さんが近づいてきた。勉強をする時に邪魔になるのか、髪型をポニーテールにしていた。

なんていうか、その、凄く良い……！

「姫路さん。その髪型似合ってるね……！」

「えっ！？ そ、そうですか。ありがとうございます」

「うん。そのうまく纏め腕があらぬ方向にい……？」

「うちも同じ髪型なんだけど」

『あれ？ひばりちゃんはどうしたんですか？』

『風邪で寝込んでいるようだ』

『そうですか。あとで様子を見に行きますね』

『ああ。その方が喜ぶだろうな』

僕が美波に関節を取られているといつの間にか陸が一つずれて姫路さんが僕の隣に座った。

これが両手に花という状況だろうか。だとしたら確実にひとつは毒を含んでいるけれど。

「ところだね」

美波に解放された腕をさすりながら僕は尋ねる。

「なんで自習なの？ 授業はやらないのかな？」

「そう言われればそうね」

わざわざこんなところまで来て自主うなんて勿体無いような気がする。

僕としては望ましい事でもあるけど。

「授業？ そんなもんやるわけないだろ」

「そういじことだ」

そんな僕の言葉を聞きつけて、これ幸いと雄二が霧島さんと一緒にこっちにやってきた。

膝の上に座ろうとする霧島さんとそれを押しのけようとする雄二の攻防は見ていて面白かったから少し残念だ。

「やらない？ どうして？」

「明久。お前はAクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるのか？」

「むっ。失礼な。雄二にはそうかもしれないけど、僕にとってはFクラスもAクラスも大差はないよ」

どちらも理解できないから。

「……威張って言うことでもないぞ明久」

「この合宿の趣旨は、モチベーションの向上、だ。分かりやすく言うと、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういったメンタル面の強化が目的だから、授業はさして問題ではないということだ」

雄二が僕に説明してくれる。ふむ、なるほど、

「だから雄二は霧島さんに抱きつかれながら話してるんだね」

それならメンタル面がかなり鍛えられるだろう。

「違うんだ明久」



「なにが違っつて言うのさ」

「人生に多少の妥協は必要だ」

要するに根負けした、と。

両脇からくる変な圧力から逃げようかな、などと考えていると、

「あ、代表ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな?」

そこに聞き慣れない声が聞こえてきた。

いそいそと僕の正面の席に勉強道具を広げている彼女は、確か……

「工藤さん、だっけ?」

「そうだよ。キミは吉井君だったよね? 久しぶり」

ニツと歯を見せて笑う工藤さん。制服姿で会うのは本当にひさしぶりだから、なんとなく新鮮に感じる。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

「なんかいま変な台詞が混じらなかった!？」

「変とは失礼だね。これでもボクのれっきとした特技の一つだよ」

「い、いや。そういう意味じゃないんだ。ただ、その……」

「あ、さては疑ってるね？ なんなら、ここで披露して見せよっか？」

工藤さんが短いスカートの裾を摘んでいる。そして、後ろではなぜか雄二が目を押さえてのたうち回っていた。

霧島さんが指をチョキにして「……浮気はダメ」と呟いているのは関係ないと思いたい。

「アキ、見ちゃダメよ」

「明久君、見たらどうなるか分かってますよね」

隣り二人から目隠しをされる。

なぜだろう、美波より姫路さんのほうが力が強い気がしてきた。

「……………明久に陸、工藤愛子に騙されないように」

「どうしたムツツリーニ？ お前がこんな美味そうなイベントに乗らないなんて」

「あれ？ ムツツリーニ、随分と冷静だね。僕ですらこんなにドキドキしているんだから、てつきり鼻血の海に沈んでいると思ったのに」

きちんと喋れてるからまだ理性は保てているようだけど、まさかムツツリーニがこんなに長く耐えられるなんて。

「……………ヤツは、スパッツを穿いている……………！」

「そ、そんな！？ 工藤さん、僕を騙したね！？」

畜生がっかりだ！僕の純粋な気持ちを返してほしい！

それと「俺は目を突かれ損じゃないか……………」と落胆している雄二に謝って欲しい！

目を抑える力が弱くなったので、僕は二人の手をどかした。

「あはは。バレちゃった。さすがはムツツリーニ君だね。まあ、特技ってわけじゃないけど、最近凝っているのはコレかな？」

「それは、小型録音機だな」

陸が言うには、工藤さんが取り出した小さな機械は録音機らしい。

「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えば」

ピッ 《工藤さん》 《僕》 《こんなにドキドキしてるんだ》 《やらない？》

「わあああっ！ 僕はこんなこと言ってないよ！？ 変なもの再生しないでよ…！」

「じゅめんじゅめん、ちょっと遊んじやったよ」

「さっきまでの会話をつなぎ合わせたのか。とうるか消してやって

くれ、今すぐ」

「ピッ！ 《工藤》 《なんて》 《美味そう》 《なんだ》 《今すぐ》 《やってくれ》

「っておいしいっ！！」

「ね？ 面白いでしょ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべる工藤さん。だけどその笑みはなぜか僕から外れていた気がした。

「……ええ。最っつ高に面白いわ」

「……本当に、面白いセリフですね」

僕と陸が振り向くと、そこには氷の微笑をたたえた美波と瑞希がいた。

「ちよつと！ 今二人とも近くで聞いてたでしょ！ なんで僕をそんなに睨んでるの！？」

「そ、そうだ落ち着こうな2人とぐあっ！」

僕を助けるために2人を宥めようとした陸の腕が、急に背中の方にひねりあげられた。

「陸、さっきの一体どういう事ですか？ まさか昨日の事で懲りてないのですか？」

僕は陸の方に目を向けると、そこには同じく氷の微笑をたたえた清水さんが陸の腕を捻りあげている。

僕の方は、美波にバックドロップの体勢につかまっている状態。

「美春、もうちょっと頭を前に出させて」

「え？ ちょっと、ちょっと待って！ 美波、僕をバックドロップの体勢に抱えてどうする気!？」

「え!？ おっおい待て！ まさか……」

そのまま関節技で固められた陸の後頭部に、バックドロップで加速がついた僕の脳天が衝突。

僕達はそのまま場に崩れ落ちた。

「全く、昨日あれだけおしおきしたっていうのに、まだ懲りないの!？」

「明久君、エッチなのはいけないと思います!」

「陸も、反省してください!」

頭となると流石にダメージが深く、僕達はつめき声をあげる事で手いっぱいだった。

「! 明久に陸よ、大丈夫かの？」

いつの間にか僕達の傍に着ていた秀吉が声を掛けてくれた。

「……ぼっ僕は何とか……それより陸、大丈夫？」

「あー、大丈夫？」

先程から黙っている陸をみて、工藤さんも流石にやり過ぎたかなと反省してるみたい。

陸は後頭部を抑え、よろよると起き上る。

「ってー……大丈夫だと思う。それより自習に戻るぞ。美春も先生たちに何か言われる前にもとっとと戻れ」

「じゃあ明久君、私達と一緒に別の場所で勉強しましょう」

「そうよ。海谷は美春を送らないといけないし、海谷の仕事の邪魔するわけにはいかないからだからウチと一緒に瑞希に……」

「ごめん。これからひばりの様子を見に行こうと思ってるから」

と僕は言ってるのに強制的に僕を連れて行くこととする美波の手を、陸が阻んだ。

「何するのよ!？」

「力尽くでやろうとするな。後大声出すなよ」

2人のやり取りは、教室中の注目を浴びていた。

「君達、少し静かにしてくれないか？」

「あ、ごめん」

僕は久保くんをはじめ、この部屋にいる全員に頭を下げる。

「吉井君か。とにかく気を付けてくれ。まったく、姫路さんとい  
島田さんといい、Fクラスは危険人物が多くて困る」

「何で姫路さんと美波が真っ先に挙げられるの？」

「……恋のライバルだからだ」

そこで、痛みが多少治まった陸が、一言。

？この中に久保君が好きな人がいるってことかな。

「悪かったな。騒がせて」

「いや気を付けてくれればいいんだよ」

「ああわかった。さあ明久、行くのなら行って来い」

「あっ、うん」

僕は陸に言われて出て行った。

陸視点

俺は席に着き書類の把握に戻る。

ソレを見て、久保は一言。

「ああ。それぞれ仲がいい僕それに混ざりたい」

と言い残し、自分の席へと戻って行った。

寒気が走った。俺も風邪が引き始めたか。

「姫路達もとつとと席に戻れよ、また久保が来るぞ？」

「…………ぐっ」

「…………今回は引きましよう美波ちゃん」

「…………そうね」

と行って二人そろって別の席に着いた。

「ふう。さて美春。お前を送っていくかな」

「…………わかりました。送らせてあげます」

「では、行きますかプリンセス」

「よ、よろしくです／＼」

廊下

「…………何か言うことはありますか？」



「……あれは工藤が合成で作った奴だ。俺自身は言っていない」

「はあ。やれやれ。美春の早とちりですか」

「ああ。まあ迷惑を掛けたからな。今度おいしいケーキ店を連れてやるよ」

「無論陸のおごりですね」

「ああ。当然だ」

そんな話をしながら美春を送っていた。

第六十七話 強化合宿編 7 (二日目) (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

第六十八話 強化合宿編⑧ (二日目)

個室

「あ、あのひばりは？」

保険医「大丈夫よ。今は眠ってるだけよ。それにしても何回も来てそんなに心配？」

「はい。……昔いろんなことが在りましたから」

「そう」

そう、どうして忘れていたんだろう？あの事をいや忘れていたんじゃない。

ひばりが転校したからこそもう安心だと思ったんだ。

でも変わってなんかなかった。相変わらず自分の事はほっといて他の人の為に動いて疲れて倒れる。

僕は見て見ぬふりをしてたんだ。

ホント僕はひばりにたいして何もしてないね。

?????視点

?????1「倒れたと言う話は本当のようだな」

????2 「保険医にも確認したから間違いない」

????3 「じゃあ、今日決行するの？」

????1 「ああバカが都合のいい事に覗きをするつもりだ」

????2 「邪魔な吉井<sup>バカ</sup>はどうすんだ？」

????3 「奴は覗き犯としてマークされているうかつに動けないさ」

????123 「「決行決定」」

食堂

陸「さて困った」

そう俺はいや俺達は困っていた。

美春「美春の方でも聞いた話では陸達が今日覗きを実行すると言っ噂が流れてます」

雄二「確かに厄介だな」

そう噂が本当かどうかの真偽ではない。支倉の脅迫犯を捕まえるための行動が制限されるのが困るのだ。

ムツツリーニ「……身動きが取れなくなる」

秀吉「そうじゃのう」

雄二「支倉の脅迫犯が男であることは間違いないがな」

その上手掛かりがないに等しい。

美春「そのことについては鉄人には話してますの？」

陸「ああ。もしものことも考えてな」

雄二「どっちにしる。現状では俺達は犯人の手掛かりもなく女子に睨まれ行動が制限」

「……後手に回っている」

「それにしても用意周到じゃのう」

陸「ああ。俺達を覗きの犯人して動けなくして自分達は暗躍出来るからな」

手掛かりもなく無実を証明する手もない。

八方ふさがりだ。

「……（考え中）」

陸「どうした美春何か思いついたのか？」

「……確認したいことが在ります」

「確認？」

「ええ」

「最初に覗き疑惑が発生したのは美春がブタ野郎とお姉さまを離す為の行動だった。それは間違いないです」

と美春が自白した。

そう、明久を脅迫していたのは間違いなく美春だ。

「でも、ここで美春には知らないことが起きました。あとで美春のカメラを回収しようとしたら壊されていました」

そう。支倉の脅迫犯が美春のカメラの見つけ壊した。だが何故壊す必要が在ったのか？。

それがわからない。

分かってる事は支倉の脅迫犯はこの覗き騒動を利用したことは間違いない。

雄二「……つまり清水の狙いと脅迫犯の狙いが偶然にも重なったと言うことか」

陸「もしくは脅迫犯も同じことを起こすつもりだったともいえる」

「……用意周到」

「じゃが支倉はワシらの味方についたのじゃ」

雄二「ああ。これは脅迫犯には予想外だったんだろうな」

陸「さらに、美春がこっちについたことで有利になった」

脅迫犯は焦ったはずだ。

すべての罪を美春に押し付けるはずがいなくなったのだから。

美春「つまり、噂を流すことで美春達に牽制と制限をかけられた」

陸「ああ。そうだ。それに噂は女子だけでなく俺達の方でも流れている」

雄二「これらを統合すると犯人は最低でも二人はいると言うことだな」

そうだ。でなければカメラを仕掛けたりする時にだれか来ないかを見張る人間が居ないと見つかるリスクもある。

それに噂を流すとき一人で流しては時間がかかる。複数の人間が居れば噂は早く流れる。

今回は早く噂が流れた。一回の休憩時間で全クラスが聞いている。

この事から複数犯であることは間違いない。

結局今出来るのは俺達は部屋から出ないと言う事ともし覗きをする連中がいたら美春達が捕まえるしかないと結論だった。

美春「身から出たさびとはいえやる気が起きません」

陸「そう言っな。犯人を見つけ次第薬の実験に使っさ（ニヤリ）」

美春「まあ。それくらいならしてあげます。こ、今回だけです」

陸「ああ。ありがとう美春」

美春「で、では／＼／＼／」

と言って美春は出て行った。



第六十八話 強化合宿編⑧ (二日目) (後書き)

ご意見感想お待ちしております。

第六十九話 強化合宿編 9 (二日目) (前書き)

黒幕の名前が明らかになります。

第六十九話 強化合宿編9 (二日目)

個室

明久視点

保険医「ねえ。吉井君。私ね他にも行くところがあるの。それで悪いけど支倉さんにこのおかゆを食べさせてくれる」

昼食を食べてそれから鬼のような午後からの自習をが終わり。

そして、夕食のとき僕は食事をしてからひばりの様子を見にいこうとしたとき保険医の先生が僕に頼みごとをしてきた。

「ふえええ！いや、無理だよ／＼」

保険医「安心しなさい。一時間後には帰ってくるからそれじゃよろしく」

「ええ！それって安心できる事なの!？」

保険医の先生は僕の返事を聞かず出て行った。

どうしよう？僕がひばりにご飯を食べさせる？寝ぼけてる幼馴染の少女に？

それってどんなエロゲーだよ!!

「ひ、ひばり。ご飯食べれる?」

ひばり「お母、さん……」

「！（ズキ！）」

……お母さんか。ひばりのお母さんはひばりが10歳の時に病気で亡くなった。

病気で亡くなるとき僕はひばりを守るってひばりのお母さんに約束した。それなのに僕は……。

情けないや。

約束をしたことですら忘れていたんだから。ひばりがお母さんと言うまで忘れていたんだから。

そして今、躊躇している。守るって約束したのに倒れるまで気づかなかった僕。

そんな僕にひばりの傍にいていいんだろうか？ホント中途半端で情けないよ。

そんな僕にひばりの傍にいる権利はあるのだろうか？……今の僕にはないよね。

でもそれでも今だけはやらなくちゃ！

「ひばり、あ〜ん」

「あ〜ん」

僕は心がズキズキ痛みながらも食べさせた。

罪悪感と忘れていた約束を胸に刻みながらひばりにご飯を食べさせていた。

「終わった〜」

やっと全部食べさせた……。

ごめんね。ひばり今の僕に出来ることはこれくらいなんだ。

本当にごめんね。

明久視点終了

夕食が終わり、俺達は部屋に戻った。

陸「さて、雄二これからどうするんだ？」

雄二「そうだな。今日覗きに参加する連中は何人いるかわかるかムツツリーニ？」

ムツツリーニ「……集めた情報によるとAクラスからの参加者はいない。続いてBクラスだがすまない情報が集まらなかった。Cクラスは一名。Dクラスも一名。Eクラスから二名参加。俺達Fクラスは参加者なし」

秀吉「むう。ムツツリーニの情報網にもひっからないとはのう。Bクラスを警戒すべきじゃのう」

陸「……ああ。だが……」

雄二「フェイントの可能性もあると言いたいんだろ陸」

秀吉「フェイントじゃと?」

ムツツリーニ「……あからさまにあやしすぎると言つこと」

陸「そうだ。まるで疑ってくれと言ってるようなもんだ。支倉への脅迫文を書いて今まで俺達に尻尾すらつかめないのにそんなあからさまなことをするとは思えないんだ」

秀吉「なるほどのう。裏をかいたと思つたら実は無実でしたとなつては目も開けられんのう」

雄二「……それでその情報は伝えたのかムツツリーニ?」

ムツツリーニ「……無論伝えている」

陸「さてそろそろ明久を呼びに行くかね」

雄二「お前も物好きだな」

陸「俺もそう思うよ」

と俺はそう言つて明久を迎えに行った。

個室前廊下

明久視点

はあ。あれから保険医が帰ってきたため僕は後をまかせて部屋に戻っているところだ。

????「随分としけってんな。支倉に何かして怒られたのか明久？」

この声は……

「……陸」

陸「??どうしたんだ。随分と落ち込んでいるようだが何かあったのか？」

「う、ううん。何でもないよ」

これは僕の問題なんだ。陸に話すわけにはいかないよ。

陸「……ふむ。……そうか。ならいいだがな。……これは受け売りなんだがな。つらい時に信頼できる誰かに話すと道が開けると美春母が言っていた。もし話す気になったらいい力になってやる」

そう言っつて陸は部屋に戻って行った。

ありがとう陸。でもこれは……。僕はどうしたらいいんだろう。

明久視点終了

明久の奴何かを隠してる。でも……それは自分から言っつまで待つのが優しさ。

無理やり聞き出すのは最低のやり方でどちらも最後は悲しい気持ちになる。

それが人としての道か。難しいな。俺にしてやれることはないのか。フツ俺も丸くなったな。

初めはただの実験のつもりだったのに今じゃ本当に助けたいと思ってる。なら足掻くだけだ！。

### 第三者視点

今は入浴の時間。

鉄人『お前らは覗きとはいい度胸だな！！』

CDE男子『『『畜生！！』』』

ふん。バカどもありがとよ。おかげで鉄人に見つからずに済むぜ。

????1「<よし、鉄人はいったな>」

????2「<ああ、これで来ないな>」

????3「<そうだな、これで……ぐふふふ>」

さて、ここでじっとしていても仕方ない。さっそく行動開始だ。

????1「<よし、行くぞ！>」



「???2、3」「<おお!>」「

第三者視点終了

保険医視点

保険医「…………ん?」

元気ね。若いつていいわね。…………て私は若いわよ!

「?ホント誰に言ってるのかしら?」

私は部屋にかぎを掛けてしまっしてからちよつとした事を思いついたの。

「さて、これを西村先生達に教えに行こうと」

保険医視点終了

第三者視点

ひばりが寝ている部屋の前に来た三人

「???1」「<ここだ…………準備は大丈夫か?浅井、須堂>」

浅井「<ああ、神埼>」

須堂「<ぐふふ、楽しい楽しい宴の始まりだ>」

…………いまさらながら俺(神埼)は須堂を仲間に入れたことに後悔し

ている。

ポン（浅井が俺（神崎）の肩を叩いた）

浅井も俺と同じ意見のようだ。だがいまさら外すわけにはいかない。

何故なら須堂の作戦でうまく行ってるのだから

……まあいい。これ以上こいつの声を聞きたくないしさっさと実行しよう。

神崎「（トントン）？何だ、須堂？」

須堂「ぐふふ……ん？俺じゃないぞ？」

神崎「え？」

俺は振り向くと、布施先生がそこに立っていた。

布施先生「君達、ここで何をしてるのですか？」

神崎、浅井、須堂「……逃げろ！！」「」

大島先生「まあ、待て！」

神崎、浅井、須堂「……！！」「」

俺達は逃げようとしたが、いつの間にか大島先生がそこに立っていた。

大島先生「さて、お前達何をしてるんだ？」

布施先生「説明してもらえませんか」

ちっ「逃げ場がないか。ならば！！」

神埼「く……っ！ こうなったら戦うぞ！」

浅井、須堂「おお」「」

こうして戦いの火ぶたは切って落とされた。

第六十九話 強化合宿編9 (二日目) (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

第七十話 強化合宿編10 (二日目～三日目) (前書き)

連続投稿

第七十話 強化合宿編10 (二日目〜三日目)

個室前廊下

第三者視点

俺は召喚獣を召喚し大島先生と対峙したが攻撃をかわされ逆に俺は攻撃を受けまくった。

神埼「く……っ！」

大島先生「無駄だ。いくら召喚獣を使っても俺には勝てん」

確かにそうなのだ。俺はFクラスの土屋やAクラスの工藤のように保健体育は得意でない。

このままでは負けるのは確実。だが…布施先生くらいならあの二人なら倒せるはず。だから俺が今すべきことは時間稼ぎだ。

????「では補習室に向かうか神埼」

神埼「えっ？」

俺は声が聞こえた方に体を向けると鉄人が浅井と須堂を抱えた状態で立っていた。

マジツすか？

大島先生「さてどうする？」

鉄人に大島先生のタッグに勝てるわけがない。……今回は失敗か。

神埼「降参します」

俺は戦闘態勢を解き両手を腕に挙げた。

それから俺はいや俺達は臨時指導室に連れて行かれた。

鉄人「とことん指導するぞ！」

神埼、浅井、須堂「くそーーーーーっ（絶対あきらめないからな）！！」「」

俺達は再戦を胸に秘め鉄人と熱い夜を過ごした。

### 三日目

洗面台

朝起きて顔を洗っていたとき明久に保険医が何かを話していた。

何だろう？

ムツツリーニ「……陸」

陸「ムツツリーニ。悪いが何の話が分かるか？」

ムツツリーニ「……（フルフル）」

「そうか」

ムツツリーニ「……すまない」

「気にするな」

雄二「そうだぞ。あとであのバカに聞けば済む事だからな」

秀吉「あまり聞くべきではないのだ。でも。昨日から明久の様子がおかしいのじゃ。あまり隠し事をしない明久が頑なに話したがらんのじゃ気にならんほうがおかしいのじゃ」

陸「余計なお世話だと思いがな」

雄二「ふん。あいつだけ幸せになるのが嫌なだけだ」

秀吉「お主というやつは……」

ムツツリーニ「……人の幸せは異端審問会は許さない」

陸「そこまで無理やり聞くのなら覚悟があるんだな」

秀吉「覚悟じゃと?」

陸「そうだ」

雄二「何でそんなものが要なんだ?あのバカに俺達が後悔するよ  
うな悩みなんてあるわけがない」

ムツツリーニ「……(コクコク)」



陸「……俺にはそうには見えないが」

雄二「ともかく自習時間に聞きただけだ。あいつに隠し事は似合  
わん」

ムツツリーニ「……了解」

秀吉「むう。すまぬがワシも気になるのじゃ。たとえ明久が傷つい  
たとしてもすぐに忘れるのじゃ」

本当にそうなんだろうか。確かに今までの明久ならそうかもしれな  
い。

だが昨日の明久は立ち直れないのかもしれない。

俺はどうしたらいい。

神埼視点

食堂

須堂「あと少しだったんだがなあ」

神埼、浅井「そうだな」

無事俺たちは鉄人の指導から何とか帰還して朝食中である。

向かい合った須堂の言葉に俺達は頷く。

そう、昨日は邪魔が入って支倉に会うことができなかった。

須堂「そこで昨日の反省だ。浅井、神崎、昨日の敗因はなんだと思っ？」

浅井「敗因？ うん、先生たちが俺達より強かったただけだろ？」

須堂「そうだな。だがそれだけか？」

神崎「そういえば何故先生たちがあそこにいたんだ？」

須堂「そうだ。敵はここに来ると予想していたんだ。まあ当然だな。吉井ならともかく支倉の事なら動くことは間違いない」

浅井「！ちっその事を忘れていたぜ」

神崎「だが原因が分かったんなら対処法はあるんだろ？」

須堂「当然<sup>ニヤリ</sup>」

そう。昨日は失敗して当然だったんだ。

覗き犯の数が少なかった事が原因でそんなに先生方が必要なかった。

だから空いてる先生方が護衛をしていた。

須堂「そこで、こちららも戦力を増強しようと思っ」

浅井「どういうことだ？」

須堂「ああ。今度はな  
」

今度こそ成功してやる！

第七十話 強化合宿編10 (二日目～三日目) (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

第七十一話 強化合宿編 1 1 (三日目) (前書き)

更新遅くなりましたが投稿します。

第七十一話 強化合宿編 1 1 (三日目)

神崎視点

実習室

浅井「Cクラスは全員参加だ」

神崎「D、Eクラスも参加だ」

須堂「あとはA、B、Fクラスだな」

俺達は須堂の提案の元、自分のクラスと他のクラスの男子達を抱き込んでいる。

今までの勧誘でCクラス、Dクラス、Eクラスは参加することになっていた。

浅井「しかし、Fクラスは良いとして、AクラスとBクラスは難しくくないか？」

須堂「AクラスとFクラスの勧誘はまだ考えてないから明日に回すことにして……だが、Bクラスは手はある！」

神崎「そうなのか？」

須堂「ああ」

浅井「……なるほど。確かに代表の言葉は信じないだろうが第三者

の言葉を通してなら可能性が高いな（ニヤリ）」

神崎「なるほど。そういうことか（ニヤリ）」

バカ三人「」「」（ニヤニヤ）」「」

須堂「……さて行ってくるぜ」

そついつて須堂は笑顔を浮かべるとBクラスが勉強しているところへと向かった。

後は先生に気づかれないようにごまかしておくかな。

俺と浅井は先生に須堂に注意が行かないように質問をした。

神崎視点終了

自習室

雄二達は明久に朝の事を聞き出そうとしていた。

しかし教える気はないらしく無視をしていた。いや聞こえてないよ  
うだ。

その様子が気になったのか姫路たちも参加していた。

「ちょっとどうしたのよアキ？」

「そうですね。明久くん。さっきから上の空ですよ」

「……………何？」

「何じゃないだろう？一体何が朝起きたんだ？」

「……………（コクコク）」

「……………」

「明久よ。何隠しておるのじゃ？」

「……………」

「アキ！何隠してるのよ！！！！」

「そうです。明久君何隠してるんですか！」

「……………」

陸「……………無理だな。反応してない。今聞いても無駄だ。これ以上は先生に注意されるぞ」

俺がそう言うと雄二は鉄人に気づかれない程度に後ろを振り向いた。

なぜなら監督の鉄人が、じろりと俺や雄二達を見据えていた。

ちなみに俺はシステムの書類整理。

雄二達は数学の勉強をしてるふりをしながら話している為、特におとがめはない。



それにしても鉄人に気づかれないように話を姫路たちも使えるとは驚いた。

「……ちなみに腹話術の様に最小限の口の動きだけで会話はFクラスでは必須スキルだ」

「誰に向かって言っておるのじゃムツツリーニよ？」

「……企業秘密」

「それにしても今回は俺達は参加してないのになんで睨まれるんだ」

「……理不尽極まりない」

翔子「……先生達にしてみれば、雄二達が参加しない事自体が怪しい。だから見張っている。それに雄二達は観察処分者とA級戦犯無理もない」

それにしても気配を隠して近づくのは相変わらずだな。

そのせいで誰も気づかないから驚くんだよな。

？俺？俺は気づいてるよ。俺の知識が欲しいからって誘拐をしに来る連中がいるからな。

そのせいでどんなに気配を隠しても俺には分かるがな。

「しよ、翔子。いきなり話しかけてくるな」

「そ、そうですよ。心臓に悪いですよ」

「ウチ。びつくりしたんだから」

翔子「……それはごめんなさい。でも吉井はきつと何か悩んでる。でも無理やり聞き出すのはいけない」

「だがな。それじゃ面白ーじゃない支倉の脅迫犯の手がかりかもしれないんだぞ」

「「え!?!」」

翔子「……雄二それはどういうこと?」

「そうよ。そんな話聞いてないわよ」

「そうです。初耳です」

「今言ったからな」

突然の展開に霧島も姫路も島田も困惑してるな。無理もない。

それにしても喧嘩していても友達の話は大切のようだな。

安心した。

翔子「……それでも無理やり聞き出すのは駄目。自分の口から言うべき」

陸「俺も霧島の言うとおりでな。それに脅迫犯の情報なら隠す必要がないからな」

「そ、それはそうだけど」

「でも、それは寂しいです。信じてもらってないみたいで」

「そうじゃのう。そんなにわしらは信用できんのかいのう」

「まったくだ」

「……同感」

陸「少なくとも雄二は信用はできないわな」

「……それについては同感だ。だが……今はなんの時間だ……！」

声が聞こえた方に向くと鉄人が居た。

西村先生「さっさと自習に戻らんか……！」

その言葉で明久への質問は打ち切りとなった。

昼食を食べてからまた自習が再開された。

「……君達、ちょっと良いかな？」

「ん？ どうしたんだ、久保？」

「何かあったのか？」

俺が書類の整理が終わった時久保が声をかけてきた。

久保「……ちよつと霧島さん達には聞かせられない事なんだ。少し席をはずしてもらえないだろうか？」

「……分かった」

「ん？私たちの前では言えないの？」

久保「すまないけどこれは言うわけにはいかないんだ」

「え？ え？何ですか？」

「……姫路、行くよ」

「あ、はい」

久保の言葉で霧島達が席を外す。

「……それで話とは何だ？」

「ああ、ちよつとね。 実は 」

雄二が話を切り出すと久保が話をし始めた。

久保の言う事にはCクラスの神崎と浅井が覗きの勧誘に来たという事だ。

このことからおそらく支倉の脅迫犯の手がかりであるに違いない。

それにこれは、美春からの情報だが神崎達が支倉が眠っている医務

室に向かっていたそうだな。

このことから犯人は覗きの勧誘してきたのは隠れ蓑。本命は支倉に何かをしでかす気だな。

「それで、何故かAクラスの男子達が乗り気でね」

「そうか……それで何故俺達に？」

「いや、Fクラスはどうするのか気になってね」

「そうか……」

「「おい、お前ら」」

久保の言葉を聞いて雄二は何かを考えている時、横から確か横田と福村が近づいてきた。

「ん？ 何だ、横田と福村？」

横田「ああ。今、Cクラスの神崎と浅井が覗きの勧誘に来てな」

どうやら、こっちにも二人が来たらしいな。

「それでどうしたんだ？」

福村「いや、これは坂本達の意見を聞いて置こうと思ってな。俺らの判断で保留にして後で返事をすると言っておいた」

陸「そうか。それで雄二どうする？」

「ヤリ（意地の悪い顔）」

「ふむ。勿論、却下だ……と言いたいところだが、ここは敢えて乗っってみよう」

「どうやら雄二は俺の意図に気づいたらしく、笑顔でそう言う」

横田「だが、坂本に海谷。そんなのが俺達Fクラスを信じてくれた支倉にバレたら……」

「ああ、ハリセンにはたかれ説教を受け信用を失うだろうな」

陸「安心しろ。俺を信じる。信用を失わずむ方法がある。だからそれを実行するために参加するのは四日目だと伝えとけ」

「そういうことだ。俺達には最強のガーディアンが付いているんだ。だからこそ、俺達は参加するふりをして覗きを阻止するんだ」

俺らは支倉を裏切る行為はしないと決めているから覗きをするなんてもつてのほかだ。

だからこそ、それに敢えて参加するのだ。中から阻止をするために。

「では、僕も参加させていたどうか」

「ああ、久保がいれば安心だ」

陸「すまない。助かる。だから作戦を伝える必要があるからケータイの番号を教えてください」

「え！？あ／＼／うん。分ったよ。これが僕の番号だよ」

久保は俺のケータイに赤外線通信を行った。……ただあの寒気は一体何だったんだらうか？

「横田、福村、神崎達に俺達は参加すると伝えといてくれ」

横田&福村「了解だ」

雄二の命令で動き出す福村と横田。

「ところで雄二に陸よ。犯人はわかったようじゃがそれはあと聞かしてもらったのじゃ。それよりも何故、神崎達は覗きの勧誘をしているのじゃ？」

「ああ、それはな。あいつらの保身のためだ」

「身を守る？ 誰からじゃ？」

「簡単な話。覗きは立派な犯罪なのは分かるな？」

「それくらいはとうぜんじゃ」

そう覗きは立派な犯罪だ。

もし、支倉が怒ってなかったら間違えなく雄二達は覗きを敢行していただらう。

「あいつらは人数を増やして覗きによる処分を逃れようとしている

んだ」

「ん？ 何でじゃ？」

陸「人数を増やせば相手の特定は難しくなる。もし、鉄人達にバレても全員の顔を覚えるのは難しいだろうからな」

間違えなく鉄人たちは必ず全員捕まえようとする。

だが動き回りながら周囲に気を配っておくなんて、そう簡単にできる事じゃない。

「なるほどのう」

陸「そういうことだ。雄二。美春に教えていいか？」

「ああ。そうしてくれ」

陸「さて新兵器の出番だな。くく、さて俺をコケにしたことを後悔させてやるぜ」

「……頼むから爆発だけはさせないでくれ」

「まだ試運転しかしてないからな補償はできないな」

「不安じゃのう」

「……（コクリ）」

さて話も終わったことだし雄二達は霧島達を呼んで、勉強を再開。



では俺も動くかな。それにそろそろ休憩時間だな。俺は美春に電話をした。

美春視点

休憩時間

「で用事はなんですか陸？」

陸「犯人が分かった」

美春達の自習が終わり。休憩時間にはいるとき陸からメールが来ました。美春に用事とは一体？

「ああ。実は」

陸はさっきの出来事を話してくれました。

それにしてもブタ野郎どもが、覗きをするつもりのおつです。

はあ。随分、派手な事をやります。

確かに最初は美春が立てた作戦ですがここまでされるとあきれられないです。

陸「それでだ。復讐をするために俺達を利用しないか」

「面白いことを言ってくれますね。いいでしょう。美春はその誘惑に乗りますわ」

ニヤリ（意地の悪い顔）

陸「くつくつくつ。勝負は明日。最高にいい思い出になるぜ」

「クスクス、分かりました。鉄人や女子の皆には美春から言ってきます」

陸「ああ、頼む」

陸はそういつて臨時研究室に向かいました。さて、鉄人に言いに行きますか。

美春は鉄人のところに向かいました。

教務室

「鉄人いえ西村先生、ちょっと話したいことがあります」

「ん？ 何だ？」

「実は陸の話ではCクラスの神崎達ブタどもが覗きをするという事です」

「何！？ ふむ……よく教えてくれた」

「それと陸達Fクラスのブタどもがそれを阻止しようとしているみたいです」

「……そうか。では我々はFクラスの動きに合わせる事にしよう」

「お願いします」

鉄人に陸の作戦を教え終えた美春は、支倉さんを除いた女子全員に事の顛末と陸達に協力をしてくれるように頼みました。

一部の人たちが、驚いていましたが、快く頷いてくれました。

明日が楽しみです。美春を犠牲にしようとしたブタども覚悟しろ！！

美春視点終了

第七十一話 強化合宿編 1 1 (三日目) (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

第七十二話 強化合宿編 1 2 (三日目〜四日目) (前書き)

G A Uさんから支倉美空さんの使用許可をいただきまして登場させてみました。

第七十二話 強化合宿編12 (三日目〜四日目)

三日目夜

宿泊部屋

雄二「さて陸。犯人は誰だ？」

部屋に戻ってくるなり雄二は質問をしてきた。

いや雄二は、犯人が誰何か分かっているがそれでも確認の為に聞いてきた。

陸「まずは犯人より前に聞いてほしいことがある」

雄二「なんだ？」

ピツ 《 浅井、神埼、昨日の敗因はなんだと思う？》

「？何の話じゃ」

陸「昨日支倉が眠る部屋に侵入しようとしていた連中の話だ」

秀吉「なんじゃとー！」

ムツツリーニ「……………連中は盗聴に対する警戒心が薄い。だから簡単に情報が手に入った」

秀吉「なるほどのつ。こちらの情報網を甘く見ておるのつ」

雄二「ああ。だが今まで警戒していたからな。今まで俺たちに尻尾を見せなかったからな」

その通りだ。俺たちの警戒網を抜け作戦を実行する連中だからな。

《敗因？ ううん、先生たちが俺達より強かったただけだろ？》

《そうだな。だがそれだけか？》

《そういえば何故先生たちがあそこにいたんだ？》

《そうだ。敵はここに来ると予想していたんだ。まあ当然だな。吉井ならともかく支倉の事なら動くことは間違いない》

《！ちっ、その事を忘れていたぜ》

犯人の中にも知恵が回る奴がいるようだ。

雄二「なるほど。これらの情報から、犯人は三人で支倉に脅迫書を送ったのはこいつらで間違いないな」

秀吉「三人組のうち二人は名前がわかったのじゃ」

ムツツリーニ「……………それで、こっちが犯人の作戦」

《だが原因が分かったんなら対処法はあるんだろ？》

《当然》

《そこで、こちらも戦力を増強しようと思つ》

《どういうことだ？》

《ああ。今度はな》

それ以降は下種な笑い声が流れてきた。

ムツツリーニ「……………わかったのはこれだけ」

秀吉「肝心な作戦は分からないままじゃのう」

「……………すまない」

陸「そうでもないだろう」

雄二「そうだ。昼間の連中の話と合わせれば作戦の内容も予想がつく」

そう。敵の作戦は教師陣を支倉の部屋から引き離したいのだ。

数少ない教師を覗きの方へ応援に行かせられればいいからだ。

女子風呂への覗きが成功しようとしなかつと関係ないからだ。

犯人の狙いは支倉だけだからだ。

ムツツリーニ「……………なるほど」

秀吉「確かに教師陣は支倉のところまで長くはいられないのじゃ」



雄二「で、陸。三人組の犯人のうち二人はわかった。あと一人はだれだ？」

やれやれ、分かって聞いてきてるな。

陸「Bクラスからの情報だがCクラスの須堂という男だ」

ムツツリーニ「……………あの変態ドスケベの須堂か」

雄二「……………確かに奴ならそれくらいの知恵は持つてるだろうな」

秀吉「女子に恐れられ男子も恐怖と羨望を集めるあの須堂じゃと！」

雄二「そうだ。ムツツリーニと同格扱いをされてる須堂だ」

ムツツリーニ「……………一緒にされる方が失礼極まりない」

陸「情報を集めてみたが黒い話しかないな」

雄二「黒い話だと？」

陸「ああ。」

不思議な手を使い女を操る力があるとか。

嫌がる女に薬を嗅がせると大人しくなるとか。

それらで裏で女を売ってるとか。

ろくなうわさを聞かない。

それらを雄二達に話した。

雄二「なるほど。確かにろくでもないな」

ムツツリーニ「……………最低な行動だ」

秀吉「性質が悪いのじゃ」

陸「そうだな。もしそんな薬が本当であればとんでもないことになるな」

ムツツリーニ「……………火のないところに何とかという言葉がある」

雄二「そうだな。用心をした方がいいな」

秀吉「そうじゃのう」

ムツツリーニ「……………清水のカメラを壊した理由は？」

陸「それはおそらく自分たちは見えないのに他の連中が見えるのは気に入らないからと言えるな」

俺はムツツリ 二の質問に答えた。

ムツツリーニ「……………須堂、浅井、神崎許すまじ！」

……………かなり怒っているな。やはりカメラを壊すことが許せないんだろっつな。

「……………壊さなければ高値で売れるのもつたいない」

そっちかよ。エロへの執着心恐るべし

雄二「……………話を戻すがとにかく須堂を要注意っていうことだな」

陸「ああ。そうだ。後問題は……………」

「……………明久」

「そうじゃのう。明久は何を隠しておるのじゃ？」

雄二「まったく。部屋に戻ってくるなりすぐに寝やがって！  
これじゃ作戦の立てようがないじゃないか」

そう。明久の様子がおかしくてどうにも調子が出ない。

明日の作戦はどうなるのだろうか？

犯人視点

宿泊部屋

須堂「さて、Fクラスの連中は間違いなく敵になるな。こちらの手  
ゴマを増やさないとな」

浅井「そのための薬か？」

神崎「指示通り。霧島さんと姫路さんと島田さんと例のレズと木下

姉と工藤に薬を嗅がせたけど大丈夫なのか？」

須堂「安心しろ。俺は谷とは違う。完璧な作戦でお前等に楽園を見せてやるぜ」

浅井、神崎「作戦は明日だな」

須堂「ああ。明日は楽園を観えるぜ」

ふん。バカどもがせいぜい俺の為に動いてくれ。俺のエデン為にな。

犯人視点終了

明久の夢

????「アキ君、アキ君起きて（ユサユサ）」

誰だろう？どこか懐かしい気がする。

????「起きないとお嫁に行けなくなるようなキスをします」

「はっ！邪悪な気配」

????「アキ君。いくら何でも邪悪な気配はひどいな」

この声、この悪戯好き、そして、ひばりを上回る声帯模写。

間違いない。

「どうして、ここにいますか？美空おばさん」

小さい時に見たときとまったく同じ姿。見た目はひばりをそのまま大人にして、髪を下ろした姿。

美空「決まってるわ。未来の息子の様子を見に来たに決まってるじゃない」

「……………」

美空「?どうしたの。いつもならい、いつ、ぼ、僕が美空おばさんの息子になったんですか?と言うのにどうしたの?」

「……………僕はひばりには相応しくない」

美空「何?喧嘩でもしたの?」

「違います。僕がひばりを守ると約束をしたのに過労で倒れました。その上、ひばりは僕たちを守るために他の女子を敵に回してそれで……………」

美空「もう話さなくて良いわ。アキ君は泣きごとを言いたかったの?」

「違います。そうじゃないです。ただ約束を守れない僕よりも他にふさわしい人がいるとおもいます」

美空「それを逃げてるって言ってるのよ!」

逃げてる僕が……………そうなんだろうか?

美空「ようく考えてみてアキ君。アキ君の周りは誰も居ないの？友達はいないの？」

友達？そんな決まってる。僕を信じてくれる友達は陸は間違いなく味方だ。

秀吉もそうに違いない。ムツツリーニもそうだと思う。雄二はどうでもいいや。

美空「アキ君はキチンと相談した？どうして一人で悩んだの？確かに答えを出すのはアキ君自身よ。でも相談することで選択肢を増やすことはできるわ。相手がアキ君を嫌ってない限りはね」

僕は……どうしたらいいんだろう？

美空「アキ君。明日起きたら相談してみたらどう？きっと悩みは解決すると思うわ」

えっ!？

美空「まったくひばりといいアキ君といい。心配掛けるんだから。私との約束を守ってくれるのは嬉しいでも間違っただやり方で守ってほしくはないな」

間違っただやり方？

美空「そうよ。二人が倒れたら本末転倒よ。だから美空お母さんの約束してほしいの」

約束？

美空「ええ。一人で悩まず皆で悩みましょう。きっといい答えがみつかると思うわ」

「うん。今度こそ正しい形で守るよ。今はよくわからないけど必ず」

美空「なら安心したわ。今度会うときは孫を見えるのを楽しみにしてるわね」

なっ……ななな／／

美空「じゃあねアキ君。ひばりを泣かせないでね。あ、でもベツトの上なら問題ないわよ。

頑張ってるね それとこれだけは忘れないでね。学生の内に子供を作っては駄目よ。

避妊は忘れないでね」

突っ込もうとする僕の返事をする暇もなく美空おばさんが姿が薄れていく。

それに合わせて、僕の意識は落ちていった。

美空「それと美空おばさんじゃなくてお母さんと呼んでね。これも約束よ」

完璧に美空おばさんに遊ばれた。

とある場所

????「これでよかったの支倉さん？」

美空「ええ。問題ないわ海谷りのさん。保険医になっているとは思  
いませんでしたよ」

りの「何の事だか……」

美空「では、わたしはこれで、ひばり分も補充したことですしまだ  
まだ頑張れます」

りの「そう。次に会うのは10年後だね」

美空「クスッそれはわからないわよ」

りの「ふん」

こうして三日目の夜が終わった。



第七十二話 強化合宿編 1 2 (三日目～四日目) (後書き)

ご意見感想をお待ちしています。

第七十三話 強化合宿編 13 (四日目) (前書き)

強化合宿も終わりに近づきました。

明久は無事復活できるのでしょうか？

第七十三話 強化合宿編 13 (四日目)

強化合宿四日目

明久「な、なな！？なんてことを言っただ美空おばさん！」

陸「……いきなりなんだよ明久」

朝となり、明久が大声で叫んだために、俺は目を覚ます。

「ごめん陸。ちょっと懐かしい夢を見てね」

「そうか。それと明久……あんま動かん方が良いぞ？」

俺は明久の背中の方にいる物体に目を向け、明久それにつられても自分の近くにいる存在に気がつく。

そこには……

「……」「ぐっ……」

「……………最悪だ」

雄二がいた。

「気分が悪くなるから、そのゴリラさつさと蹴りだせ。2人まとめ大惨事になる前にな」

「そうだね……雄二！起きろコラあっ！」

「ぐふあっ！」

明久は大声を伴い、雄二をけりだす。

その痛みに悶絶している間に、秀吉とムツツリーニが目を覚ました。

「んむ？ ……なんじゃ？ 雄二はまた自分の布団から離れた場所で寝ておったのか？」

「秀吉、またってどういう事？」

「いや、別に大したことではないのじゃが……雄二は寝像が大層悪い様でう。」

明久はワシの布団の中に入ってきておって……やめるのじゃ明久！

花瓶を振りかざしてどうするつもりなのじゃ！？」

「殴る！ コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける！」

ガチャッ！（ドアが開く音）

鉄人「おいお前ら！ 起床時間だ ぞ……？」

ひばり「？アキ君、おはよう……？」

「死ね雄二！死んで詫びるんだ！あるいは法廷に出頭するんだ！」

「何だ！？朝からいきなり明久がキレまくっているぞ！？持病か！？」

「落ちつけ明久！雄二を殺しても何の解決にもならんぞ！」

「ええい落ち着くのじゃ明久！西村先生、支倉、すまぬがこやつを取り押さえるのを手伝って頂きたい！」

「……………！（コクコク）」

「……………お前ら（アキ君たち）は朝から何をやっているんだ（やっているの）？」「」

この後、ひばりのはりせんが炸裂し明久を止めてこの騒動は終わった。

朝食

暴走していた明久を支倉の力で落ち着いたのを確認してから食堂に向った。

陸「それでどう動く雄二」

「どう動くとは……………」

「狙われていた支倉は完治し動くことができる。その上犯人は分かっている。

ならば、最初から主犯格の奴らを潰すことが良いと思うがな」

「確かにな。だがなそれじゃいけないんだ。主犯格を潰しても他のバカどもが止まらん」

「やれやれ。分かってはいたが結局相手の手に乗るしか方法がないか」

「ああ」

今夜の事で雄二と話をしていた時……。

明久「ねえ陸。……相談に乗ってくれる？」

「ん？どうした明久。いつでも相談に乗ると言ったんだ。遠慮する必要はないぞ」

「う、うん。ここじゃ何だから分かった。部屋で聞こう」

「ごめんね」

「気にするな。むしろ頼ってくれ嬉しいと思うな」

俺は食事を終わると同時に明久と一緒に部屋に戻った。

宿泊部屋

「それで、話とはなんだ？」

「う、うん。例えばの話なんだけど約束を守れない奴に彼女を守る資格はないよね。陸はどう思う？」

「……そうだな。選んだ行動の内容によるが約束を守ろうとして最後まで足掻く奴はきつと誇れるぜ」

「誇れる？」

「ああ。確かに約束を守れない奴はクズだ。でもな、例え守れなくても最後まで足掻く奴は誰も攻めはしない少なくとも俺はそう思う」

「そうなの？」

「そもそも一人で出来る事なんざたかが知れてる。だからこそ人はお互いを助け合う。」

「……まあ裏切る奴は裏切るがそんな奴はクズだ。少なくとも俺はそんな男クズに彼女を守る資格はないなと言うな」

「……」

「それに俺に言わせれば明久は一人で抱え込みすぎだ。他人のことなのに自分のことのように考える。」

「普通そこまで考える人間はいないぞ明久。」

「ま、そんな明久だからこそ明久の周りには人が集まるんだろうな。だからこそ明久の周りには頼れる友達がいる。」

「俺からの明久の質問の答えは誰かに頼っても約束は守ることはできぬ。」

「だから、一人で悩むな。少なくとも俺は、困ったら明久を頼るぜ。これが俺の答えだ。」

「……満足したか」

「……陸」

「じゃあな」

俺は明久の傍を離れた。

部屋の外

陸「……聞いた通りだ。それにしても悪趣味だな。

雄二やムツリーニはともかく秀吉や支倉に姫路に島田まで盗み聞きとすると思わなかった」

俺は部屋の外に出ると部屋に隠されていた盗聴器に声を掛ける。

数分も立たずに隠れて聞いていた連中は俺の前に現れた。

美波「な、何言ってるのよ偶然よ偶然」

瑞希「そ、そうです。偶然です。たまたま通りかかったんです」

あくまで偶然と言いきる島田と姫路。

だがここは男子宿泊部屋だ。女子が目的がない限りここに偶然現れるわけがない。

なぜなら男子宿泊部屋の隣は学習部屋その隣が女子宿泊部屋の構図を取っている以上、

偶然なんてありえないからだ。

秀吉「気になって当然なのじゃ。ムツリーニと違って明久は滅多に隠し事なんてせんからのう」

ムツリーニ「……すべて機械がかってにしたこと。俺には関係ない」



雄二「陸なにをいつてるんだ。決まってるだろ。明久の悩み事を知って笑うためだ」

秀吉、雄二、ムツツリーニ。自分の欲望に忠実すぎて呆れるしかない。

特に雄二は隠す気も無いな。ここまで明久を弄ることしか考えてない奴とは思っていたけど。

ここまでとはな……。

やれやれ、素直じゃない。

雄二の為にそれと明久の立場を守るため霧島にいや坂本妻に何か送り物を送るとしよう。

ひばり「……私はどうしたら良いのかな。アキくんがこんなに悩んでいたなんて」

最後に自分のことのように悩む支倉。

ホント明久といい支倉といいこれほど相手を思いやれる関係は羨ましいな。

「支倉お前まで悩んでどうする。ちょうどいい機会だ明久と戦ったらどうだ。」

喧嘩くらいした事があるんだろう？」

「うん。小さい時にした事はある。どうしてそれを……って海谷君

それってまさか!？」

どうしてそんなことを聞くの聞こうとした支倉は俺の狙いに気付いたようだ。

「ああそのまさかだ。思いきし自分の本音をぶつけてやれ。

いつまでもうじうじされる方が迷惑だからな」

「な、何言ってるの!海谷君」

雄二「なるほど。お互いの本音をぶつけて支倉と明久に活を入れようというわけか」

ムツツリーニ「………確かにその方が効率が良い」

秀吉「そうじゃのう。落ち込んでいる明久を見る方が気が滅入るからのう」

美波「そうね。今のアキじゃ面白くないしね」

瑞希「悔しいですけどこの事はひばりちゃんにしかできませんから。明久君の事をお願いします」

ひばり「皆……うんやってみる」

さて、これから忙しくなりそうだな。

明久の復活とバカ退治をしなくちゃな。

面白くなってきたぜ(ニヤッ)

それから夜の時間になるまで勉強をした。

おっとこの作戦を美春に連絡しないとな。

第七十三話 強化合宿編 13 (四日目) (後書き)

ご意見感想をお待ちしています。

第七十四話 強化合宿編14 (四日目) 覗き編

浅井視点

.....

Cクラス宿泊部屋

神埼「?須堂どこに電話していたんだ?」

須堂「ああ。この後の事だ」

浅井「.....ああ、なるほど。俺達の目的が終わった後のことだな」

神埼「なるほどそうか。さすがだな須堂」

須堂「まあな。それより行くぞ」

浅井&神埼「おう女子風呂に!!」「」

「いたわっ! 病気で寝込んでる女の子を襲おうとした主犯格三人組よ!」

「長谷川先生! 向こうの三人をやります!」

部屋を出て直ぐのところに長谷川先生率いる女子部隊が展開されていた。

.....どうやら覗きがバレたらしい。

でもそれくらいは想定済み。なぜならFクラスや久保が裏切るのは目に見えている。

そのため須堂が用意している例の薬を今日の朝から全部の階に気づかれないように薬を散布してるんだからな。

欠点は、本来この薬は一人の人間に対して効果を発揮する物だ。無論個人差はあるらしいけど。

今回は全体にばらまくから効果が薄い。……だが俺達の目的は達成できる。

浅井「バレたか……でも今回は俺達の勝ちだ！」

先行してきた女子二名はEクラスの女子のようだ。

女子二人は召喚獣を呼びだして俺達に攻撃をしようとしたが……。

数学 Eクラス・古河あゆみ&源涼香 83点&77点

神埼「俺達の邪魔をするな！」

女子二人「何言っ つ何で!?何で体が動かない!?それに召喚獣が勝手動くのよ!?!」

神埼の命令で女子二人は動けなくなる。オマケに召喚獣は邪魔な教師に向かって攻撃をする。

長谷川先生「こ、これは一体どういうことですか?それに召喚フイ

ールドが取り消せない！？一体何が起きたんですか？」

動けなくなった女子二人と同じように追いついてきた他のEクラス女子やこのグループの頭の長谷川先生も動けなくなっていた。

驚く先生や女子を見ながら俺達は唇を綻ばせる。

須堂に言わせると当然の事だそうだ。

今回は全体にばらまいたから単純な命令しか聞かせれないが今回の目的には十分な効果があるからだ。

須堂「さて、早く行くぞ。ぐずぐずしてる暇はないからな」

そうだな。俺達は作戦が成功する事を確信しながら笑みを浮かべながら俺達は女子風呂に向かっている。

覗きに参加する連中と合流するために廊下を走る俺達。

軽々二階を制圧した俺たちは一階へと向かった。

覗きに集まったメンバーも笑みを浮かべている。それはそうだろう。

邪魔な女子が動けないうえ単純な命令を聞くんだから。

その上三階と二階に防御にしていたFクラスのバカどもと久保も動けない状態だ。

これを笑わずにいられるわけない。

では、ここも軽々制圧をしますかね。

一階

「……護してくれ……」

「……メだ！……倒的過ぎる……！」

神埼「よしっ！これで1階の制圧もうまくいくぞ」

須堂「いや、違う！様子がおかしいぞ！」

そこには教師女子生徒連合軍に押されているBクラス男子の姿があった。

総合科目 Aクラス・霧島翔子&木下優子 4762点&3972点  
VS 総合科目 Bクラス・加西真一1692点

圧倒的な戦力差に為すすべも無く仲間が倒れていく

翔子「……悪事はそこまで」

優子「たく、あなた達は本当にバカね」

神埼「くっ、霧島と木下か……」

地下へと続く階段の手前。

そこには霧島と木下の姿があった。



既に彼女たちの周りには打ち倒された召喚獣が死屍累々と転がっている

「Aクラスは高橋先生と戦ってるわけか」

周囲を観察して、須堂が呟く。

見回してみると、この総合科目戦闘はBクラス、離れたところの物理科目戦闘で、Aクラスの生徒が戦っている。

しかし、ここで疑問が浮かんだ。何故？何故戦ってるんだ。

そう女子達と戦う前に指示を出しているはずだ。覗きに参加したメンバーに指示は出した。

それは間違いな。なのに何故？

須堂「仕方がない。 もう一つ仕掛けを動かすか」

「仕掛け？」

突然の須堂に発言に俺達はいや他の覗きのメンバーも首をかしげていた。

俺達の疑問も気にすることなく須堂は隠していたんだろうと思われ  
るリモコンを取り出しボタンを押していた。

それが合図だったようだ。上の階から沢山のガスが噴き出してきた。

翔子「……拙い」

優子「こんな仕掛けが隠されていたなんて！」

須堂「急ぐぞ」

「「お、おう」「」

覗きのメンバー「「「ま、待ってくれ！！俺達も行く！！」「」

煙で視界が悪かったが、なんとか俺達だけは地下に行くことが出来た。

地下

大浴場への廊下

おかしい何かがおかしい。三階や二階は須堂の計画通りだった。

だが一階では同じ作戦が使えなかった。まるで、効果が消えたような状態だった。

須堂はそれすらも想定していた。

仮に海谷が解毒剤を作ったと考えられなくもないがこんな短時間で作れるものだろうか？

何か疑問が残る結果だった。

「……ま、今考えても仕方がない……」

俺は考えるのをやめると覗きをするためにそして鉄人の動きを封じるために向う。

????「残念ながらゲームオーバーだ」

????2「そうじゃのう。悪いがお主らはこの先には行かせんじや」

????3「……………(コクコク)」

????4「まさか、誘導されているとは思ってなかったようだな」

神埼「ん？ な、何故……………何故お前らがここに？」

陸「何故って決まってるだろう。お前らをここに来るのを待ってたのさ。」

「二度も俺が遅れを取ると思うか？」

浅井「クッ！」

神埼「読まれていたなんて」

須堂「……………なるほど。俺達はアンタの手のひらで踊らされていたのか」

……………まだだ、まだ終わってない！

浅井「お前らを倒せば俺達は覗けるからな」

神埼「そ、そうだ。その通りだ！」

須堂「……………（構えを取っている）」

奴らを倒して覗きを成功させ支倉を手に入れるんだ。

なぜなら今は支倉は入浴をしてるんだからな！。

陸「欲望に忠実なのは分かったがそう言うのは俺達に勝ってから言いな！」

雄二「そういうことだ。悪い事はいわね。ここで止まってくれないとありがたいんだけどな」

ムツツリーニ「……………今なら説教と補習ですむ」

秀吉「そういうことじゃ。諦めるのも勇気だと思っがのう」

浅井「くっ！」

神崎「そうはいくか！」

須堂「……………」

今回いろんな連中を犠牲にしたんだ。

いまさらここまで来て諦めるというのは無理な話。

だから必ず勝つー！！

浅井「行くぞ！ 海谷、坂本！」

神崎「俺の実力を見せてやる」

須堂「……………」

雄二「ああ、来い！」

陸「バカな連中だ」

ムツツリーニ「……………同情の価値なし」

秀吉「バカな連中じゃのう」

そして、俺達と防衛組との戦いが切って落とされた。

第七十四話 強化合宿編 1 4 (四日目) 覗き編 (後書き)

ご意見感想をお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8801o/>

---

バカと発明と召喚獣

2011年10月28日16時02分発行